

50周年記念誌

2008

岩国市民マンドリンクラブ

岩国市民マンドリンクラブ 50周年記念誌



昭和38年12月 発行

岩高プレクトラムソサエティ



昭和52年12月 発行

岩国市民マンドリンクラブ

ペナント

1. 岩高プレクトラムソサエティ(1958～1969)



2. 岩国プレクトラムソサエティ(1970～1972)



3. 岩国市民マンドリンクラブ(1973～現在)



定演会場

1. 共立講堂(1958～1962)



2. 岩国市労働会館(1963,1964)

写真なし

3. 岩国市体育館(1965～1978) この間、労働会館を2回使用



4. 岩国市民会館(1979～1996)

この間、岩国勤労者総合福祉センターを2回使用

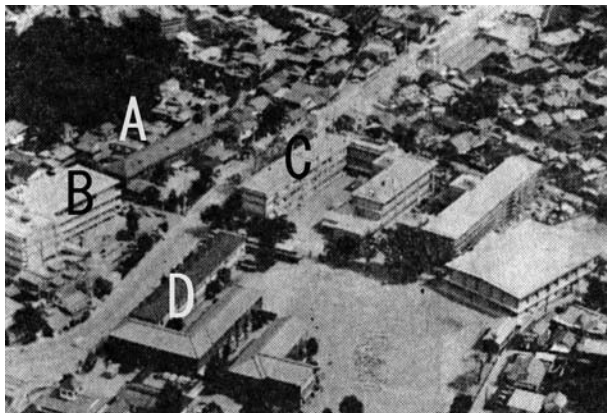


5. シンフォニア岩国(1997～現在)



練習場

1. 岩国小学校旧高等科校舎（常時練習場）



1972年11月現在

A：岩国小学校旧高等科校舎

B：現岩国市中央公民館

C：岩国小学校現校舎

D：岩国小学校旧校舎

2. 岩国市中央公民館（常時練習場）



3. サンライフ岩国（臨時練習場）



合宿練習場

4. 石城山青少年宿泊訓練所



5. 岩国市青年の家



6. ユースホステル岩国



7. 山口県民ふれあいパーク





巻 頭 辞

岩国市民マンドリンクラブ
会長 石川善久

50回を迎えた特別な年に居合わせただけの私に、巻頭辞執筆の大役が回って来てしまいました。先輩諸氏を前に身のすくむ思いですが、元来の厚顔無恥はお許し願ひ、任を努めましょう。

岩国高校プレクトラムアンサンブル(愛称:プレアン)で多感な青春期を共にした卒業生達が、熊谷幹雄恩師の元に集い、「岩高プレクトラムソサエティ」という真新しい名のもと、第1回目となる演奏会を開催した昭和33年。それから50年の歳月が流れ、700名にもものぼる仲間が時代を繋いでくれました。アマチュア音楽団体にあって半世紀もの間、途切れる事なく活動出来ていると言うことは驚きと同時に、ご支援頂いた全ての方々のお力添えに拠るものであり、感謝の念で一杯です。だだ、今日までの道のりが決して一本調子ではなかった事も、今回の記念誌に寄せられた仲間の語る文面に見て取れます。

プレアンOBによりスタートを切った同窓の集いは昭和43年、熊谷先生のご逝去を境に、大きな転換の時を迎えることになりました。心の支えを失って自らの足で歩み始めた教え子達は、その時既に逞しく成長した青年となり、それぞれの進路先で指揮者やコンサートマスターなど指導的な立場を務めながら岩国のマンドリンを全国に示していました。そんな傑人達が打ち揃って行ってお盆の「岩国里帰りコンサート」は、正に珠玉もの。先駆的な曲を積極的に取り上げ、技術的にも高度な曲をこなす、斯界でも希な団体へと発展を遂げたのです。若々しく輝いたICMCがそこにありました。

しかし、盛り上がりを見せた時の後には、寂寥の空気が漂うのが常。一時代を担って来た若者も仕事、家庭と多事に忙殺され、一人また一人と離れて行きます。無理を重ねてきた遠方組も次第に足が遠のき、地元のメンバーによる地道な活動が、その後10年余りの長きに及びました。

そして今・・・、先の苦難の時を粘り強く繋いでくれたメンバーのお陰と、時の流れとが救いとなって、再び私達に陽光が差して来たのです。音楽を無類の友とする気の置けない仲間達が、地元岩国はもとより近隣各地からここに集まっています。

30年前とりまとめた記念誌があります。当時私が幹事長の立場として寄せた文章の終わりに「誕生20年を迎えた現在、メンバーの数も増え活動規模も拡大して参りました。しかしその指向するところは創設された諸先輩方の、情熱と志に拠るところにあり、マンドリン音楽を通じて会員相互の素朴な親睦をはかり、同時にマンドリン音楽の追究、普及をとという基本姿勢は変わらぬものです。願わくば、岩国という一地方都市にあって、真に市民ベースに則った活動を行い、岩国文化の一端を担うサークルに・・・、と一人思いを巡らすのは、叶わぬ未来図でしょうか。」と残しました。

漠として描いた未来図が満更でもなさそうです。

これからも続くICMCの通過点に過ぎない今茲ですが、一つの節目としてまとめ上げられた本誌に大きな意義を感じます。編纂にあたり先頭になって導いて下さった三浦孔司氏のご尽力に、心より敬意を表し、それが時々にはける、これからの活動の参考書と成るなら、これに優る酬いはないでしょう。

目 次

各 界 メ ッ セ ー ジ	1
ク ラ ブ 活 動	
1. 岩国市民マンドリンクラブ沿革	9
2. 三大慶事	23
3. 各 年 代 の 特 徴	27
4. 主 催 演 奏 会 プ ロ グ ラ ム と 写 真	31
一 般 寄 稿	87
資 料 室	
1. 定 演 に 関 す る 集 計 資 料	163
2. CD収録目録（I CMC定期演奏会）	167
3. CD収録目録（I CMC主催）	178
4. 会則、50周年記念事業、記念誌編集委員、 第50回定期演奏会記念パーティ、第50回記念定期演奏会 関係者	181
編 集 後 記	185



50周年に寄せて

岩国市長 井原勝介

昭和41年に岩国高校に入学して、横山の古い校舎で、初めてマンドリンの演奏を身近に聴く機会を得ました。「岩国高校プレクトラムアンサンブル」を指揮する故熊谷幹雄先生の情熱あふれる独特な動作が、今でも懐かしく目に浮かびます。柔らかく、哀愁のある音色に新鮮な驚きを感じるとともに、その時の印象が強く残り、以来、私の好きな楽器の一つになりました。

ところで、長い間疑問に感じることがあります。「プレクトラム」とは何を意味するのでしょうか。

そして、7～8年前に「岩国市民マンドリンクラブ」の演奏会で、何十年振りにマンドリンに再会し、遠く懐かしい日々が蘇り、改めて熱烈なファンになってしまいました。

「岩高プレアン」の卒業生を母体にして始まり、次第に広く市民の間にその活動の輪を広げ、今では、幅広い年齢層の、様々な職業の人が参加する、まさに市民のマンドリンクラブに成長されました。毎年秋の定期演奏会を中心に福祉施設などへの慰問や各種イベントへの参加、全国各地への演奏旅行など充実した活動を展開され、昭和51年の岩国市文化協会の文化功労賞に続いて、平成19年2月には岩国市文化功労賞をそれぞれ受賞されました。申し上げるまでもなく、「文化」は人の心を豊かにする我々の生活に欠かせないものであり、その振興を通じて長年にわたり岩国のまちづくりに貢献してこられたことが評価されたものだと思います。

そして、創立以来50周年の記念の年を迎えられました。昭和から平成にかけて経済社会情勢が大きく変化する激動の半世紀、この間、幾多の困難を乗り越えてこられた歴代5人の会長を初め役員、関係者の皆様のご努力やご苦勞は並大抵のことではなかったと思います。心から敬意を表するとともにお祝いを申し上げます。

今年はどうような曲が、どんな趣向で披露されるのでしょうか、記念すべき節目の定期演奏会を楽しみにしています。いつまでも素晴らしい演奏を聴かせて下さい。



岩国の戦後とマンドリン

岩国市教育長 磯野恭子

岩国にマンドリンクラブが生まれて50年になります。

あの繰り上がるような弦をつまびく調べを聞くと、楽器の中にドビッシーやシューベルトやハンガリー民謡まで、激動のヨーロッパを生抜いた作曲家たちの残した調べが奏でられているようで、音の泉を自分の感性の器に盛り込んで胸をときめかせるのです。

私たちが身近なところでマンドリンの演奏が聞けるようになったのは、そう遠くない戦後のことです。

敗戦のあと、日本の都市は焼け跡の中から新しく立ち上がることを余儀なくされました。

年の暮、どこからともなく生まれてきた音楽の一つが、このむせび立つようなマンドリンの調べでした。それは戦争で荒れ果てた日本人の心に、一筋の希望が灯ったように響きました。そして、この調べによって人々は生きる希望をかき立てられたのでした。

マンドリンと並んで若者の心の空白を埋めたのが、歌声運動のロシア民謡でした。楽天的なロシア民族の歌声が日本人に欠けていたものを満たし、マンドリンの調べはその若者に新しい息吹を与えました。

マンドリンの起源は17Cのイタリアです。ローマ型とミラノ型それにフレッチェ型など種類がありますが、今日私たちが使っているものは、ナポリ型を19Cに改良して使われているのだそうです。8本の弦が2本ずつの4つの組となり、ヴァイオリンと同じEADGに調弦します。胴は美しい寄木で作られ、洋梨を半分に切ったような小型の楽器から奏でられるその音色はとても優雅です。

マンドリンを生んだイタリアへは、紀元前753年に3000人のラテン人がエーゲ海を越えて移り住み、以降1000年にわたって比類なき強大なローマ帝国を築き上げました。ヨーロッパ全域を東・西と分けたローマ帝国は、政治・経済・軍事・技術・知力・文化の花を咲かせました。マンドリンもそれらの民族のツールとして庶民によって弾き始められた音楽の古典です。古典とは、かけがえのないものという意味に他なりません。音色・音調にも人間性豊かな響きが伝わってきます。

岩国市民マンドリンクラブは、昭和33年に産声をあげ、アマチュアの音楽クラブとして、市民団体が半世紀も続けたことは、全国でも珍しいことです。ますますのご発展と今後のご活躍を祈念しています。



岩国市民マンドリンクラブ50周年を祝って

岩国市文化協会会長 藤谷光信

この度、岩国市民マンドリンクラブが50周年を迎えられることを、心よりお祝い申し上げます。故熊谷幹雄先生のご指導により発足した岩高プレクトラムソサエティが、演奏技術は勿論のこと人格形成やアンサンブルを重視して精進してこられたことは、熊谷先生のお人柄の表れと拝察されます。

熊谷先生が亡くなられた後も、先生の愛弟子の皆様を中心に、長きに亘って活動してこられました。この間には団体の名称変更も2回あり、幾多の困難にも遭遇されたことと思います。これ等乗り越え50年という大きな節目を迎えられたことは、まことに驚くべき快挙であり、石川会長をはじめ役員や会員の皆様方の献身的なご努力と熱意によるものと賞賛し、敬意と感謝の意を表します。

定期演奏会をはじめ、演奏旅行や各種施設への慰問演奏など社会的な活動も活発におこなわれ、岩国市の文化活動の振興にも大きな貢献をしてこられました。その演奏技術も素晴らしく、他の多くのマンドリンクラブの目標にされるなど、岩国市民の誇りといっても決して過言ではありません。これからも更なるご活躍、ご発展を心より期待して、お祝いの言葉といたします。



「50周年記念誌」発刊を祝して

山口県立岩国高等学校長 上田一人

岩国市民マンドリンクラブが、創設50周年を迎えられましたことを心からお祝い申し上げます。また50周年記念誌を刊行されるに当たり、創設期から御縁のある山口県立岩国高等学校を代表してご祝辞を申し上げます。

る機会を賜り、誠にありがたく光栄に存じます。

貴クラブの創立は、昭和33年当時、岩国高等学校プレクトラム・アンサンブルの指導者であった故熊谷幹雄先生とその教え子の皆さんが「岩高プレクトラムソサエティ」を発足させ、東共用講堂にて演奏会を行ったことに遡ります。その後、今日までに毎年欠かさず定期演奏会を重ねられ、平成19年11月に第50回を迎えられましたことは、歴代の役員並びに会員の皆様の並々ならぬご苦勞による輝かしいご功績であります。

この半世紀はこれまで日本が経験したことのない激動の時代でした。もののない時代からものが溢れる時代へ、経済が右肩上がりから停滞へ、集団から個への変化等々、そして人々の価値観は多様化していく中で、年1度の定期演奏会を確実に繋いでこられたことは、中心となってお世話をされる方々のリーダーシップはもちろんですが、変化の大きいそれぞれの時代にあっても、そこに集う仲間の変わらぬマンドリンにかける想いが最も大きな力であったのでしょう。これまでの定期演奏会に出演された方は延べ約3000人近くになると伺っています。演奏する人は年々少しずつ変わっていても、他団体が羨む音楽レベルの高さは常に目標とされ、早くから「岩国市民マンドリンクラブ」の名声を築かれ維持されていることは驚くべきことであります。

この機会に、昭和52年に発刊された「岩国プレクトラム30年史」を拝読させて頂きました。そこには、熊谷先生のお人柄、会員の方々のマンドリン音楽に対する熱い想いや音楽を通して心をつなぐとけ合う和のすばらしさ、よき仲間との出会いの感動の数々がちりばめられていました。マンドリンクラブとの出会いがそれから歩んでいく人生の励みになり、潤いになっていく様子が文章の端々に伝わってきました。そしてその30年史には、かつて本校の生徒であった一人ひとりの胸の中に残っている青春の日々がよみがえり、当時の学校の雰囲気をも醸し出されていました。

この50年記念誌が次なる30年50年に向けて会員の皆様の支えとなることと思います。この栄えある50周年を契機とされ、なお一層「岩国市民マンドリンクラブ」が岩国市民だけでなく、周辺地域の多くの方々から愛されるとともに、本校のプレクトラム・アンサンブルのよき先輩、目標として輝き続けますことを心から祈念いたします。



アマチュア & プロ

…岩国市民マンドリンクラブのばあい

Japan Chamber Philharmony 指揮者 石井和彦

アマチュアとプロ。時々それらの定義がわからなくなってきました。プロに限って考えると①演奏活動により生活の糧を稼ぐ、②正規の音楽教育を受けている、③お客さんに質の高い演奏を提供するなどでしょうか。

しかし、①はきちんと健康保険など完備したオーケストラが一番ですが、それでも生活ができるのはそのうちの半分10団体程度でしょう。さらにオペラや合唱、ピアノ等になると演奏活動だけによる生活はほとんど不可能に近いといえます。

②正規とは一体何でしょう？ 本当の音楽家は音楽大学では育たないと思います。とりあえずは自分に合った良い先生につくことが一番大事ですが、それは熱意さえあれば誰にでもできるでしょうね。

③ここが最も曖昧なところですが。質の高い演奏とは、音程？ 皆でそろえること？ 速く正確に弾けること？ 大きい音が出ること？ 確かにそれらが全部できるとインパクトはありますが、お客さんの感動は別のところにあると思います。そしてここが一番大事なところでしょう。

日本で活動していると、お客さんに感動していただけるのはプロの演奏家の仕事だとは言えないような気がします。これだけアマチュアの演奏家が多い国も珍しいのですが、生活の中で普通にさらっと美しい音楽を提供してくれる場がないのも要因の一つでしょう。

するとアマチュアの活動は単に自己満足の世界とも言えなくなります。それどころか全く逆の現象も多く見られます。それはヨーロッパのように演奏して音楽を提供する人とそれを享受する人にはっきり分かれているわけではない、アマチュアの活動が盛んな日本独特の現象ではないでしょうか。

音楽会はいつもとより少しおしゃれをして出かける、懐かしい知人に会おう、そして演奏者とお客さんとが心を通わせすべてを楽しむ場ですから、まず演奏家にはすべてを楽しんで欲しいと思います。

現在マンドリンの世界には幸い？プロのオーケストラがありません。岩国市民マンドリンクラブもアマチュアだからこそお客さんと一緒に楽しめるコンサートができるのではないのでしょうか。しかもメンバーの皆さんはかなり本気です。

私自身も「アマチュア・岩国市民マンドリンクラブ」からエネルギーをもらった一人です。これからも演奏、練習をいっぱい楽しんで、しかし時々苦しんで、市民の皆さんをふわっと楽しませてください！



岩国市民マンドリンクラブ創立50周年をお祝いして

日本マンドリン連盟 会長 清正 寛

岩国市民マンドリンクラブが、創立50周年を迎えられました。マンドリン音楽を愛する者として心からお祝いを申し上げたいと思います。

今年50周年を迎えるこのマンドリン合奏団は、昭和33年（1958年）に当初は岩国高校のOB・OGによる合奏団として出発したようですが、その後、昭和48年（1973年）には現在の団体名に改め、意欲も新たに市民をベースとした団体として音楽活動の場を広め、レベルの高い音楽性を追究してこられました。

50年前というと、私は、大学のクラブでマンドリン音楽に熱中していた頃で、中出阪蔵氏の1958年製作のギターを手に入れた年でもあります。そのころから岩国高校のクラブはうまいという評判を耳にしていたので、皆さんの創立50周年に本当に「おめでとう！」と伝えたい気持ちが実感として湧いてきます。

そして皆さんの岩国市民マンドリンクラブは、設立当初から定期演奏会を重ねてきて、今年は50回目の定期演奏会を迎えることになります。この50年の間、継続的にマンドリン音楽のための合奏団として演奏活動を続けてこられたことに敬服の念を禁じえませんし、その活動を支えてきたクラブの皆さん、関係者の皆さんの努力・・・多分この中には多くの汗と涙も、そして喜びも多く含まれているのではないのでしょうか・・・には、マンドリン音楽に携わる者として、大きな感謝を申し上げたいと思います。

岩国市民マンドリンクラブの50年の音楽活動は、岩国市だけではなく、東京、京都、神戸などにも広がり、また、メンバーが2人も日本マンドリン独奏コンクールで1位の栄冠を得たことから伺えるように、音楽的な表現力や技量において高い実力に裏付けられたものであり、日本のマンドリン音楽界においても高く評価できると思います。

皆さんのこの合奏団が、今後とも、音楽性豊かな活動を続けられ、マンドリン音楽の素晴らしさを聴衆の皆様に伝えていただけることを願い、また、味わい深い伝統を積み重ねられることを祈って、お祝いの言葉とします。



50周年をお祝いして

日本マンドリン連盟 中国支部長 桧垣尚文

50周年おめでとうございます。

この50周年は、一つの通過点でもあります。こうして継続することは、並大抵の努力では出来ない偉業です。このお祝いの言葉を書くにあたって、岩国市民マンドリンクラブの古い演奏会パンフレットを開いてみました。昭和40年代後半からの演奏曲目を見ると、一貫して常に新しい音楽の追究と挑戦が感じられます。またその頃のメンバーが現在も多く活躍されており、そこには、クラブ員の固い絆で結ばれた強みがあるように思います。

思い起こせば、広島市の大学にマンドリンクラブを作ろうと活動されたのは、岩国高校の卒業生が中心でした。故熊谷先生によって蒔かれたマンドリンの種は着実に根付き、いまや大きく成長し立派な花が咲き、そして新しい種となって日本中に広まりつつあります。

人は、その人が忘れ去られた時が本当になくなったといわれますが、熊谷先生は、まだまだこれからも生き続けて行かれることでしょう。

日本マンドリン連盟の行事として、40年前からマンドリン独奏コンクールを隔年開催しておりますが、これまでに貴クラブから、新井義悠氏と田村隆司氏が一位になられ、また松重正清氏が三位に入賞されるなど、マンドリン発展向上のために大きく貢献していただいております。同じクラブからこのように入賞者が出られたことは全国的にもなく、そこにも岩国市民マンドリンクラブの技術力の高さが伺われます。

これから次の大きな節目である100周年に向かって、新しい種と共に次世代へと受け継いで行かれますよう、ますますのご発展とご活躍を祈念しお祝いの言葉とさせていただきます。



岩国市民マンドリンクラブ一家

防府MGU指揮者 大浜博正

岩国市民マンドリンクラブ50回記念定期演奏会のご盛会、誠におめでとうございます。

今回の演奏会には、防府マンドリン・ギターアンサンブル、宇部マンドリーノから20名くらい聴きに参りました。“凄いね”という言葉が全員が異口同音に発しておりました。

メンバーの層の厚さ、各年代の指揮者、各パートの充実、長い歴史と厳しい練習の成果を私達は感じる事が出来ました。50周年ということもあって、歴代の指揮者がそれぞれの思い入れのある一曲を、精魂込めての演奏は、将に一本勝負の迫力を感じて、非常に興味深く拝聴させていただきました。

“凄いね”という言葉はそれらを包括的に感じたからではないでしょうか。

私達、防府MGUは、第9回定演をこの12月1日にアスピラートホールで開催しました。当日は、石川夫妻、金丸夫妻、中里さん、田村さん、江間さんが演奏に参加してくださいました。第1回から毎回、岩国市民MCの主要メンバーのご参加を頂いております。その人達だけで、もう立派な演奏会が出来る顔ぶれです。

河村太郎さんの編曲も、私たちには貴重な存在です。

そのお陰で、第1回から9回まで、定員650名のホールが満席になります。(チケットは700円) ほかに山口MCの指揮者の大島さん、会長でギタートップの佐々木さん、それから宇部マンドリーノの皆さんも応援に来てくださいます。

そして最大の楽しみ(?)は、打上げ、二次会。岩国のメンバーの方々も山口の方々も、男女を問わずお酒の強いこと、深夜2時頃まで(皆さんには深夜ではない?) 飲みながらのマンドリンの話を延々としゃべり続ける。こんな社会人の同好会は、他にあるのでしょうか。別れ際には、手を握り合い、肩を抱き合い「マンドリンをやっていて良かったね」がいつもの別れの挨拶。岩国市民MCを頂点としたマンドリンクラブ一家のような感じがします。

私と岩国との出会いは、昭和33年頃だから、もう50年近く前になります。

ワセダマンドリン楽部のメンバーとして(これでもコンマスでした)中国、四国演奏旅行の途中、岩国高校の熊谷先生がクラブの大先輩ということで、お世話をしていただいて、岩国高校プレクトラムアンサンブルと交歓演奏会を横山講堂で開催したのが始まりです。

熊谷先生が度の強い眼鏡越しに、満面の笑顔で迎えてくださったこと、山添さんがコンサートマスターで可愛い丸刈りの坊主だったこと、古い木造の建物ではあったが格式を感じさせる横山講堂、木漏れ日が燦々と輝く校庭、それは私にとっても貴重な青春の1ページなのです。

卒業後、防府に帰省してからは、横山での岩国高校の演奏会は勿論、県内での演奏会には、いつもご案内を頂いていました。

川西のご自宅にも、何度かお伺いし、オリジナルのイタリア名曲選などをカルテットで楽しんだこともあります。先生は、マンドリン人(?)の仲間との交流が本当に好きでたまらないといった方でしたし、非常に気配りのきく優しい人物でした。がしかし、演奏会で指揮をされている時、練習の指揮のときは近寄りたがり厳しさを感じたものです。お世辞にもスマートな指揮振りとはいえない、体全体火の玉、目玉が飛び出しそうな感じ、、、岡本太郎を想像してください。そんな先生と孫のような男の子、女の子の集団、そこから生まれてくる美しい旋律。とても微笑ましい世界でした。

あれから50年も過ぎたわけですが、熊谷先生のプレクトラムに対する情熱と、厳しさ、楽しさ、優しさが岩国市民マンドリンクラブに脈々と受け継がれていることは、本当に素晴らしいことだと思います。その恩恵を受けておられる皆様もこの歴史を継続してくださると信じます。

歴代会長の三浦さん、石川さんの魅力的なお人柄、また高島さん、新井さん、中里さん、尾園さん、末岡さんなどのそれぞれ個性を持った優秀な指揮者のご活躍をあわせて、岩国市民マンドリンクラブの益々のご発展を心からお祈りいたします。



大人になってわかること

司会者 山中敏枝

「岩国市民マンドリンクラブ50周年」おめでとうございます。

数年前から、石川会長ご夫妻のお人柄にひかれて、定期演奏会の司会のお手伝いをさせていただいております。楽器の一つもできない私ですが、毎年、音楽を愛する皆様の情熱を身近に感じさせていただき、パワーを頂戴していることに本当に感謝しております。

50年の間に、演奏にかかわってこられた会員の数は、おそらく今の岩国市の人口ほどもいらっしゃるでしょう。そして、その会員を支えてくださったご家族の皆様、演奏会を楽しんで下さった方々の数を合わせると、これまで演奏してきた曲の音符♪の数ほどにもなるのでは？・・・素晴らしいことですね。

岩国に住んで22年になりますが、私は岩国が大好きです。

前に穏やかな瀬戸内海が広がり、後ろに古のロマンを感じさせてくれるお城山、ささやかな生活には十分な商店と、多すぎず少なすぎない人々の笑顔。そして、「市民」が、50年も受け継いできた「岩国市民マンドリンクラブ」という素敵な財産があります。市民の一人一人が、誰に言われるのでもなく、守ってきた伝統は、何にも替えがたい大切な宝物だと思います。

大人になってわかる、さわやかで、さりげなく、長く続くものの素晴らしさ・・・「岩国市民マンドリンクラブ」には、そんな上質のテストを感じます。

クラブは50歳を迎え、人にたとえれば、そろそろ人生の円熟期。

これからどうぞ末永くすばらしい伝統を次の時代に伝えていってください。

皆様と私の（ハハハハ）健康と、クラブのご発展を心よりお祈りしております。

ク ラ ブ 活 動

1. 岩国市民マンドリンクラブの沿革

—歴代会長が綴るあの日あの時—

1-1. I CMCの沿革

1971～1979 会長 三浦孔司

それは30年前のことになる。岩国プレクトラム30年史編集関係者の間では、当時すでにこの記念誌で終わることなく、また記念誌あるいは映画でも作りたいという思いがあった。
今ちょうどその時が巡ってきた訳である。

創立されてしばらくは、岩国高校プレクトラムアンサンブルOBによる同窓会形式の活動が続けられたのであるが、熊谷先生が他界されてご縁が次第に薄くなって行ったことや、自分達でプレクトラム音楽を追究したいという意識の高まりなどから、岩国市民マンドリンクラブへと脱皮したのである。その年から広島公演が始まった。昭和48年(1973年)のことである。当時は、既婚者は極わずかであり、結婚ブームが始まった頃だったので若い力が溢れんばかり、自分を拘束するものもなく没頭できた時代だったのである。

以下は、定演プログラムや記憶を頼りに沿革について記してみたい。

当時と今の大きな違いは何かを考えると、それは、岩高ブレアンを基盤とした思考と行動であったのに対して、今は、多様性の集合体となり、一つのより高い音楽表現を実現することの一点で共通性を持っていることではなかろうか。

起源

このクラブの起源は、前回の記念誌である「岩国プレクトラム30年史」や初回の記念誌「岩高プレクトラム・アンサンブルの歩み」に詳しく載っているので、そちらをご覧いただきたいが、起源といえば、故熊谷幹雄先生のマンドリン情熱が全てであろう。

岩高ブレアン創部記念日である12月24日には、毎年「クリスマスの集い」を開き、“この日を祝し、かつ忘れぬための行事”を催して、プレゼント交換や隠し芸披露をしていた。その中で、師は、“ゴンベが種まきや、鳥がホジくる。3度に1度は追わずばなるまい。ズンベラ ズンベラ ズンベラ よー”とオペラ調で歌ってくださったものだ。

それは、合奏の協調性を教えると共に社会生活での教訓だったのだろう。

師は、時と場所によっては、冗談やふざけやジョークも通じる人で、ご自身のあだ名「幹雄から採ったミキ猫の“猫”」を喜ばれていた。生徒は、面と向かっては誰もあだ名を言う者は居ないが、プレゼントには良く出てくるグッズであった。

50年経って、お許しいただければ、“ゴンベが種まきや、オレ達が育てる”の気構えて、継続が出来たのではなかろうか。

年齢

年齢構成の面から見ても、20回前後は、40才を最年長に30才前後が中心となっていたのが、今は、70才を最年長に50才台が中心となっているようである。

30才前後といえば、ある程度の社会的経験をつんでいるし、何とんでもまだ若さに溢れ、幸いにして当時は趣味娯楽の種類も少なく、マンドリン合奏に寝食を忘れるほど没頭していたのであるが、今は、趣味娯楽や



人生を楽しむ術が他にいくらでもあるし、年齢的に見ても生活という条件に拘束されるという面もあわせ持つために、以前とは違った取り組みになっているのだろう。

出演回数

年齢構成だけではない。出演回数という経験熟練度から見ても当時は、10回以上の人が6名(ステージに上がった人の1割)に対して、今は、20回以上の人が25名と5割を数えるのだから、それは相当の老舗のアンサンブルと言えるのだろう。

指揮者にしても、当クラブ生え抜きで、全員30回程度の出演回数を数えるので、奥さんとの生活よりも長く、アンサンブルがシッカリ行くのも当然といえば当然である。

そのことは、定演の録音盤を聞き比べてみると随分大人の演奏になっていると感じるのは、私だけであろうか。

出演者数

出演回数が出たので、ついでに出演者数に触れてみたい。

第1回は、22名の岩高プレアンOBでスタートした。出演者数の推移を眺めてみると、10回、20回、30回、40回と節目の定演には、なぜか前後の年より明らかに飛びぬけて多いのである。言わず語らずの気持ちさがそうさせたのだろう。

最も多かったのは、20回定演で81名、20回以降最も少なかったのが、33回、36回の36名となっている。33～38回は、40名前後と低調が続いた時期であり、選曲の面から見てもオリジナルとかクラシック系が幾分少なく、これが奏者にも影響していたのだろうか。後でも述べるが、お客様を考えての選曲だったのに、奏者が減るという作用もあるとすれば、選曲は本当に難しいものである。

通算してみると、延べ出演者数は実に2627名になるのだから50回もやれば、こうなんだなー。1回平均53名である。2627名というのは、35回出た人なら35名というカウントになっているので、個体数としてみると、678名ということになっている。

678名の人が、ICMCの定演に出演したということになり、改めて積年のすごさを感じずにはいられない。

40年前に亡くなられた熊谷先生は、想像だに出来なかったろう。声掛け合って始めた一人としても、その場が精一杯で先のことなど考える余裕もなかった。

それにつけても、後輩の人たちの継続力には感服することしきりであり、深く感謝している。

演奏曲目

次に演奏曲目を見てみよう。

演奏頻度の序列を調べて見ると、1位が細川ガラシャで8回、2位は序曲イ長調で6回などである。4回以上の人気曲目は9曲を数え、細川ガラシャと交響的前奏曲を除く7曲は、熊谷先生が振られた曲であり、7曲の名前を見ると熊谷先生を連想するし、その匂いさを感じるのである。それは、師の好みもあり、所蔵譜面の制約もあったのだろうけれど、我々の腕の方がその辺りだったのではなかろうか。

一方、作曲者の人気度という点、細川ガラシャの鈴木静一が断然多く26曲を数え、次いで熊谷賢一が14曲と続くがここ10年間は取り上げていない。なかなか演奏許可がとり難いとか聞くが20回記念として作曲を委嘱した経緯もある。その年のユースホステル岩国での合宿には、作曲者自身の指導が得られた。

3位以降は、ヴェルキークー、マチョッキ、マネンテ、アマディと流石にオリジナルの作曲者名が続く。

選曲は、指揮者を中心に主要メンバー、現在はパトリダーを入れてなされている。定演では、アンケートをとっているのだから、この情報を保存しておきたかった。

編曲者のデータは集めていないが、最近の人気アレンジャーとして特筆したい人が当クラブに在籍されている。河村太郎氏がその人で、ポピュラーからクラシックまで幅広く、選曲委員から苦しい時の神頼みをされ、快く引き受けていただいている。全員に代わって厚くお礼を申し上げます。

ここでティンパニーについて触れてみたい。

熊谷先生が他界されてからは、自分たちで選曲から全てを決めることになり、翌年の第12回(1969年)には細川ガラシャが初登場となった。次の年第13回は人魚姫というように大仕掛けの曲が取り上げられるようになるとティンパニーが欲しいという願望が大きくなり、第14回(1971年)に初めて、吉本屋君担当のティンパニーが登場となったのである。

その後、第16回(1973年)からは、広島公演が現実のものとなったので、自前のティンパニーが欲しくなり、部員全員から資金を借用して広島の中山楽器店で購入したと記憶している。それから毎回使用しているが、余人を持って代えがたしということで吉本屋君は、遂に32回の出演となっている。

広島公演以降は、広島の大学MCと交流が増えて、ティンパニーの貸し出しも頻繁になり、運搬での衝撃が大きく、ほぼ10年で寿命が切れたようだ。まだまだ書き足りないほど思い出深い楽器であり、大きな出来事であったのである。

その後は、あちこちで借用を続けていたが、最近、白木さんのご尽力で打楽器の一括借用がかなっている。

入場料

ちなみに入場料はと振り返れば、もちろん初めの頃は、無料で聞いていただいたものだったが、1965年(第8回定演)頃から岩高PE第20回定演を祝して、向山に引っ越した岩高プレアンに部室を贈ろうということで、定演を有料にしたが、部室は色々と問題があると言うことで、1971年に、ドラ、チェロを寄贈したことを前回の記念誌に書いている。しかし、金額はいくらだったかは不明である(20~30万円だったかなあ)。1973年(第16回定演)に広島演奏会を催した時から200円という金額が確認できた。そして翌年は300円。その後、1980年頃に400円、1982年に500円になって25年間据え置いていることになる。

最近、ノルマとして定演チケット20枚が渡され、責任分消化で大童のようであるが、お陰様で50回定演では、1500枚程度を売り上げ、1100名程度の入場者を迎え、1階はほぼ満席に見えるほどに支持を得て、アンケートにも好評の言葉が多いことは、次の励みにつながるというものである。

会場

使用する会場も、当初は共立講堂、第8回から第21回までは岩国市体育館、第22回から第39回までは主として岩国市民会館、第40回からはシンフォニア岩国を使用している。

前回の記念誌で書いたと思うが、共立講堂は、破れたガラス窓からコーモリが飛来するような世情だったし、岩国市体育館も冷房は勿論なくて、舞台・客席つくりにくタクタになり、挙句の果てには、19時のサイレンが頭上で鳴り響くので、ステージマネージャーは、この時刻に演奏時間帯をはずすことが大役の一つであった。また、想定外のものとして、21回の録音盤には、ジェット戦闘機の轟音が生々しくレコーディングされている。

いよいよ待ちに待った本格的な大ホールとして岩国市民会館がオープン。1979年4月には、当クラブ主催の開館記念演奏会を開き喜び勇んだものである。

有料になればお客様抜きでの選曲は出来なくなり、以来この方、選曲する関係者の最大の悩みでありどうしても後手回しとなる難題である。たまに上手くいったと言っても毎年同じことは出来ず、やはり難題なのである。



ポスター1973.8.18
第1回広島演奏会

裏方

選曲を表の難題とすれば、裏の難題は、クラブ運営と定演の諸準備である。

昔も今も、専門の事務方が専任している訳ではないので、手弁当で個人の人脈に依存している。これは本当に裏の仕事人であるが、この仕事が確固としていなければ演奏活動も不安定になり、クラブの衰弱になって表れるのである。当クラブは、幸いにして、この裏方に恵まれたが、この方々への感謝を忘れてはなりません。

練習場と練習日

練習場と練習日についてもちょっと触れてみよう。

これは記録に残っていないので、それぞれの記憶に頼るしかないが、熊谷先生ご存命中は、師の行動にどこまでも付随・追従していたので、師の指導される帝人マンドリンクラブの週1回の練習日に帝人の厚生施設「桂風荘」に同行させてもらっていた。ご逝去後は、岩国小学校の旧高等科の教室(現中央公民館隣の松浦医院の位置)を使わせてもらっていたのである。

その頃の何時だったか、あの鈴木静一氏がその練習場に現れて練習をつけてくれたことがあったが、あの指揮棒と体の使い方には初体験の我々は戸惑うばかりであった。ご来岩の目的は聞いていない。

・・・おっと、記録を見つけた。

編集作業の途中で、第13回(1970年)プログラムに、鈴木静一氏ご自身による挨拶文を見つけたのです。それによると、「1969年秋に広島商科大学のマンドリンクラブに招かれて来た時に、岩高を訪問し、岩高プレティの諸氏ともお会いした。」とのことでした。岩国でのご案内や練習会場のご案内、練習終了後のお付き合いなど、どうだったのだろう。居合わせた私も思い出せない。

その後、旧岩国図書館跡地に岩国市中央公民館が新設(図書館は併設)されたときに先の旧教室は取り壊されたので、クラブ活動を市民文化活動として認めてもらい、以降練習場は毎週中央公民館となった。年代で言えば、1970年前後(第14、第15回定演頃)までのことで、当時のことは、山添、高島、和久本君あたりが詳しいはずだ。

和久本君といえば、その頃流行っていた辺見まりの「経験」の“さわり”を得意のドラで遊び弾きしていたなあ。その後、ドラトップを務め第17回(1974年)のルーマニア狂詩曲では、見事なテノールを弾いている。

それから約30年間は、クラブの内情とは疎遠になっていたもので、山根夫妻、石川夫妻、中里、尾園、金丸夫妻、末岡夫妻、石崎、上田、牧田、岡崎、浜田、足立、広中、波羅、中村由哉君あたりにバトンを渡そう。

練習場は、現在でも中央公民館を使わせてもらっていて、練習日は2週間に1回、ただし、練習時間は従来の倍以上の朝10時から15、16時まで続き、重点主義が採用されている。

当クラブは、公民館主催の公民館祭りなど、公民館活動の常連でもあるし、長年の演奏活動が認められて、平成19年2月25日に岩国市文化功労賞を受賞した。誠に慶賀に耐えない。

合宿練習

薄れ行く記憶の中で断片的に残っているので、資料を照合しながら綴ってみよう。

合宿所の振り出しはどこだったのだろう。少なくとも1971年(第14回)頃には始まっていたようだ。市内では、横山のユースホテル岩国とか岩国市青年の家、市外では、光市の光青年の家、岩田の青少年宿泊訓練所を思い出す。

当時は、数の上では岩国に常時不在の大学在校生が多かったのも、次第にレベルの高い曲を選んでいく所為で、合奏を纏め上げるためには合宿練習が必須のこととなったのであ



1975年 #18 定演打ち上げ

る。

合宿は、合奏の仕上げが唯一の目的であるが、練習後の交流にも興味津々。しかし、我々の団体は、決して常軌を逸することはなかったにも拘らず、岩田の宿泊訓練所では、代表者として呼び出され、お説教をくらったことがあった。何がどうだったのか、今でも不可解さが残っている。

寝食を共にするということは、遊びの中でも効果は大きいものようだ。アンサンブルが仕上がっていくから不思議である。

打上げ

これもいつから始まったか明瞭ではない。1970～1980年の間の記憶には、通津の沢潟海岸にあった施設での1泊と松塚君の松屋産業ビルで1泊したことが残っている。

松塚君には、ギタートップとして、合奏をはじめソロも何度か頼んだし、松屋産業の部屋を借りて会議とか先の合宿をさせてもらった。財力のない私たちの心強いパトロンである。今でも感謝している。

その1泊しての打上げの時、台風に見舞われて帰るに帰れないこともあったなァ。



2006年 #49 定演打ち上げ

演奏内容

50年も続けて来て、演奏内容の実態はどうかというと、「口で言うより現物を見る」ではないが、驚くなけれ熊谷先生の追悼となった第11回演奏会から1回も欠かさずにライブ録音が残っているの、先ずはこれを聞いてみることだ。それ以前も故富沢先輩は録音しておられたと思うのだが、引き継ぐ機会を逃してしまい、今でも残念で仕方がない。

録音盤を聞いてみて顕著なことは、過去に最も盛り上がった20回定演前後は、熱病にでも取り付かれたのか、出演者も多く若さに溢れていた頃のもので、荒削りではあるが、生きのいい若々しい演奏であった。

それから20年、30年と沢山の定着メンバーによって熟練の大人の演奏となっている。最近、新井君と末岡君の指導によって、執拗といえるほど表現にこだわり追求していく姿勢が演奏に十分表れているように思うし、それによってクラブ員の意識も変わり、市外のかかなり遠方からの参加者も相当の人数に上るほど、充実感のある演奏活動となっている。

このように新井君の貢献度は特筆に価するものであり、また彼の指導を実現させた石川会長の功績も大いに評価しなくてはなるまい。新井君が出れば田村君と続く、字はマンキチ。マンドリンのリーダーとして、苦しいときのエースとして何度も頼まれて遠路を登場、27回出演となった。

このような華々しい活動の対岸には、和久本君の原稿にある「岡山の医師たちのグループ」(エスペランサ)のような音楽との付き合い方もあり、何だか背中をドンと突付かれたような気がするのである。

録音そしてCD化

録音方法はいえ、オープンリールのテープレコーダーである。定演シリーズの第1巻は1968年の第



11回定演に当たるが、私が録音機なるものを初めて触ったのが、高校時代の1954年頃である。さすが米軍基地の町で米国製を借りて来たらしい。それもテープの前身であるワイヤーレコーダーだったのである。

その後国産のテープレコーダーが出回りしかもステレオで録れるようになり、1973年の広島公演からは、大枚をはたいて2トラック38という大型のテープレコーダーを購入してしばらく録音したが、

仕事の関係で次の人にバトンタッチした。

その後は、テープレコーダーあるいはホールの録音設備を利用して録音し保存されている。

私としては、再び、2004年47回からデジタル録音装置を購入して録音係りを担当している。

機材を揃えればすぐに録れるというものでもなく、それまでがアナログで育ってきた者が、いきなりCDと言われてもそれらを仲介する知識もなく迷っていた所に「三浦さん、パソコンで何でも出来ますよ」という尾園君に触発されて、デジタル機器に踏み込んで行ったわけだが、2トラ38からいきなりMDだMOだCDだHDDだといっても、「ダイナミックレンジは大丈夫かよ」と本当に不安な出発だった。

30数年の間に録音方法・機材などの技術革新が進み、いろんな録音媒体によって個人ベースで保存されていたものを拝借して2004年から2005年にかけて、統一の取れたCD化の作業を行った。貴重な音源は、石川、末岡、牧田、大浜、安田、山根義広の諸氏から借用したものである。お陰で第11回から40枚のCDとして完備している。

CD化するということは、同じ曲を何度も繰り返して聞くことになり、神経をすり減らす作業であるが、以前のアナログ時代とは違い、パソコンを使っただけの作業は目と耳での編集作業となり、正確さと簡易さで負担は随分減ってきたのも事実である。

音源は、ライブ録音であるので、いろんなハプニングが織り込まれているが、中でも、子供の声が極端に大きく他人に迷惑をかけている定演が何回もあり、30回を中心にして前後に集中しているのは、どうした訳であろうか。

古いテープとレコーダーは、経年的劣化が進みCD化する最後のチャンスだったように思う。当分の間は、このCDで保存が続き、更なる技術革新の暁には、新媒体への移し変えが必要となるだろう。最新の技術であるデジタル録音は、パソコンによる編集・修正ができるし、合宿などでの練習版CDも安くできるので、個人練習用としてもってこいであり、従来では考えられなかったことである。

定演のCDは、現在、ICMCのホームページにリストアップされていて、部外者からも注文が来ている。

以上、沿革についての体裁になっていないかも知れないが、13項目の視点で記憶を呼び起こしました。

不足するところは、他の人の原稿に期待して筆を置きます。 お付き合い有難う。

1-2. マンドリンだらけの日々

1980～1988 会長 山根義広

岩国プレクトラムソサエティが、岩国市民マンドリンクラブに名称を変え、初期の隆盛を極めた時代から途中に会長を受けその任期終了までを、年代を追って記してみることにする。

昭和48年(1973年) 第16回定演の年である。

～市民団体としてのスタート～

クラブの名称を「岩国プレクトラムソサエティ」から「岩国市民マンドリンクラブ」に変更。

これに伴い、メンバーも岩国高校ブレアンOB、OGでない方、岩国在住でない方が増えていった。

岩国高校ブレアン出身者が、進学先の大学や勤務地の社会人サークルの同好の志を誘って参加することが多くなった。同



1975年8月 合宿

時に曲目も、高度なテクニックのものが多く取り上げられるようになった。

また、それまでは、進学地や勤務地の都合、結婚などでクラブから離れる人が多かったが、この頃から、そのような生活環境の変化があってもクラブを続ける人が増えてきた。

お盆休みに行なっていた定期演奏会だが、夏休みに帰省して来た学生メンバーが練習に加わり、盆休みの合宿には社会人の帰省してきたメンバーが加わる、その勢いで定期演奏会を行なっていた。

より緻密な演奏を求めて、5月の連休頃に合宿を行なうことがあったが、東京、大阪、九州から飛行機で帰省し合宿に参加、合宿が終われば朝一番の新幹線や飛行機でそれぞれの勤務地へ帰っていく……という猛烈なメンバーもいた。

このように、「マンドリンと仕事」を生活の軸にしているメンバーの姿は、とても刺激的だったのである。

昭和50年（1975年） 第18回定演の年である。

～成長と苦悩～

この頃は、仕事の都合などで、地元にクラブのリーダーである男性が少なく、8月の定期演奏会が終わって、翌年6月頃までの通常練習は、集まる人も少なく、多いときで5～6人、時には1人のことも……。

定演後にT氏の退団、クラブの支えだったので将来の活動に不安が残ったが、地元を離れていたメンバーも結束して、クラブの立て直しに……。心強く思う。

昭和51年（1976年） 第19回定演の年である。

～外に向かって～

メンバーに広島在住のものが多かったこともあり、広島演奏会を実施。

昭和52年（1977年） 第20回定演の年である。

～20年の区切りと第1次結婚ブーム～

クラブ員が、演奏面はもちろんその生活スタイルまで手本にしていたA氏が10月に結婚したのを皮切りに、メンバーの結婚が続く。

昭和56年（1981年） 第24回定演の年である。

～市民団体の形～

これまでのメンバーは、独身者が多かったが、結婚して夫婦での出演者が出て、この年は親子での出演者もあった（柴田さん親子）。これでやっと同窓会的な団体から市民団体の形になったと、その成長振りが嬉しかった。

「魅力のあるクラブにするには？」「メンバー同士のコミュニケーションを上手く図るには？」「観客を増やすには？」「技術の向上を図るには？」……。

いろいろな問題点を抱えて数年が推移していたので、定演終了後泊り込みの反省会を実施。KJ法を使って皆で考えた結果、それぞれが自主的、活発に動くようになった。それまで部員の皆は、より積極的に参加したいのに、幹部の方針が分からなく何をすべきか見えなくて、物足りなく思っていたのだろう。目的、自分が出来ることがハッキリ見えたのだと思った。

昭和57年（1982年） 第25回定演の年である。

～日本全国から岩国～

この頃は地元在住のメンバーが少なく、演奏会には日本全国から集まってきた。それを表したものが、ブ

ログラムの中の「メンバー表＝部員分布図」である。

昭和58年（1983年） 第26回定演の年である。

～つながり～

M君が自分の学校の教え子とともにクラブに参加。

「熊谷先生から教わったマンドリン合奏の楽しさを引継ぎ、高校を卒業しても弾いていこう」と出来たこのクラブ。その高校の卒業生が、赴任した学校でマンドリンクラブを作り、自分の生徒とともに合奏に参加してきたことに、感慨もひとしおだった。

#25 定演プログラム 部員分布図

昭和60年（1985年） 第28回定演の年である。

～多芸多才なメンバーを発見～

通常の練習に集まる人数は少なく、「果たして、これで演奏会ができるのだろうか？」と不安に感じているも、直前合宿になるとワッと人が集まり、ブワァーッと練習して、演奏会を実施し、また1年後に会うことを約束して散っていく……。そんな状態でスケジュールをこなしていた時代。

打上げでは、パート別に余興を競った。そのため、合宿などのパート練習では、合奏のための練習よりも余興の練習に重点をおくパートもあった。

そして、みんなの多芸多才さに驚き、これならドサ周りの興行ができるのではないかと・・・と思ったことも。

昭和61年（1986年） 第29回定演の年である。

～自分の生活に密着したクラブ～

結婚してもクラブを離れる人が少なくなった。子供ができて、子供を放って(?)参加したり、一時的な休部はあっても退部することなく、続けるママさん部員が増えてきた。

そんな状態を支えてくれた子供たちに、感謝の気持ちを表して演奏したのが「子供の国」。そして日頃紹介することもない子供たちをプログラムで紹介した。

プログラム表紙のデザインは、気のいいヨーロッパの貴族が、お城のコンサートに出かけている雰囲気を表してみた。

1-3. 会長として



1997年 #40 定演

これは元々、私自身が「マンドリンの美しさは小合奏にあり」と思っている事に起因しているのだが、衰退に

1993, 1994 会長 尾園勝善

会長当時の事を何か書けと言う事なのだが、ほんのワンポイントリリースなのでほとんど何も覚えていない、というのが正直なところである。就任した当初に、日本の古い曲をリメイクして、マンドリン作品として定着させるような事をしたい、と言っていたような記憶があるが、たいしたことにはならなかった。

会長としては、無能であったので観客動員数は最低ランクに落ち込んでしまったように記憶している。部員数もかなり減ってきていて、アンサンブル指向にしてはどうかと言う提案をした事がある。

つながると思ったのか、賛成はされなかった。しかし会長として、応援に頼る大合奏はしたくないと言う事で、またまた石川御大に再登板をお願いする事になった。それで今に至っているわけであるが、落ち着くべきところに落ち着いたのではないだろうか。

今やインターネットも手伝い、通常練習に30人が集まるようになったと聞くと、初期の黄金時代とはまた違った意味で黄金期を迎えようとしているのかもしれない。当初、岩国をマンドリンのメッカにしようと言う夢のような事を言い合っていたが、それも案外夢ではないのかもしれない。各大学のマンドリンクラブの部員は激減し、短大では廃部も多いと聞くと、そんな中、小さな地方の町で永続しているのは素晴らしい事であろう。

クラブのますますの発展を祈り、参加できた幸福を感謝しつつ…。

1-4. 私の「昔と今」

1989～1992, 1995～現在 会長 石川善久

もういい加減に書き上げなければ堪忍袋の大きな三浦先輩の緒も流石に切れそうな気がします。30年前、20回記念誌の編纂作業を中心になって取り組んだ者の一人として、今回の編集主査のご苦労は充分に分かってはいるものの、なかなか重い腰は上がりません。無事校了に至った時、「もし次があるとすれば50年誌ですね。その時はお互い歳は？ それより、ICMCはまだあるのかしら？」等と冗談とも本気ともつかぬ遠い先の事に思いを馳せ、まとめ上げた達成感に言葉に出来ない程の喜びに浸った時のことを昨日の出来事のように想い出します。

あれから本当に30年が過ぎた今。果たしてどっこい、当時と変わらぬICMCここにあるではありませんか。当時と変わらぬ？ はい、私にはICMC気質は当時とちっとも変わっていません。歴史の積み重ねに伴って年齢層の厚みが増ただけで、マンドリン合奏をこよなく愛し、常に高い音楽性を追求するICMC気質はしっかりと今の私たちに繋がっています。

「昔と今」はG. マネンテの名曲で私も何度か合奏に加わりましたが、その楽譜には「今と昔」と書かれています。日本語の言い回しとしてその方が調子がいいのだらうけど、編曲の中野二郎先生は“原題に沿うと「昔と今」の訳が正しい”と後年、訂正されています。本稿の文脈をして、正に我が意を得たり！ 両巨匠に敬意を表しつつ拝借しました。

ICMC黎明期の様子に付いては諸先輩をお願いすることにして、私には岩高プレクトラム・ソサエティの第1回から積み重ねた長い歴史に様々な思いを致し、50回を刻するに至ったICMCの今の姿を見つめ整理する事が、この稿に課せられた務めと心得ましょう。

と言うことで、任期以前の事については歴代会長に委ねることにし、さっそく就任に至った頃の様子から紐解いて、私的なことを織り交ぜながら現在までを辿ってみます。貴重なページを頂きますが、ご容赦のほどを。

昭和から平成へ

私の前任は山根義広さんでした。そのご苦労は並大抵では無かつたろうと拝察します。当時は土曜日の夜が通常練習日でしたから、いくらマンドリン好きの山根さんでも広島(廿日市)からの毎回参加には限度がありましょう。30才代の働き盛りで日々多忙を極めておられたことは傍目にも伝わって参ります。

このことは山根会長と同様、他のメンバーにも言えることで、土曜の夜の参加者集めには自ずと限界がありました。私も商売を始めてまだ日が浅く土曜日も遅くまで雑務に追われ、練習日と分かっているながら Cello を車に積み込むことは後回しになるのです。その頃熱心に I CMC を支えてくれた金丸君達からよく電話が入ったものです。今でもある中央公民館一階の公衆電話から、「石川さん、今日も練習になりません。来てくださいよ・・・」何かすがるような、そして責め立てられるような調子で……。本当に申し訳ないと思いながらも、つつい失礼ばかりしていました。この時期を地道に繋いでくれた彼等の努力があってこそ今の I CMC が存続している訳で、本当にみんなには感謝の気持ちで一杯です。



#30 定演の頃 定演間近の土曜練習

そんな状況の中、私が会長を仰せつかったのは平成元年。覚え易い年です。新しい元号に戸惑いを感じ、身に染みた「昭和」の呼び名を意識的に振り払いながら使う「平成」に照れくさを覚えたものです。またその時、I CMC には既に 32 年の歴史があり、各地・各方面で活躍する多くの偉大な先輩を輩出していました。そんなクラブにあって山根会長からの会長職の引継ぎは、若輩の私には荷が重過ぎます。幹事として実務や運営に係わることは不得手ではありませんでしたが、クラブの屋台骨を担って立つ会長職は、いくらお調子者の私でも躊躇します。強い辞退の申し出にも関わらず、山根会長の巧みな説得と粘りにより、ウブな私は受けざるを得ない状況に追い込まれた様な気がします。不心得者とお叱りにならないで下さい、山根さん！

練習日の変更

昭和の I CMC を締め括った山根会長の後を受け、私が先ず手を付けた事はこの練習日の変更でした。長年の慣行を変えることに多少の異論もありましたが、土曜日の夜という設定自体が近郊に大多数のメンバーがいて成り立つ訳で、実情を見ると変更はやむを得ません。そこで月 2 回の日曜日、それも終日（同じやるなら一日中どっぷりと！）の練習に切り替えました。日曜日と言うことで若いメンバーにはそれぞれに予定があって、スタートこそ思わく通りには集まりませんでしたが、そこは元々マンドリン好きな仲間達。皆、徐々にスケジュールを調整するようになり、その成果が表れるまでに時間を要しませんでした。定演などの目先の目標が無い時でも、10 人前後は集まり、何とかアンサンブル程度は出来る形になりました。が・・・

弱音

消滅の危機は乗り切れたものの、この程度の人数では満足のいく I CMC の定演は出来ません。都市部とは違いマンドリン経験者をたやすく探し出せる土地柄でもなく、練習日程の変更をしただけでは新規加入による増員は望めません。参集は成り行きまかせ。夏の定演が視界に入り始める頃になっても相変わらずの人数。チケットの販売を開始する時にはいつも思ったものです。

“このチケットが出回ってしまえば、もう後には引けない。大丈夫だろうか？

今ならまだ間に合うけど・・・” すごく不安の中での、エイ！ 販売開始！！

もはや走り出した列車は止めようがありません。最終的には賛助の力をお借りし、数回の強化練習で何とか定演開催にはこぎ着けるものの、いつも綱渡りの企画です。無事“夏”が終わるとホッとしたものです。頭からはいつも「定演」の二文字が離れず、このままでいいのだろうか？

と思いつつも、無策のまま、又、次の夏が来ます。

その頃、尾園君とは I CMC の目指す音楽の方向性や運営について良く話し込みました。ただ彼との間ではなぜかボヤキ話になり、マイナス思考になるのが常。ある時から、これまでの定演の形に疑問を抱くようになり、規模縮小の方向へ傾倒していきます。

「大人数での開催に無理を重ねてきたが、現状に合わせた少人数のアンサンブルで出来る範囲でやろうよ、それでも無理な年は流せばいいじゃないか。途切れなく続いた定演だけど何時かはその時が来る、私の力不足で途切れてもその汚名は私が被る」等と、今思えば捨て鉢のような結論にまでなるのです。こんな弱気な私を鼓舞してくれたのが末岡君や金丸君達。「やはり、ここまで続けてきた大人数での定演を継続したい。何とかして、これまでの形態を維持し頑張ろう。」との主張でもう一度引き戻してくれたのです。斯くて演奏会自体は体裁を整えたものが続くことに成りました。しかし、ここまで4年間、何とか会長を務めてきましたが、零細企業を営む傍らでの重責はクラブの方がどうしても疎かになり、年間を通してのメリハリのある積極運営まで行き届かないのが実情。メンバーの皆さんにはずいぶん鬱憤を与えたことと思います。

こんな沈滞ムードの中、背中にしょった重い荷物を降ろしてくれたのが、彼の尾園勝善君です。彼は二級後輩にあたり、私としてはある程度先輩風を吹かせた訳で、いつものように行きつけの飲み屋に誘い、ああでもないこうでもない等と調子のいいことを言いながら会長職を押しつけた様に思います。私が山根会長から口説かれた時の様に首尾よく運びませんでした。私への心遣いか、“何れ私に返上します”とのヘンな条件付きで受けてくれました。彼の音楽の才能は衆目の認めるところです。音楽作り主体の運営で、思う存分力を発揮してもらいたいとの願いを受け、2年間でしたが力一杯、慣れないクラブの運営に力を尽くしてくれました。

再任と出直し

尾園君との約束は予想外に早く訪れ、平成7年から再度会長に就任する事に。2年間の休息でしたが、運営面の重圧から解放たれプレーヤーだけの我が身には英気を養う事ができました。しかし事情を承知の上で再任を受けるには覚悟を決めねばなりません。心強いことに、子育ても一段落した妻がこの年から本格復帰。物置の奥に殆どしまいっぱなしだったギターを取り出して、“左の押さえと、右の弾きがシンクロしない！！”などとボヤキながらも末席に加わりました。彼女の理解と支えが、私の再任引き受けを後押ししてくれたのかも知れません。

定演38回の年、間近には40回の定演が迫っていました。

転機の40回

節目というのは何かに付けてステップアップのきっかけに成るものです。折しも I CMC にはフォローの風がそよ吹き始めていました。その一つは県内では有数の規模と設備を誇る本格的なコンサートホール「シンフォニア岩国」の完成です。平成9年開館、正に我々40回定期演奏会の年に合わせてくれたかの様なナイスタイミング、照準はシンフォニア岩国に！

そしてもう一つ心強い出来事。それは、新井義悠氏の復帰です。岩国高校プレクトラムアンサンブル出身の氏は、日本マンドリン界に輝かしい数々の実績を残しながらも長く地元を離れて居られましたが、1996年帰省され、プロとして広島を拠点に幅広く活動を始められました。I CMC においては古くからのメンバーでもあり、深い関わりをお持ちの新井氏ですが、プロとして活動を起こされたからには馴染みの私達にも甘えは許されません。正式にご指導をお願いし、質の高いアンサンブルの再構築へ、との思いも熱く、新たな一歩を踏み出します。これもまた、

40回というタイミングに合わせて頂いたかのような偶然。この二つの事は、その後のICMC活動にとって本当に“大きな贈り物”となりました。

一方部内に於いては、この頃から次々と新しいメンバーも加わり、若いエネルギーが満ち満ちてきました。そして節目の演奏会ということで早くから諸準備に取り組み、新旧メンバー総ぐるみで選曲や運営に力を発揮！みんなの積極的な参加意識が表れ、雰囲気も引き締まってきました。しばし忘れていた「ときめき」を見つけました。

そんな中、40回を契機に創部以来続けてきた夏の「里帰りコンサート」を改め、季節の良い秋の開催に変更しようという大胆な発想が生まれます。しかし、伝統の足かせを外す事にはや躊躇はありません。これも、節目という口実の成せる技でしょうか。この「秋の定演」は、年間を通じての練習計画には好都合で現在に至っています。従来だと演奏会の最後の追い込みをしていた夏に、悠々と合宿練習も行えました。そこは標高500mに立地する、由宇町の「ふれあいパーク」。眼下の瀬戸内海が箱庭の様に望める素晴らしいロケーションでの一泊二日は、日常を忘れてマンドリンに没頭した異空間でした。ここの「ふれあいパーク」は現在でも合宿練習に利用させて頂いています。

いよいよ迎えた第40回の定演。真新しいホールと60余名の磨き上げられた奏者達、高まる雰囲気の中、650名の観客を前にしてのステージは久しぶりに味わう新鮮な緊張と喜びでした。

この40回定演に於ける達成感は、実に貴重な経験となり、50回に続く活動の礎となるものでした。

音楽とマネージメント

40回以降、現在に至る活動には印象深いものがあります。まず、古くからのメンバーと毎年のように加わる新メンバーの融合。老若男女を問わないマンドリンアンサンブルで結ばれた絆は、目に見える形で表れてきました。子育てに一段落したベテラン世代、家事のやりくりをして参加する現役パパ・ママ世代、新米社会人の初々しい世代、そして孫子のような学生達。バランスのとれた世代構成は社会人団体としての厚みを増し大人の団体へと成長を見せてきました。合宿の準備や緻密な練習スケジュールの作成、演奏会会場との打ち合わせ、等々に腕を振る若き幹事達。後方でそっと目配りをし、準備怠り無い女性陣。従来への悪しき慣行であった「岩国時間」も徐々に払拭され、今では10時の練習開始には合奏体形がほぼ出来上がり、指揮者の登場を待つばかりの心がけ。こうした各自の積極的な参加意識と互助の姿勢により運営は一段とスムーズになり、組織としての活力が湧いてきました。



2005. 11. 12 #48 定演打上げ

特徴的な姿と言えるでしょう。それはICMCの初期、高島信人氏が、音楽とマネージメントの両面において、卓越した手腕と篤き人望で若いメンバーの心を捉え輝いていた頃と対比しても劣

らぬ活況と言えるでしょう。

ICMCの今、そしてこれから

さてここで近況をいくつかザク切りで並べてみましょう。

●ホームページの開設

世の中はまさにインターネット時代。平成14年に、ICMCもホームページを立ち上げました。各種資料の整理、取りまとめを行うとともに、外部への情報発信、新規部員の勧誘、そして何より会員への連絡事項の徹底に絶大な威力を発揮しています。

●ライブラリーと所蔵楽器の充実

河村太郎氏のパソコン編集による楽譜提供は、ICMCライブラリーに革命をもたらしました。何と定年退職後の手習いで始められたとお聞きしますから仰天です。今や、私たちの譜面帳には昔の手書譜は殆ど姿を消し、美しく読みやすい楽譜が貼られています。音楽に対する造詣の深い方ですから、五線に置かれた符玉にも流れが読み取れ、惚れ惚れします。ご自身で編曲された曲も多く、何度も演奏会で使わせて頂き感謝の気持ちで一杯です。現在は河村氏の指導を受けながら何名かのオペレーターが綺麗な楽譜を提供してくれています。

ホームページもパソコンに依る楽譜作成も、尾岡勝善君がその先鞭をつけてくれたことは一言申し添えておかなければ成りません。

次に、所蔵楽器も充実して来ました。殊に、マンドラ（3本）、マンドチェロ（2本）、それとマンドローネ（1本）（何れも大野 繁 作）は逸品です。これらの楽器は、プレアンで故熊谷幹雄先生がご苦労され調達された楽器でしたが、時が流れ、傷みも激しく使い手も無いまま長年高校の部室の片隅に無惨に放置されていたところを、1997年に譲り受けたものです。ICMCの部費から修繕費を捻出して、今では立派に往年の輝きを取り戻し、芯のある深い豊かな音色が蘇りました。他にも、スネアドラムやスタンドシンバルなど小物打楽器類、本年はシンセサイザー一式等を揃え所蔵楽器の幅も広がりました。

●文化功労賞受賞

幾多の山坂を乗り越えて一つの方向性を掴みかけた今、私たちに嬉しいご褒美がありました。「長年の活動を通じて音楽文化の地域貢献に果たした功績」が認められ、平成18年度岩国市文化功労賞を受けたのです。個人、団体数え切れないほど有る関係者の中で選ばれることは容易ではなく、活動が広く認められ、市民権を得た思いと同時に、50回を迎える節目の年にあたり私たちにとっては大きな励みになりました。

●50周年記念事業

40回を過ぎた頃から“50回事業”と言うことが視野に入り始めましたが、遠い先のことと暫くは目にフタをして来ました。46回の年、末岡成基君を委員長とする50回記念実行委員会が立ち上がり、内容の検討が始まります。彼はICMCの定演回数と年齢が同じという因縁浅からぬ事からも、この大役を買って出てくれました。当時のメモによると、

- ・50回記念演奏会を目途に3年掛かりのプロジェクトをスタートする（具体的には選曲、演奏レベルの向上、メンバーの掘り起こしによる増強、集客等か？）
- ・記念誌の作成



2007年2月25日(岩国国際観光ホテル)

岩国市文化功労賞授賞祝賀会

- ・プレアンとの交流
- ・他団体等交流のある場所での公演
- ・記念曲として新作を現代作曲家に委嘱するか否か

との走り書きがあり、具体性には欠けるものの、何かが動き始めた事が伺えます。それからは様々な場面で50回を口にする様になり会員の意識は喚起されました。

この中で記念曲の委嘱については賛否両論上がりましたが、“新曲の委嘱は受身の我々としては色々な角度からリスクが大きすぎ、初演の冠は付くものの価値観に乏しい。それよりマンドリン合奏の名曲として既に高い評価を受けている楽曲は沢山ある。それらを改めて見直し、ICMCならではの曲作りを目指そう”との意見にまとめられ、以降50回を睨んだ選曲が始まります。

また、目標には掲げたものの、誰も一步を踏み出せずにいた「記念誌」の編纂事業。ついに、その委員長の重責に白羽の矢が立ったのが三浦孔司氏でした。

冒頭にも触れましたが、30年前の記念誌の編纂を中心になってまとめ上げられた経験と実績で再度のご登板を願う事となりました。果たして、氏の持ち前の「計画性」と「行動力」に皆脱帽。いつしか、“50年記念誌原稿取り立て人”の異名を取るまでの氏のご尽力のお陰で作業は飛躍的に前進し、50年一区切りの資料整理の見通しが立ちました。私と来たら、今まさにその原稿を書いている訳で、三浦先輩には描かれたタイムテーブル通りに編纂は進まず、大変ご心配をお掛けしていますが・・・

三浦氏のご功績はこの記念誌編纂にとどまらず、50回記念事業全般をまとめ上げて戴いたことにあります。平成19年1月の総会では具体案を示して頂き、正式に「50周年記念事業」の柱が決まりました。

- ①50周年記念演奏会
- ②50周年記念パーティ
- ③50周年記念誌
- ④楽器購入
- ⑤定演録音原版整備・保存
- ⑥プログラム他の資料整備・保存

終わりに

薄れかけた記憶、散逸した資料をたぐり寄せ私なりの取りまとめをして来ましたが、そろそろまとめに入ります。

今、改めて50年の重みを感じています。昭和33年、ここ岩国の地で小さな産声を上げた私たちが、半世紀もの間休み無く走り続けられたことは、そのことだけで100点です。そして、その中で貰った無形の財産は、引退された方も含めメンバーひとりひとりの人生にしまい込まれていることでしょう。同窓会形式で始まった我がクラブも、今や完全に市民クラブの形を整え多くの方々のご支援を受けるに至りました。何ら見返りなど求めうるべくもないアマチュア団体、そこには他からの押し付けによるものは何も無く、自らの参加意識によってのみ見出せる価値が在るだけです。マンドリンを趣味に持てた幸せ、ここに集うみんなが生涯楽しく続けられる環境を整えていくことが私の仕事ですが、維持発展させて行く事はメンバー全員の心意気です。

明日から、51回のICMCが始まります。また何年後かに編纂されるであろう記念誌には、どんな足跡が付け加えられているのか夢見つつ、ペンを置きましょう。

＊ 第51回定演から名称を岩国マンドリンオーケストラに改めました。

2. 三大慶事

三浦孔司

今では、平和国家、経済大国となったわが国は、50～60年前には、戦後の苦難・困窮をなめつくす経済混乱期真っ只中に居た。それが、1950年の朝鮮戦争の特需で活況を呈しはじめ、経済は確立期に入ったといわれている。さらに、昭和31年（1956年）の神武景気を経て、昭和33年（1958年）のなべ底景気の年に当クラブは、設立されたのである。そして、高度成長期を迎えることになる。

それから10年間は、故熊谷先生を中心としたブレアンOB会として活動が続いたが、昭和43年7月（1968年）に師はご逝去され、次第に活動の方向を市民ベースに移す過程で名称を、現在の岩国市民マンドリンクラブに改称した。昭和48年（1973年）のことである。

こうした混乱の時代に育った岩高ブレアン生や岩高プレティの少年たちは、物欲よりも感情や精神面に志向していたのだろう。大学進学率もそんなに高くなく、岩高では、進学クラスが5割程度、女子クラスにはそのクラス分けさえない時代であった。物欲がないだけでなく、文化的な情報も乏しく、音楽で言えばレコード盤かラジオくらいなものだったので、岩高に入学してナマのマンドリン合奏を聴いたトタンにその虜になり、熊谷先生という個性に惹きつけられて、次第にノメリ込んで行った同志は少なからずいた。

少年時代とは、そういう時期でもあり、人生を左右する概念が育てられる大切な時期であろう。

師は、合奏を社会生活の教えとしておられたし、プロの演奏者を育てる積もりは毛頭なかったが、音楽にノメリ込めばノメリ込むほどに、師の教えも親の言動も耳に入らず、プロを目指した少年たちもいたのである。

2-1. 日本マンドリン独奏コンクール1位入賞

新井義悠君

その志の成功者の1人が、昭和39年卒（1964年）の新井義悠君である。岩高ブレアンの定演プログラムを見ると、スタートがセカンドマンドリン、2年生からは、マンドラに名が載っている。卒業後大学に進学してマンドリン熱はますます高まり、4年生の冬に、第1回全日本マンドリン独奏コンクールに出場したとのこと。

卒業後は、故塩見一郎氏をリーダーとしたフィオレンティーノで活躍し、昭和49年（1974年）第4回全日本マンドリン独奏コンクールで第1位を獲得された。

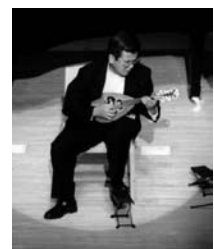
彼の音楽形成は、熊谷先生を初めとして、中野二郎氏、鈴木静一氏のお名前が記事に見える。ほかに、チョット遠慮勝ちに、ICMCもありや？ それは、進学後も高島信人君との太いパイプによって、頻繁にICMCとは連携できていたのである。



田村隆司君

新井君のこの快挙は、当クラブ員の誉れと同時にものすごいインパクトとなり、マンドリン熱は益々高揚して、先の新井君に続こうとお互いに切磋琢磨することになり、個人技・合奏体ともに進歩成長として現れ、OB会時代とは隔世の感がある。

そして現れたのが、マンキチこと田村隆司君である。



彼は、昭和44年（1969年）岩高を卒業、もちろんプレアンOBである。したがって、熊谷先生が亡くなられた年の3年生で、最後の指揮棒は2年生ということになる。プログラムを見ると、1、2年のときは、チェロを弾き、3年生でプリモトップとなっているが、ICMC入会後の彼は、兎に角、暇さえあればマンドリンをコチョコチョ、カチャカチャと弾いて手放さないために、マンキチというあだ名を頂戴することになった。

彼の手記には、3年生在学中に毎週日曜日の午前中は、故熊谷先生宅でマンドリンの特訓を受けたとあり、急造のプリモトップを図られたのだろう。

卒業後は、大学のギターマンドリンクラブに所属していたのだが、マンドリン環境は比べようもなく、ICMCでの急進的かつ革新的さらに意欲的な活動に常に参加して、先輩の新井君の刺激を受け技術を取り入れて精進を重ねた結果、昭和51年（1976年）9月 第5回全日本マンドリン独奏コンクールで見事1位に輝いたのである。これは、先の新井君に続く快挙となり本人の名誉もさることながら、ICMCの評価も高めてくれたことになり、気分は絶頂の一時期であった。

2-2. 岩国市民マンドリンクラブ京都特別演奏会

前記2人だけが鎬（しのぎ）を削ったわけではなく、多くの部員が技術向上に邁進していた熱気ブンプンの時代である。

当時の広島には、プレアンOBが作りあるいは育てた大学のマンドリンクラブや、東洋工業MCや広島プレクトラム協会との交流も盛んになり、岩高同窓会の広島五橋会の力添えなどを得て、昭和48年8月（1973年）に第1回広島演奏会を開催することができた。その前夜は岩国での第16回定演と、若さゆえできた貧乏人の離れ業である。

この企画は、広島の同好の志を惹きつけることになり、各パートも充実して、昭和51年3月（1976年）に新井君、塩見さん達のご尽力によって京都特別演奏会が挙行できたのである。

一応成功裏に終わったと思うが（謙虚に）、涙をボロボロと流して喜んでくれた、涙もろい塩見さんを思い出す。

岩国地区に留まらずに育って行ったOB達との強いつながりで、各地の演奏活動に参加させていただきましたが、京都公演がICMCだけの単独演奏会であったことと、マンドリンクラブの憧れの地である京都で挙行できたこと、一つのシンボルであったことを評価したいと思います。



京都特別演奏会のプログラム表紙
と
手作り班別引率旗（10枚）



1976年3月20日
京都駅頭に班毎に集まれ！
みんな 若いのー
うっそじゃないが



2－3．文化功労賞授賞

岩国市文化協会

熊谷先生がご逝去されて8年目の昭和51年（1976年）に、岩国市文化協会から文化功労賞を授賞した。先生ご存命の頃から連れ立って広島、周南などには賛助出演などしていたが、昭和47、48年頃から東京、関西、岡山などにも出演する機会が増え、広島、京都では、単独主催の演奏会をもつ様になっていた。それに加えて、二人のソロコン優勝者を出したことが、認められたものである。



「貴クラブは 昭和33年設立以来 プレクトラム音楽の普及と発展に尽力するかわら 日本各地で意欲的な活動を展開し 幾多の優秀な演奏者を育成するなど 音楽文化の振興に寄与された功績はまことに大なるものがあります よってここに記念品を贈りこれを表彰する」

昭和51年11月3日 岩国市文化協会 会長 伊藤正一

岩国市教育委員会

50回の定期演奏会を迎える本年、岩国市教育委員会から文化功労賞を授賞した。

市民の文化活動の一翼を担い、合計678人の人がステージに登り、盛衰を経験しながら脈々と50年を迎えることに対して、その功績を認められたものである。

長年にわたり、高い音楽性を有して定期演奏会の開催や各種演奏会への出演など、活発な活動を展開されるとともに、各種音楽団体や文化団体との交流に積極的に取り組まれるなど、音楽文化の向上に貢献されました。ということで

「貴団体は 多年にわたり音楽を通じ 岩国市の文化の振興に尽くされました よってその功績をたたえ表彰します」

平成19年2月25日 岩国市教育委員会



2007. 2. 25 岩国市文化功労賞授賞記念撮影

前列 右から3人目 石川会長

各年代の特徴

各年代の特徴（その1）

	概 要	出演回数傾向
# 1 ～ # 10 (昭 33～ 昭 42)	<ul style="list-style-type: none"> ・岩国高校の熊谷幹雄先生を中心としたプレクトラムアンサンブルOBによる同窓会形式の活動。 名称を岩高プレクトラムソサエティとした。 ・岩国市内の帝人・東洋紡 MC との合同演奏会を開催したり、広島市のビタリチオ MC に賛助出演したりと、他の団体との交流を深め経験を積み重ねた。 ・昭和 39.12 に第 1 回記念誌を発行した。 	定演は、夏休み・盆帰省者を誘って 8 月に開催した関係で、出演回数は、1 ～ 3 回が 80%を占めていた。
# 11 ～ # 20 (昭 43～ 昭 52)	<ul style="list-style-type: none"> ・岩高熊谷先生の急逝に直面して、今後の活動を模索しながら、次第に市民レベルの活動に方向が転換されていった。名称も相応しく、昭和 45 年に岩国プレクトラムソサエティに、更に昭和 48 年に岩国市民マンドリンクラブに改称して、名と体を一致することにした。 ・これまでの功績で、昭和 51.1 に、岩国市文化協会から文化功労賞を授賞した。 ・後半には、定演のほかにも、東京、京都、神戸、岡山、広島などで演奏活動を行なった。 ・昭和 52.12 に第 2 回記念誌を発行した。 	後半は、広島市内の大学・職場の MC から定演への体験的賛助出演が多くなり、この時期の出演者数が歴代最多(645 名)である反面 1 回だけの出演者数がこれも最大(54%)となった。
# 21 ～ # 30 (昭 53～ 昭 62)	<ul style="list-style-type: none"> ・昭和 54.4 に岩国市民会館の柿落とし演奏会を開催した。 ・熊谷先生を直接知るメンバーがほとんどいなくなり、プレアン以外のメンバーが次第に増加している。 ・この時期の後半は、定演が終わると休むメンバーがかなり多く、秋から春に掛けて寂しい練習が続く。 	20 回前後から 20 数回にかけて活発な活動を続け、出演者数も 600 人台で、4 ～ 10 回の人が 29%に増加した。
# 31 ～ # 40 (昭 63～ 平 9)	<ul style="list-style-type: none"> ・メンバー不足で苦しんだ時期であるが、小さな子供連れで練習に参加したお母さんプレイヤーのお陰で、クラブ活動は継続できたのである。 ・出演者数の減少を、プレアンや友誼団体で補い、演奏内容の貧弱さを第 2 部の企画物(合奏、ギターソロ、アンサンブル、詩の朗読、他団体の賛助など)で凌ぐと言う、試練の時期を迎えていた。 ・この時期の後半から、8 月に定演開催が難しくなり(学生の減少、お盆の家事が忙しい)、36、37 回に初めて 9 月定演を経験したが、38、39 回には、再度 8 月開催、40 回から会場をシンフォニア岩国に移し、11 月開催が定着した。 ・同じ時期、毎年横山で小さなコンサートを開催したお陰で年間を通じての活動が活発になり、毎回の練習も充実してきた。 ・40 回から、新井氏がマンドリントレーナーを引き受け、新たな出発となった。 	前期に続き、1、2 回の人 が 66%と定着率も悪く、出演者数は更に減少して 465 人と最小となった。
# 41 ～ # 50 (平 10～ 平 19)	<ul style="list-style-type: none"> ・44 回から新井氏が指揮者・音楽顧問を引き受けて、より高い音楽性を目指す方向に転換した。 ・積極的に各方面からの出演要請に応じて、知名度の底上げにも効果を上げ、メンバーも増加傾向に転じて、通常練習にも 20～30 名を数えた。 ・長年の文化活動が認められて、平成 19.2 岩国市から文化功労賞を授賞した。 ・ホームページを開設した。 ・平成 20.2 に第 3 回記念誌の発行を予定している。 	大きく様相が変わってきた。 1 回の人 が 40%を割り、6 回以上の人 が 30%となって安定感が出たものの、新人の加入が今後の大きな課題になることだろう。

各年代の特徴（その2）

曲目ジャンル	作曲者人気	その他
所蔵のオリジナル曲が少なかったせいで、クラシックの小品を加えていたが、ポピュラーが 50% を占めていた。	M.マチョッキと K.ベルキーが全体の 29%を占め、鈴木静一を含む邦人作曲家が 29%を占めている。	東小学校と東中学校の共用であった共立講堂で定演が始まった。後半は、一時労働会館を使用した。第 10 回からは市体育館を 23 回まで定演の会場とした。 プログラムは、1 年ごとに新しいデザインとしていた。
内容面・技術面共に、よりハイレベルを求めてオリジナル曲が 60%を占める反面、ポピュラーは 20%に後退した。	この時期、鈴木静一を 16 回(25%)と集中的に取上げ、内 5 作品は音楽物語であった。 熊谷賢一にも意欲的に取組み、氏には 20 回記念の作品を委嘱した。 K.ベルキーと G.マネンテが 14%を占めている。	広島公演を機に、プログラムとペナントがプロ(岩高美術部 OB の佐々木唯夫氏)の手で作られた。 第 16 回定演からしばらくは、その表紙が使用された。
前期より更にその傾向が強くなり、ポピュラーは 1%に過ぎず、減少分ほどクラシック曲が増えた。	活発な活動を反映して、歴代最大の 74 曲(オリジナル+クラシック)に取り組んだ。中でも、人気の根強い鈴木静一のほか、前期から取り組み始めた熊谷賢一がトップとなった。	第 29 回から、プログラムの表紙が変更された。 第 24 回からは、会場を基本的に岩国市民会館に移し、第 39 回まで使用した。
観客の要望とオリジナルのみでのステージ構成が限界となり、ポピュラーを増やした。(38%)	前期に続き熊谷賢一を取り上げ、今期はトップとなった。 他には、G.マネンテ、A.アマディ、藤掛廣幸、鈴木静一などが見える。	第 31 回から、パンフレットのシンブル化が進み、39 回が最軽量になったが、40 回からは、再び充実化した。 第 40 回からは、会場をシンフォニア岩国に移し現在に至っている。
前期に続きポピュラーが 47%になった。しかも、編曲者は、当クラブの複数の会員(奏者)である。	人気の根強い鈴木静一、G.マネンテ、A.アマディ、U.ボッタキアーリ、藤掛廣幸が取り上げられたが、熊谷賢一は演奏許可が取り難いと言うことで 0 となっている。 久保田孝を初め、吉水秀徳や小林由直などの新進若手の曲を取り上げる機会が増えてきたために、オリジナル作曲者の多様化が進んだ。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 46 回から、定演を 2 部構成に変更して、お客様重視志向になってきた。プログラムも B5 版から A4 版にして読みやすくした。 ・ 48 回から終演後のお見送りを始め、49 回には、初となるダンスとの共演を演出した。 ・ 楽譜ソフト「Finale」導入により、パート譜が正確で見やすいものになった。50 回からは、ホームページにアクセスして各自ダウンロードが可能になっている。

主催演奏会プログラム

&

写 真

第1回定演

マンドリンの夕べ

第1回

時 5月24日(日) 午後7時

場所 豊貴川講堂

主 賓 若島プロクトラム ツヤイサイ
(ロンドン・ロイヤル・アカデミー・オブ・ミュージック)

共 催 岩 国 高 等 学 校
 毎日新聞社岩国通信部

岩国市の発展と関係の深い下記の団体の協賛による
 祝賀の趣意を込めさせていただきます

スピア・オルガン 演奏・指揮
 デュー・マンドリンとその弦楽隊

瀬田 楽 器 店
 岩 国 市 岩 国 町 TEL. 1130

第10回定演

第 10 回

マンドリン

定期演奏会

1987. 8. 14(日) 8:30 P.M.


岩 国 市 体 育 館

主催 岩国高校プロクトラムアンサンブルAOB
 後援 岩国市教育委員会・中国新聞社岩国支所

第20回定演

IWAKUNI
CITIZEN
MANDOLIN
CLUB

岩国市民マンドリンクラブ 第20回記念定期演奏会
 昭和63年8月14日(日)



第30回定演

30th Mandolin Concert

第30回 岩国市民マンドリンクラブ定期演奏会

昭和62年8月16日(日) 19時開演

岩国市民会館ホール
 主催 岩国市民マンドリンクラブ
 後援 岩国市教育委員会
 中国新聞社



第40回定演

40th Mandolin Concert

第40回岩国市民マンドリンクラブ
定期演奏会

平成9年11月8日(日) 18:30～

シニアフェスティバルコンサートホール
 主催 岩国市民マンドリンクラブ
 後援 岩国市教育委員会
 岩国市文化協会



第50回定演

岩国市民マンドリンクラブ
第50回記念定期演奏会

マンドリン
& ギター
コンサート
50th

2007

主催 岩国市民マンドリンクラブ
 後援 岩国市教育委員会
 岩国市文化協会



第1部

1. 組曲「ロシア」より第一軍隊行進曲 …………… 鈴木静一
2. 毬つき遊び …………… 中野二郎
3. スパニッシュワイゼン …………… シック
4. 民謡「木曾節」に基づく小狂想曲 …………… 池ヶ谷一郎
5. 組曲「支那の印象」 …………… 吉田矢健治

第2部

1. 二重奏 M: 長島 啓、G ; 吉岡史雄
 ロンド …………… R. カラーチェ
2. 四重奏
 SERENATA No.2 …………… 平山英三郎
 SOUVENIR DE CATANE …………… レオナルディ
3. ギター合奏
 夜明け …………… フィルポ
 ラ・クンパルシータ …………… ロドリゲス
 ロマンス (弦楽セレナータより) …………… モーツァルト
4. マンドリン合奏 (岩高プレクトラム・アンサンブル)
 序曲 山嶽詩 …………… サルヴェッティ

第3部

1. ボルガマーチ …………… ロシア民謡
2. ビヤ樽ポルカ …………… ブラウン
3. 水色のワルツ …………… 高木東六
4. 愉快的鍛冶屋 …………… ペーター
5. ミレーナ …………… M. マチヨッキ



第1部

1. 校歌紹介……………平山康三郎
2. 序曲 イ長調……………K. ヴェルキー
3. ともしび……………ロシア民謡
4. 渚にて……………小島克己
5. ルンバ「砂漠の哀愁」……………平山英三郎編
6. 「月の砂漠」の主題による小幻想曲……………赤城 淳編

第2部

・マンドリン三重奏 (ワルツ3題)

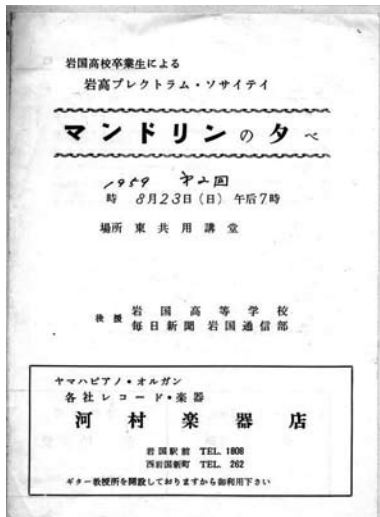
- (ア) 君の心を
- (イ) 恋のかほり
- (ウ) キッス・ミイ・アゲイン

・ギター合奏

- (エ) 淡き光に
- (オ) 美しきモレナ
- (カ) ただ一度
- (キ) ベサメ・ムーチョ

・マンドリン二重奏

1. 野にて



第3部

1. 小さい花……………シドニー・ベシエ
2. 南国土佐を後にして……………武政英策
3. 民謡調間奏曲……………平山英三郎
4. フォスター名曲集……………平山英三郎編
5. 序曲「バグダッドの太守」……………F.A. ヴォアルデュ

第1部

1. 山嶽詩……………サルヴェッティ
2. 「月の砂漠」の主題による小幻想曲……………赤城 淳編
3. ミレーナ……………M. マチョッキ
4. ペンシルバニア・ポルカ……………平山英三郎編
5. 勝利者に栄光あれ……………M. マチョッキ
6. ボルガ・マーチ……………ロシア民謡

第2部

1. マリネラ
2. キエン・セラ……………P. B. ルイス
3. 黒いオルフェ……………R. ボンファ
4. 死ぬほど愛して……………ルスティケリ
5. 岩国よいとこ……………吉田矢健治
6. 茶さり節……………池ヶ谷一郎
7. 会津磐梯山……………池ヶ谷一郎
8. お江戸日本橋……………池ヶ谷一郎
9. 木曾節による小狂想曲……………池ヶ谷一郎



春季臨時 1961年3月23日(木) 18:30~ 共立講堂

I. 合奏

1. 春陽……………小池正夫
2. 蝶々を主題とする変奏曲……………服部 正
3. 春のノスタルジア……………武井守成
4. 踊る小花……………武井守成
5. 青豌豆の踊り……………前田 正

II. 軽音楽

1. 太陽がいっぱい……………ニノ・ロータ
2. 真珠とりのタンゴ……………サントス
3. 鉄道員……………C. ルスティケリ
4. リトル・ボーイ……………ニーサ

III. 四部合奏

1. ゴンドリエ
2. 旅 愁
3. 南国の夜
4. 海の少女

IV. 合奏

1. セレナータ……………モーツァルト
2. 峠……………鈴木静一

V. 合奏

1. 西 域……………川崎貞利
2. 序曲 嬰へ短調……………K. ヴェルキー



第1部 合奏

1. マンドリニストの行進曲 メツァカーボ
2. 軍隊行進曲(ロシア三部作第一) 鈴木静一
3. 放浪 池ヶ谷一郎
4. 序曲 水車小屋の乙女たち M. マッチョッキ

第2部 合奏

1. 南国の夜
2. 真珠採りのタンゴ
3. 聞かせてよ 愛のことば
4. 浜辺の唄

第3部 四部合奏

1. オ・セニョリータ
2. ジプシータンゴ
3. ダーク・アイズ
4. 2つのギター

第4部 合奏

1. 序曲 バグダッドの太守 ヴォアルデュ
2. 古戦場の秋 小池正夫
3. ムーアのグラナダ ガルシア



第1部 合奏

1. マンドリンマーチ……………C. カンナ
2. クシコスボスト……………H. ネック
3. 山 峡……………川崎貞利
4. 序曲 イ長調……………K. ヴェルキー

第2部 合奏

1. 五木の子守唄……………中川信良編
2. 白鳥の湖……………服部 正編
3. 月の砂漠……………中川信良編
4. カチューシャの唄……………平山英三郎編

第3部 四重奏

1. スペインの花……………三戸知章編
2. タンド・ロジータ……………三戸知章編
3. ジブシー・タンゴ……………宮島寅次編

第4部 合奏

1. 序曲 ニ長調……………K. ヴェルキー
2. アンダルーズ……………P. ラコム
3. 序曲 ミルタリア……………M. マチョッキ



第1部

1. 序曲 イ長調 K. ヴェルキー
2. 序曲 小公女 ハーディ
3. 聖者の行進 赤城 淳編
4. クワイ河マーチ 赤城 淳編
5. 史上最大の作戦のマーチ 赤城 淳編

第2部

1. 箱根山 赤城 淳編
2. ラ・クンパルシータ ロドリゲス
3. 夏の思い出 赤城 淳編
4. マカレーナの乙女 赤城 淳編

第3部 (四重奏)

1. ビギン・ザ・ビギン 赤城 淳編
2. マイ・ショール 赤城 淳編
3. パーフィディア 赤城 淳編
4. マイアミビーチ・ルンバ 赤城 淳編

第4部

1. 序曲 魅惑島 J. B. コック
2. 「月の砂漠」の主題による小幻想曲 赤城 淳編
3. 組曲 スペインの印象 ブーシュロン



第1部

1. オリンピア行進曲……………M. マチョッキ
2. 黎明序楽……………鈴木静一
3. 童謡集「幼き日の思い出」……………赤城 淳編
4. サンタ・ルチア……………平山英三郎編
5. ロシア民謡「黒い瞳」……………中川信良編

第2部

1. ヴィオレッタに捧げし歌……………赤城 淳編
2. ワシントン広場の夜は更けて……………赤城 淳編
3. ジャングルドラム……………赤城 淳編
4. スワニー……………赤城 淳編

第3部

1. ラ・クンパルシータ……………赤城 淳編
2. ラ・コンパルサ……………赤城 淳編
3. マリア・マイ・オウン……………赤城 淳編
4. マラゲーニャ……………赤城 淳編

第4部

1. セレナータ……………モーツァルト
2. 糸杉の林にて……………サルトリ
3. 序曲 水車小屋乙女たち……………M. マチョッキ



第8回 1965年8月14日(土) 18:30～ 岩国市体育館

第1部

1. 序曲 ロ短調 K. ヴェルキー
2. 序曲 イ短調 K. ヴェルキー
3. アディオ・アディオ
4. ノ・ノ・レタ
5. チャオ・チャオ・バンビーナ
6. ロマンティカ

第2部

1. ウナセラディ東京
2. 何も言わないで
3. 城ヶ島の雨
4. Never on Sunday
5. よさこい節
6. エスパニア・カーニ

第3部

1. 新内流し
2. タブー
(四重奏)
3. 鈴かめの径
4. 寒い朝
5. そよ風

第4部

1. ペルシャの市場にて ケテルビー
2. 古戦場の秋 小池正夫
3. 序曲 レナータ ラヴィトラーノ

1965年3月 プレアン同窓会



第9回 1966年8月14日(日) 18:30～ 岩国市労働会館

第1部

1. POESIA ALPESTRE M. サルヴェッティ
2. 西域より 川崎貞利
3. ミレーナ M. マチョッキ
4. 序曲 ロ短調 K. ヴェルキー

第2部

1. 叱られて 服部 正編
2. 日本抒情歌集 服部 正編
(ヤシの実、夕焼け小焼け、7つの子)
3. エスパニア・カーニ 服部 正編
4. タプー 山口吉雄編
5. マカレーナの乙女 赤城 淳編

第3部

1. Eine Kleine Nachtmusik W. A. モーツァルト
2. 序曲 バグダッドの太守 F. A. ヴォアルデュ
3. ORPHEUS J. オッフエンバック

1966年7月 第5回交歓会



第1部

1. 序曲 ローラ G. ラビトラーノ
2. 序曲 イ長調 K. ヴェルキー
3. 序曲 水車小屋の乙女たち M. マチョッキ
4. 古戦場の秋 小池正夫

第2部

1. サウンド・オブ・ミュージック 赤城 淳編
ドレミの歌、エーデルワイス
サウンド・オブ・ミュージック 他

第3部

1. ペルシャの市場にて ケテルビー
2. 白鳥の湖 J. チャイコフスキー
3. 序曲 天国と地獄 J. オフエンバック





第1部

1. 序曲 嬰へ短調 K. ヴェルキー
2. 愛の喜び マルティニー
3. 「荒城の月」を主題とせる
2つのマンドリンの為の変奏曲 服部 正
M: 1st 山添修志、2nd 新井義悠

第2部

1. 序曲 聖ジュスト N. I. ビテリー
2. 孤独 T. コスタット
3. 幻想曲 イ短調 高島信人

第3部

1. 夢のタンゴ
2. 真珠とりのタンゴ
3. タンゴ アルヘンタ
4. エル チョクロ
5. マンボ No. 5
6. 黒い瞳のマンボ
7. 闘牛士のマンボ

第4部

1. 組曲 山の印象 鈴木静一
2. 序曲 過去への憧憬 フォクト



第1部

1. 黎明序楽 ……………鈴木静一
2. 日月譚の歌 ……………鈴木静一
3. 劇的序楽 細川ガラシャ ……………鈴木静一

第2部

1. 浜辺の歌 ……………成田為三
2. ローレライ・パラフレーズ ……………ネスバトバ
3. 「荒城の月」を主題とする

2つのマンダリンの為の変奏曲 ……………服部 正

マンダリン: 1st 山添修志、2nd 新井義悠

第3部 ～イタリアへの招待～

1. 村の娘 ……………塩見一郎編
2. 海に来たれ ……………塩見一郎編
3. オー ソレミヨ ……………塩見一郎編
4. 夢見る思い ……………塩見一郎編
5. アルディラ ……………塩見一郎編
6. ラ・ノビア ……………塩見一郎編

第4部

1. 序曲 ニ長調 ……………K. ヴェルギー
2. 序曲 レナータ ……………H. ラヴィトラーノ



第1部

1. 峠……………鈴木静一
2. 劇的序楽 細川ガラシヤ……………鈴木静一
3. ロシア民謡による幻想曲
「ヴォルガは流れる」……………鈴木静一

第2部

1. 夜のタンゴ
2. 夢のタンゴ
3. マラゲーニヤ
4. マイアミビーチルンバ
5. ベサメムーチョ
6. タブー
7. 花
8. 叱られて

第3部

1. アンデルセン童話による譚詩と
マンドリンオーケストラ
「人 魚」……………鈴木静一



第1部

1. 過ぎた日の熱情 川崎貞利
2. メリアの平原に立ちて G. マネンテ
3. 序曲 ロ短調 K. ヴェルキー

第2部

1. マドンナの宝石 W. フェラーリ
2. ワルツ「女学生」 W. トイフェル
3. 白鳥の湖より「情景」 P. チャイコフスキー
4. 愛の歓び G. マルティニー
5. 火祭りの踊り M. ファリャ

第3部

1. 音楽物語「朱雀門」 鈴木静一



第1部

1. 序曲 イ長調…………… K. ヴェルキー
2. ギリシャ風主題による序楽…………… N. ラウダス
3. 交響詩「比羅夫ユーカラ」(征服の史)…………… 鈴木静一

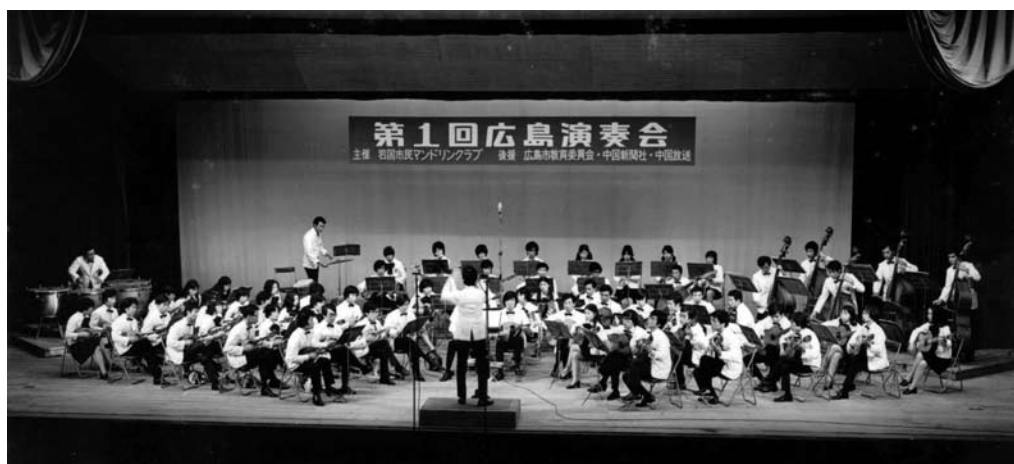
第2部

1. 交響曲 第8番ロ短調「未完成」 第1楽章
…………… シューベルト
2. 交響詩「はげ山の一夜」…………… ムソルグスキー

第3部

1. アンデルセン童話「氷姫」より
「氷の精に魅いられたルディ」…………… 鈴木静一

第16回 1973年8月17日(金) 18:30～ 岩国市体育館
 第1回広島 1973年8月18日(土) 18:30～ 広島市青少年センター



第1部

1. 恵まれた結婚(祝典行進曲) G. マネンテ
2. 劇的序楽 細川ガラシャ 鈴木静一
3. 聖ボニファチオのオペルト伯 A. ヴェルディ

第2部

1. ギター協奏曲ニ長調 A. ヴィバルディ
 ギター: 松塚展門
2. スイスの牧人 P. モルラッキ
 マンドリン: 新井義悠

第3部

1. マンドリンオーケストラの為の
 群炎 I、II 熊谷賢一

第17回 1974年8月16日(金) 18:30～ 岩国市体育館
 第2回広島 1974年8月17日(土) 18:30～ 郵便貯金ホール



第1部

1. 序楽 今と昔……………G. マネンテ
2. グラウコの悲しみ……………A. マッツォーラ
3. ダンテ序曲……………N. リ. カウシ

第2部

1. 合奏協奏曲「四季」より「秋」……………A. ヴィバルディ
2. G線上のアリア……………J. S. バッハ
3. ルーマニア狂詩曲 第1番……………G. エネスコ

第3部

1. マンドリンオーケストラの為の
 ヴォカリーズ……………熊谷賢一
 (1) 暁の歌
 (2) 街の歌
 (3) 夜の歌
2. マンドリンオーケストラの為の
 群炎 III……………熊谷賢一



第1部

1. 序曲 イ短調 G. クラウズニッツァー
2. 祈り U. ボッタキアーリ
3. 夜の印象 D. D. ジョバンニ

第2部

1. ミュージカルへのお誘い
(サウンド オブ ミュージックより)

第3部

1. 狂詩曲 海 鈴木静一
2. オアシスにて E. マルチ
3. 交響的前奏曲 U. ボッタキアーリ



第1部

1. Imperia (皇帝) M. Maciocchi
2. Romanza e Bolero ～Nieves～ G. Lavitrano
(ロマンツァとボレロ ～雪～)
3. Oberto Conte di S.Bonifacio A. Verdi
(聖ボニファチオのオペルト伯) (C. Munier)

第2部 賛助出演 “チルコロ・マンドリニスティコ・フィオレンティーノ”

1. 古戦場の秋 小池正夫
2. 線香花火 明滅する広告塔 中野二郎
3. てんとう虫の嘆き かまきりの踊り 松本 譲
4. マンドリン オーケストラのための一楽章
「くもの糸」 田島孝一

第3部

1. Preludio Sinfonico (交響的前奏曲) U. Bottacchiari
2. Danza delle Lucciole (蛍の舞曲) A. Amadei
3. Ouverture su Temi Ellenici (ギリシャ風主題による序楽) N. Lavdas

第19回 1976年8月15日(日) 18:30～ 岩国市体育館
第4回広島 1976年8月14日(土) 18:30～ 広島市青少年センター



第1部

1. ト調 序楽 D. D. ジョバンニ
2. モスコウの真昼 D. ベルッティ
3. 交響的間奏曲 G. マネンテ

第2部

1. 序奏とファンダンゴ L. ボッケーリーニ
 2. 愛の歓び G. P. マルティーニ
 3. ツゴイナーネルワイゼン P. サラサーテ
- マンドリン：新井義悠

第3部

1. 組曲 山の印象 鈴木静一
2. 平家物語 西海の挽歌 鈴木静一



第1部 I CMCの思い出の曲

1. ミレーナM. マチョッキ
2. 劇的序楽 細川ガラシャ鈴木静一
3. グラウコの悲しみA. マッツォーラ
4. メリアの平原に立ちてG. マネンテ

第2部 マンドリンによる“郷愁のメロディ”

1. 丘を越えて
2. 浜辺の唄
3. 荒城の月幻想曲
4. 鈴懸の径
5. 民謡「木曾節」に基づく小狂想曲

第3部 第20回記念ステージ

1. パストラール・ファンタジー藤掛広幸

☆ 委嘱作品発表

2. マンドリンオーケストラのための

ヴォカリーズ 第5番熊谷賢一

—すばらしい明日のために—

- I 若葉の歌
- II 君の歌
- III 青春
- IV すばらしい明日のために

第1部

1. ローマトリノ D. ジョバンニ
2. 浪漫的間奏曲 A. カペレッティ
3. 我等が懐かしき山々に D. ジョバンニ

第2部 関東、関西在住メンバーによる小合奏

関東の部

1. プレクトラム A. アマディ
2. ゴンドラの唄 E. メツァカーボ
3. カバレリア・ルスティカーナ前奏曲 マスカーニ

関西の部

4. ファンダンゴ F. ワルター
5. 組曲 第6番 H. アンブロシュウス

第3部

1. マンドリンの群れ C. A. ブラッコ
2. 夏の庭 P. シルベストリ
3. 劇的序曲 A. カペレッティ



第1部

1. ラ・ペザレーゼ G. フィリッパ
2. 歌劇「南の港にて」より間奏曲 N. スピネリ
3. 組曲「吟遊詩人」 A. アマディ

第2部 アンサンブル

1. バロック音楽
2. 聞いてのお楽しみ
3. 「バッハの小品より」 K. ヴェルキー編曲
4. ノクターン G. グロー

第3部

1. オラッチオ・クリアッチオ兄弟 チマローザ
2. 組曲 アルジェリア 作品60 サンサーンス
 - (1) 前奏曲
 - (2) ムーアのラブソディ
 - (3) タベの幻想
 - (4) フランス軍隊行進曲



第1部

1. そり滑り L. アンダーソン
2. シンコペーティッド・クロック L. アンダーソン
3. ゴリーウォークのケークウォーク ドビッシー
4. 白 鳥 サン・サーンス

第2部

ギター合奏

1. 教会カンタータNo. 147 J. S. バッハ
2. EXECUTION (処刑) 松本定芳

マンドリン・アンサンブル

3. プレクトラム四重奏曲 ファルボ

第3部

1. 交響詩 エカープの嘆き N. ラウダス
2. 冬の花 プーシュロン
3. “時の踊り” 歌劇「ジョコンダ」より A. ポンキエルリ



第1部

1. ローレライ・パラフレーズ ネスバドバ
2. 愛の挨拶 E. エルガー
3. ダッタン人の踊り A. ボロディン

第2部

マンドリン・アンサンブル

1. 「日本民謡」 熊谷賢一

第3部

1. 神々の饗宴 M. マチョッキ
2. 幻想組曲「華燭の祭典」 G. マネンテ
 - (1) 人々の祝福
 - (2) 教会にて
 - (3) 家族の祝福



第1部

1. 三声のカノン J. パッachelベル
2. ハンガリア舞曲 第5番 J. ブラームス
3. 交響詩 フィンランディア J. シベリウス

第2部

1. マンドリン合奏のための二章 柳田隆介
2. マンドリン・オーケストラのための
ラプソディ 第4番 熊谷賢一

第3部

1. 序曲 ニ短調 S. フアルボ
2. 組曲 エジプトの幻影 G. ミッシェル
 - (1) 踊り
 - (2) スフィンクスの伝説
 - (3) ナイル河にて



第26回 1983年8月14日(日) 14:00～ 岩国市民会館

第1部

1. 交響詩 「北夷」 鈴木静一
2. 劇的序楽 細川ガラシャ 鈴木静一

第2部

1. 舞踊音楽「恋は魔術師」より
“火祭りの踊り” M. de ファリア
2. 歌劇「南の港にて」間奏曲 N. スピネルリ
3. カバレリア・ルスティカーナ P. マスカーニ
4. 歌劇「ルスランとリュドミラ」 J. グリンカ

第3部

1. シンプル・シンフォニー 尾園勝善



第1部

1. 「ローラ」序曲……………H. ラヴィトラーノ
2. 夜曲(ノクターン)……………S. コペルティニー
3. 祭……………Q. ファブリ

第2部

1. 歌の翼に……………F. メンデルスゾーン
2. オペラ「椿姫」より……………G. ヴェルディ
第一幕への前奏曲
乾杯の歌
3. ビア樽ボルカ……………V. ヴォツダ
4. タイプライター……………L. アンダーソン

第3部

1. グランド・シャコンヌ……………藤掛広幸
2. 河の詩……………熊谷賢一



第1部

1. 国境なし G. マネンテ
2. 夜の静寂 P. シルベストリ
3. 交響的前奏曲 U. ボッタキアーリ

第2部

1. 二人の友 G. フィリッパ
マンドリン：田村隆司、マンドラ：金丸眞明
2. 「アランフェス協奏曲」より第Ⅱ楽章 J. ロドリーゴ
ギター：末岡成基
3. 「四季」より“冬” A. ヴィヴァルディ

第3部

1. シンフォニエッタ No. 1 大栗 裕



第1部

1. マンドリン・オーケストラのための
舞踊風組曲 久保田 孝
2. マンドリン・オーケストラのための音楽
“子供の国” 熊谷賢一

第2部 パンフルートの調べ パンフルート：岩田英憲

1. ロマーナの祈り ザンフィル
2. コンドルは飛んでいく アンデス民謡
3. 黒いバラ J. ラスト

第3部

1. 滅びし国 G. フィリッパ
2. 子守唄 E. ケーラー
3. 英雄葬送曲 C. O. ラッタ



第1部

1. 「軽騎兵」序曲……………F. スッペ
2. 組曲「アルジェリア」……………サン・サーンス

第2部 ～30回記念合同ステージ～

1. バグダッドの太守……………ヴォアルデュ
2. 古戦場の秋……………小池正夫
3. 劇的序楽 細川ガラシャ……………鈴木静一

第3部

1. 舞踊風組曲 第2番……………久保田 孝
2. マンドリン・オーケストラのための
ヴォカリーズ 第4番“風の歌” ……熊谷賢一





第1部

1. ハンガリア舞曲 第6番 J. ブラームス
2. 交響曲「おもちゃ」 L. モーツァルト
3. アラベスク C. ドビッシー
4. 「四季」より“冬” A. ヴィヴァルディ

第2部

1. 序曲 ニ短調 S. ファルボ
2. 黄 昏 D. ベルッティ
3. マンドリン・オーケストラのための
ヴォカリーズ 第9番「海原へ」 熊谷賢一



第1部

1. 風の谷のナウシカより久石 譲
風の伝説、 メーヴェ、 風の谷のナウシカ
2. 天空の城ラピュタより久石 譲
プロローグ～出会い、 鉾山町、 時の城

第2部

1. マンドリン合奏と朗読による音楽民話
「つつじのむすめ」鈴木静一
2. ヴェルレーヌの詩に寄せる三楽章鈴木静一

第3部

1. 今と昔G. マネンテ
2. モスコウの真昼D. ベルッティ
3. セレナーデF. シューベルト
4. 北欧のスケッチA. アマディ



第1部

1. ユーミンの世界……………尾園勝善編曲

ひこうき雲、瞳を閉じて、時をかける少女、
赤いスイートピー、中央フリーウェー、
ダンディライオン、(遅咲きのたんぽぽ)

第2部

ギターソロ：末岡成基

1. “サクラ”による主題と変奏……………横尾幸弘
2. 大聖堂……………A. パリオス

マンドリンソロ：田村隆司

3. 夜の鐘……………ノビペレロ
4. スペイン風奇想曲……………ムニエル

第3部

1. 海の組曲……………A. アマディ
2. マンドリン・オーケストラのための
海光る風……………小林由直



第1部 ICMCステージ

1. ドラゴンクエストよりすぎやまこういち
ロトのテーマ、おおぞらをとぶ、
アレフガルドにて、冒険の旅
2. 「荒城の月」を主題とする
二つのマンドリンのための変奏曲服部 正
M: 田村隆司、大浜芳樹

第2部 プロムジカ・マンドリン・アンサンブル ステージ

1. 「仮面」序曲P. マスカーニ
2. マンドリン・オーケストラのための
ヴォカリーズ 第1番「暁の歌」熊谷賢一

第3部 合同ステージ

1. 群炎 V 「祈りと希望」熊谷賢一
2. 群炎 III熊谷賢一



第1部

1. 序曲 「フィガロの結婚」 W. A. モーツァルト
2. 狂詩曲 「スペイン」 E. シャブリエ

第2部 岩国女声合唱団

合唱

1. 流浪の民 シューマン
 2. 村の風車 G. ビゼー
(歌劇カルメンの間奏曲より)
 3. 祭りと花と娘 E. シャブリエ
- 独唱 ソプラノ：岡村美磋
4. メリーウィドウワルツ E. レハール
 5. スペインのセレナード G. ビゼー

第3部

1. ギターとオーケストラのための
アランフェス協奏曲 J. ロドリゴ
G：末岡成基
2. 二つの動機 吉水秀徳



第1部

1. 夏の思い出
2. 浜辺の歌
3. むらまつり
4. きんたろう
5. おぼろ月夜
6. インナーズ

第2部 ギターソロ G: 中野義久

1. スペイン舞曲 第5番「アンダルーサ」……………グラナドス
2. アルハンブラ宮殿の思い出……………タレガ
3. 12の歌「地球は歌っている」より……………武満 徹編
オーバー ザ レインボー、サマー タイム、
イエスタデー
4. グラン・ホタ……………タレガ

第3部

1. プレリユードⅡ……………吉水秀徳
2. マンドリン・オーケストラのための
群炎 第6番「樹の歌」……………熊谷賢一



第1部

1. ジュラシック パーク……………J. ウィリアムス
2. 戦場のメリー クリスマス ……坂本龍一
3. 嵐が丘……………坂本龍一
4. ブレード ランナー……………ヴァンゲリス
5. シンドラーのリスト……………J. ウィリアムス

第2部 マンドリンソロ: 田村隆司

1. シシリアの思い出……………S. レオナルディ
2. 愛の挨拶……………E. エルガー
3. 小人の踊り……………R. カラーチェ
4. タイスの瞑想曲……………J. マスネー
5. 幻想的円舞曲……………E. マルチェルリ
6. チャルダッシュ……………V. モンティ

第3部

1. マンドリン・オーケストラのための組曲
「見知らぬ大地(くに)へ」……………尾園勝善
1楽章 出航(たびたち)
2楽章 憧れをのせて
3楽章 時の行方
4楽章 夢を歴(つ)ぐものたち



第1部 日本人の心に残るメロディ

1. 襟裳岬 吉田拓郎
2. 舟 歌 浜 圭介
3. 川の流れのように 見岳 章
4. ライム ライト C. チャップリン
5. エデンの東 L. ローゼンマン

第2部

1. ギター ソロ: 上野裕介
2. ギター デュエット: 末岡成基、原田 寛
フラット マンドリン アンサンブル: ブルーメサ
3. ロシアン・ラグ D. アポロン
4. リトル・ビーン・アイランド 岩永豊司
5. ブルー・メサ P. オストリウシュコ
6. A列車で行こう B. ストレイホーン

第3部 マンドリン・オリジナルの世界

1. 序曲 吉水秀徳
2. 生命の詩 (世界の命=広島の心)
..... 作詞 原田東岷
..... 作曲 藤掛広幸
..... 合唱 岩国混声合唱団



第1部 セピア色に染まったラブ ソング

1. 花の首飾り すぎやまこういち
2. モナリザの微笑み すぎやまこういち
3. 銀河のロマンス すぎやまこういち
4. 二人だけの海 弾 厚作
5. 海その愛 弾 厚作

第2部 やさしいギターの調べ

1. ギター三重奏：山口ギター同好会（原田寛、宮家敏明、真田修吾）
「調和の幻想」より ヴィヴァルディ
2. ギターとフルートの二重奏（G：伊吹稔、F：伊吹恵子）
「タンゴの歴史」より ピアソラ
3. ギター合奏：I CMC
「少年時代」 井上陽水

第3部 マンドリン オリジナル

1. マンドリンの群れ ブラッコ
2. パストラル・ファンタジー 藤掛広幸



第1部 話題のNHKテレビ番組のテーマ ミュージック

1. 素晴らしき日々へ : 「あぐり」 より 岩代太郎
2. 春よこい 松任谷由実
3. シルクロード 喜 多 郎
4. 祭の笛～日本の素顔 : 「新日本紀行」 より 富田 勲
5. 秀 吉 小六禮次郎
6. 毛利元就 渡辺俊幸

第2部 マンドリン ソロ ステージ

M : 新井義悠

1. 美しきロスマリン クライスラー
2. タイスの瞑想曲 マスネー

M : 田村隆司

3. ツィゴイネルワイゼン サラサーテ

M : 新井義悠、田村隆司

4. 二つのマンドリンのためのコンツェルト ヴィヴァルディ

第3部 マンドリン オリジナルの世界

1. 組曲「ナポリの風景」 クロッタ
 - (1) サンタルチアの祭
 - (2) ポジリポ地方の唄
 - (3) 入り江を照らす満月
 - (4) 祭日の悪戯っ子
2. 古 譚 ギウディシ
3. 劇的序曲 カペレッティ

第41回 1998年11月15日(日) 14:00～ シンフォニア岩国

第1部 マンドリン オリジナルの世界

1. バグダッドの太守 F. A. ヴォアルデュ
2. 夜 曲 S. コペルティニー
3. 交響的前奏曲 U. ボッタキアーリ

第2部 ポピュラー ステージ

1. FOREVER YOURS 五十嵐 充
2. 長い間 玉城千春
3. ひだまりの詩 日向敏文
4. ALIVE 井沢弘将
5. もののけ姫：もののけ姫より 久石 譲
6. アシタカせつき：もののけ姫より 久石 譲

第3部 音楽物語

1. 長谷雄卿草子より「朱雀門」 鈴木静一



第1部

1. イタリア～英雄的行進曲～……………A. アマディ
2. サヴォイアのマリア・ピア女王～子守唄～……………G. マネンテ
3. 怯える小鳥～諧謔風ポルカ～……………G. フィリッパ
4. 夏の庭～黄昏～……………P. シルベストリ
5. 唄と踊り……………R. カラーチェ

第2部

1. ディズニー メドレー……………小穴雄一・尾園勝善編
2. アラジン メドレー……………ジョン モス・尾園勝善編

第3部

1. 北設楽民謡「せしよ」……………川島 博
2. 舞踊風組曲 第3番……………久保田 孝



第1部

I [日本のうた]—故郷を想う時—

1. はないちもんめ わらべうた
2. こんびらふねふね 香川県民謡
3. ずいずいずっころばし わらべうた
4. 故 郷 岡野貞一
5. 茶摘みによる幻想曲 唱歌
6. 夏の思い出 中田喜直
7. たなばたさま 下総皖一

II 岩国錦帯橋 松塚展門

第2部

ギターアンサンブル

1. TSUNAMI 桑田圭祐
2. Farewell to Island W. ザイシンガー
3. Irish Fork Medley J. スパークス

ギターソロ：末岡成基

4. セビリヤーナス (セビリア風幻想曲) H. トゥリーナ

マンドリン アンサンブル

5. スプレーン・・憂愁 A. アマディ
6. 鷺の歌 服部 正
7. 水車小屋の乙女たち～序曲 M. マチョッキ

第3部

1. Impression 1999 舟見景子
2. 組曲「もののけ姫」 久石 譲
アシタカせっき、祟り神～旅たち～もののけ姫、
アシタカとサン



第44回 2001年11月10日(土) 18:30～ シンフォニア岩国

第1部 中野二郎先生を偲んで(中野二郎編曲)

1. 懐かしき追憶……………G. フィリッパ
2. 晩 秋……………G. マネンテ
3. 組曲 吟遊詩人……………A. アマディ

第2部 おなじみの曲でお楽しみください

1. 太陽がいっぱい……………ニノ・ロータ
2. 星に願いを……………L. ハーリン
3. 踊り明かそう……………F. ローエ
4. そり滑り……………L. アンダーソン
5. ラッパ吹きの日……………L. アンダーソン

第3部 クラシックの世界へ

1. ある貴紳の為の幻想曲……………J. ロドリーゴ
G: 末岡成基
2. 歌劇「仮面」序曲……………P. マスカーニ



第45回 2002年11月9日(土) 18:30～ シンフォニア岩国

第1部

1. 星の庭……………小林由直
2. 星空のコンチェルト……………藤掛広幸

第2部

1. ジブリ メドレー……………久石 譲
2. 千と千尋の神隠し……………尾園勝善編
あの日へ、滝の少年、神さま達、底なし穴、
六番目の駅、湯婆婆狂乱、ふたたび、いつも何度も

第3部

1. 歌劇「カバレリア・ルスティカーナ」前奏曲
…………… P. マスカーニ
2. スラブ行進曲…………… P. チャイコフスキー



第1部

I プロジェクトX

1. 地上の星……………中島みゆき
2. 大きな古時計……………H. C. ウォーク
3. ひよっこりひょうたん島……………宇野誠一郎
4. 黄昏のビギン……………中村八大
5. ヘッドライト・テールライト……………中島みゆき

II プレリュード 3……………吉水秀徳

III 序曲 第4番 ロ短調……………K. ヴェルキー

第2部

1. マリゼッタのアルバム……………G. マネンテ
マリゼッタ(ガボット)、夢見つつ(モメント・ムジカーレ)
人形(スケルツォ)
2. 彷徨える霊……………U. ボッタキアーリ
3. 交響管弦楽のための音楽……………芥川也寸志



第47回 2004年11月13日（土） 18:30～ シンフォニア岩国

第1部

1. 新撰組（MHK大河ドラマより）……………服部隆之
2. サウンド オブ ミュージック……………R. ロジャース
3. 初秋の唄……………桑原康雄
4. 亡き王女のためのパヴァーヌ……………M. ラベル
5. 喜歌劇「詩人と農夫」序曲……………F. V. スッペ

第2部

1. 劇的序楽「細川ガラシャ」……………鈴木静一
2. ノスタルジー 無言詩……………P. シルベストリ
3. ジャズ ポップ ロック組曲……………C. マンドニコ
 (1) MAMBO (2) BLUES (3) STOMP
4. 東洋の印象 第2組曲……………A. アマディ
 (1) 愛の歌と幻想曲
 (2) 黄昏(回教役僧の祈祷)
 (3) 市場にて



第1部

1. ギリシャ風主題による序楽……………N. ラウダス
2. 舞踊風組曲 第2番……………久保田 孝
3. ライム ライト……………C. チャップリン
4. ひまわり……………H. マンシーニ
5. ハウルの動く城……………久石 譲
6. スターウォーズ……………J. ウィリアムス

第2部

1. 弦楽合奏のためのセレナーデ ハ長調 作品48
……………チャイコフスキー
第1楽章 Pezzo in forma di Sonatina
第2楽章 Walzer
第3楽章 Elegie
第4楽章 Finale (Tema Russo)



第1部

1. 短くも美しく燃え W. A. モーツァルト
2. メヌエット ト短調 L. V. ベートーベン
3. ガボット L. V. ベートーベン
4. アダージェット G. マーラー

(交響曲 第5番より 第4楽章)

ダンスとのコラボレーション

5. 踊り明かそう ローエ
6. ラ・クンパルシータ M. ロドリゲス
7. 情熱大陸 葉加瀬太郎
8. 夜霧のしのび逢い G. V. ウォッター

第2部

1. ハンガリアの黄昏 D. ベルッティ
M: 新井義悠
2. マンドリン合奏のための二章 柳田隆介
3. 英雄葬送曲 C. O. ラッタ



第1部

1. 序曲「レナータ」……………H. ラビトラーノ
2. 交響的前奏曲……………U. ボッタキアーリ
3. パストラル・ファンタジー……………藤掛廣幸

I CMC 50回記念メドレー……………尾園勝善 編

4. 月光仮面 ～ パイプライン
5. 男はつらいよ ～ UFO
6. 赤いスイートピー ～ セーラームーン
7. ジュピター ～ 千の風になって

第2部

8. 劇的序楽「細川ガラシャ」……………鈴木静一
9. 交響的前奏曲……………吉水秀徳
10. 組曲「ホルベアの時代より」……………E. グリーグ



一 般 寄 稿

寄稿者氏名の冠数字は、初出演時の西暦を示す。

西域より

1958 村橋 浩

私は岩国高校に入学して、最初はテニス部に入りました。しかし、コート数は少なく部員数は多くて練習ができず、部活を休んでいました。一学期の終わりのころだったか、熊谷先生から「今年の一年生の入部者が少なく困っている。誰かマンドリンクラブに入って欲しい」との要望を聞き、入部することになりました。練習は夏休みを返上して毎日登校したお陰で、なんとか秋の演奏会へ出ることができました。

そこで出会ったのが、東洋的な曲想を持つ「西域より」（川崎貞利作曲）でしたが、この曲を演奏していると西域とはどんな所か、ぜひ行って見たいと思うようになりました。しかしその地は、外国ではあるし、しかも中国の奥地ということもあって、胸の内にずっと残っていましたが、その夢がかなったのは、1993年の4月のことでした。シルクロードのど真ん中「敦煌（とんこう）」に立つことができたのです。

タクラマカン砂漠に立つと、360度礫を敷きつめた、見渡す限り何もない荒涼とした原っぱ。

最初、砂漠とは童謡の「月の砂漠」を連想していたので、余りの違いにびっくりしましたが、次に移動した月牙泉（げっさせん）では、童謡「月の砂漠」のように風紋のきれいな砂の小山を、ラクダの背に揺られながら「西域より」を連想することができました。

やっと若い頃の夢が叶い「西域より」の原風景を見て、歩いて、風を感じることでたのびました。



タクラマカン砂漠にて（1993年4月）

クラブ活動に縁遠くなっている者の勝手なお願いですが、いつかこの曲を演奏してください。今度は、逆にこの曲を聴きながらシルクロードを思い出したいのです。

1/2Cの記憶

1959 山添修志

記憶ほど当てにならないものはないという。

ぼんやりと見ていたはずの風景が、音とざわめきと温もりさえも伴ってとつぜん蘇ったり、たしか自分は真っ只中にいたはずの場面が、古いガラス窓越しの揺ぐような風景として、距離をおいて見えたりすることがある。またその時が、前であったか後にあった事なのか、とても瞬時には整理できないことがよくある。

岩国高校横山校舍正門を入った突き当たりの校舍南側の板壁、新入生歓迎の手書きポスターが多く貼られた中に、プレクトラムアンサンブルのポスターが眼に入った。眼に入ったのか探して見付けたのかは、定かではない。左側の図書館（六角形だったと思う）が濃い緑におおわれていた。そして“蝶々”を開きながら汗で手をぬらしたのは、春陽のせいだけだったのだろうか。それから岩国高校プレクトラムアンサンブルへの通学が始まった。



‘56年春。

記憶を伝えるその内容を「論理と情緒」、方法を「喋ると書く」というような、はなはだ乱暴な分類を試みた。論理的内容は書くことが精度に優れており、情緒的内容は喋る方が優柔不断で使いやすいと思う。

1963年3月 プレアン交歓会

情緒的記憶をあえて書いてみると、それは手垢のついた文章の切り貼りと、粘っこいあと味の悪さしか残さない。きわめて文才に乏しいためなのだろう。

入部ポスターを見付けたのをきっかけに、20年間にわたるマンドリン漬けの生活が始まった。

演奏会にまつわる記憶は数多いが、なかでも色濃く残るのは‘58年の岩高プレクトラムソサエティ第1回定演である。

私は高校3年生、詰め襟制服で参加したはずだがホームページの写真は異なる。8月なので詰め襟であるはずは無く、やはり記憶は当てにならない。

‘78年秋、東京に移り住むこととなり今年で29年、時を経て「岩国とマンドリン」がしだいに遠いものとなった。

しかし時として共立講堂、労働会館、体育館など、暑かった演奏会のこと、いく度かの広島公演のこと、慰問のこと、数えきれない合宿のこと、そして連綿と続いた練習のことなどなど、現像した印画紙のように一枚一枚と浮び上ってくる。また東京神田共立講堂など定演以外のステージも忘れられない。

私事になるが、中学生で始めたトロンボーンに明け暮れる高校生の孫、あらゆる環境は異なるが、ほぼ彼の一途な情熱は、私の横山マンドリン学部時代を髣髴とさせる。

燃え尽きた灰は何時しか埋もれ、表土に覆われているが、これからも時々掘り返してみることになるだろう。

夢

1960 三浦孔司

50年も経てば考えられなかったことが、身近な生活の中で実現し利用できている。
練習に行くにしても車がある。昼食はといえばコンビニがある。しかし、西岩国の町は寂れ、河村楽器店、植野楽器店、重村日進堂書店など昔話である。こうして思いを巡らしているとまるで夢を見ているようだ。
少年時代は目を覚まして夢を見たが、今は枕で夢を見る。しばらく枕上夢に付き合ってくれないか。

あれこれと構想を練っていたある晩のことが、その晩に夢枕に立ったのである。

句： 記念誌の 作業途中のプログラム その晩夢に 即よみがえる

熊谷先生

思い巡らせば、出発点はどうしても熊谷先生になる。1952年（昭27年）岩高1年生の時、2階にあったホームルームがよく現れる。

師が担任であったこと、自分も肺炎を患っていて運動系が出来ないことが相まって、ブレン入部となり、音楽との縁につながったものである。家も割合に近かったものだから、よくお邪魔したものだ。

そこには、礼儀正しい古風なご母堂様もご健在で、名前も覚えていただき、苦学して大学を卒業したときにお祝いごと、立派な掛軸と一句を頂戴した。

思わぬ出来事に卒業証書より嬉しくて身の置き所に困るほどであった。



1954年 熊谷先生と私

軸は、 鉄心之我命 作者は、嶋洲という幕末の人と思う。

句： たゆまざる 幾歳月に業成りて 末たのもしき 寿をことほぐ

隆子 86才

初めての楽器は皆と同じ 3000円の国島製マンドリンであった。三浦君頑張れといって、大野繁の熊谷バージョンとでもいうべきマンドリン（糸巻き部分が堅琴の形をした特別製）やヴィナッチアを初心者の方に借しげもなく貸し出されたことは、いかにアンサンブルを早く高めて聴きたいかというお気持ちではなかったか。それもそうだろう、卒業時の同級生は、たったの3人だったのである。
それに家には、ドラ、チェロ、ギターを揃えて、家でも外でも少しでもレベルの高いアンサンブルを希求しておられたものと思う。

1958年の1回目の定演からしばらくは、30人前後のステージも、第9回には57名、第10回は78名を、数字の上では師も大いに満足され、先に希望を見つけられた矢先の1968年に、53才で急逝されたわけである。

ご臨終に近い頃、入院先の国立病院で輸血が必要になり、富沢初代会長の指揮のもとに広島赤十字で献血したが、その甲斐もなく、やせ細ってなくなられたご遺体は、山添、高島君によって家路につかれたという。
家で、一人で待たれていた悲しみのご母堂さまは、そのお気持ちを詠まれているが、失礼ながら、母としての気持ちを推察して下の句をつけさせてもらった。

句： 日盛りを 木陰ゆきませ 永の旅
身代わりなげく 門で悲しも

師との最後のお別れのとき枕元で、私は自分に言い聞かせるためにも声にして、“後はお任せください”と、お別れの言葉とした。・・・・このことは今も忘れない。

音楽嗜好の変遷

確かにその後の我人生に、恩師とそして立ち上げ育てた I CMC の影がずーっと付きまとい、これらを見無視して語ることは出来ないように思う。

その大きな影以前には、どんな音楽との関わりがあったのか記憶を手繰ってみると、終戦後 2 年経った小学 5 年生の時に校内発表会でクラス合唱の指揮棒を振ったことがあった。

その頃は、物資が無いだけではなく、思想・習慣まで打ち壊し再建する時期に当たり、教科書の新方針に合わない軍国調の部分は、墨で塗りつぶして使ったのだ。

今でも歌の文句は言えるしメロディも歌えると思う。

“雨だれが落ちている 窓の外の軒端から

見ていると綺麗だね 水晶の玉だね “ どうだ！

小学校はそれだけ。

次は、中学校なのだが、これも 1 つしか記憶に無い。それは痛い痛い思い出である。

戦後は、復員（帰ってきた兵士）した若い先生（代用教員とか言っていたかな）が、軍隊式の暴力的教育をしていた時代で、それは見境なしに殴られたものだ。

手で殴るだけでなく、黒板を指す細い竹がバラバラになるほど殴る、履いている軍靴を脱いで底で殴る。

何れもひどい場合は、傷害を受けるのであった。相手は小中学生ですぞ。

その中学での事件の原因は覚えていないが、音楽の授業が終わり、机とイスを片付けて教室を広くして、懲罰該当者数名を並べて順に殴っていったのである。南の窓際で殴られた者は、北側廊下の窓際までよろめいてドッと倒れる。すごいシーンでしょう。内容は、音楽ではなかったか。失礼。

そして夢は、ブレアンにと推移したわけである。

その年、昭和 27 年（1952 年）は、確か日本国が独立した年に当たると思う。そんな時代が青春の初めでした。

社会も次第に落ち着き、岩高は、その点は全然違って、岩国の最高学術的雰囲気があった。

2 年生の選択科目では音楽を選び、合唱で有名な福島先生に教えてもらった。その中で、勿論ソルフェージュはあったが、短い詩を与えられ各自作曲せよとおっしゃる。たまたま数十分で出来たのだろう。「三浦君、そのピアノで弾いてみなさい」との指示。仕方なしにピアノの前に座ったが、どう弾くのかさっぱりで、困り果てた思い出がある。

その福島先生には、卒業後あれこれとマンドリン以外でのアドバイスを頂いた。“弾いて気持ちがよければいいじゃないか”を 1 歩前に出て、基本となるとは一通り勉強しなさいということで、まずは対位法、和声楽を学べとご指導を受けた。それが切っ掛けとなり大学在学中に、ピアノの代わりに和音が出せる鍵盤楽器のエキセルシャ製中古アコーディオンを購入した。それでもピアノが欲しい気持ちは収まらず、就職してからのこと、後輩で明大マンドリンクラブ出身の藤中君が当時勤めていた広島カワイ楽器で、念願のピアノを世話してもらった。部屋に運び込むとゆらゆらする杜宅の床を補強したりしながら、引越しも 2 度同伴して挙句に（1975 年）横山に落ち着いている。この時の引越しの手伝いに尾園君他の顔が浮かぶ。

1979 年の第 2 2 回定演で、松重正清君が浜辺の歌を中心としたアンサンブルという題名の編曲を、当該ビ

アノで夜遅くというか明け方まで1人で苦勞していたナー。

入社後10年位は、仕事を覚えることと半々ぐらいに、音楽がウェイトを占めていた。その後は、音楽と言うよりもICMCの会長として、10年程度マネージメントに専念したのである。

ついでのことだが、Nakade Rokutaro の中古手工ギターも在学時代に手に入れて、転勤中はこちらがお供していた。

通学していた大学が神田にあったものだから、書籍類は勿論のこと、先の楽器にしても、学生街では身分相応の品物が手に入っていたように思う。その頃の社会情勢は、60年安保が示すように、学生運動が盛んな頃で、私にも少なからず影響を与えていたようだ。そんな時代にも、東京では、オーケストラの公開収録とかコンポ演奏とか生演奏喫茶など、こまめに探せば有益な知識が、最小限のお金でふんだんにあるものだから、若者にとっては魅力満載である。もしも私が跡取りでなかったなら、おそらく東京に就職していたこと間違いない。

話をまた高校時代に戻そう。

1954年山口県高校連合音楽会で、下関播生工業高校のブラスバンドが、“ペルシャの市場にて”を演奏し、それを聞いてブラスに興味がわき、卒業して初給料でフルートを始めたが、永井楽器店の勧めとベニーグッドマンの映画に大いに刺激を受けてクラリネットに変更した。

当時は、岩国には指導者が居なかったのか、市消防の練習に1, 2回参加させてもらったり、福島先生のご紹介で高森高校か高水高校かの先生を訪ねたこともあったし、近所のエリザベート音大のお姉さんに紹介してもらって音大で学生さんに見てもらったり、挙句には、在京学生時代に福島先生のご紹介により、NHK交響楽団のクラリネット奏者の門を叩いたこともあったが、食うことが先になりどれも無に帰してしまった。

ブラスの外にも、ハマったものがある。

高校時代にラジオ関東を、岩国で耳をそばだてて聞いたトリオロスパンチョスを初めとしたラテン音楽、とりわけアルゼンチンタンゴにはシビれてしまい、大学在学中は、新宿歌舞伎町のタンゴの生演奏喫茶“カナール”に頻繁に通ったものだ。ついに大学卒業後の就職を待ってバンドネオンを購入する羽目となってしまった。このバンドネオンという楽器も、神田の楽器店から取り寄せたもので、スペイン語の教則本も取り寄せ、西和辞典も購入して独学が始まった。

バンドネオンは元と言えば、ヨーロッパの楽器だったとか。それがスペインの移民と共にアルゼンチンに渡りあたかもアルゼンチンの楽器のように思われている。原理は、ボタン式のアコーディオンなのだが、当初は、規則正しく隣のボタンが半音ずつ上がっていくように並べられていたのが、現在の主流は、不規則に並んでいる。聞くとところによれば、高度なバリエーションを弾きやすくするための改良だとか。

右手の押し引きで2通りのポジションを、左手も2通りのポジションをと「せんない」楽器ではある。けれども、そのセンチミエントな音が日本人の心を虜にしていたのである。

卒業して20年後に東京支社に転勤することになったが、タンゴは流行からはずれ生バンドは死滅したのかと思いきや、ある夕方、六本木の裏通りにタンゴを生演奏するお店を見つけ、東京を去る日まで時には青春の残り火を確かめに覗いたものだった。ところが、ある日そのお店でバツリと従兄に出会ったのである。彼は、フラメンコギターで飯を食っていて、そのお店でも出演していたのだろう。誰しも、親には言いたくないことであろうから……。今では、アルゼンチンタンゴといえばピアソラであるが、当時は名前を時たま聞いた程度だったろう。

その他には、在京中に長島君のピンチヒッターとして東京宝塚劇場で、オーケストラボックスに入り沖縄のサンシンの代わりにバンジョーを弾くアルバイトの経験もさせてもらった。その世界では、夜出勤しても挨拶は、“お早うございます”なのだ。オーケストラボックスから手の空いた奏者が、ステージ上で演技中のダンサーに対して冷やかしの声をかけたり、ダンサーはダンサーでそれに対して知らん顔をして応えたりと、舞台

裏には裏の世界があることを知った。

おまけを言えば、サラリーマン時代、ある程度楽譜が読めることから、事前に“有線ベストヒット”などの新曲を昼休みに口ずさみ、夜になると行きつけの店でカラオケするという1つの技も音楽を楽しんだ副産物と言えるのではなからうか。これ等は、俗に言うポップス系であるが、クラシックにも強く魅せられていたので、有名な曲は、かなりの数メロディを覚えていたようだ。今は、そのほとんどを忘れているが・・・。

・・・今、引き出しから、当時の日本育英会奨学生証と気に入ったレコード名を記したメモが現れた。

なんとも古色蒼然とした色合いである。このレコード名は、在学中選択した音楽の著名な田辺某先生の解説とレコード演奏が、疲れた身体を心地よくさせてもらった時のものである。

就職も決まった4年の秋(1961年10月)、これで学生生活とも東京生活ともお別れとなることを機に、大枚をはたいてスペシャル席(3,000円)に座り、国立パリオペラ座歌劇団のカルメンを東京宝塚劇場で鑑賞したのである。(比較のために、もらっていた特別奨学金:3,000円/月)

その席には、1人に1本ずつのバラが配られ、合図に合わせてステージに投げ入れる役目もあったのだ。

夢も大変な裏通りに入り込んでしまった。このことは、熊谷先生と同じページには一寸書けないな。しかし、このように我人生を振り返ってみて、予期せぬことが次々と体験できて常に新鮮な刺激を受けていたのは、やはり学生時代だったのである。初めは岩国弁であったのが、次第に俄か仕込みの東京弁になるから不思議なものである。

話をもどして・・・・・・・・・・

絆

高校に入学すると、友人から始めて広い範囲の方々との交流が始まる。

岩高では、小学校、中学校とは格段に違った雰囲気の中で、教師もグーツとアカデミックさを備えて、近づき難い感じさえあった。

クラブ活動に参加すれば、前後5年間の在校生と親近感を造成することになるが、度々訪ねてこられる諸先輩方には、一方的ではあるが、兄姉の信頼さえ出来てくるのであった。

そういえば、その中の1人に冬梅邦光(旧姓井上)さんという4歳違いの先輩が。今ひらめいた。

先輩は、広大とエリザベート音大を掛け持ち通学しておられて、編曲の試運転をプレアンで付き合ったこともあった。後に上京され、プロのミュージシャンとしてTVで何度かお見かけしたが、私も上京して下宿時代に、プレアンの後輩の1人とアドバイスを受けにお訪ねしたことがあった。

後輩もプロのマンドリン奏者の道を選ぼうとしていた時のことで、プロの先輩としてのご意見を伺いに行ったのである。先輩いわく、「職業としてやっている俺を見て、楽しそうに見えるか」ということであった。丁度私の胸にも進む方向を探していた時分だったので、大いに参考になった訳である。

こんなことは一例に過ぎず、他の先輩を訪ね歩き、話を聞いたり昼飯をご馳走になったり、プレアンは、校内に留まらず生きていた。

話を元に戻そう。

当時は、故富沢会長、山添君、富永君、高島君、和久本君、田中君が中心となっていたと思う。市内門前にあった富沢会長の家も夢に浮かぶ。応接室には、音響装置とテープレコーダーに定演のテープ、度々メンバーが集まり、その中に旧姓中原(現石崎)さんの顔もあった。



1954年11月
左端：冬梅さん、 右端：富沢さん

その頃、私は五日市楽々園に社宅住まいをしていた。ある時、山添君と高島君がやってきた。それまでの指揮は、熊谷先生しかあり得なかったのも、次の指揮者がいない訳である。そこで、高島君が是非とも指揮がやりたいので了解してくれという頼みごとであった。富沢会長に相談し了解を取った。新しいスタイルの出発となったのである。

高島君は、音楽づくりもさることながら、日頃から岩高プレアンにも顔を出し練習後は自宅に集めて交流するなど、現役とのパイプは太く沢山の出演者も確保できたし、プレアンOBが各地で活動するものだから、東京、関西、広島などものすごい人脈が出来て、演奏旅行も実現するし、広島公演も実現することができた。これはすべて彼の功績とでもいいのではなかろうか。中でも京都特別公演は、代表的企画で、成功裏に終えたことは、50年の歴史にも特筆すべきものとともに、若者の心を捉えて長く共通の絆としてのシンボルとなったものである。この企画には、京都在住の新井君を筆頭に故塩見一郎氏ほかのフィオレンティーノの皆様など多大なお力添えがあつてのことで、ここに改めて感謝の言葉を申し述べておきたい。

これだけのことが出来るのは、とても普通のサラリーマンには不可能なことで、彼としても趣味の世界と生業との、夢と現実の狭間で大いに悩んだに違いないと思う。

これに似たようなことは、多かれ少なかれ趣味に没頭する限り経験し悩むものであり、また多くの人が現実には勝てないことを悟るものである。私も危うい多彩な夢を見てきたものだ。

しかし、先の富沢会長や高島君の例を見ると、家にまで呼んで交流することで絆が強くなれば、クラブ活動も盛んになる裏方の力であることは間違いなさそうだ。それは今でも言える。

現在の石川会長の個性と、店の事務所をクラブの事務所のようにした開放が、今の活況の大きな一因となっていることも確かだろう。石川善久暢子夫妻に深く感謝している。

先の高島君にしても石川君にしても、私の会長時代は、主力のほとんどは独身者であつた。高島君をICMCの初代の指揮者とするなら、2代目は、中里、尾園の同級生同士となる。

中里君といえば、第一記憶シーンは、光市で合宿したときかな。岩国駅から同席となったが、まだ、高校生だった。夏の盛り、ついつい缶ビールが飲みたくなり、目の前で一人で飲むわけにもいかず、一緒に飲んだが、後日、彼曰く、「あのときのビールが初体験だった」とか。悪いことをしたのかな、それとも良いことをしたのかな。1975年第18回定演から指揮者として登場している。それから、指揮者と奏者を兼務しているわけだが、なんだか便利屋的な登場が伺えることもあり、少々気の毒に思っている。これは、私の感傷かも知れないが、彼も苦しい時代を乗り越えた仲間の1人として、表彰ものではなかろうか。

このように、独身者との交流がご縁となり、5組の人達の仲人をさせていただいたことは、身に余る光栄と感謝している。

一人ずつ

熊谷先生が亡くなられてから10年余り、家庭サービスや仕事までもおろそかにしてクラブ運営に取組んでしまつたが、家庭も仕事も大目に見てくれたようである。加えてクラブ員の欠かせないご協力を得たお陰で、一時期を作ることができたのである。言わずもがなの感謝をしている。

そんな訳で一人ずつ夢に出てくるのであるが、個人名を出す和不公平があつてはいけなしいし、紙数にも自ずと制限があるので、ごく限られた名前だけ挙げさせてほしい。

先ずは、最多出演回数である。牧田さんの36回を筆頭に、32回以上の方は石川会長、中里、山本芳生、松塚、吉本屋の6氏である。仮に20回まで数えると25名。いろんな制約のある中でよく続けられたものだ。その6氏のうちで3名は、チェロ担当ということを見ると、ガッチリとスクラムを組んだ鉄壁のトリオというべきか。

クラブが50年も続けられたわけだが、聞けば盛衰があつたとのこと、知らなかったことではあるが心配していたことだった。特に1990年代は、あわやの崖っぷちだったとか。

その苦しい時代を支えてくれた人達は、現在も中心になって活動している人達であり、一人一人のお名前を書いてみたいが、それも自粛。その時期の出演回数の多い人を数えてみると30名近くになる。とりわけ、小さなお子さんを抱えたお母さん達の踏ん張りや、屋台骨を支えたと言えるのではなかろうか。

こうした試練と精進によって、40回あたりから息を吹き返し、その息吹を感じ取ってもらったのか、新しい市民のメンバーや、遠方からの熱心な参加者を得て一皮むけたICMCになっているのではなかろうか。50年前の立ち上げからバトンタッチして続けていることを、私を含めて当時の誰が想像し得たのだろうか。クラブの沿革を書くにしても、それぞれの時代の人に頼らざるを得ないわけで、この記念誌がその役割を担っているのである。同時に、振り返ったとき、あの頃はこんな考え方をしていたのかという自分の姿も蘇るタイムマシーンともなり得るのである。

このように縷々書いてきた訳だが、メンバーには各自の感慨が残っているものと思う。

句： **かにかくに 五十瀬の重み引継いで 吾言うよりも友に残るやも**

最後の夢は、少年のように目を覚まして見てみたい。まだまだICMCは、活動が続けるだろう と。

灯火

1961 小東孝幸

今年で第50回定演を迎える岩国市民マンドリンクラブ（ICMC）。素晴らしいと思います。

設立当初から尽力されておられる三浦さん、長年にわたり現在も会長として継続・発展に努めてこられた石川さん。また、会長を支えてこられた中里副会長をはじめとする皆さんに心からお礼を申し上げます。

岩国市には、マンドリンがある。いつも灯っている。それも何時までも灯っているとの思いは、一度合奏に参加した人にとって、どんなに大きなものとなって来たことでしょうか。現在、ICMCに参加している人達も、きっとその思いの時があったことと思います。絶えることなく岩国で流れ続けさせたトレモロ、時代ごとにメンバーは変わったことと思いますが、今日もとうとう流れていることに感謝で一杯です。

マンドリンに出逢って本当に楽しかった高校時代、その時代にICMCの前身であるプレクトラムソサエティの第4回定演に出させて頂いていたことを最近知らされて、あゝそう言えば、夏の夜に三浦さんをはじめ、諸先輩方と、今は吉香公園となって跡形もなくなった岩高校舎の1室で、練習させて頂いた記憶が蘇ってきて、懐かしい気持ちになりました。味わいのあった木造2階建ての二階から、錦帯橋河畔で打ち上げられた花火が幻想的に見えたものでした。

その後、新興の大学でマンドリンクラブ設立に奔走した学生時代も楽しい思い出です。

いつかICMCの合奏に参加できたらいいんだがなー、と思いながら出来なかった社会人時代は、時折聞こえるメロディに心安らいだものでした。仕事リタイア後、還暦まじかになってやっと手にすることが出来た合奏曲目でした。何時の時代も、ロシア民謡、古賀メロディを楽しんでいましたが、今も一緒です。

カチューシャ、人生の並木道・・・いいですね。

約40年経ってやっと参加できたのに、少し弾きこむともう夫々限界だよと指が悲鳴を上げたりもしていますが、もう少し頑張ると



2005年11月 #48 定演

指に頼んでいる5年間です。

つい先日、失くしてしまったと思っていた熊谷先生から頂いた年賀状がパラリと出てきて喜んでおります。今度はなくさないようにと大切に保管しておりますが、50年という長い歴史を持つICMC、その礎を築かれた熊谷先生が偲ばれます。高校時代、先生の家に午前におじゃまして(御前)午前演奏会と洒落込んだこと、その都度、ご母堂様から頂いた普段口にするこもなかったお菓子の味とか、広島に連れて行ってもらって頂戴したカレーライスも美味しかったですね。その時に聞いた、先生がまだ学生時代に、あの古賀政男氏が時折大学を訪れたなどのお話も楽しかったです。高校時代の秋の定演のとき、先生は残念ながらご病気で出られなくなり、急遽代役として、合唱部の世話をしておられた福島淳先生に指揮していただいたことも思い出です。

思い出は尽きませんが、ICMCにはお世話になりっぱなしで、何のお礼も出来ず申し訳ない気持ちで一杯ですが、大きな流れの中、お許しください。

いつまでもトレモロが流れますように。

昔も今も

1961 中尾雅子

ICMC 50周年おめでとうございます。

その間の、役員の方々に心から敬意を表します。本当に素晴らしいことだと思います。

私は、岩国高校卒業後50年ですから、このクラブは、私たちの卒業の年に出来たことになります。しかし、東京に職を求めたために、初めての参加は第4回定演になりましたが、マンドリンとのかかわりはその後も絶えることなく続き、人生の大半をマンドリンと共に過ごして来たことになりました。

マンドリンとの長い付き合いの原点は、多くの人々と同じく何といっても熊谷先生なのです。アンサンブルは勿論のこと、苦楽を共にした同級生との親身のお付き合いも、いまだに続けているのです。

正直言って、マンドリンの音がそれほど好きでもなく(上手な方の音ではなく、自分の音なのですが)弾けば指が痛いし、緊張すればトレモロは荒くなるし、それでも私が今まで続いたのは、ひとえにマンドリン音楽にかかわっている人達が好きだからです。



1964年正月 仲間と訪問

私のいるマンドリンクラブも、43年が過ぎ、平均年齢も63才になりましたが、仲がよく、家族のようです。最近では還暦を過ぎた人達が入って来られ、雰囲気が少しずつ変わってきましたが、それでもいつの間にか同化して、誰が新人だか分からなくなっています。

マンドリンには、人と人を繋ぐ何かがありそうです。私もマンドリンのお陰で色々な方にお会いする機会に恵まれ、晴れがましく楽しいことも経験しました。思い出してみると、私たちの結婚式で、マンドリンの比留間絹子先生が独奏してくださったこと、NHKの放送に比留間マンドリンアンサンブル(名前は定かではありません)の一員としてドラで参加させていただいたことなど、感謝と共に忘れられない思い出になっています。

先日、川口雅行先生(カバさんトリオ、エリザベート音楽大学マンドリン講師)の会に入れていただき、スペインへ演奏旅行(文化交流)に連れて行っていただきました。

スペインの方達と一緒にステージあり、川口先生のソロ、私たちの演奏、レセプションと、とても楽しく夜中

の12時過ぎまで盛り上がりました。スペインのグループは24,25人位で、マンドリンと同じ音色を持ち、三角形でマンドリンのようにおなかが出っぱってなく、弦はダブルで6本、若い人達のグループでした。本当にマンドリンを止めなくてよかったと思っています。

最近の私の心配事は、いつまでマンドリンが弾けるのか？ 耳が遠くなったらダメでは？ 目が弱って楽譜を追うのが苦痛になったらどうしよう等。

それでも、今の私の生活の中でマンドリンは、大きな位置を占めています。

音楽は腹の足しにはならない

1962 松前浩久

長崎平和大会のステージであるシンガーが「芸術は腹の足しにはならない、しかしそれを食さなければ人間は限りなく動物に近づいてしまう」と言っていた。これが気に入って、プレアンの合宿で練習場の黒板に大きく「音楽は腹の足しにはならない、しかしそれを食さなければ人間は限りなく動物に近づいてしまう」と大書きして一人悦に入ったことがある。覚えている人はいないかもしれないが、私は大切なことだと思っている。

私は、縁があってプレアンの顧問を16年間もやった。指導する実力を持ち合わせないから『自主・自律・自由』をモットーにしていた。おかげで部の実力は上がらないうえに、自由をはき違えて飲酒におよび20人の停学者をだし、定演をブラバンのステージを借りるという悔しい思いをしたこともあった。しかし、一方でプレアン部員から京大の医学部と工学部に二人が合格したときは、「進学の神様」三浦先生に、全校朝礼で「これこそ文武両道だ、これが部活動のあるべき姿だ」と言われて、「私立に行った生徒だって素敵な人ばかりなのに」と思いながらも、プレアンが褒められて喜んだこともあった。いずれにしても、プレアンをやったから進路の障害になったと言う話は聞いていない。最近、子供ができて幸せになったという便りがよく届く。それを食した素敵な人間になったのだと思う。

プレクトラムソサエティが、プレアンの卒業生を中心に組織されたと熊谷先生からお聞きしたのは、高校生の時だったと思う。以来音楽の好きな方・お世話される方・応援される方々など多くの方々の知恵と努力で50年も続いてきた。

私は、最近絵を描いている。最初に習った絵の先生が、「パン画を描く、絵は自由でなければならぬ、絵はみんなのものだ、・・・・」つまり、お金にしようとして絵を描くと買う人に迎合してしまい自由ではなくなる。絵がお金持ちだけのものになってしまっはいけないのだと教えられた。『自由でみんなのもの』これが芸術には大切なことだと思う。

プレクトラムソサエティは、市民マンドリンとして誰でも参加できるようになった。根深いファンの方もおられる。50年の間には多くの市民が、市民マンドリンの演奏会で心洗われる思いをされた方その活動



2007.11.04 自宅アトリエ

に感銘を受け芸術を食された方も多いことだと思う。こうしたことは「腹の足しにはならないが人間にとって忘れてはならないこと」を市民に知らしめたのだと思う。これからいつまでも自由で素敵な演奏活動を続けられることを期待します。

故郷の土は・・・・・・・・

1963 高島信人

私の高校時代のマンダリンの恩師であり、岩高プレクトラム・ソサエティ（現、岩国市民MC）の創設者であった熊谷幹雄先生が逝去されたのが、ちょうど第11回定演（1968年8月）の1ヶ月前——支柱を失った悲しみに浸る間もなく、8月の定演に向けて連日連夜会合を持ったことなど、今でも鮮明に覚えています。その年の定演は追悼演奏会となり、私が先生の後を継いで指揮を任されることになりました。

それから第19回までの9年間、定演はもとより東京演奏会・京都演奏会・岡山演奏会と初めて県外遠征もしました。

今考えるとあの時期は、岩国市民MCの発展期であったのかも知れません。そんな中でクラブに深く携われたことは、その後の私の音楽人生に多くの影響と財産をもたらしてくれたのも事実です。

私が、岩国を離れてから31年、光栄にも第50回記念演奏会で、再び岩国市民MCの指揮を執ることになりました。久しぶりに逢った先輩・後輩達と旧交を温めるたびに、今まで忘れていたものが鮮やかに蘇り、何かしらの懐かしさと居心地のよい安堵感を覚えています。やっぱり自分の音楽の故郷は、岩国なんだ・・・・・・・・と。



1976年3月21日

京都特別演奏会

今の自分の心境を一句・・・・・・・・

故郷の 土あたたかき 裸足かな

継続は力なり

1964 新井義悠

「継続は力なり」・・・・・・・・今あらためて、この言葉の意味を噛み締めています。

当クラブが、岩国高校の熊谷先生と先輩たちによってスタートして半世紀。地方のアマチュア団体が大きな変動もなく、これほど長期間活動が続けるだけでも誰もが瞠目する程の実績ですが、加えて内容、スケール共に一定のレベルを維持していることを考えると正に「金字塔」と呼ぶにふさわしい偉業でしょう。

これはひとえに雨の日も風の日も、地道な努力を続けてこられた地元の皆さんの功績以外の何物でもなく、心から拍手を送りたいと思います。

それに引き換え、私は、高校卒業後40余年、岩国を離れて関西、東京と流れ、日常練習に参加しないで直前に帰ってはのさばっていた気がします。今となっては手遅れですが、己の慢心と厚顔を恥じているところです。

少し脱線しますが、この頃を思い起こすと真っ先に頭に浮かぶのが高島先輩の「帰れコール」です。熊谷先

生亡き後のクラブを、卓越した音楽性と魅力的キャラクターでリードし、黄金時代を築いたカリスマ指揮者だった彼は、別名「手配師」とも呼ばれるほど人集めの達人でした。年によっては、無理かも？と迷ったりすると狙ったように電話がかかってきて「エエじゃないか！翌朝の始発で帰えりゃ何とかかなろうが！」「皆待ちよど！」等と、おそらく別の場面で培われた(?)手練手管で落とされたものです。

丁度その頃、持病の金欠病が一進一退を繰り返したのは、あながち偶然ではないような気もしますが、ともあれお蔭でこの価値ある歴史の場面に少なからず立ち会えたこと、そしてその過程で生まれた世代を超えた強い絆は、今の私にとって大切な宝物です。

時は流れて東京に転居してからは、徐々にご無沙汰してしまいましたが、突然故郷でなんとマンドリンを生業として、第二の人生をはじめようと岩国に戻ったのが10年前で、奇しくもクラブの40周年でした。

急に思い立ったため、それまでに特別の訓練や専門の教育も受けず、指導者のキャリアもなく、あるのはアマチュア奏者としての経験と音楽に対する愛着と情熱くらいのもので、なんと無謀な・・・・・・と訝る人が大半でした。案の定、険しいスタートでしたが、そんな中、まだ駆け出しで特に指揮に関してはおよそ本業とは程遠い未熟な私に、その大役を何年もの間与えてくれた当クラブの懐の深さと度胸の良さに脱帽、そして感謝です。

それから数年、私なりに自らの非力を感じつつも、永遠のテーマを目指して努力してきたつもりです。

そのテーマとは、“音符という記号を音に換える作業で終わらず、一音一音の意味を思い、魂を注いで弾けばいつか必ず心が動き、それが聴く人の心に届く説得力のある演奏へとつながる”と言うことです。

ただ現実問題としては、曲にもよるし、個人差もあるし、指揮者次第なので実際に体感するには、いくつかハードルがあるものも事実です。(気のせいかも知れませんが、最近時々手応えらしきものを感じる事があります。)

そして近年、新たにもう一つ宝物が増えました。

それは紅顔(まだ厚顔ではない)の高校卒業前後、当クラブの母体「岩高プレクトラムソサエティ」(岩高OBのアンサンブル)でコンマスとして活躍されていた山添先輩からその愛器を託されたことです。当時では、とりわけ稀なヴィナッチアのオールドで、その透明感のある伸びやかな音色に魅了されていた私は、今頃先輩の手許でどんな環境かな?といつも脳裏から離れず、いつか尋ねてみたいな一と思っていたところ、何と先輩の方からお電話をいただき、渡りに舟とばかりに、早速東京を訪ねてあつかましく持ち帰ってしまいました。

それからオーバーホールして改めて手にした時、瞬時に虜になってしまいました。そしてこれ程の名器を手許に置いて心行くまで満喫できることは勿論ですが、私を信頼し応援しようとの山添先輩の温情が何よりもあり難く、かけがえのない宝物となりました。

そんな果報者の私が、多士済々の当クラブで、これ以上身に余るほどの処遇を受け続けていいのか、ためらいもありますが、せつかく巡り合った新しい仲間達と一緒に音楽を創る喜びを分かち合い、いつか心が一つになって心が振るえる演奏が出来たらもう何もいらない!との思いが募るばかりです。



2005年11月12日 #48 定演

プレアン追想あれこれ

1964 藤沢幸昌

岩国市民マンドリンクラブの50周年を心からお祝い申し上げます。

岩高プレクトラムソサエティを母体として、このような素晴らしい市民マンドリンクラブに発展して半世紀という、とてつもなく長い期間活動を続けられている指導者並びに団員の皆さまに、心から深い敬意を表します。一人の岩高プレクトラムアンサンブルの卒業生として大きな誇りに思うと同時に、故熊谷幹雄先生が創部され、その精神、技術等の全部が継承されつづけて今日が在るのだと改めて感慨に浸っております。

私は昭和39年(1964年)に卒業し、卒業後は当時のプレクトラムソサエティに加わり演奏することを思い描いていましたが、転勤等で参加は思うに任せずという結果でした。それでも京都での演奏会や、広島での公演などには出演させていただいたことを忘れられない思い出にしています。プレクトラム30年史が発刊されて30年になります。その時、投稿の栄を受け駄文を掲載いただきましたが、再び今回寄稿させていただくのをうれしくは思いつつ、当時のことだけでなく、最近の身辺のことさえも記憶があいまいとなり……

私達の在籍していた昭和38年当時は、横山の岩高旧校舎の2階が部室で、暇さえあればそこで練習したり戯れたりしていたように記憶しています。1、2年生の女子部員は川西から終業後、練習に通ってくるという形態で、今思えば、私たち男子生徒は表向き高い音楽性や演奏技術を追求していたものの、実際は彼女たちの到着を連日待っていたのかもしれないが。

演奏した曲目も余り記憶に残っていませんが、一生懸命に練習した「マンドリンの群れ」、「ローラ」、「レナータ」等は思い出深い曲目で、特にレナータは卒業演奏のメインであったと同時に、宇部で行われた第1回NHK音楽コンクールの山口県予選で1位になることが出来た曲で、忘れがたいものです。1位発表のときの感動は、今尚思い出深く心に残っています。当時の思い出し、語り合える仲間と再会したいと常々思っています。

仲間といえば同期の新井君と宮崎君とは、今年賀状のやり取りをしておりますが、藤井君、竹本君、石井君、その他のメンバー達はその後どこでどのように過ごしているのやら。新井君については、今更申すまでもないのですが、超一流のマンドリニストとして活躍しており、一人の友人として生涯の私の誇りの一つです。初対面の人でも、彼と一緒に岩国高校でマンドリンを弾いていたといえ、すぐに打ち解けあえるという経験を何度も体験しました。還暦を経て、時間にゆとりが出来てきた現在、是非旧交を温めるべくメンバー達に再会することが出来れば幸いです。第50回の演奏会には是非とも出演し、そこで仲間に会えるのを楽しみにしています。

私は、現在大阪の近郊に住んでいます。大阪といえば、古い暖簾をもった大阪商人が、船場の商人たちの主役として活動しています。暖簾は大阪商人の生命であり、また庶民の旗印でもあるといえます。大阪の商いの原点は、暖簾を何よりも大切に守り続けることです。

岩国市民マンドリンクラブの暖簾であるペナント(母体は岩国高校プレクトラムアンサンブルのペナント)を大切に守り、受け継いでこれから先70年、100年と歴史を刻み、発展を続けていっていただきたいと思っています。ささやかながら私もその一員に加わり続けることが出来れば望外の喜びです。



1963年 岩高三年生 左端

マンドリンと転勤と人の和

1966 和久本忠史

50周年を迎えて、今日まで永い間引っ張って来られた皆様方に、ご無沙汰のお詫びと心からの感謝とお礼を申し上げます。

昭和41年（1966年）岩国高校卒業、当時の先輩達（これが三浦先輩）「41年かア・・・若いのー」と言われたのが最近のよう。当時、老朽化した旧公民館に大学生、社会人になった人達が、少人数集まり夏は暑さのため窓を全開・・・汗をかきながら。冬は、ストーブの周りを囲み練習したときのことが思い出されます。いかに多くの部員を集めて定演まで繋ぐかが当時の課題でした。幹事長を任せられ演奏会近くになると何が本業か分からないくらい、とにかくマンドリンに打ち込んだ毎日が思い出されます。

昭和45年（1970年）までの4年間の活動は、東洋工業MC、広大MC、チルコロマンドリニスティコフィオレンティーノ、広島商科大学MC、広島方面、徳山方面の皆さんとの交流、「マンドリン発祥の地」岩国に集合され沢山の楽友ができました。

昭和45年（1970年）岡山県に勤務、この地に来てしばらくマンドリン関係の人達との接触はなく、ひたすら岩国、広島での演奏活動をしていましたが、岡山での仕事も落ち着いたころ何気なく立ち寄った楽器店の張り紙で、岡山市立の施設で練習をしているギターマンドリンクラブの存在を知りました。

練習日を狙って訪れたドアの向こうに居た人が、岡山市民MCのメンバー山根栄さん、後でラナナシカーテを立ち上げることになる森典子さん達でした。この出会いがこの後、岩国の人達との係り合いの物語の始まりです。

これから岡山と岩国の二足のワラジの活動が始まり、ますます忙しくなりました。岡山での8年間、指揮者も2年間経験させてもらい良い勉強になりました。岡山理科大、就実高校、就実短大、ノートルダム清心女子大、倉敷中央病院GMC、重井病院GMC、岡山済生会病院GMCとの交流。多くの演奏会の出演と多くの人にマンドリンの楽しさを教えてあげたような気がします。

また、仕事の関係で、岡山大学GMC出身の医師との出会いで小グループの合奏も始めました（現在エスペランサ）。また新しい楽友ができたのです。

一番充実した7年間・・・この間、岩国市民MCと岡山での交流、岡山のメンバーを連れて岩国市民MCの定演への参加。同級生の藤本君が立ち上げた東京でのコムラードマンドリンクラブへの賛助出演。岩国市民MCの京都公演、東京公演、倉敷音楽祭出演、広島と岩国での2日間の連日公演。これ等が7年間多くのマンドリンの仲間と超多忙な日々を過ごした活動の交流記録です。

昭和53年（1978年）盛岡へ転勤（5年間に在）：岡山空港から会社関係者、岡山の多くの？楽友達に、見送られ東京経由→仙台空港へ15時到着→17時過ぎ宮城沖地震遭遇（マグニチュード7.5）家族、会社の人達も無事でした。私の転勤を仙台が体を震わせて歓迎してくれたのだと、その時の上司の言葉。

岩国から余りにも遠い地に来たため、岩国、岡山との接触はできなくなりました。ここでは、マンドリンよりゴルフ、スキーに没頭。しかしながらマンドリンの匂いを嗅ぎつけ、岩手医科大学GC、岩手大学GMC、岩手GMCとの交流。結局、演奏会は5回の出演、合宿などに参加し楽しいこともありましたが、岩国が忘れ



1976年3月 京都駅前
班引率旗を背中にセット中

られない5年間でした。

この間、1度だけ盛岡から岩国に帰って定演に参加・・・・・・・・。

昭和58年(1983年)東京へ転勤(7年間在住)ほとんど活動なし。ただ、2回新井さんに強引! ?に誘われ、片道70kmの相模原MCに合流、何回練習に通ったでしょうか? 久々の大勢の演奏会に参加させていただきました。まだ若いからできたのでしょう。楽しい思い出になりました。

平成2年(1990年)和歌山へ転勤(2年半在住)全く活動なし。歳も40歳を過ぎ責任のある仕事の始まり。重責が? 邪魔をして音楽活動なしの2年半でした。

ひたすら、交響楽団の演奏を聴きに行きました。



1976年3月 京都特別演奏会

平成8年(1996年)、20年ぶりに思い出の岡山へ転勤(3年間在住単身赴任)。岡山GMCが、ララナシカーテに名称変更になっており、森典子さんが熱心に活動をされていました。なんとそこには、新井さんが毎月指導にいられていることを聞かされびっくり!! 20年前の私の縁で生まれた関係でしょう。熱心に誘われましたが、仕事が忙しいことを理由に逃げてばかり。

一方で、昔の楽友の医師などのグループ(エスペランサ)の月1回(土曜の夜)の合奏に参加。お年寄りドクター達とプラス若者の集団で20~22時まで初見の楽譜(易しい曲)で合奏、その後24時まで和やかなお茶会という、易しい曲を楽しく弾くのをモットーとした集まりで楽しみました。

時には医師会関係のイベントに参加、病院の緩和ケア病棟への慰問、結婚式での演奏という、のんびりした演奏会の3年間でした。

平成11年(1999年)大阪へ転勤(8年間在住→現在に至る)

営業を離れ、スタッフの仕事になり柄にもなく学部部所属、お勉強の毎日・・・・・・・・。

また、演奏会を聴くことのみに専念しました。あつという8年間。そして今年は、50周年記念演奏会のお誘い。また私事ですが、11月16日で還暦。なんと思えば深い年になりそうです。

熱心に活動したときから40年経過、その内12年間は定演に参加、その後は母の見舞いなどなど、また平成17年(2005年)の14号台風で生まれ育った我が家が、床上浸水し解体のため帰岩(この時、三浦さんに、またお世話になりました)するものの、その都度忙しさにかまけてこの間一度も公民館に立ち寄らずご無沙汰ばかり。

今回の記念演奏会には、一度は出演するつもりで臨みましたが、体調が思わしくなく、聞くことでの参加に決めました。なんと30年ぶりにメンバーとの再会です。本当に楽しみです。

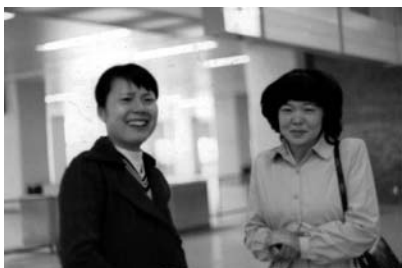
最後に、マンドリンを通じて会えた方々、ありがとうございました。そしてICMCを今まで引っ張って来られた方々、お疲れ様でした。もう一度、感謝! 感謝です。

昔はネー！

1967 石崎悦子

50回と言うと、50年前が第一回。私が小学生の頃に産声を上げたことになる。
(私たちの時代には、岩高プレアンOBと現役との交歓会方式で、しかも、校内で演奏会を行っていた。)その10年後には、私は、現役で参加していた計算になる。

校外での最初の会場は、労働会館。次が、現在、新築中の新市役所の土地にあった体育館。あの頃は、みんなの帰省をねらって、夏のお盆休みに、定演を行っていた。



1976年3月21日 京都特別演奏会
石崎 遠藤

プレアン現役部員が、体育館の床にシートを敷き、椅子を並べる等のお手伝いをした。もちろん、クーラーなど無い。いつの頃か、会場に氷柱が設置され、ステージでは、どこからともなく汗が流れてくるのを感じながら演奏した。しかも、その頃は、全員、白のブレザーだった。

会場は、もちろん扇子・うちわなど動かさなければならぬ。隣が市役所だったので、演奏中に、午後7時のサイレンが、鳴ったこともあった。
打ち上げは、Mさんの会社の会議室で、女性達の手作りのオツマミでしたこともあった。

前後するけど、合宿のとき、墓地での恐怖の肝試し。・・・なぜか、練習光景が思い出せない。
そのうち私も、結婚、出産、転勤などでお休みもあったけど、ギターはずっと私のそばにいた。いままで、続けてきて、本当に良かったと思う。

今回、原稿依頼のおかげで、なつかしい思い出に酔ってしまった。

昔はネー！ ぶち！ ノドカだったんよー！

「あのマンドローネは今」

1967 田中正充

これを書くために、高校の卒業アルバム(1967)と岩国プレクトラム30年史(1977)を引っ張り出し、当時の記憶を探そうとしています。アルバムをめくると40年前にタイムスリップして、錦帯橋を渡る岩高生に戻り、横山校舎の体育館で熊谷幹雄先生の指揮の下、仲間たちと練習に明け暮れた青春時代が懐かしく蘇ってきます。

1965年4月岩国高校に入学、新入生歓迎演奏会でプレアンの素晴らしい演奏を聴き、迷うことなく入部したものです。高校時代の3年間は厳しくもあり優しい熊谷先生の指導を受け、また、卒業後はOBで組織されたプレクトラムソサエティ(現ICMC)で多くの先輩方に、音楽はもちろん人生についての教えもたくさん頂きました。

現在、広島県の岩国高校の同窓会広島支部である広島五橋会で



1981年 富沢元会長の葬儀
右から3番目

幹事として、同窓会のお世話などをさせていただき、多くの同窓生の方と交流がありますが、これも高校時代のプレアン、卒業後のプレクトラムソサエティで年代を超えた交流を経験させていただいたからだと思います。今でもお付き合いのあるメンバーの方から、今のI CMCにも年代を超えた交流や繋がりががあると聞いています。マンドリンに掛ける情熱もあると思いますが、連綿と続く年代を超えた交流や繋がりが、それがアマの団体で50年も続いてきた原動力となっているのではないのでしょうか。

確か高校2年の時だったと思いますが、RCCテレビに出演することになり、それまで合奏では何年か使われていなかった（部室に眠っていた？）マンドローネを加えることになりました。おそらくテレビ映りを考えてのことだったかもしれません。マンドラパートの私にその大役が回ってきたのです。

楽譜を渡されて、オー！ 8分音符や16分音符が無い、休みも多い。楽勝、楽勝！ しかし、困った、へ音記号なのです。いつものマンドラの楽譜はト音記号ですが、ローネは低音楽器なので当然楽譜はへ音記号。チェロやベースのパートであれば毎日見ているへ音記号なので問題ないでしょうが、ト音記号しか読めない私には、一音ずつこれがドだからこれはミなど五線紙と格闘する始末で、とても合奏についていきません。

そこで苦肉の策で考えたのが、楽譜をト音記号に書き直すことでした。とにかくテレビ出演に間に合わせるにはこれしかない、との思いでへ音記号をト音記号に書き直してしまいました。卒業後もプレクトラムソサエティの定演で何度かローネを担当しましたが、毎度その方法でやってしまい、いまだにへ音記号は苦手なままです。（このエピソードは30年史の106ページの写真を見て思い出し、我が家の古いアルバムにも同じ写真がありました。）

当時マンドローネは非常に珍しい楽器で、日本でも所有しているところは数少ないと聞いていましたが、現在ではどうなのでしょう。岩国高校のプレアンにあったあのマンドローネは40年以上たった今、健在なのでしょう。今回、記念誌用の資料をいただき、その記録を見ると第46回に出演記録がありますが、そのローネは当時のローネなのでしょう。その出演者の方は、きっとへ音記号のままちゃんと合奏されたことでしょうね……。

今後も、I CMCの活動がずっと続き、人の繋がりを大事にするその精神が引き継がれていくことを願っております。マンドローネも時々演奏会で活躍できますように……。

徒然なるマンドリン

1968 藤本匡孝

思い起こせば、あの日あの時から30年の歳月が経過しました。前回の記念誌に続いて投稿の機会を与えて頂きましたことを、心より感謝しております。30年前は、何をやるにしても全てアナログの時代で、それは大変な作業であったと記憶しています。

岩国高校入学と同時に手にしましたマンドリン、44年の歳月の間、マンドリンを通じていろいろな人と出会い、そして色々な場所、環境での演奏体験をすることができました。ボランティアでの慰問演奏、出演料を頂いてのプロミュージシャン、スタジオミュージシャン、オーケストラ等、このような経験で感じましたことを書き留めたいと思います。

ライブコンサートの時など、楽器の説明をすることが多いのですが、音色はなんとなく聞いたことがあるけど「姿形を見るのは初めて！」と



1977年12月 藤本、三浦
30年史発刊記念パーティ

いう方が多いのには驚きます。街の中を楽器を持って歩いていますと、時折「どんな楽器ですか」と聞かれることがあります。楽器と言われるだけでもまだ良い方かも知れません。未だにマイナーな認識度の低い楽器なのでしょうか・・・・・・

しかし、一度耳にされた方は、その淡い哀愁に満ちた音色に郷愁を感じておられるようです。そういう私も高校入学時、横山校舎の古びた建物から聞こえてきたマンドリンの音色に誘われるように入部しましたが、まるで昨日の出来事のような感じがするのです。

さて、「トレモロは早い方がいい！」この言葉をよく耳にしますが、「遅いよりは早い方が・・・・」私もそのように思います。しかし、演奏する曲、フレーズによっては「もう少し遅いほうが・・・・」と思うこともしばしばあります。ラブソングだとかセレナーデだとかの叙情的な曲の場合、特に顕著に感じます。早くにも遅くにも自由に使い分けのできるトレモロ、これこそがマンドリンを楽器として生命を与えるものではないかと思えます。

また、弦の変わり目がフレーズの切れ目という演奏もよく耳にします。そのためのポジション移動ではないかと思うのですが、各ポジションのトレーニングも必要でしょう・・・・・・

ピッキングに関しても同様で、アップとダウンの組み合わせによる発音法ですが、拍には「表」と「裏」があり、それを弾き分けしないと抑揚があべこべになったり、非常に無機質な連続音の表現となり、聴衆に不自然さや不快感を感じさせると言う結果になりかねません。

奏者は、その曲で何を感じどのように主張・表現したいのかを分析した後で、演奏に望めば必ず感動していただけるものと確信しています。

歯切れよいピッキング、哀愁に満ちたトレモロ、これ等を組み合わせたマンドリン独特の音色は、必ずや聴く人の心を開かせ、音楽の感動を共有できると思います。

無限の可能性を秘めたマンドリンで思いの丈を音に込め、さらに精進していきたいと思うこの頃です。

熊谷幹雄先生によって岩国の地にマンドリンの種がまかれて60年余り、数々の人材を排出していますが、ますますのご発展を祈念して記念誌への駄文とさせていただきます。

感謝！ マンドリンクラブ様

1968 山根道広

第50回定期演奏会、おめでとうございます。

振り返れば、マンドリンクラブとの関わりは、高校1年生で岩国高校のマンドリンクラブ「プレクトラムアンサンブル」に入部してから・・・・・・。入学後クラブ決めの日、プレアンへ希望して行ったら、約100人の新入生の中に弟も・・・・・・。「おお、お前もか！」それからマンドリン漬けの日々が始まりました。

高校卒業後、大学でもマンドリンクラブへ。そして、当時は高校の同窓会的クラブだった「岩高プレクトラムソサエティ」へも。

そのクラブが50年経ったとは本当に感無量です。

青春時代のほとんどの時間を費やしたマンドリンクラブ。50回のうち何回参加したのか、あらためて振り返ってみると、11回から24回までの14回。その後は仕事の都合で参加できなくなり、すっかりご無沙汰をしています。

今回、記念の演奏会ということで、三浦さん、石川君などから熱心に声をかけていただき、昔のことを懐かしく思い出しています。

毎年、定演の前になったら大きな楽器を抱え、新幹線に乗り帰郷。実家にチョット顔だけ出し、合宿→演奏会→打ち上げ→仕事へ……とあわただしく過ごした盆休み。

ブランクを空けて急に訪ねても、暖かく迎えてくれるクラブの雰囲気とメンバー。

そんな中でとても楽しかった思い出の一つが関西在住の者で、アンサンブルを組んで出た第22回の定期演奏会(S. 54年1979年)の頃のこと。

私は大阪でバリバリの社会人。金丸君、末岡君をはじめ、長藤君、山崎(啓)君、山崎(庸)君、松村君、占部君、井出君、吉田君、木村さん、小路さん、安田さん、花岡さん、森近さん……等、関西に進学していた学生でアンサンブルを組み、ワンステージ持ちました。

毎週日曜日の練習で心がけたのは、間違ってもいいから、恐れずに音だけは出そう！

最強の音と最弱の音だけには細心の注意を払い、他の部分は、リラックスして弾こう！

……そして練習後は、梅田で飲みながらミーティング。

定演本番のステージでは、指揮の私が振りまちがえたのを、みんなは無視して、うまく弾いてくれた……。このときは、「うん！毎週飲んだ甲斐があった!!!」と、本当にうれしかった。



1976年3月21日 京都特別演奏会
山根、石川

50年というここまでクラブが続いてきたのは、各年の幹事さん、指揮者の皆様のご尽力があったからだと思いますが、同時に、何十年間も変わらず練習に参加して来られた部員の存在も、目立たないけれど大きい事だと思います。

運営面での苦勞もせず、四苦八苦して練習もせず気楽に過ごしている日頃の私の生活の中で、何かのきっかけがあれば懐かしく思い出し、楽しい気分を味合わせてもらえる……。そんないいとこ取りのクラブとの繋がり。それができるのも、このような皆様のおかげだと、あらためて心から感謝をいたします。

どうぞよろしく



1968 吉岡光則

コントラバスへの憧れ断ち難く50歳になって初めて基礎を習った素人です。

アンサンブルの経験もほとんどない、ズブの素人ですが、よろしく願います。

I CMC 50周年誌によせて

1969 田村隆司



1997年11月 #40 定演

岩国市民マンドリンクラブ創立50周年誠におめでとうございます。

最近ICMCに小生が参加したのは40周年の時だから、もう10年の時が流れてしまった。また、小生が徳山市（現在は周南市）から大阪に転勤したのが、平成7年7月（1995年といえば阪神大震災の年）。そして、東京に転勤したのが、平成15年3月で、山口県を離れて、早12年が過ぎた。

その間、仕事の内容は変わったものの、会社が終わって家に帰ると若干休憩するも、単身赴任の為かおもむろにマンドリンを取り出し布を弦に噛ませて「弱音器」よろしく練習をするのが、毎日の日課である。

どんなに練習しても、次から次へと弾きたい曲目が出て来る次第、よくも飽きもしないものと感心する。しかし、習慣とは恐ろしいものであるが、マンドリンを練習しない日は殆どない。最近では、ソロ曲が中心の練習であり、年に数回人前で演奏する程度で、合奏は滅多にしない今日この頃である。

昔、良く聞かれたものだが、「どうすればマンドリンが上手になれるのか」と。その問いに対し必ず答えたのが、「貴方より上手くマンドリンを弾く人がいたら、その人が見えない所で貴方の何倍も練習していると言う事に気づいて欲しい。」と。

今回は、マンドリンを練習する時、小生が注意している点について所見を少し述べてみる。

I. 練習方法は急がば回れが正解と思われる。

今までの練習で感じた事を記載してみる。

「上達に王道はない。ただあるのは、頭と耳を使った繰り返しがあるのみ。練習は“ゆっくり”が基本であり、確実に弾くことを目指すべし。結局、それが一番の上達の早道である。そして、毎日の繰り返しが大きな力となり、練習量が多い事はステージでの結果を裏切られない。しかし、完璧はない。練習は楽しくやり、毎日の練習を日課とすべし。そして、現状に満足しない。尚、もし近道を目指すのであれば、自分の悪い癖がつく前に、良い先生につくべきである。」

II. 練習方法

小生の通常の練習方法と、理想と思われる練習方法を記載してみる。

1. 指の準備運動

先ず、マンドリンを構えて、2と3の指を使ってダウンアップしながら「E, A, D, G線」の順番に弾いて行く。（ハ長調で）

「ファ・ソ（E線）、シ・ド（A線）、ミ・ファ（D線）、ラ・シ（G線）、ラ・シ（G線）、ミ・ファ（D線）、シ・ド（A線）、ファ・ソ（E線）」とダウンアップする。

続けて、「ソ・ラ（E線）、ド・レ（A線）、ファ・ソ（D線）、シ・ド（G線）、シ・ド（G線）、ファ・ソ（D線）、ド・レ（A線）、ソ・ラ（E線）」。

続けて「ラ・シ（E線）、・・・・・・」・・・・・・。

そして、E線を登りつめて（オクターブ上昇して）「レ・ミ（E線）、ソ・ラ（A線）、ド・レ（D線）、

ファ・ソ (G 線)、ファ・ソ (G 線)、ド・レ (D 線)、ソ・ラ (A 線)、レ・ミ (E 線)」と弾いた後、「ド・レ (E 線)、ファ・ソ (A 線)、シ・ド (D 線)、ミ・ファ (G 線)、ミ・ファ (G 線)、シ・ド (D 線)、ファ・ソ (A 線)、ド・レ (E 線)」と 2 度ずつ下がって行き、・・・・・・・・・・、最後は、「ファ・ソ (E 線)、シ・ド (A 線)、ミ・ファ (D 線)、ラ・シ (G 線)、ラ・シ (G 線)、ミ・ファ (D 線)、シ・ド (A 線)、ファ・ソ (E 線)」で終了する。但し、音は確実に出すこと。

この練習をすると、直ぐ 3 の指 (薬指) が動くようになる。

2. アーティキュレーション (分節音：音の長さ) の練習 (非常に大切)

最初に、「アーティキュレーション (分節音：音の長さ)」の練習を是非して欲しい。(基礎練習)
この場合、テンポは「♩=60」、ピックで音を出した時、どの長さで左手の指の力を緩めるかである。
小生の場合、♩ (四分音符) を「♩=60」でピッキングした時、次の 4 種類の「アーティキュレーション」に分けている。(プロはもっと細かく分けている)

1) テヌート又は、スラー内の四分音符の長さ

四分音符を、1 拍の内に頭の中で「1, 2, 3, 4」と均等に数えた時、「1, 2, 3, 4」の間、指を押さえたままにする。音を充分伸ばす。

2) スラーのない四分音符の長さ

四分音符を、1 拍の内に頭の中で「1, 2, 3, 4」と均等に数えた時、「1, 2, 3」の間、指を押さえたままにし、「4」で指の力を抜く。

3) スタッカートでの四分音符の長さ

四分音符を、1 拍の内に頭の中で「1, 2, 3, 4」と均等に数えた時、「1, 2」の間、指を押さえたままにし、「3」で指の力を抜く。

4) スタッカート・ティンモの四分音符の長さ

四分音符を 1 拍の内に、頭の中で「1, 2, 3, 4」と均等に数えた時、「1」の間、指を押さえたままにし、「2」で指の力を抜く。

この練習は全ての指が覚えるまで、繰り返し練習する。また、簡単な曲で、納得がいくまで繰り返し練習する。

5) 名ヴァイオリニスト

余談だが、さる名ヴァイオリニストは、速いパッセージの 16 分音符の一つ一つの音にビブラートを効かしていると言う話を聞いたことがある。それは、上記、1)～4)の練習を、四分音符を 1 拍でなく、16 分音符を 1 拍として上記練習をしたものと推測される。

3. 曲を練習する方法

次に曲を練習する方法について例を挙げて説明する。ゆっくりのスピードで練習するのが基本である。
前提は、前記 2. の訓練が充分行われたものとする。

1) 実際の曲による練習 (モンティのチャルダスの速いところ)

例えば「モンティのチャルダスの速いところ」を練習するとして。

(1) テンポはメトロノーム「♩=50」に合わせて練習

テンポは「♩=50」で、メトロノームに合わせて行う。

一拍に16分音符を4つ打った時、一つの16分音符の音の長さ（アーティキュレーション）を自分の耳で管理（音が詰まっているか、充分伸びているかを確認）しながら練習する。「♩=50」がこの時の最速の速さと思われる。（そして、一番難しいテンポでもある）確実に弾けるようになるまで、速度は絶対速くしてはいけない。

勿論、32分音符がある曲の場合は、「♩=25」のスピードで行う。

（注）もし、まだ訓練が充分でなければ、テンポは「♩=60」でメトロノームに合わせる。この時、十六分音符を1拍として数え（四分音符の長さで）アーティキュレーションを考慮しながら練習をする。この練習をすれば、十六分音符に表情がつけられるようになる。本当はこの練習から入るのが一番である。

(2) 自分の演奏をテープ（今はMD等）に入れる

(1)のテンポで曲が仕上がって来ると、自分の演奏をテープ（MD等）に吹き込み、何度も聞きなおし、自分が第三者になったつもりで冷静にチェックする。問題があれば、そこを克服すべく繰り返して練習した後、テープ等に吹き込み、再度チェックする。

(3) テンポを徐々に上げる

(2)が合格すると、テンポを「♩=80」にし、メトロノームに合わせて練習する。そして、それが合格すると、テンポを「♩=120」にし、メトロノームに合わせて練習する。尚、テンポを「♩=120」で弾けない場合は弾けるテンポに落とす。恐らく「♩=50」のテンポが充分弾きこまれていれば、テンポを「♩=120」には比較的早く、到達できる。

(4) 自分の曲をテープ等に入れ最終確認

目的の速度（例えば「♩=144」とすれば）で弾けるようになると、自分の演奏をテープ等に吹き込み、何度も聞きなおし、最終チェックを実施する。

(5) 日頃の練習は「♩=60」で、1回/週に「♩=144」で実施

曲が完成した後は、日頃の練習は「♩=60」の速度で余り表情を付けなくて練習する。こうすれば、音符を常に確実に弾ける。1回/週に「♩=144」の速度で実施する。目的は曲のスピードを忘れない為である。勿論、練習時、自分の耳でのチェックは重要である。

(6) 実施例

ここで、小生の実施例を一つ紹介する。

同じチャルダスではあるが、チゴイネルワイゼンの3楽章には幾つも難しい所がある。その内の一つ、十六分音符でE線を上昇するところ「ラ・ソ♯・ラ・シ、ド・シ・レ・ド、シ・ド・レ・ミ、ファ・ソ・ラ・シ、ド・シ・ラ・ド、シ・ラ・ソ♯・シ、ラ・ソ♯・ラ」を練習した時、ヴァイオリン指定の運指で3. 1)-(1)を6ヶ月間、毎日100回以上繰り返してやっと確実に弾けるようになった。しかし、途中から、ヴァイオリンの運指がもう一つシックリしない為、自分独自の運指に変えたくなった。その時も、前回と同じように6ヶ月間、毎日100回以上繰り返して何とか体が覚えてくれた経緯がある。

また、チゴイネルワイゼンの3楽章は今でも、毎日練習しており（15年間以上継続している）そして、問題のパスセージは毎日10回以上繰り返し練習している。
今振り返ってみると、気の遠くなるような繰り返し回数になると思われる。

4. 曲想をつける

曲想をつける上で、重要なことは出した音がどの様に人間の耳に聞こえるかを考えなければならない。

1) 人間の耳の特性

(1) 音の聞こえ方

1000Hz（E線7フレットのシの音が一番近い）より低い音は、同じ力で出したとしても1000Hzの音よりも弱く聞こえる特性があり、それは低音に行くほど顕著になる。つまり、マンドリンの開放弦をG・D・A・Eと同じ力で弾くと、Eが一番強く聞こえ、次にA、D、Gの順に弱く聞こえる。同じ強さに聞かそうとすると、Gを一番強く弾き、Dは少し弱く弾き、Aではもう少し弱く弾き、Eはもう少し力を抜くと言う配慮が必要である。

1000Hzより低い音域での3度以上の跳躍（例えばラード）を弾く場合は、ラで弾いた時よりも、ドを弾く時に少し力を抜く必要がある。

(2) 人間は同じごとを続けると「耳は慣れてくる」

① スピード

同じスピードでずっと曲を弾き続けていると、「耳は慣れてきて」時間が経つと最初のスピードより遅く感じる。つまり、後半を同じスピードに感じさせる為には、後半は少しスピードを上げる必要がある。

また、八分音符から二分音符に行くスピードが遅くなったように人間の耳は感じる。つまり、八分音符が四つ続いた後に二分音符が来る場合は、少なくとも最後の二つの八分音符は「r a l l .」を付けないと曲が突然遅くなったように感じる。逆に、二分音符から八分音符に行くスピードが速くなったように人は感じる。この場合、逆の対応が必要であることは容易に想像できる。

② 音の強さ

同じ強さで音を鳴らし続けると、「耳は慣れてきて」時間が経つと最初の音の強さより後半の音は少し弱く聞こえる。つまり、後半を同じ音の強さに感じさせる為には、後半は少し音の強さを上げる必要がある。

③ 音色

最高に綺麗な音を出したいなら、その前に少し荒々しい音を出した後に最高に綺麗な音を出すすと効果がより出る。音楽はあくまで相対的なものである。

————— 中間省略 —————

9. 演奏上の注意

その他、下記の内容についても考慮する必要がある。

1) 右手の使い方

- 2) 左手の使い方
- 3) ピックの使い方
- 4) 楽器の特性
- 5) 演奏上の注意
- 6) 人間の体の仕組み

10. 演奏中のチェックポイント

文章がかなり長くなったのでこらでまとめてみる。
小生の場合、人前で演奏する場合、四つの点についてチェックする。

- (1) 手首に必要以上力が入っていないか？
- (2) 肩に必要以上力が入っていないか？
- (3) 右肩を前に巻き込んでいないか？
- (4) 上半身が必要以上に前かがみになっていないか？



1975年8月 #18 定演

I CMC 50周年記念誌に寄せて

1969 藤岡 寿

50周年おめでとうございます。これまで会の維持発展に尽くされた多くの方々に、そして演奏されたのべ470曲の一曲一曲に心を尽くして取り組んだ、お一人お一人のご努力に敬意を表し、I CMCのメンバーとして一時ステージに上らせていただいたことを誇りに、思い出を寄せ書きます。



1976年3月21日 京都特別演奏会
前列右

I CMCという思い出すのは、何といっても熊谷先生です。渾名は『猫』。私が昭和41年（1966年）に岩高に入学してからお亡くなりになる昭和43年の夏まで、本当に様々なご指導をいただきました。ブレアンに入部してすぐ、楽譜を床にバラバラと置いて「楽譜を床に置くものではない！」と大喝。ベースを弾いていた私が何の気なしに、置いた楽器をまたいた時のこと「楽器をまたぐんじゃない！」と再び大喝。そして冬の試験期間に勉強する意欲が出ず、部室で楽器を触っていると「藤岡！試験期間は楽器を弾くべからず！すぐに家へ帰ってしっかり勉強しろ！いいか、しっかりだぞ！」とまたまた大喝。この試験期間が後にも先にも自分が「一生懸命勉強した」と思える唯一の時でした。勉強はともかく、楽譜や楽器の扱いを通して、音楽に対する謙虚さと敬意を先生から学ぶことができました。

私たちが誕生日に贈った猫の人形を、普段の頑固一徹さとは別人のように、目を細めてご覧になっていたことが胸に蘇ります。その先生と高校時代のうちにお別れするとは思ってもありませんでした。病が小康状態のとき散歩をご一緒したことがあります。先生は「最近の若い人が変わったと言われるけれど、ブレアンの生徒はちっとも変わっていないよ…」とおっしゃっていました。その時の一瞬一瞬をいとおしむような先生の清々しいお顔が忘れられません。

次に I CMC で思いだしますのは、先輩方の友情の熱さです。昭和 48 年（1973 年）、私は東京でサラリーマン生活を始めたところでした。東京へ出て、学生生活を送った田舎の長崎と東京の違い、学生と社会人の違いに戸惑いながらも「もう自分が楽器を弾くことは二度とないだろう」と思いながら仕事に励んでいました。ある秋の日、大学の先輩から「自分の会社のマンドリンクラブが出演するので、暇があれば聴きに来てよ」と誘われ、「産業音楽祭」のチケットを渡されました。マンドリンが懐かしくて聴きに行きました。

先輩の会社のマンドリン演奏が終わったところで家に帰ろうと、立ち寄ったトイレの中で I CMC の先輩にばったりであいました。「えっ、何でこんなところに？」という私に、その先輩は「偶然だけれど必然だねー。ちょうど良かった。次の次にステージに上がるからベースを弾いてくれ」と有無を言わず私を楽屋に引っ張っていきます。「ちょっと待って」と言って暫く、どうやって工面したのか「これ、弾いて」と楽譜と楽器を私によこして、さらに「その T シャツじゃあ困るから」と上着までどこからか調達してくれていました。私はその団体の名前も知らずにステージに立っていました。演奏した曲は「レナータ」、優秀賞をいただきました。その時が東京コムラードマンドリンアンサンブル立ち上げの時でしたが、それを知ったのは演奏が終わった後からでした。在東京 I CMC メンバーの方々と、中央大学マンドリンクラブ OB の方々などが核となって立ち上げたマンドリンアンサンブルです。それからは、先輩方のお蔭でどっぷりと楽器に浸るという充実した日々を過ごさせていただきました。コムラードとの合同演奏会となった I CMC の東京公演や京都公演は忘れられない出来事です。

今、仕事などの事情で楽器に触ることもなくなっていますが、かつて熊谷先生から教えていただいた様々なことがリズムとなって今に至っても自分の中に脈打っていること、それが自分のライフスタイルとなっていることを感じています。

改めて発展し続けている I CMC に敬意を表します。そして今後ますますのご発展をお祈りいたします。

音楽とともに 50 年

1969 松塚展門

このたび岩国市民マンドリンクラブが、昭和 33 年の草創期からさまざまな歴史的変遷をたどりつつも半世紀にわたる活動を見事にこなし、50 回目の定期演奏会を迎えることは大変意義深い。日本のアマチュア音楽サークルにおいても、これは偉大な業績である。この記念すべき機会に、私と音楽との係わりの歴史を振り返り、ちょうど 50 年の思い出を綴りたいと思う。

■ 音楽との遭遇

それは今から 50 年前、私が 7 歳の物心がついた頃であろうか、私を取り巻く音は蓄音機から流れる三波春夫さんの調子の良い歌、帯鋸が大きな原木を切る製材の音、そして木材の切れ端を割木として束ねる槌音等であった。家にはオルガンがあったが、猫踏んじゃったくらいしか弾けなかった。上手な人はどうして右手と左手が別々に自在に動くのか、当時不思議に思ったことを覚えている。

小学校の学科の中で音楽は結構好きなのであった。音楽の時間にはたまに歌のテストなるものがあった。生徒に順番に歌を歌わせてゆくものであるが、これが結構どきどきもので自分の順番が廻ってくるまでの、あの緊張感のある時間が忘れられない。先生の伴奏に合わせて歌い始め、走ってはいけなそうと思いつつも、焦っている自分の姿は、今もあまり変わらないと思う。それでも、微調整をしながら歌い終わると、結構ほめられていい気分になったが、これは教育の極意を心得た先生のお蔭と感謝している。今日のカラオケ好きもこの時代にその芽が形成されたものかもしれない。

三波春夫さんの歌はほとんど覚えており、しばしば大人に調子に乗らせて歌ったものである。当時の我が家は、大家族構成で13人が一軒の家に住んでいた。我が家5人と父の両親とその子供達6人合わせて13人である。いつも賑やかで皆歌が好きな一家であった。地域の芸能大会には歌の家族NO.1が参加し喝采を浴びていた。

こんな調子で始まった私と音楽とのお付き合いは、その後今日まで50年続くものとなった。印象的なのは遭遇からちょうど40年後に三波春夫さんを岩国にお招きしてコンサートを開催したが、最初に刷り込まれた音楽にたぶんに影響されたものと思われる。三波春夫さんには色々なことを教わり大変感謝している。当時、沢山のクラシック音楽が蓄音機から流れていると、今日の私はもう少し違ったのかも知れない。

■ ギターへの憧れからギター狂へ

それは中学時代であった。突然ギターの音色に魅せられた。私の頭の中に入り込み虜にするギターの音色は麻薬のようなものであった。映画音楽の『禁じられた遊び』のメロディーが頭から離れなくなり異常な状態であった。また後に、飛行機事故で亡くなられた人見徹さんのギターの生演奏を、中学校の体育館で聴いてギターへの憧れは頂点に至った。

結構工作が好きだったこともあって、今から思えばお粗末であるが、手製のギターをこしらえて『禁じられた遊び』を弾いて陶醉していた。そんな私を見て、祖父がギターを買ってくれた。真新しいギターのニスの臭いを今も覚えている。(そのギターは今是指板が反り返り使い物にならない。)すぐに通信教育でレッスンを開始した。あまりにまじめにギターを弾くのでこれは本物だと思ったのであろう、高校時代に河野賢、大学時代にホセ・ラミレスを親に買ってもらったが感謝している。

ギターに魅せられてかれこれ四十数年になる。今から考えてみると、中学の終わりから、高校、大学、大学院までの十数年間はギター三昧の生活であった。そしてその間、ギターソロ、デュエット、ギター合奏、マンドリン合奏等々さまざまなジャンルを楽しんだ。ギターを弾く合間に勉強していた付けが今日に影響を及ぼしているようである。また、新婚旅行には必ずスペインへと思っていたので、スペインが入っているツアーに参加した。スペインでは新婚の家内をほったらかして通訳と二人でギター工房に行きギターを買ったが、いまだに崇めているような気がする。還暦近い私の右手の爪がギター狂の証である。

■ プレアンと熊谷幹雄先生

ところで、中学時代マンドリン合奏への憧れは並々ならぬものがあつた。私と友人の通称マンキチとの歴史は麻里布小中学校の時から始まる。私たち二人は中学時代に岩国高校プレクトラム・アンサンブル(プレアン)の演奏会を聴きに行き、いたく感激した。そこで他校には目もくれず、ただただ岩国高校プレアン学科に入ることだけを目指した。そして、めでたく二人して岩国高校プレアン学科に入学した。

入学当時のプレアンは総勢百数十名の大クラブで、岩国高校のほぼ10人に一人はクラブ員と言ってもよい状態であった。世間はフォークギターがはやり、ギターを弾くことは当時の若者の憧れでもあつた。私とマンキチは授業が終わると一目散に部室に行き狂ったように練習をした。放課後とその後の自宅はもちろん、休日もほとんど毎日楽器を手放したことがなかった。今から考えると、高校時代は授業中以外ほとんど勉強らしい勉強をしたことがなかったのを思い出す。

熊谷幹雄先生の華麗な指揮と指導に引き込まれ、マンドリン音楽の真髄を教え込まれ、それはそれは充実した毎日であった。本来ならその状態で3年間を過ごすはずであったが、突然の先生の他界に大きな支えを失った。涙ながら弔辞を述べさせていただいた辛い思い出が今も心に残る。もちろん授業では熊谷先生には古文を習い独特な発声の違いを教わった。特に『単なる が ではなく ンが・・・』というような声が今でも私の

脳裏に響いてくる。そのときの先生の姿は、教壇で肩を大きくウエーブさせながら腰を屈められるのが常であった。そう言えば、楽しそうなきの熊谷先生の体はいつもウエーブしていた。優しさと、厳しさがミックスされた最高の先生であったとしみじみ思う。プレアン時代にご指導をいただいた先生や先輩方のお陰と、後輩や多くの賛同者に恵まれたことが今回の50回定演に繋がっているものと感謝している。

■ 音楽の交流

東京での学生生活は合計9年という期間になった。当初は学園紛争華やかな時代で、授業そっちのけでギターを弾き、仲間が集まっては喫茶店で音楽談義に花が咲いた。大学学部時代はギター合奏とソロに没頭し、いかに美しく純粋で澄んだ魅力的な音を発生させるかに心血を注いだ。道半ばでとても到達点には辿り着けなかった。山は越えても越えても向こうにまた山



1975年8月 石城山合宿
中須賀、松塚

が立ちはだかった。この時代からB a c hに傾倒し今日に至っているがB a c hの音楽は私の脳の洗浄作用がある。またグループで先生について演奏や和声学また作曲法や指揮法を学んだ。

東京という街にはいろんな分野の先生がたくさん居られるとつくづく思った。

仲間4人の頭文字を取った『かたちの会』と言う演奏集団を作り、ミニコンサート開催や音楽鑑賞に忙しい毎日を過ごした。ある日虎ノ門ホールだったと記憶しているが、ナルシソイエペスの演奏を皆で聴きに行った。私はあまりの感動ですぐさま楽屋に行き、憧れのイエペスに会い握手をしてサインをいただいた。あの広い会場に響き渡る絶妙の演奏は今も忘れられない。

そんな時代、岩国に帰るとよく高校に出向いては後輩にギターの特訓をしていたが、実に迷惑をかけたものだとして反省している。当時は夏に開催されていたが、OBのマンドリンクラブの定期演奏会は実に楽しく、東京にいても帰るのが待ち遠しいほどであった。

大学院に入ると大学のクラブ活動は引退した。しかし、人伝にギターのレッスンや合奏の指導をしてほしいという話が入り、三菱商事のマンドリンクラブではギターを教え、共立薬科大学ではギタークラブのコーチになり毎週大学に行き、定期演奏会では指揮もさせていただいた。また私の編曲した曲を早稲田大学のギタークラブが演奏したいと言われたので指導した事もある。音楽のお陰で多くの方々との交流が生まれそのお付き合いは今日まで続いている。音楽に感謝である。

■ 真の柿落とし

長い学生生活を終え私は清水建設に入社した。いずれ父の会社を継ぐ運命にあったので修行のつもりで旺盛に勉強をした。当時大学の研究室の先輩が広島支店長をされており配属は広島となった。在職した3年間には運良くすばらしい現場の担当をさせていただいた。一番の思い出は、エリザベト音楽大学の新音楽ホールの建築である。

ここでは、古い建物の解体工事から新築の完成まですべての工程に携わった。立派な音楽ホールの完成間近、私にとっては劇的なことが起こった。ホールの音響の検査が実施されることになったが、その時刻が深夜近くであった。大学の関係者の方で楽器を弾かれる方が皆無であったので、急遽私にお鉢が廻ってきたのである。当時私はエリザベト音楽大学まで数分のところに住んでいた。駆け足でギターを自宅に取りに帰った。

息を切らしながら真新しい音楽ホールのステージの上でひたすらギターを弾いた。曲目は、当時熱心に練習

していた『魔笛』をはじめとして数曲である。この音楽ホールの正式な歴史には刻まれていないが、真の柿落としをしたことになる。私の密かな自慢である。実に良く響くホールであったことを覚えている。

■ 岩国太鼓

清水建設を退職し30歳で岩国に帰ってからは、忙しい社業の習得が大きなテーマになったが、地元の青年会議所でさまざまな街造りの勉強もさせていただいた。時代はバブルに向かって突き進む見かけ上勢いのある時代であった。そんな時代の岩国であるが、他の街にあって岩国にないものがあつた。勇ましい太鼓である。私は三十代半ばに『岩国太鼓』の設立企画書を作り理事会の承認を得てまっしぐらに進むこととなった。事業開始後数ヶ月で大きな和太鼓のセットを購入し、急遽太鼓の作曲をして私の会社のホールで練習に取り掛かった。事前にゴム板で練習はしていたが実物の感覚はかなり違った。

初年度かなりの場所で『岩国太鼓』のお披露目をさせていただいたが、今日思うと大変恥ずかしい演奏であつた。しかし、青年の『岩国太鼓』にかける情熱だけで皆様方には受け入れられた。その後、『岩国太鼓』は海上自衛隊の隊員や消防署の方々のご支援を得ながら今日の保存会に発展している。地域の伝統芸能としてのその地位も揺ぎ無いものになっている姿を見るにつけ昔が懐かしい。当時錦帯橋の下川原で撮影した『岩国太鼓』の絵葉書に私の姿があるが、なんと細身で勇ましい姿が写っているが、時代の流れを感じる。

■ 様々な楽器へのチャレンジ

ギターは私の人生にはなくてはならないものとなった。しかし、音の出方が減衰性のギターに対し一時楽器としての限界を感じ、バイオリン族への憧れが自分を蝕むこととなった。四十代半ばに無性にバイオリンが弾きたくなり、それを手に入れ、がむしゃらに弾いてみたが、とてもギターを最初に始めたときほど時間的な余裕はない。

なかなか独学は難しいということで、同じくバイオリンを弾き始めた知り合いの調律師の方と一緒に個人レッスンに通うことになった。その先生は元N響のメンバーで広響のコンサートマスターもされた方であるが、ビブラートの奏法を教える名人とおっしゃっていた。そのお陰であろうか、本来は大変難しいと言われるビブラートをいとも簡単につけることが出来るようになった。

しかし、問題は絶対音感の欠如である。フレットのない楽器の演奏はとても難しいと思っていたが、実はそうではなかった。簡単に説明すると鼻歌が歌えれば、バイオリンは弾けるとすぐに分かった。相対音感とでもいうのであろうか、素人にはこの程度で十分であった。ただし、音程のチェックは確実にした、12音のそろったチューナを絶えず目の前に置き音程のチェックをした。

当時はよく海外に視察に出かけていたので、旅行中フリータイムにはパリやボストンの古楽器店に行き掘り出し物を漁ったものである。お陰で自分にとっては大変良く鳴る楽器を購入し今日弾いているが確かにギターとは違った魅力がある。

バイオリンを何とかかじったので、次はチェロへと進んだ。チェロは人の声に近く実に魅力的な楽器である。ギターの弾き始めに『禁じられた遊び』ばかりを弾いていたのと同様にチェロでは寝ても覚めてもサンサーンスの『白鳥』を弾いた。

その他様々な楽器にもチャレンジした。胡弓、箏、琵琶、尺八、ピアノ……。その中でもピアノが一番気に入って今日でもほぼ毎日弾いている。ピアノもほぼ独学であるが、やはり始めは先生に付こうと岩国短大の市民講座に通った。もちろんピアノでの最初のレッスン曲は型どおりのものであつたが、私はもっぱら『エリーゼの為に』をしつこく練習した。しかし、10年以上経った今日でもなかなかこの曲をまともに弾けない。独学の欠陥が出たかと思うが、レパートリーは次第に増えた。昔抱いていた左右の指がなぜばらばらに動くか

の疑問はいまだに解けてはいない、しかし、それなりに弾いている。十数年のレッスンの重みを感じる。

■ 作詞作曲への憧れ

私は、世の中になくはないものとは自ら作らなければならないという理念を持っている。様々な特許も出願し今日その一部は会社を支えてくれている。したがって、音楽においても作詞作曲への憧れは並々ならぬものがあった。

直接音楽とは関係ない話であるが、私は『錦帯橋』の自称営業マンである。お陰で、錦帯橋平成の架替工事にも参加させていただいた。今から十年以上前錦帯橋の偉大さを歌い、錦帯橋の世界遺産化への熱い心を歌うために『岩国錦帯橋』という歌を作詞作曲した。そしてこの歌の発表会に三波春夫さんをお招きしたのである。

折角であるから『岩国錦帯橋』の歌詞を掲げておく。

今では複数の大手通信カラオケのメニューに入っており、全国どこでも歌える曲である。数千枚CDを製作し普及に努めているが、今日愛好者も次第に増えている。

その後、宇野千代さんにまつわる『さくら さくら さくら』や『五橋（いつつばし）』佐々木小次郎にまつわる『小次郎』等々を続けて制作したが『五橋』と『小次郎』は同じくカラオケで歌える。これらの制作では尾園さんに編曲をお願いした、改めて感謝したい。錦帯橋は世界遺産になると強く信じている。それに向け、またその後もこの曲『岩国錦帯橋』を歌っていただきたい。

■ 明日にむかって



2005年11月 #48 定演
後列中央

くる。技量が衰退しても、心で弾けばということになるが、なかなか難しい。

ただ最近加齢がギター弾きにとってプラスになることを発見した。それは、爪の強度である。若いときの爪は柔らかく弱かった。したがって連続的な練習は次第に爪を磨耗させ、爪のベストコンディションの状態がす

岩国錦帯橋

一、
錦の流れ 水澄みうらら
瀬戸の渚へ 夢運ぶ
清流つきぬ 源の
便り待ちます 錦帯橋
私の岩国 みんなの岩国
錦帯橋

二、
明日に向い 大きなころ
いにしえ人の 夢たぎる
岩国藩の 誇りとて
架けし偉大な 錦帯橋
私の岩国 みんなの岩国
錦帯橋

三、
匠の技と 心の力
熱き情熱 受け継ぎて
伝へし橋の 美しさ
世界の人へ 錦帯橋
私の岩国 みんなの岩国
錦帯橋

ぐに終わってしまう。さらにちょっと強くフラメンコなんかを引くと爪が切断され相当瞬間接着剤のお世話になった。あるときには足の爪を指に貼り付けて弾いたこともある。その点最近は人体が乾燥したのか加齢で爪が硬く強くなった。そのお陰で少々弾き込んでも爪の磨耗が減少した。これは実にあり難い事である。

これからはやはりギターを中心にはするが、これにこだわり、とらわれることなく様々なジャンルの方々と一緒に音楽を楽しみたいと思う。最近世界的な尺八の奏者とライブセッションを開催した。10年ぶりの試みであったが今回も実にすばらしい即興演奏であった。せつかく音楽と遭遇し50年経ったのだからもっともっとチャレンジもしたい。今年の12月にはシンフォニア岩国での第九の合唱に参加することにした。今からドイツ語の発声練習をしているが大変楽しみである。次の節目60回定演に向けて頑張ろう!!

第50回記念演奏会に寄せて

1970 越智静江

私が、初めてマンダリンの合奏を聴いたのは中学3年生の夏休み、今はありませんが、岩国労働会館での演奏会でした。当時、ギターは知っていましたが、美しいマンダリンの音色に感激したのを、今でもはっきりと覚えています。そのときの演奏会が第9回だったのです。

その日から40年余り経ち、今年が第50回。本当に長く続いている素晴らしいクラブの記念演奏会に、参加できることの喜びを感じています。

高校では、岩高ブレアンに入って合奏の楽しさを知り、卒業してから、6～7回は演奏会に参加させていただきました。その間、岡山、広島、京都での演奏会も経験しました。本当に素敵な楽しい時間でした。その後20年余り経って、シンフォニアでの第40回定期演奏会から再び参加し、今日に至っています。

合奏での楽しさは最高なのですが、最近は、練習時間の割にはうまく弾けず、少々ストレスを感じていますが、歳の所為にはしないで頑張らなければ・・・と自分自身に言い聞かせています。

今年は、息子もICMCに入部して、シンフォニアのステージに二人一緒に立てそうです。大学に入学し、ギタークラブに入部したときから密かに願っていたのですが、就職は大阪。しかし、昨年思いがけず広島に転勤になり、一家で広島に転居したため、この50回記念演奏会に参加させて頂くことになりました。

私の小さな夢が実現できそうです。仕事の都合でドタキャンにならないことを願いながら、定演までしっかり練習したいと思っています。

私の主人と息子のお嫁さんには色々ご迷惑をかけますが、理解と協力に感謝の気持ちを忘れず頑張りたいと思います。

悦ちゃん、暢ちゃんとの三重奏も細く長く続けたいし、ICMCの演奏会の方もまだ頑張るつもりです。

私の次の夢は、もうすぐ4才と2才になる孫たちとの二重奏や三重奏かなア?。そんな日が来ることを夢見ながら、練習に励みたいと思います。



2006年11月 #49 定演打上げ
牧田、石川、越智、足立、石崎

マンドリンとの付き合い

1970 柴田利和

かつて20年近く音を出していたのが、何時しか聴くだけになり、更に25年が過ぎてしまった。
今は、毎年一度の、旭川市民マンドリンアンサンブルの上品な定期演奏会を聞きに行くだけとなっている。

昭和36年(1961年)にプレアン出身の富永勝之氏が、私のいた会社に入社そして配属され、職場にマンドリンサークルが誕生したこと、熊谷先生の指揮の演奏会を、何度も聞きに行ったことからマンドリンに興味を持ち、25才近くで初めてマンドリンを手にするようになった。

初めは、国島(くにしま)の初心者マンドリン、数年経ってからは、鈴木のマンドラ手工品に格上げされた。
安い割には、音はましで現在でも健在である。

今は数年に一度くらい楽器に触れているだけだ。でも、楽器、楽譜、レコード、CD、プログラム(一部)、譜面台など1式が、岩国から旭川への長旅にも拘らず行方不明とならずに残っているのは、どういうことか？
定年後に興味として弾くというのも、既に一回りしているので当たらない。思い入れは大きいのが、近所迷惑が気になって、と言うのが大きな理由のような気がする。

家族との土曜の夜の団欒は、下手だけど真面目という練習のために全て犠牲となった。
皆あきらめていたのだと思う。でも、長女がプレアンに入ったのを見ると、マイナスばかりではないようだ。
家族の理解に支えられていたのだ。

写譜と青焼きはよくやったし、弾くよりはるかに皆の役に立っていたと思う。普段は、ドラパートが居ないと合奏ができないので、その為にと言うのもあった。全日本クラスの達人たちの中で、懐かしい思い出も多い。

25年住み慣れた岩国を離れ、最後は、気候風土など色々好きになった旭川に永住することにしてから既に通算13年、その間もICMCは守り育てられ引継がれて50年目を迎えようとしている。

素晴らしいことだと思う。続けることの大変さとその重みが、ひしひしと伝わってくる。



自分は、技術的にも続けるのは無理だが、青年時代にICMCという音楽があったのが、かけがえの無いことだったと思っている。

1975年8月 石城山合宿 中央の人

ICMC全ての関係者の、ご健康・ご多幸をお祈り申し上げます。

私と岩国市民マンドリンクラブ

1970 牧田むつ子

私が、初めてマンドリンと出会ったのは、中学校を卒業して高校に入学する直前に、友人に誘われてたまたま行った青山学院大学のコンサートでした。そこですっかりマンドリンの独特な音色に魅了されてしまい、高校に入学すると何の迷いもなくプレアンに入学し、部活に専念した高校での3年間でした。そして高校を卒業するとこれまた一直線に、このクラブに入れていただき、以来ウン十年、相も変わらずマンドリンが好きで離れられず現在に至っています。

振り返ってみると、東京演奏会、京都演奏会、そして広島定期演奏会などで充実していた青春時代でしたが、その後、定演が終わると寂しい思いをしていた時期が何年もありました。

各パートが一人ずつ揃ったので今日は合奏ができると喜んだことなど思い出します。土曜日の夜の練習と、日曜日の練習を組み合わせたり、試行錯誤の上、現在の月2回日曜日練習という形になりました。横山で小さなコンサートを開いたり、いろんな場所へ出かけていくなどの活動が続けていく中で、最近では、年間を通じて毎回の練習にたくさんの人達が参加するようになり嬉しい限りです。

また、定期演奏会自体も当初のお盆開催から、現在では11月開催へと変わっていきました。今こうしてこれまでの演奏会などの記録をホームページで見ると、本当にたくさんの人達の力で、岩国市民マンドリンクラブがここまで続けてきたことがよく分ります。私は、ずーっと岩国在住で転勤もなく、毎回遠くから練習に参加される皆さんには、頭が下がります。



1975年8月 石城山合宿
新井、 牧田

出産でお休みした時もあったけれど、どんな時もマンドリンがストレスを解消してくれました。世代など関係なく一緒に音楽が楽しめる、合奏ができる、何だかんだと文句を言いながらも本当に楽しいです。また、これまで好きなことを続けてこられたのも家族のお陰、本当に感謝しています。

そして皆さん有難う。公民館さん有難う。 これからもよろしくお願いします。

チェロパート

1970 山本芳生

チェロを始めて何年になるだろう。中学生のとき、聴きに行った岩国高校のブレアンの演奏が頭の片隅にあり、高校に入って中学時代にやっていた卓球部への入部も考えたが、なんとなくブレアンに入部するようになったのが、そもそもの始まりである。

ブレアン入部当初はギターを弾いていたが、ギターに飽きがきはじめた頃、山根（兄）さんから「チェロやってみん？」と気軽に誘われ、こちらも気軽にチェロに転向した。それからチェロなしには考えられないような人生を送ることになるうとは。

その当時三年生は山根（兄）さん。二年生は田村隆司さん。一年生は自分ともう1人、中学時代仲の良かった奥田君。奥田君は野球部に入って一年生で背番号をもらっていたらしいが、音楽が好きだったので引っ張り込んでしまった。

そもそもチェロという楽器は他のマンドリン系と比べて、大きな音が出た。しかし当時やっていた曲の多くはギター、ベース、マンドラの寄せ集めのような楽譜が多く、弾くのに簡単で、自分にとってはとっつきやすかったのかもしれない。

次の年、二年生のとき山根（兄）さんがしたように、一級下の石川君をギターからチェロに引っ張り込んでしまった。奥田君や石川君にとって良かったかどうかは、本人にしか分からない。少なくとも自分は山根（兄）さんに感謝しているが。

その後山根（弟）さんのいる修道大学に入るとともに岩国市民マンドリンクラブにも入部した。その当時高校を卒業すれば、岩国市民マンドリンクラブに入るのは当たり前のように思っていた時代である。高校のときの弾き方が大きく変わったのは、大学に入ってからだと思う。なにしろ時間はたっぷりあるので、暇さえあれば楽器を手にしてチェロを楽しんだ。チェロの楽譜は難しくないようなことを書いたが、鈴木静一全盛の時代を迎え、チェロも日の目を見るような部分が多くなり、重要性も増してきた。そして難しいところも多くなってきたが大学生という時間の余裕から、難曲もこなせるようになってきた。今思えばこの頃が一番上達した頃だと思う。

よくチェロ以外のパートの人は、チェロはパート練習をしないと、パート練習が楽だとか言うが、チェロだけでボンボンと弾いていては面白くないのである。やはり合奏にならないとチェロの面白さが味わえない。（変な言い訳）

現在、東広島でもチェロを弾いているが、東広島マンドリンアンサンブルに大学時代にチェロを始めた人が入ってきて、その人の言うことにはチェロパートの人はチェロ独特の匂いがするそうである。どうもチェロばかり弾いていると、人間もチェロの匂いがしてくるらしい。（チェロの匂いってどんな匂い？）東広島在住ということで日頃の練習にあまり参加できないが、岩国の練習に参加したとき、チェロの匂いのする人が多いチェロパートや、その他のメンバーが温かく迎えてくれるので練習に参加するのが楽しみである。やはり岩国が自分のホームグラウンドだと感じる瞬間だ。

これからも岩国の仲間と一緒にいい音楽を楽しんでいきたい。



1975年8月 石城山合宿
山本、奥田、山根（道）

Timpani Debut は I CMC (もしあの時、麻雀をしなかったら)

1971 吉木屋政幸

I CMC 50 周年おめでとうございます。また、この輝かしい 50 周年を記念して記念誌を発刊されるということ、併せてお喜び申し上げます。

また、本記念誌の発刊にあたり、三浦さんから投稿依頼を受けましたが、もともと作文が苦手なうえ、I CMC の会員ではない（会費を一度も払ったことがない）私が本当に寄稿させていただいてもよいものか大変迷いましたが、同氏からの度重なる依頼に負け、大変申し訳ありませんがこのような稚拙な文で、記念誌の 1 ページを汚させて頂くことといたしました。

さて、私が初めて I CMC（当時は、岩国プレクトラムソサエティ）に参加させて頂いたのは、第 14 回定期演奏会（昭和 46 年 8 月 28 日、1971 年）のことで、岩国高校の吹奏楽部を卒業し、大学のマンドリンクラブ 1 年生の時でした。

クラブの夏合宿を終え帰省中に、高校の吹奏楽部の同級生で、私と同じく大学でマンドリンクラブに入った名越くん（当時は I CMC メンバー）に麻雀を誘われ、その時一緒に雀卓を囲んだのがなんと指揮者の高島さんと蛭子さんでした。もちろんお二人とは初対面ですし、私はただ普通に麻雀を楽しむつもりでしたが、時間が経つにつれだんだん変な方向になってきたのです。

「定演に出んか？」「一緒にやろーや〜」「Timpani やってくれいや」という話になったのです。そうです、これは「仕組まれた麻雀」だったのです。

確かに高校・大学と打楽器をやっていましたが、当時（私が高校在学中）、学校には Timpani（楽器）がありませんでしたし、大学には Timpani の先輩がおられたので、Timpani 奏者として Stage に立った経験がそれまでに一度もありませんでした。

そのうえ、この年からお盆に高校の吹奏楽部 OB 会で演奏会を開催することが既に決まっていたので、OB である私は当然、本番までの毎日曜日の練習に参加しなくてはいけなかったもので、I CMC との練習回数は限られ、お盆明けからの数回の練習にしか参加できない状況でした。

高校までは、指揮者も楽譜も要らないくらい、何度も練習を繰り返してから本番を迎えた経験しかなかったもので、このように極端に練習量が少ないのに加え、Timpani を始めてまだ日の浅い私のような者が、定演を目指して、一生懸命練習を重ねて作り上げてこられた楽曲と一緒に演奏させていただくことは、非常に不安で、怖く、「間違えたらどうしよう」「私の一打で曲を壊したらどうしよう」との思いから「自信がないのでできません」とお断りしました。しかし、説得は厳しさを増すばかり、ついには三人掛かりで説得され、眠たさも手伝ってとうとう承諾してしまう羽目になったのです。

こうして、昭和 46 年 8 月 28 日（1971 年）、岩国体育館で、私の Timpani Debut 演奏会が開演したのです。（失礼しました。第 14 回定期演奏会でした。）



1976 年 3 月 21 日
京都特別演奏会

メンバーの皆様方の純粋で、崇高な気持ちとは違い、不純なきっかけで I CMC に参加させて頂くようにな

ってから、早いもので今年で36年が経ちました。この間、定期演奏会だけでも32回、他にも、京都公演、広島公演などにも声を掛けていただき、あつかましく同行させて頂きました。

本当に有難うございました。

今では、年中行事の一つとして出演させていただくことが楽しみである反面、寄る年並みには勝てず、年に1回（3～4回）楽器に触れるだけでは、皆様方についていけなくなりつつあるのが現状です。（頭では分っている、手が反応しない。）

幸い、ここ数年打楽器のメンバーも固定化され、若い力が二人も参加していただけるので心強く思っておりますし、そろそろ新旧交代の時期も近づいていると思いますが、スムーズに交代できるまで、お邪魔でなければ、もうしばらく参加させていただこうと思っておりますので、宜しくお願いいたします。

最後になりますが、この輝かしい50周年を契機に、ICMCがこれからも益々のご活躍・ご発展をされますようにお祈り申し上げます。

“ここは地の果てアルジェリア”より（望郷）

1972 中須賀弘明

ICMC 50周年記念誌編集長である三浦さんから、何でもいから寄稿しろとおどされ、ここアルジェリアの地で筆を執っている？ いや、パソコンに向かっている。

歌謡曲“カスバの女”に歌われているあのアルジェリアである。7年前から現地子会社の会社運営テク入れのためにこの地で執務している。アルジェリアというとパリ・ダカールラリーの行われるサハラ砂漠のイメージが強く、荒涼とした国の印象を与える。が、1年中温暖な地中海気候でコバルトブルーの青空を持つアルジェ市（ジャンギヤバン主演の名画”望郷“の舞台）に住んでいるため、生活は快適だ。特に、酒（ワイン）はうまいし、また、ネエーちゃん（地中海民族とアラブ系民族との混血であるため、色白でグラマラスな女性が多い）もきれいで街中では目が離せない。ただ、イスラム原理主義者（アルカイダのアルジェリア分室）によるテロが横行しており、自爆テロの場合逃げようがなく、ちょっと、危ないところでもある。

しかし振り返ると、我がふるさと（ICMC）を離れて、30年経っていることに気が付く。子供も手を離れ、女房は飼ひ猫にすべての情熱を注ぎ込んでいるため家を離れることはなく、年に2-3度1人で岩国に帰ることにしている。

勿論、ふるさとのお兄ちゃんである石川さんに連絡を入れる（今帰った。今から飲みに行く？と電話を掛ける。馬鹿一お前、帰るんなら連絡してから帰れーや。しょうがないのー。7時に花なんとかいう店で待っけ。中里にも来いと電話しとくけーと返ってくる）。そんな折、ICMCのメンバーと会える機会にも恵まれる。話を聞き、現執行部の連中の情熱とその運営能力のすごさに敬服する。

酒を飲みながら一応の先輩面もするのであるが、考えてみると、我が友（？、後輩のくせに気付いてみると30年以上も付き合い、こちらが面倒を見ているにも拘らず言いたいことを言う尾園というやつ）も当時から言っていたような気がするが、



1975年8月 #18 定演
あざな：三不精
中須賀、尾園、松重

はっきり言って小生には音楽的センスがない。それを引き立ててくれ、未だに先輩面を許されるのは、プレアンから I CMC へ参加するように誘ってくれた高島さんのおかげである。

その当時の高島さんは、マンドリン音楽を真っ向から見つめ、市民クラブのレベルでも聴衆を満足させる音楽を演奏できるものにしたいと一心に情熱を注いでいた。そして、広島、岡山、京都と上っていき、各地での公演会を成功させ、西日本、いや、日本の社会人マンドリン界に I CMC ありと頂点を極めた。一緒に感動を与えてもらった。当時は練習を離れても、高島さんの一声でみんなが集まり（否応なしに集合させられた？）、バカッ話をしながら皆な大いに笑った。多くの先輩と親しくなり、また、面倒をみてもらった。

高校を卒業した昭和 47 年から仕事で上京する 52 年までのほんの 5 年間。なぜか、10 年以上の活動であったかのように錯覚（おも）える。

30 年ぶりにふるさと（I CMC）の風を聴くのが楽しみだ。

マンドリンはすごい

1972 中塚 博

ロータリーエンジンに憧れてマツダ（当時は東洋工業）へ入社し、それから始めたマンドリン演奏と合奏。オデル教則本を見ながら、先輩に教えてもらいながら楽譜の読み方から勉強したものでした。

何年か練習を続け、「何とか形にはなるものだ」と思い始めた時期に、安田英雄さん（プレアン出身）の紹介で当クラブの存在とその演奏レベルを知りました。

その頃で最も印象に残っているのが、録音テープで聴かせてもらった、コンサートマスター山添さんで演奏された“人魚姫”です。「すごい、マンドリンでこんなドラマチックな演奏が出来るのか!」と思ったものです。

すっかりとりこになり、毎週広島から岩国へ練習に通い、指揮者の高島さんのところへお邪魔しては、多くの仲間の方々とマンドリン談義をした事が思い起こされます。個人的なお付き合いだけでは無くマツダのクラブとの交流も深め、合同の演奏会を開く事も出来ました。山根義広さんには、コーチのお願いをしたり演奏会への賛助をお願いしたりして、マツダのクラブとしても社内演奏会で“人魚姫”を演奏するなど、最高潮の時期をつくる事も出来ました。

何事においても、最高を知る事で見る目が変わりますが、マンドリンも同じでした。新井さんのすごい技術（当時指キチさんと言ってました）と実に表情豊かな演奏、田村さんのものすごい早さ（当時マンキチさんと言ってました）、和久本さんの確実でしっかりしたドラの音など、日本のトップレベル演奏にふれ、練習する楽しみを知る事が出来ました。

この 50 周年記念演奏会で、当時一緒に演奏した方々と同じステージに立てる機会に恵まれ、その瞬間、青春時代にタイムスリップ出来ることを非常に嬉しく思っています。

そして、この記念誌を読まれた OB・OG の方々が、続々と復帰される事を期待しています。

寄稿の機会をお与え頂きまして本当に有難うございました。



1976 年 3 月 21 日 京都公演
引率旗を持つ人 ナーさん

岩国市民マンドリンクラブの思い出と雑感

1973 尾園勝善

私と岩国市民マンドリンクラブ（前身の岩国プレクトラムソサエティ）との出会いは、まだ高校生の頃であった。

その当時はプレクトラムアンサンブルの上級生は、ソサエティに参加するのが通例だったのか、ごくあたりまえにOBの方たちと一緒に演奏していた。当時指揮をしていた高島氏をはじめとする先輩たちには、随分可愛がってもらった。というか、大袈裟に言えば、後の私の人生において大きな影響を与えたと言っても過言ではない。引っ込み思案で消極的な性格であった私に、少しでも積極性を与えてくれたのは、岩国市民マンドリンクラブと先輩たちであったように思う。

大学に進学した後もマンドリンクラブに入ったのであるが、その人数の割には（100 人前後はいたであろう）



1975 年 8 月
石城山合宿

貧弱な音に驚いたような記憶がある。そして夏休みで帰って参加した岩国市民マンドリンクラブの音にまた驚かされるのである。新たに聴いた岩国市民マンドリンクラブのサウンドは、大学のマンドリンクラブと言う比較を得て新鮮で衝撃的なものであった。特にマンドリンのトレモロは、これが本当のトレモロなんだと言う自信にも満ちたサウンドを放っていた。よく考えてみれば、当時はお盆の里帰りで、各大学のコンマスクラスが、そして新井氏のような人が、一級のマンドリンを持って参加していたのだから、良い音がして当たり前のような気もする。

選曲は、当時の指揮者高島氏の独断と偏見に満ちたものであったが、それが活況の原因でもあったように思う。氏の進取の性格を反映して、当時の新しい曲をどんどん取り入れた選曲であった。今から思うとさすがにやり過ぎではと思えるプログラムもあるが、あれをあの練習日程でやったのは驚異的でさえある。

そしてその先取り精神は、後に私が生涯音楽の師と仰ぐ熊谷賢一氏の一連の曲との出会いをもたらせてくれた。当時は、中京地区を中心とした、マンドリン曲邦人作品の新しい波が起きていた。多くの作家が新作を発表したが、その中で熊谷賢一氏に注目して多くの曲を取り上げたのはさすがである。そして 20 周年記念曲として熊谷賢一氏に新曲を委嘱するのであるが、高島氏の引退によりその曲の指揮が私に回ってきてしまった。指揮の経験の乏しい私にとってもクラブにとっても、それは不幸な事であったかもしれない。とにかく無我夢中で振っていたので、どのように指揮したか全く思い出せないのである。

話は少し前後するが、音楽的な事で思い出す事といえば、ある時の演奏会のポピュラステージを任された事があった。まだ学生であったが、編曲から指揮まで任せるから企画してみろ、と言うのであった。

「サウンドオブミュージック」を音楽物語風にしたのだが、これが当クラブにどっぷり浸かるきっかけとなったのではないかと思う。

指揮者としての思い出

長いクラブの歴史の中で何回か指揮を担当させてもらった。今から思えば、若いうちは何も考えていなかったように思えて、思い出したくもないのだが、当時の奏者のみなさんには深くお詫びしたい。今もあまり変わっていないが、自分の好きな曲にしか興味がいかないので、選曲は随分偏ったものになってしまった傾向があ

る。熊谷賢一氏の曲を中心とした邦人作品を多く取り上げ、イタリアものは少なかったように思う。これは価値が低いと言うのではなく、指揮者としての共鳴度が低いまま取り上げては良い演奏にはつながらないだろうと言う思いからであるが、多くのイタリアものファンの奏者の方には申し訳なかった。

指揮者のやりたい曲をやらせてくれる傾向は今よりももっと強くて、本当にやりたいようにやらせて貰った。良い勉強をさせてもらい感謝してやまない気持ちである。

高島氏が在籍していた頃が発端であるが、オープニング曲を作曲させてもらった。その曲は、先輩の故奥西仁さんが「ダイヤモンド」と命名してくれたが、その理由を知る人はもはや、ごく少数になってしまった。途中から毎年のように新曲に書き直して、前日のリハーサルから練習を開始するということも、今は懐かしい事である。その内の何曲かは、発展させて自作品として発表しているが、それもクラブでの経験のおかげである。独断と偏見に満ちた選曲と言え、拙作を2曲ほど定演で取り上げさせてもらった。評価もされていない、面白くもない曲を取り上げるのに賛成してくれたメンバーには深謝である。

次回60周年には、是非記念曲を献呈させていただきたいものである。

履 歴 書

1973 中里文昭

- 1970年 岩国高校入学とほぼ同時にプレクトラムアンサンブルに入部。チェロパートに配属される。第13回定演に、会場作りのお手伝いで参加。観客が多すぎて、休憩時間に追加の椅子を並べる。
- 1971年 気が付けば、同級生の男子は松村君と二人だけ。彼が指揮をやる事になり、自分はコンマス候補、マンドリンに転職。約4ヵ月後、無謀にも第14回定演にセカンドMパートで奏者として、初参加。
- 1972年 ICMC第15回定演に高校生の身でありながら、なんとファーストMパートに配属され、ちょっと天狗になった。
- 1973年 大学入学式の日に、マンドリン部に入部。マンドリンパートに配属される。麻雀を覚える。第16回定演に、セカンドMパートにて参加。
- 1974年 同期の中で指揮者に成り手が無く、先輩に説得され、指揮者見習いとなる。同時期、チェロパートの3年生が部を止め、再びチェロを手にすることとなった。第17回定演に、チェロパートにて参加。ICMCに於ける、チェロ奏者としての、歴史が始まった。
- 1975年 大学では副指揮者になった。部長は、あの釘屋君だった。第18回定演の1部で、指揮者としての初舞台を踏む。足が振るえ、顔が引きつった。
- 1976年 やっと麻雀で小使いを稼げるようになった。第19回定演にチェロパートにて参加。
- 1977～1984年（第20～27回定演）…… 指揮及びチェロパートにて参加。
- 1985年（第28回定演）…… チェロパートにて参加。
- 1986、1987年（第29、30回定演）…… 指揮及びチェロパートにて参加。
- 1988年（第31回定演）…… 指揮にて参加。定演で初めて楽器を弾かなかった。
- 1989年（第32回定演）…… 指揮及びチェロパートにて参加。



1978年8月 #21 定演
中里、山本、山根(道)

1990年（第33回定演）………… チェロパートにて参加。司会のキノチャン可愛いらしかった。

1991年（第34回定演）………… チェロパートにて参加。

1992年（第35回定演）………… 指揮及びチェロパートにて参加。

1993年（第36回定演）………… 仕事で参加できず。残念

1994～2003年（第37～46回定演）………… チェロパートにて参加。

2004年（第47回定演）………… 指揮及びチェロパートにて参加。

2005、2006年（第48、49回定演）………… チェロパートにて参加。

15歳のときに初めてプレクトラム音楽に触れ、現在53歳。その間、多くの先輩、同輩、後輩の方々に励まされ、助けられて今日まで続けることができました。ありがとうございました。

今後ともよろしくお願いします。

「私」と岩国市民マンドリンクラブ

1973 波羅三哉

今年は、岩国市民マンドリンクラブが設立されて50年ということであるが、趣味を同じくする者が集まった市民サークルが、50年も続いているということは稀有なことであり、本当に素晴らしいことであると思う。私は、10年ほど前、社会教育関係の仕事についたことがあるが、数ある生涯学習サークルの中で、これ程の長寿団体はなかった様に記憶している。

私とマンドリン音楽との出会いは、昭和44年に岩国高校入学と同時にブレアンに入部した時である。当時は、フォークブーム真っただ中であつたこともあり、迷うことなくコントラバスを選んだ。高校1年生といえはまだまだ純粋であり、今の私からは想像もできないが、ひたすら練習に励んだものである。そんな中、機会あるごとに先輩なる方々が練習に顔を出し、我々高校生はいろんな指導を受けた。彼等こそ、岩国プレクトラムソサエティのメンバーだった。演奏技術や音楽への情熱、いろんな面で彼等が眩しく見えた。

岩国市民マンドリンクラブへのデビューは大学3年、確か昭和50年だったと思う。その前年から、東京にある社会人のサークルでマンドリン音楽を続けていたから、技術的にも何とかついて行けたし、これまで憧れだった先輩方と同じステージに立てたことが、大変な喜びと同時に誇りでもあつた。

大学卒業後、縁あつて山口県に就職することとなり、20代は岩国市民マンドリンクラブのメンバーとして継続して練習に参加し、定期演奏会にも毎回参加することができた。

この頃のメンバー達は、比較的若くて意欲的であり、クラブとしても大曲や難易度の高い曲に果敢に挑戦している。だから必死に練習をした。そしてそういった曲をやり終えた時の感動は、何物にも代えがたいものだと感じていた。良き思い出である。

しかし、30代になると仕事や子育てに追われ、練習にも定期演奏会にも参加できなくなってしまった。10年以上もコントラバスには触ることすらなくなった。



1975年8月 石城山合宿
波羅、藤岡、田代

ところが、40代になって一時、社会教育関係の仕事に就き、自らが生涯学習を推進する立場になった。様々の生涯学習サークルに触れ合うにつれ、当クラブで充実した日々を過ごした頃のことを思い出すようになった。そんな時、偶然にも岩国市民マンドリンクラブによる野外演奏に出会ったのだ。居ても立っても居られなくなり、この10年余りの不義理に恐縮しつつ再び門を叩いたのである。

10年ぶりに弾くコントラバスは重く、鋭く、痛かったが、10年のブランクがあるにも拘らずクラブのメンバーは、何事もなかったように自然に私を受け入れてくれた。驚きだった。予想していたある種のカルチャーショックは感じられなかった。このクラブの人達の心の広さ、そして懐の深さ！

50年もこのクラブが続いている理由はこんな所にもあるんだなとも感じた。再び始まった私の音楽活動は、以前のようなひた向きさは全くないが、自分のペースで楽しくさせてもらっている。練習もほとんどしないし、演奏会でも間違った音を出すことも度々だが、それでも私の居場所があると勝手に思っている。シンフォニア岩国のステージに立つ機会を頂いていることにいつも感謝している。

マンドリン合奏では、コントラバスとパーカッションは、他の楽器と違い、立って演奏するパートである。一段高い目線から、他のパートの方々の後姿や横顔を眺めていると、高校時代の先輩方々や20代で活動を共にした方々の、若かりし姿が思い浮かんだりして、それも楽しみの1つになっている。

ふと気付くともう50代の半ばになってしまったが、重くてコントラバスが持てなくなるまで、続けて行きたいと思っている。クラブの運営などには、全く協力しない不良部員だが、実は60回、70回定期演奏会にも現役で参加したいと図々しいことを考えている。

部員の皆さん、どうか今後ともよろしくお願いします。

50周年に寄せて

1973 松重正清

私が、ICMCの演奏会に出たのは第16回（初めての広島演奏会の年）から19回まで、20回をお休みして21回から30回までの14年間に過ぎません。今なお活躍中の諸氏に比して、誠に貧しい実績であると言う他ありません。しかしながら、ここで得たものは大きく、今の自分の土台になっています。諸氏には、こんなヤツもいたんだと時々思い出してくだされば幸いです。

最初はとにかく周りが偉いOBばかりで、息をするのも目立たぬようにというくらいの緊張の中で、何とか合奏に参加するといった状況でした。慣れてくるとドラトツプであった和久本さんの横で弾きたい、というのが当面の目標になりました。なにしろ、熊谷先生の警咳に接することのなかった最初の世代ですから、高校時代は全く音楽的な事をしていなくて（今考えると随分テキトーなことをやっていたものだと思います）、先輩方の圧倒的な音楽性に少しでも近づきたいという一念でした。なんとかその中でやってゆけるようになり、コンマスであった新井さんの目も眩むような華麗な音楽性・技術の虜になって、幸せな時代を過ごしたのだと思います。広島の子生の間では伝説となっていた山根義広さん、後にソロコンで1位を獲得された田村さんの知遇も得て、こういう出会いの場を作ってくださった指揮の高島さんにも感謝しています。振り返ってみると、東京演奏会、京都演奏会など、



1976年3月21日京都特別演奏会
和久本、松重、中塚洋二

思い出は尽きません。自分にとってここが青春だったんだなあと思つづく思います。

1度だけ指揮もしました。今考えるととんでもない指揮で、曲はボロディンの「韃靼人の踊り」でしたが、とりあえず雰囲気だけでやってみました程度のものでした。貢献してませんね。どう考えても。

I CMCを離れることになったのは、勤務する学校のマンドリンクラブのOGによる団体を立ち上げたからですが、I CMCのいきかたは随分参考になりました。

このように恩顧を受けることは甚だしいのですが、貢献は全くと言ってよいほどしていませんね。なんという不忠者でしょう。

天罰なのでしょうが、離れた途端、10年ほどは尿管結石に苦しみ、何度も病院に担がれそのたびに入院、子供たちの演奏会の前日に倒れて入院、翌日奇跡のごとく生還ということもありました。86年に手術をし、以来とにかく水分を取る、トイレを我慢しない、この二つを心掛けるようにしていますが、結石が取まると今度は逆流性食道炎という厄介な病気を持ちまして、あれだけ楽しみだったメシを腹一杯食うという快樂はもはや味わうことができません。これはもう、一生モンダそうで、現在も薬が離れません。なんだか闘病日記のようですが、それでも何とかやっているのは子供たちのクラブ活動につきあっているからであり、元をたどればI CMCで得たもののおかげでしょう。

以上、50年という長い歳月をこのクラブと共に過ごしてきた皆様を祝福しつつ、貢献することの薄かった自らを恥じながら。

美しい人

1974 石川暢子

私が生涯、忘れられない人がいる…その人は若くして逝かれた坂井和子さんだ。
I CMCに彼女がいたことを誇りに思う。

毎日を当たり前のように浪費していた私は、彼女が内に秘めていたことを不覚にもまったく気づきもしなかった。

その頃、…確か昭和62年くらいか、練習が土曜の夜ということで家庭と小さな子供を持つ主婦はなかなか参加が難しい時だった。そこで悦っちゃんの声掛けで、子供も主人も留守の昼間に、岩国市中央公民館の広すぎる部屋で、女性だけのアンサンブルを楽しむことになった。

長いこと演奏から離れていた面々が集った。私は勤務中だったが、理解ある社長？のお陰で客先回りという事にしてもらいこっそり参加した。私も小さい子がおり、やはり夜の練習に参加することが出来ないでいた。鈍りきった指でスケールの基礎から始めなければならないほどだった。でも、おしゃべりも交えたほのぼのした中にも、悦っちゃんの厳しい音チェックが入る練習は、主婦の集まりにしてはまじめで有意義なものだった。何の曲を練習していたか、情けないことに記憶がない。

あやしい記憶を頼りに、メンバーはマンドリンが坂井さん、野村さん、国光さん、よっこちゃん、ドラが紙元さん、黒崎さん、ギターが悦っちゃん、杉田さん、金丸さん、私…あと誰だったか。高校でマンドリンを弾いていたお菓子屋の三木さんが配達途中に、練習をうらやましそうに覗きにきてくれたりした。そのうち現在も続けているのは残念ながら半数弱の4名のみ。

そうこうして少し慣れてきて、“じゃあ、いけるんじゃない”ということで岩国市民マンドリンクラブの定演に再デビューしたのが翌年。

38回（平成7年＝1995年）まですっかりメンバーの中核として活動していた坂井さんはある時から、夏風邪をこじらせて微熱が続くといわれ練習を休みがちになった。



1989年8月20日
#32 定演 坂井さん

彼女は御庄の山越えた大谷というところから通ってきていた。冬になって雪が降ると峠が通れなくて来れないところだが、なつかしい里山を思わせるとてもきれいなところだ。周りの畑で無農薬野菜の栽培をしていて、季節の野菜やくだものなど持ってきてくれた。

「見かけは悪いけど無農薬じゃけえおいしいよ。やはり食べ物は安心が一番だからね。」

体調も良くなったといって、自慢の無農薬すももを持ってきたくれたのは初夏の頃だったか。カリカリとした食感で甘ずっぱい味がした。

“あ、元気になられたんだあ”と別段何も感じることもなく、8月の定演に向けて練習が本格化していき準備に追われるようになっていった。再び休みがちになっていた彼女のことを気にはなりながらも、そのままにしていた。

実は2度目の入院をされたと聞いたのはもう定演直前。私は“今年は残念ながら出られないんだな。でも、来年があるしね…”と軽く考えていた。

そうして迎えた39回の定演に、彼女から激励の祝電が届いた。

ステージで聞いたその祝電に違和感があった。“なんで…?”

「マンドリンが弾けるという、なんでもない当たり前の毎日がどんなに幸せで大切な事か知っていますか。今回私は出ることが出来ないけれど、一日一日を感謝の気持ちで過ごしています。皆さんも悔いのないようにこれから頑張ってください。」というような内容だったと記憶する。

なんか、ただの祝電と違って妙に心に引っ掛かった。“まさか…ね。”

そして、定演後にはじめて末期がんで余命あとわずかだと聞いたのだった。

しかも当時はまだがんという病気は、本人に告知する時代ではなかったにもかかわらず、すべてを受け入れての療養中と聞いた。入院先の看護婦さんでさえ、出会ったことがないほどの模範的な患者さんと驚かされていた。仏教婦人会のお世話も長くされていたので、お見舞いに来られたご主人と静かにお経を読んだりの入院生活だった。

体調のいいときは外泊許可をもらって、ご主人、息子さん、娘さんと食事に行ったり、夜遅くまで話し込んだりとほんとに毎日を大事に過ごされていた。

「やりたいことはすべてやらせてもらったし、何も思い残す事はないよ」

当時、二人のお子さんは大学生と社会人になったばかり。だけど、娘さんの花嫁姿を見ることも、はじめての不安なお産の手助けも、さらにはかわいい初孫を抱くことも彼女には決して許されていない。母親として胸が張り裂けるほど心残りであったはずだ。

なぜあのように心穏やかに過ごせるのだろうと、煩惱の塊の私には理解が出来ないでいた。

今、会っておかないと一生会えないと頭では理解できても、会った時なんと声をかけたらいいのか、余計なことを考え、マンドリンパートの人がお見舞いに行ってきたと聞いても、どうしても行くことが出来なかった。

年が明け、小雪のちらつく寒い日に彼女は静かに逝ってしまった。予告された余命をずいぶん延ばしての旅立ちだった。すべてを遺言により、ほんとに彼女らしい質素で気持ちのこもった葬儀だった。最期の顔はいつもとちっとも変わらず綺麗なまま、ゆるい癖毛が額にかかっていた。ちょっとゆすったら起きてきそうだった。

いつもは控えめなむっちゃんが、お棺に一番先に進み、花に埋もれた彼女に「坂井さん…」と言ったまま

絶句した。それを見ると堪えきれずに涙がこぼれた。皆も同じ気持ちだった。 通夜の席でご主人が、ぼつりぼつりと闘病中の思い出を話された。

「ほんとにやさしいやつで、人の悪口は結婚してから一度も聞いたことがない。今年のお正月を無事に迎えられたことが殊にうれしかったようで、（これでもう思い残す事は何もなくなったよ、お父さん。もしお正月に葬式ってことになったら皆忙しい時だから迷惑かけるがと、それだけが気になってたんよ）そう言っていました。」彼女らしいエピソードに胸が熱くなった。

私も彼女の高校ブレン時代への厳しい練習の話など思い出した。伝説の熊谷先生に指導を受けた世代で、定演前には何キロも体重が減った話を懐かしそうに笑って話してくれた。

I CMCでも、いつも後ろの方で、控えめだけど熱い視線で練習していた様子が、私のギターパートからよく見えていた。あのすももをいただいた時、彼女はすでに病気のことを隠していたんだなあと思うと、切ない気持ちでいっぱい。そして、ノーテンキにクラブ活動していた自分の気配り、配慮の未熟さに愕然とした。

でもひとつ言い訳するとしたら、彼女は命の期限を言い渡されている様子などみじんも見せず、ほんとに毎日をいつもどおりに楽しそうに愛しんでいた。というか、彼女はそれまで元々そんな生き方をしていた人なのだった。

私は、彼女のように死を当たり前のこととして受け入れられるだろうか、まったく自信がない。人としての道を早くに悟ってしまったから、彼女は短命だったのかと思うほどすばらしい人だった。私は彼女を超える人にいまだ会ったことがない。

憧れの女性だけど決して超えられない人、坂井和子さんはそんな美しい人だった。

葬儀は彼女の生き方、人との処し方を物語るように多くの会葬者で溢れた。二人の遺児はとても落ち着いて母親の死を受け入れている様子から、それまでにしっかりとお別れが出来ていたんだろうと推測された。

最後にご主人が縁側に立ち、空に向かって「かずこおー！！」と叫んだ声が脳裏に焼きついている。

情熱を次の世代に

1975 釘屋時夫

記念すべき50周年の節目を迎えるに当たり、心からお祝い申し上げます。
月並みですが、時の経つのは早いものですね。30年前、20周年記念誌の編集作業に加えていただいた時のことが、つい最近のことのように思い出されます。あれから30年も経ったのですね。

岩国高校時代は音楽とは無縁だった私が、修道大学でマンドリン部に入部して、マンドリン合奏の楽しさを知り、ブレン出身の先輩の方々に接する機会を得て、岩国市民マンドリンクラブに参加させていただくことになりました。それが昭和50年（1975年）でした。

当時の岩国市民マンドリンクラブは、岩国高校ブレンのOB会的クラブから、市民クラブへと発展的進化して、各地方のマンドリンクラブとの交流を深め地方公演も盛んになし、活動の成果・名声ともに高まっていた時期だったと思います。



1977年 30年史編集委員会
後列右二人目

最初は、社会人のクラブに初心者に近い学生の方で、参加することに恐々とした思いがありましたが、当時のクラブには、新しいメンバーでもすぐ打ち解けられる開放的で明るく、すごく親しみやすい雰囲気があったような気がします。

そして、昭和52年（1977年）には、20周年の記念演奏会、記念誌の出版など、まさに大きな節目の時期に居合わせたことを喜ばしく思っております。あの頃は、演奏会の度に演奏する曲目が難しくなり、はっきり言ってなかなか弾きこなすことが出来ませんでした。それでも、皆で演奏することが楽しく、またクラブの皆と過ごす時間が楽しくて、毎週土曜日の練習や演奏会前の合宿は、つらかったこと、楽しかったことを含めて、今でも印象深く思い出されます。

まさに青春時代のすばらしい思い出でした。

青春時代の思い出話として、過去形で片づけてしまっただけは、非常に申し訳ないのですが、当時、クラブの運営やお世話をしていただいていた皆様や、当時のメンバーの方々が、今でも変わらぬ情熱を持って現役で活躍されていることには、本当に頭の下がる思いで一杯です。

社会人になっても勤務先が岩国の間は、クラブに打ち込む時間は十分あったのですが、勤務で大阪、東京と離れて行くに従って参加できる時間が限られてきて、次第に縁遠くなってしまいました。最後のステージは、昭和60年（1985年）28回の定期演奏会だったのでしょうか。東京から楽器を持って何度か飛行機で帰省し、練習に参加したことが思い出されます。この年を最後に、残念ながら楽器を弾く機会がなくなってしまいました。クラブには、11年間お世話になったことになります。

結婚したのが、昭和61年（1986年）、上の子供は、来年成人式を迎えます。当時の自分と同じくらいの年令になるわけですが、うちの子供たちは親のステージを見ていません。音楽を楽しむこと、情熱を持ってマンドリンに打ち込む姿を、身をもって教えてやることが出来なかったことは、いささか残念に思っております。時が経ち、自分たちの子供が、当時の自分たちと同じ歳になり、親子で同じステージに立ち、共に音楽を楽しんでいる方々の姿は、本当にうらやましく感じるものがあります。

マンドリン音楽を愛する人達が集って50年、メンバーの変わらぬ情熱とマンドリン音楽を愛する心で、今では岩国にしっかりと根付き市民クラブとしての確固たる地位を築かれました。これからも、この50周年が、未永い歴史の通過点として、これまで受け継いできたマンドリン音楽にかける情熱を次の世代に引継いでいただきたいと思います。

現在、私の家族は大阪に住んでおりますが、私は、単身中国の上海に勤務して3年になります。年に数回、日本へは帰国しておりますが、実家のある岩国に帰省するのは、年に1回程度です。

メンバーの方々にも久しくお会いする機会がありませんが、遠くはなれたところから皆様がたのご活躍と、岩国市民マンドリンクラブの更なる発展を、心からお祈り申し上げます。

追伸

30年前、20周年記念誌の編集に参加させて頂き、記念誌の編集作業の大変さは、身をもって体験し十分理解できます。今回の50周年記念誌の編集に当たってお世話いただいている皆様方のご苦勞に対して、この場をお借りして、深い敬意と感謝の言葉をお送りしたいと思います。

【ワンポイント ガイド】

Q. 今回が50周年、なのに30年前に発行された記念誌に「岩国プレクトラム30年史」と命名されていますが、なぜ？ 計算が合わない。

A. ごもつとも、本誌の寄稿にも時々この用語が出てきます。

実は、30年前に発行された30年史にその解説がされています。

発行されたその年が、昭和52年12月24日、(12月24日はプレアン創立記念日)

- プレアンの定演30回(第1回定演：昭和23年)
- ICMCの定演20回(第1回定演：昭和33年)
- 熊谷先生の10周忌(ご逝去：昭和43年)

岩国の30年間のプレクトラム活動を総合的に記録し、熊谷先生を顕彰しようとの熱い思いを込めて「岩国プレクトラム30年史」となったのです。

従って、「30年史」はICMCが編集したのですが、プレアン関係の資料も充実しています。あえて20周年記念誌にはしなかったのです。

私の原点

1976 河村啓二

昭和47年4月(1972年)に岩国高校プレクトラムアンサンブルに入部しました。

別棟にある女子教室の中庭には藤棚があり、その下で先輩の指導のもと教則本に基づき、両指の運用方法からギター練習が始まりました。折りにふれいただいた先輩からの助言や励まし、御庄への遠足や故熊谷先生の墓参りといった行事も良き思い出です。何よりも一人よがりであった自分(今もそうですが)、そんな自分を一人として認めてくれた、あるいは赦してくれた同級生に深く感謝しています。

クラブの伝統として、先輩たちから「定演」を大切にすることを学びました。1年生の時初めて定演の終了後、3年生の全員が泣いていることに驚きかつ感動しました。こうしたことがモチベーションとなり、ずっとクラブを続けることができて、自分たちが3年生になりメインの曲を決める時期がきました。

当時西岩国にあった高島先輩のところに、鈴木静一先生の音楽物語「朱雀門」のテープを、同級生で聴きに行った時のことをよく覚えています。場所は京都、平安時代の男女の物語であり、日本的な感傷に溢れた曲でした。鈴木静一先生の曲を高校在学中は多く演奏しましたが、映画音楽のようでナレーションやピアノ、照明が入りイメージを掴みやすく、素直に感動できるものが多かった気がします。



1981年8月 #24 定演(前列中央)

昭和49年9月(1974年)に、2部では尾園先輩(当時山口大学在学中)のカーペンターズの編曲物と、3部で音楽物語「朱雀門」を演奏し、3年間のクラブ生活は終わりました。同級生で心をひとつにして無事責任を果たすことができましたが、多くの先輩、下級生に支えられたものと感謝しています。充実した高校生活を送れたこと、

離れた後も自然と集まることのできる同級生の仲間を持つことは大きな財産となっています。

一浪の後、昭和51年（1976年）に早稲田大学に入学、経験者として1年生として春の定演から出ました。大学時代には「若人」の作曲者である赤城淳先生に演奏、指揮法を学ぶ機会を得ました。慶応大学マンドリンクラブは強力なライバルでした。早稲田大学は付属高校のマンドリンクラブは廃部となっていたことに対して、慶応大学は付属高校出身者で中心メンバーを固めており、彼らは音楽好きでありその素養も高いものがありました。

岩国市民マンドリンクラブの活動は、高校時代から尊敬の念で見えており、大学時代と社会人2年生まで積極的に定期演奏会に参加しました。社会人2年生の夏、仕事との掛け持ちはさすがに体力的に無理があったのか、定期演奏会の後、広告の集金後に疲労困憊で車の中で寝てしまい、その夜の打ち上げにすることができませんでした。

長い空白期間において、平成17年春（2005年）から下関マンドリンクラブの一員として、再びギターを弾いています。譜面どおりに弾けず悪戦苦闘しています。定期演奏会では、藤掛廣幸先生の作品（「ファンタジア九州」）などを演奏しました。日々仕事をしながら、先輩との接し方、業務の進め方など自分の雰囲気や手法の多くは高校・大学時代のクラブ活動の経験に基づくものが多いことに驚いています。自分の可能性と限界を知る出発点、音楽を通じて多くの人々とのふれあいを通じて成長することのできた岩国高校プレクトラムアンサンブル。そのメンバーであったことを誇りとして今後も音楽活動を続けたいと思います。

私と岩国市民マンドリンクラブ

1976 山樋明洋

1976年の初夏、とある日曜日、20歳前の私は、大学のマンドリンクラブ（MC）の先輩の中里さんに連れられて、岩国の公民館の合奏練習に通っていました。

藤本さんの指揮による、故鈴木静一先生の「西海の挽歌」や、山本さん指揮の下ではG. マネンテの「交響的間奏曲」などを練習していました。結構、各大学のMCのメンバーが参加してしまっていて、実のところ、当時私が思いを寄せていた某女子大生の参加が、私のICMCへの参加動機であったことは否むところではありません。

大学のMCと社会人のそれでは、一年とちょっと楽器をいじった私には、大きな驚きの連続でした。実のところ、私は、楽譜を読むことができませんでした。合奏に出て、皆さんが弾いておられるのを聞き覚えて「ここはこうして弾くんだな……。」合奏の回数を重ねて何とか弾いていました。

それでも、岩国ユースホステルの合宿の頃には、どうにか合奏について行けるようになっていました。

若い当時は、吸収力が高かったのかな？

演奏会には、当日になってからも沢山の部員が各地から帰省されて、いきなりリハーサルの演奏に参加されるのにも驚きました。これがまた上手い、合奏のツボを抑えている。って言うか、演奏会のコンサートマスターが新井先生だったのです。

演奏会当日は、会場が岩国市体育館で、客席の所々に人の背丈ほどある氷柱が据えてあるのにも、またまたびっくり。演奏会用の白いブレザージャケットに、大きな蝶ネクタイにも驚かされました。

二部の絶妙なアンサンブルを舞台の袖で聴いて、またびっくり。一体どれくらい練習していますか？

三部が終わって、アンコールに「丘を越えて」、幕引きに「マンドリニストの生活」で畜生、「やられた」、両曲とも確か演奏会当日か、その直前にしか楽譜は渡されなかったはず、合奏はリハーサルだけ、それでも演奏

は素晴らしく、皆さん簡単そうに弾いておられる。私は唯、楽譜を見詰めているだけだった、そう言えば、最後のジャン！だけは弾けた、そういう演奏上の姑息さだけは、今も変わらない。

因みに、私には「マンドリニストの生活」は、今は弾くことができるが、「丘を越えて」は未だに弾けない……。とにかくにも大学のMCとICMCの曲に対する理解の度合い、アンサンブルの技術的なもの、その他数々の違いに大きなある種のカルチャーショックを受け、同じ社会人のMCである広島市民マンドリンクラブにも参加させて頂いたこともあったけれども、「岩国市民マンドリンクラブって凄いなあ・・・」と強烈な印象を抱いていました。これが、私と岩国市民マンドリンクラブとの出会いでした。

それから20数年を経て、会長の石川さんご夫妻に誘っていただいて、40才をとうに過ぎて三女の父となり、このクラブに参加するようになるとは……。 (末娘でさえ、当時の私の年令を越えてしまっている。家内は件の女子大生ではないっ！・・・けれども、やはりマンドリンクラブの部員でした。) 今回の参加は、当時のような不純な下心はありません。誓って。ブレアン出身ではない私を、各部員の方々の皆さん、本当に温かく迎えて下さって、心から感謝申し上げます。

いまだに楽譜は、読むことができません。初見は全く利きません。トレモロも遅いし汚い音でかなりの下手糞ですが、音量要員として何とかこれからも頑張っけて付いて参ります。これからも、宜しくお願いします。



2005年11月 #48 定演
石川、山樋、 山本、中里

ところで先の7月の終わり頃、全国マンドリン連盟の中国支部桧垣支部長さんの企画されたコンサートに参加させていただきました。これは藤掛廣幸先生の曲を先生ご自身の指揮の下で、演奏するというコンサートでした。その時、私が当クラブより拝借させていただいています1950年製の故大野繁氏作のチェロの音を藤掛先生から大変お褒め頂きました。隣り合わせた桧垣さんが、作者の大野繁さんの説明をされて私は大変鼻高々でした。

このチェロについては、岩国プレクトラム30年史の中の、富沢元生初代会長さん(S27年卒、故人)の手記の中に、故熊谷先生が大変ご苦勞の末、手に入れられたことが記されています。

このチェロを抱くと当クラブの歴史とその重さ、ならびに過人の熱き想いを感じざるを得ません。このチェロをこんな私が弾いていいのかしら？

そいでもって、今年の定期演奏会の曲目は超難曲揃い、早いところこの記事を書き上げて練習そして練習、乱文深謝。

愛しの I CMC

1977 上田賀子

私が、I CMCの門を叩いたのはもう30年も前のこと。20回の記念演奏会を控えた春でした。高校を卒業したばかりの私は、憧れの先輩方が多く在籍されるこのクラブに入ることに、戸惑いを感じながらも思い切って入部しようと思い、友人と二人で土曜日の午後7時に扉の前に立ちました。なかなかノックすることができず、どちらが扉を開けるかジャンケンしたのを覚えています。やっとのことでドアを開けたのですが、そこには誰もいらっしやいませんでした。

予定時間の30分遅れの行動という、当時のクラブの岩国時間というものの洗礼をさっそく受けたのです。その後、憧れの方々の顔が揃いはじめ、すごく緊張した記憶がありますが、私達の心配はどこへやら、あっという間に仲間に加えていただいたような感じでした。

それから、楽しいことばかり。私自身、岩国時間がすっかり身につき、7時からの練習に8時頃から参加。1時間たらずの練習のあと、皆で喫茶店に移動してお茶とお喋り。またある日は、練習後に夜の吉香公園を散策。ピクニックに旅行、飲み会、直前合宿では、演奏会の打ち上げの余興で行う出し物の練習に精を出し、その打ち上げたるや、朝まで騒ぐという素晴らしい？ ものでありました。これが大人の世界なのかと感動しておりました。



1981年8月 #24 定演

確か、音楽クラブのはずなのですが、私に限ってはこういう思い出が強く、弾けるとか、弾けないとか、そういうことを考えていなかったようです。情けないですね。それというのも、わたしなんぞが弾かなくても一流の奏者が揃っておいででしたので、私は、末席に座らせていただくだけの存在で、十分に幸せだったのです。

あの頃から早30年。岩国時間という言葉はすっかり姿を消し、練習開始時には多くの人がスタンバイ。私はといえば、30年かけても腕が上達した様子はなく、態度ばかりが大きくなりました。

しかし、お茶目当てではなく、練習のために中央公民館の扉を開けるようになりましたよ。いえ、やはり、このクラブの空気を吸いに、仲間に会いに・・・といったほうが正しいかもしれませんね。

30年前のあの日、思い切って扉を開いてから、I CMCが、私の人生を豊かなものにしてくれました。そして数々の場면을彩ってくれました。

私の周りで見守ってくださった先輩方や、ゆかいな仲間達に出会えた事に、感謝の気持ちでいっぱいです。

私の愛しのI CMCがこれからもますます発展し、末永く続いていきますことを心から祈っております。そして、これからもずっと、よろしくお願いいたします。

あれから30年

1977 岡崎美由紀

私がICMCに入ったのは、昭和52年高校を卒業した春です。ちょうど第20回定期演奏会の年でした。高校卒業後就職した私は、3年間続けてきたマンドリンとそのまま縁が切れてしまうのが寂しく、ICMCで続けることにしたのです。一人では心細いので、高校時代2人でこっそりクラブの練習を抜け出しては、テトラパックのコーヒー牛乳を飲んでいて上田(旧姓弘津)さんと一緒に、4月のある土曜日の夜中央公民館に行ってみると、初めて練習に参加するという人が2人来られていました。でも時間になっても肝心のクラブの人は誰も来ず、しばらく4人で立ち尽くしていましたが、あきらめて帰ろうととぼとぼ階段を降りているところにメンバーが来られ、その日から練習に参加しました。

その後20歳で結婚し、仕事を続けながら3人の子どもの育てる暮らしの中で、演奏会に出られない年もあり、練習する時間もない日々でしたが、細々とマンドリンを続けてきました。今は市町村合併により再び岩国市民になりましたが、旧玖珂郡錦町に住んでいるので、長女が生まれて、まだ車の免許を取っていなかった頃は、土曜日の午後、楽器を片手に赤ちゃんを抱いてお泊りセットも持って、岩日線の錦町駅から岩国駅まで1時間、市内の実家に子どもを預け練習に行っていました。家では練習する時間がなく、職場に楽器を持っていって、昼休みにこっそり練習していたこともありました。

クラブも一時は練習の参加者が少なく、練習に行っても合奏はできず、早々に練習を切り上げるような状態で、このままICMCはなくなるのかなあと真剣に心配した頃もあり、私自身はICMCがなくなったら、マンドリンを続けることはないだろうと思っていました。万年練習不足で上達しない、音楽的な感性や才能もなく、定期演奏会の当日になってそれまで練習してきた曲のよさにやっと気づくような有様で、一時はマンドリンを手放して、きっぱり止めてしまった方がいいのではないかと悩みましたが、それでも続けられたのは、ICMCには気心の知れた仲間がいたこと、家庭や仕事とは違う世界で気持ちがリセットできたこと、なによりも合奏が楽しかったからです。



1980年8月 #23 定演
後ろ側

30年前は、第50回の定期演奏会で、またバストラールファンタジーを弾いていることを想像もしていませんでしたが、腰が痛い、首が痛い、肩が痛いと言いながら何歳まで続けられるのかということが、同世代の話題になる今日この頃です。

あの日、あの時

1977 金丸眞明

岩国にマンドリン音楽が芽生えて今年で60年、岩国市民マンドリンクラブの定期演奏会も50回を数える。社会人の音楽団体として半世紀も継続していることは驚異的で、また、非常に誇らしいことである。

私は、昭和52年（1977年）、大学2年の時に第20回定期演奏会に初参加、その後社会人となった昭和56年（1981年）から現在まで連続28回定演に参加させて頂いた計算になる。

青雲の志忘れ難き20歳代の頃は、永井 叔（詩人）という人に憧れていた。

永井 叔は、松山出身で、昭和一ケタの時代、「一日に一度は大空を仰ごう」と大書した襷を左肩から斜めにかけて、ただ生きることにだけアクセクしている現代人を尻目に、その日の食事代にも事欠く生活をしながらも、マンドリンを弾きながら全国を漂泊して歩いた青空詩人である。詩人の中原中也、評論家の小林秀雄を恋敵にして失恋し、之が全国を漂泊するきっかけとなったと云う。（中野二郎 「画家文人とマンドリン」より）

今は、世俗にどっぷり浸かり、50歳間近の親父と化したのが、いつまでたってもあの頃の幻想が懐かしい。社会人として、ICMCに参加後、数年間で雑用係から会計、幹事、幹事長と一足飛びに出世することになる。（他に世話をする人が少なくなっただけであるが）幹事として、当初は楽しく運営させてもらったのであるが、徐々に練習の参加人数が少なくなってきた。人が集まらないとなると、当然楽しくはない。

昭和××年7月（定期演奏会1ヶ月前）

「おお、今日は4人かあ。昨日は3人じゃったが、今日は4人で麻雀できるわあ。」

昭和××年8月（定期演奏会2週間前）

「今日はセロがおらん。」「石川さん（現会長）宅へ行って、楽器借りてきます。今日はセロ弾きます。」

昭和××年8月（定期演奏会1週間前）

「さすがに人数増えてきたなあ。」「練習に初参加の方は、ええっと、15人。皆さん自己紹介をお願いします。」

現在の練習風景からは隔世の感があるが、定期演奏会20回代後半から数年間はとにかく練習参加人数が少なかった、というより練習にならなかった。それでも、定期演奏会は決行した。

昭和××年9月（定期演奏会の反省会）

「今回の観客数は243人でした。」「まあ、こんなもんか。ほんじゃ飲みに行こか。」

反省も何もあったものではない。

昭和×〇年1月（総会にて）

「今年は、どんな曲やりましょうか。」『序曲ルスランとリュドミラ』という難解な曲があります。

これやりましょうよ。」「良いなあ。それとやっぱり大曲も入れよう。」

何とも、今からすると赤面の至り。

それでも、能天気数年間はこれの繰り返し。

ところが、ある年、定演の1ヶ月前に指揮者が降板するという事件が勃発。それを契機として、徐々にICMCの運営や定演のあり方に疑問を呈する声があがる。私自身もマンネリにより自問自答を繰り返す。当時のミーティングを再現。

「練習もしないで、定演で大曲をするなんてとんでもない。」

「お客さんからお金をとれる演奏をしているのか。」

「今後の定演は、市民会館（当時は岩国市民会館で定演を開催していた）ではなく、場所は中央公民館の集会場、しかも無料ですべき。」

至極もつともな意見。 侃侃諤諤の議論。究極は、

「今のままでは、人数も少なく、しかも練習にならん。もう定演はできない。一旦、I CMCを解散しよう。やりたい者が新たな団体を立ち上げたらどうか。」

との過激な意見もあり・・・・・・ただ無言。

数年前の能天気な考えは影をひそめ、同様なミーティングの繰り返し。いわばI CMC存亡の危機。 さあ、どうする・・・・・・。思考がフリーズしていた。

しかし、数週間後のミーティングで、誰彼となくボツリと呟く。

「続けよう。どんな形でも続けよう。このクラブは続けることに価値がある。」

長い静寂の後、一同無言で頷く。説得力があった。

この言葉を契機として、I CMCは真に市民クラブの社会人団体として、大人のクラブに脱皮していったのではないかと思っている。



1979年11月 #40 定演
後列右

千日の稽古を鍛とし、万日の稽古を錬とす。

能々吟味有るべきものなり。

(宮本武蔵 『五輪書』)

スポーツでも芸事でも千日の練習を経た動きは一生の技として身につくもので、百回の練習では起こらない質的な変化が千回の練習によって起こる。万日という十年単位の稽古が積み重なると、千日の稽古で得たものより格段に質的に高い技と認識を得ることができる。量が蓄積すると質的な変化が起こる「量質転化」を、武蔵はこの言葉で表現していると言われている。私は加えて、人格も変化するのではないかと思っている。

I CMCは昭和33年(1958年)に誕生し、定期演奏会は本年50回を数え、時代、年代に応じて紆余曲折はあったのであろうが、量の蓄積により、確実に質的な変化を生じつつあると感じているのは私ひとりだけではないのではないだろうか。

私は、アマチュアもプロも終局的に目指すものは同質なものと考えている。すなわち、音楽を聴きにきて頂いた方々に対して、真摯な姿を以って感動を味わって頂くことに尽きる。

いつまでも今の仲間たち、そして新しい仲間たちと感動のできる音楽を続けていきたいものである。

以 上

50回・50歳

1977 末岡成基

1958年（昭和33年）・・・我誕生す。長島、巨人に入団す。ICMC（の前身、岩高ブレクトラムソサエティ）第1回演奏会開催す。そして今年、2007年（平成19年）・・・我49歳（来年早々50歳!）、長島巨人軍終身名誉監督はリハビリ中？ ICMC定演50回!!!

・・・自分自身と長島氏のことを思うと大いなる、非常なる時の流れを感じずにはいられませんが、ICMCは淡々と演奏会を重ねて来たかのようです。多くの出会いにより音楽とクラブに深くかかわることになった自分史（チョット恥ずかしいですが）をご紹介しますながらICMCの過去～未来をご案内してみましょう。

私が、初めて意識して手にした楽器は、フォークギターでした。中2の時、同級生の弾き語る「拓郎節」に痺れたのです。それが高じ高校入学後プレアンへ、楽器はもちろんギター（クラシックの方）。そのころの先輩方がよく弾いておられた「ガラシャ」に鳥肌立ったものでした。この高校時代が、私のその後を決定づけました。同級生に金丸君、中村由哉君、占部君、白木さん（旧姓足立）、1年後輩に広中君、やます、よっこ、みゆき、ハマちゃん、さとみちゃん（旧姓板倉）・・・あれれ、現在のICMCの仲間達ばかり・・・特に同級生の男子3人は、小学校からの顔見知りと来た日にや・・・長いねえ～。

また、当時は、ICMCの第1次隆盛時とも重なり、指揮者の高島さん始めマンドリンソロ・コン連続1位の新井さん・田村さんやギターの松塚さん尾園さん・・・といった錚々たる先輩方が足繁く来校くださり得がたい薫陶を受けたのでした。

そんな環境の下、自然「ギター」にのめり込んで行き、高3の定演では初めてのソロ（アルハンブラの思い出）のステージに立つことができました。そうそう、その時使った河野ギター、これは石崎悦子さんからお借りしたものでした。

大学に入り、当然ギターを続けようと思いましたが、ギター部にするかマンドリンクラブにするか迷いました。部室も隣同士で・・・とりあえず先に入ってみたギター部で、またとんでもない出会いが待っていました。案内された狭い部室の奥では長髪でスラリとした男性が、隣の女子学生のリクエストする曲を次々と「軽々と」弾き倒しています。向かい側では、恰幅のいい男性がパッハのシャコンヌ！ これまたスラスラ弾いているではありませんか。山口の田舎から出てきたばかりのカップには衝撃でした。「皆こんなの?! 恐るべしギター部!!」・・・迷わずギター部へ・・・後で分った事ですが、長髪さんは、福田進一さんと現在国際的に活躍中の日本のトップギタリスト、恰幅さんは坂田さんといってこれまたコンクール優勝歴のある方だったのでした・・・どおりで。当時100人以上の大所帯のギター部に結局4年間お世話になり、4回生ではコンサートマスターもやらせてもらいました。

大学時代といえど同じ下宿の連中とテレビで、長島の現役引退セレモニーを見て感動した覚えも。

「巨人軍は永遠に不滅です!」

4年間ギター三昧でしたが、2回生の秋、関西学生ギター合奏コンクールに部員有志で参加することになり指揮を仰せつかりました。この時選んだ曲が藤掛広幸「パストラルファンタジー」、初めて参加したICMC20回定演で弾いた曲だったのです。他校の方が、ギター合奏にアレンジしていた楽譜を元に再編曲し、急造アンサンブルと格闘すること1ヶ月余り・・・定演用の曲をフルメンバーで演奏していた他校に混じって参加し、結果銀賞を獲得、指揮者の第1歩? を踏み出したのでした??

この時、審査委員の一人が高橋功さんというギター界では有名な方でしたが、「パストラル～」の初演に立ち会っているというお話を頂戴しここでも不思議な縁を感じたのでした。

大学卒業後就職し運良く広島勤務となったために、I CMCに顔を出すようになりました。24回から連続参加して今に至ります。20回台は、独身者が多かった前述のメンバー主体であちこちよく遊びに行ったものでした。一方で青臭く「プレクトラム音楽とは!？」的喧々譁々の論争も・・・若かったなあ。実際土曜日主体の通常練習は集まりが悪く、すぐに練習を切り上げて皆でお茶に行ったり麻雀したり・・・当時の幹部の方々はさぞかし頭が痛かったのでは、と今になって申し訳なく思う次第です。



1981年8月 #24 定演
ギター中央

20回台後半から30回台になると我々の同世代で結婚・子育てラッシュ・・・練習場の一角が託児所になった時期でもありました。この時期転勤あり、子供の増殖ありで結構皆忙しかったのですが、何やかや言いながら定演当日には、ちゃっかりステージに上がっているという・・・無我夢中の10年間だったような気がします。そんな中で学生時代からの念願叶ったアランフェス協奏曲全曲演奏(35回)・・・大きな思い出です。

こうして多くのメンバーが、子育てしつつ自身も成長(変化?)する中で、視野が広がり徐々にクラブの方向性が変わっていったと思います。つまり「オリジナル至上主義」⇒「良いものは良いという音楽至上主義」、「自己満足演奏でよし」⇒「お客さんと一緒に楽しみたい」「力任せに弾けば良い」⇒「音色は?微妙な強弱・緩急は?作曲者の意図をどう表すの?」・・・この気運は新井さんの帰岩・技術顧問就任により一層鮮明になってきました。

40回を越える頃から日曜日主体となった通常練習への参加率が高まり(常時20人前後)、曲に対する深掘りができるようになったことで「音楽する喜び」「合奏する喜び」を感じられるようになり、すると次の練習が待ち遠しく、他のメンバーにも声をかけ・・・好循環となってゆきました。

ここ数年チャイコフスキー、マーラー、スッペ、芥川也寸志・・・といった所謂純クラシックの大家達の作品が必ずプログラムの中に入ることになったことも決して上記と無関係な現象ではないと思います。

自身も縁あって広島ギター協会会員となり、プロの先生を呼んで合宿形式でレッスンを行なうサマースクールの立ち上げと運営に携わるようになったこの頃から(スクールは、07年で10回目を数えました)、ギター独奏を研究・深掘するにつれ音楽もいくらか深く理解できるようになったかなあ～と思っています。このノリで06年山口ギターコンクールに出たところ運良く最高位が頂けました。

クラブでは、43回から指揮もするようになり、44回では、指揮とギターコンチェルト(ある貴紳の為の幻想曲)という無謀な挑戦もさせて頂きました。クラブも自身も音楽的な成熟が進んできたかなという印象です。

一方で、パソコンの普及により作曲ソフトを使い編曲や手書き譜を浄書するようになった部員も増加。ここにも「身近」に音楽と付き合う姿が見られるようになりましたし、大先輩であり元会長でもある三浦さんは、練習を録音・編集し個人用練習CDを作成・配布して下さり、合奏団の音楽向上を側面支援して下さいました。本当にありがたいことだと感謝する次第です。

こうした一連の活動の日常的な土壌は、石川会長ご夫妻が一手に引き受けてくださっています。楽譜の印刷、打ち合わせ、ちょっとしたお茶にちょっとどころではない!? 飲み会。人数が増えた分、複雑になりがちな人間関係を熊谷イズムというDNAを共通項にうまくまとめて行くご苦労は、大変なことと思います。石川会長ご夫妻の存在なくば、今日のI CMCもまたあり得ないのです。

そんなこんなで迎える50回、それは過去の総決算ではなく、更に明るく豊かな未来と新たな出会いを感じさせるものになると確信しています。「I CMCは永遠に不滅です!」

50回を終えた2ヵ月後、私は50歳になるのです。

岩国市民マンドリンクラブとともに

1977 中村由哉

岩国市民マンドリンクラブ50周年記念誌発刊おめでとうございます。半世紀にも渡って活動が行われてきたことに敬意を表すると同時に、今後のますますの発展を祈念しております。

私自身が今年でちょうど50歳になりますので、I CMCの歩みに自分も重なっていることになります。振り返ってみますと、幼稚園か小学校の頃、共立講堂での演奏会に、岩国東教会の杉原牧師婦人に連れられて聞きにいった覚えがあり、タンゴの曲目があったのでしょうか。後日、そろばんをマラカス代わりにカチャカチャ振って遊んでいたような気がします。その後、岩国高校を昭和51年(1976年)に卒業し、I CMCに参加するようになったのは20回の演奏会からです。高校一年生の時にジャンケン負けで担当になったコントラバス。就職が学校勤務の関係で、行事と重なり演奏会に出られなかったこともあります。なんとか続けて参加しています。

I CMCに入った頃、会長が三浦孔司さんから山根義広さんへ移る時期でありました。石川善久さんや釘屋時夫さんが幹事長や事務局長になられ、その補佐ということで大学生の四年間、I CMCの事務局の活動に参加させていただきました。入ってすぐ岩国プレクトラム30年史の編集や記念演奏会の準備などに取り組みました。その頃は直前合宿や演奏会が、8月のお盆の前後で、夏休みで動きがとりやすいこともあり、連日連夜石川さんの家にお邪魔していたように思います。演奏会の打ち上げを青年の家、通津の海水浴場の海の家や吉香公園の集会所で泊まり込みでしたのも懐かしく思い出されます。私自身は入ったばかりでよくわかりませんでしたが、東京公演を開催し技術的にも高いレベルにあったI CMCの今後のクラブのあり方はいかに、というような話もされていたように思います。

下関に住むようになりますと、今度は、帰郷して演奏会に参加するという立場になってしまいました。しかし、私が岩国を離れると同時にギターの河村さんやマンドラの金丸君(現コンサートマスター)、ギターの末岡君(現技術委員長、指揮者)が県内や広島に帰ってきました。また、五十代、四十代で弾いている女性メンバーの多くは、高校を卒業と同時にクラブに入り、結婚、子育てとたいへんな時期ながら、時間をやりくりしながら練習に参加されていました。練習に参加しますと、このように核となる方々がおられるため、しっかりとアンサンブルが構築されているように思います。

岩国でがんばっておられる方々には申し訳ないのですが、生活の本拠地を下関に移し、こちらで市民オーケストラの活動を始めますと、日頃の練習に参加することがむずかしくなりました。しかし、今まで自分が楽器を弾いて来られたのは、I CMCの活動があったからこそ思っています。演奏会が近くなり練習に出ますと、ほっとした気持ちになり、音楽の追究と同時に自分の中では同窓会の気分で気持ちよく弾かしてもらっています。

I CMCのホームページを見ますと、市民音楽活動としての行事にも積極的に参加され、地域に根ざした活動で充実しているようです。これからも市民に愛され、市民が誇れるクラブであってほしいと思います。また、マンドリン音楽の楽しさやおもしろさを受け継いでくれる若者が、たくさん入ってくれることも願っています。



1979年8月 #22 定演 右側

I CMCとともに

1978 濱田純子

第21回定演から参加させて頂いて、途中何度かの休みを挟みながら、現在に至っています。

この約30年間は、I CMCも山あり谷ありで、私が入った当時は、そうそうたるメンバーがずらりと座っていらっしゃった華やかな頃でしたが、その後、勤務の都合や出産・育児などで、参加人数は激減していきま

した。そんな中、子連れ参加が見られるようになり、その数は徐々に増え、子供がいる練習風景が当たり前のような時期もありました。私もその中の一人です。

当時のメンバーの方々には、何かと迷惑をおかけしましたが、娘にとっても私にとっても楽しい思い出の一コマです。

しかし、クラブとしては依然として、厳しい状況が結構長く続いていました。ここ最近になってようやく、忙しかったメンバーも少し落ち着き、新メンバーも増え、遠方からも熱心に参加してくださる方が増えて、普段の練習で部屋が狭く感じるくらいになりました。その頃を思えば、夢のようです。

若い時よりも、弾くことが楽しくなって、毎年定演に出られることが当たり前ではなくて、とても幸せなことだと思えるようになった今、若い頃とは違った音が出せていると信じてい・・・。

いえ、出せるように練習しないとイケませんよね。



2005年11月 #48 定演

仲間とともに

1980 金丸孝子

「あー、終わっちゃった。今年も楽しかったね。」「皆、来年も絶対やろうね!」

これは定期演奏会の後の会話ではありません。毎年、初夏の週末に交わされる同期の集まりでの一コマです。

高校を卒業し、それぞれの道を歩み、でもなぜかI CMCに集まってしまった私達、

就職し、結婚し、子供が生まれ、いろいろな環境の変化や流れの中でも途切れることなく続いたクラブとの付き合い。

始まりはそう、15才の春。ではなく、私の場合は更に遡る事2年。姉が入っていたプレ・アンの定期演奏会を聞きに行ったのが、マンドリンというものの出会いでした。かわいいナレーションの入った「氷姫」が特に印象的で、「幻想組曲 銀河」は、現役の高校生であった尾園さんの作曲と言うことで記憶に残りました。

そして2年後に晴れて岩高生となった私は、フォークソングの弾き語りに憧れていたこともあり、ギターを持つことと

なったのでした。(姉の方は途中で退部し他の道に走りましたが、縁というものの不思議さか49回の定期演



2006年11月 #49 定演
中村、金丸、高嶋、石角

奏会での異色共演となりました)

高校3年間、男女交際など目もくれず真面目に部活に励み、出来すぎた先輩を持つがゆえに不作の年と言われながらも、充実した日々を送ったと思います。

大学生になり、遠距離通学でありながらもマンドリンクラブに入部したのですが、どうしてもそのクラブの目指すものに同調できず半年で退部、真面目な高校時代の反動なのか、大学生生活を奔放に満喫し、ギターは部屋の片隅に追いやられていたのです。そんな時も、プレ・アンの同期たちとは休みの度に同窓会を行い、縁の切れることはありませんでした。

そして卒業、就職。と同時に、先に社会人となり I CMC で活動していた同期が数人いたこともあって、練習場所の公民館を覗くこととなったのが、クラブとの長い付き合いの始まりでした。

同年代の部員が多かったこともあり、練習後のお茶会・宴会や旅行など楽しい日々を送り、そうこうするうちに結婚。人生の最大イベントもクラブと重なり、披露宴・2次会はミニ演奏会となったのです。

2人の子どもを授かり、出産の年はさすがにお休みしましたが、それ以外は何とかして演奏会に出演できたのは、同じような年代の仲間がいてくれたお陰だと思います。メンバーが少なくて存続が危ぶまれていた頃、やむをえず子ども連れて練習に参加した事も少なからずありました。子どもには迷惑な事だったのかも知れませんが、今思えば子育ての悩みやストレスを相談したり、共感したりと私には無くてはならないものだったと思います。

時には理解のある夫に子どもを任せ、同期の女性で食事会を企画、実行。手が離れたら泊りがけて語り明かそうと言うことになり、実行。上膳・据膳で食べて飲んで、しゃべりまくり、回を重ねています。

時には遠出し、今度は積み立てをして海外遠征をしようかという計画まで出てきました。もちろん練習に差し支えないように考えていますよ。

高校時代はなかなか本音で話せなかったシャイな乙女も、歯に衣着せぬ発言が出来る熟女に成長しました。本当に安心していただける友達を与えてくれたマンドリン音楽に感謝しなければいけませんね。

ただ、残念なのはあれだけ練習に連れてきた子ども達は、マンドリンには一切興味を示さなかったことです。でも2人とも音楽の好きな優しい女の子に育ってくれました。

特に優れた技術がある訳でもない私が、ここまで続けてこられたのは、沢山の仲間がいる I CMC が居心地良かったからなのかなと思います。家庭や職場、社会的なしがらみを離れて、素で付き合える仲間たちのいる居心地の良い場所があるって、素敵なことだと思いませんか？そして、演奏会目指して一生懸命に取り組む姿は素晴らしいと思います。その一生懸命な気持ちは、聴きに來て下さる人たちにもきっと伝わると信じています。

他のメンバーの皆さんにとっても、居心地の良い場所であり続けるように努力し、末永く活動していけたら願う今日この頃です。

こころのふるさと

1980 寺内美津子

五十周年、おめでとうございます。

半世紀もの長い間、脈々とアンサンブルが受け継がれ、また岩国高校卒業生だけでなく、市民の活動として発展してこられたのですね。

思い起こせば、私が高校生の頃も、よく I CMCの方が指導に来て下さり、まぶしい憧れの存在でした。

卒業してからは関西支部に入れていただき、お盆の帰省中の演奏会（よりも合宿？）を楽しみにしていました。合宿では朝まで延々と、先輩方のギターの弾き語りを聞いていたのが青春の楽しい思い出です。

8年間 I CMCにお世話になり、結婚後はずっとマンドリンからは遠ざかっていますが、昨年、思いがけずダンスで声をかけていただき、夫婦で参加させていただきました。皆様も少しも変わらずに気さくに温かく接して下さい、心の故郷に帰ったようでした。

生の素晴らしい演奏に乗って、あのような立派なステージで踊れるなんて、一生に一度の思い出になりました。本当にありがとうございました。



2006年11月 #49 定演
寺内夫妻組、 中西・高嶋組

これからも美しい音楽を追求する仲間、I CMCのご発展を、心よりお祈り致します。

マンドリンと私

1980 足立俊江

もう50年になるのですね！ 私の精神年齢は18歳なのに・・・(うー)。 としえです。といっても23回定演前の方にはお分かりにならないと思いますので、自己紹介させていただきます。

私は、足立俊江（旧姓板倉）と申します。夫と姉と義姉もクラブ員で、夫は足立康雄（今のところ一応ギタートップです）、姉は外山里美（旧姓板倉）、義姉は白木眞智子（旧姓足立）といひます。ちなみに今年から息子（裕太郎といひます）もクラブ員になってしまいました（先日部費を徴収されました）。ということで、親族一同どっぴり I CMCにはまり込んでいる私ですが、これまでを振り返って思い出深いことを2、3紹介したいと思ひます。

初めて I CMCの方々と演奏したのは、岩国市民会館の柿落としてした。真新しい舞台でやさしくアドバイスなどいただき、尊敬と憧れの眼差しで……。そして、17歳のときに姉に連れられて初めてクラブに参加し、右も左も分からないまま、年上のおじ様たちに連れ回されたのが27年前でした。その当時はよく岩珈堂で練習の打ち上げをしていましたね。また、定演後は岩珈堂の側にあった施設で、泊りがけの打ち上げをして、朝帰りして父親に叱られました。今となつては懐かしい思い出です。



1983年8月 #26 定演

31回定演の朝、産気づき急遽入院となったのですが、夫は演奏会に行っていました。打ち上げは参加しなかったのですが……。翌日無事生まれた子が、今ギターを弾いています。平成5年、転勤先の福山から帰った夏、ゆみちゃんの「合宿しよるけん遊びにおいで」との誘いの言葉にホイホイ出かけて行って、びっくり！マンドリンの人がいない……。ということで子供を実家に預け、楽器を持って復帰したのでありました。

これまで演奏した曲の中で印象深かった曲は、「ルスランとリュドミラ」、「エジプトの幻影」、「弦楽セレナーデ」などです（ほかにもいっぱいありますが……）。

昔はうまく弾けませんでした、当時の山根会長には本当にお世話になりました。結婚して子供ができてからしばらくお休みしていましたが、これまで通算30年ぐらい参加させていただいています。これも、夫・義父母を始め周囲のみなさんのお陰です。とても感謝しています。私にとってICMCはもう人生の一部のようなものです。

さー、この原稿が三浦元会長のもとで再校されているころは、合宿も終わって50回記念定演の練習が佳境に入っているころだと思います。思いっきり打ち上げを楽しむためにも、夫の尻を蹴り上げながら練習に励みたいと思っています。がんばるぞー！

音楽雑感

1981 阿武秀治

会社の転勤で、ICMCを離れてもう9年目に入りました。

岩国高校のプレクトラムアンサンブルで、当時田村隆司さんや山根（義）さんのご指導を受け、そのまま大学まで。音楽が好きだったことと、高校だけではもったいない気がして、転勤になっても細々と色々なサークルで続けています。

金沢は、オーケストラアンサンブルをはじめ、アマチュアでも合唱、ピアノ、ヴァイオリン、邦楽など音楽が街に息づいているように思います。

私にとってマンドリンは好きな音楽なのですが、音楽全体を見たときに、マンドリン界と呼ばれる中にいる人たちは、どうも他の音楽を知らなさすぎるのではないかと思います。

昨年まで2年間、東京で國土潤一先生（音楽の友によく寄稿されている音楽評論家の方）についてマンドリンと音楽全体についての指導を受けることができました。



1997年11月 #40 定演

そこで感じたことは、音楽は理論的な面と感性的な面と両方がとても大事であるということが分かりました。曲のなりたちや構成、また作曲家の歩んできた道などを知ればもっと演奏する上でも興味がわくし、面白くなって来ます。さらに学べば学ぶほど奥深く知りたいことが増え、表現方法も様々な工夫ができ、アンサンブルにおいては、奏者一人一人がお互いに方向性を決めながら演奏していくと、とても楽しいことがわかりました。

音楽全体のことを勉強することは、マンドリンを演奏する上でもまた、幅が広がってくるように思います。まず楽器をもつ前に、譜読みでソルフェージュのように自分のパートを歌ってみるのです。これがなかなか正しい音程で歌えません。そして、ただ漠然と合奏するのではなく、所々パート毎に聴きあって、他のパートがどのように演奏しているのかを分かって合わせたり、奏者と指揮者が意見を出し合って作り上げていくので、納得して演奏できるし、その過程

がとても楽しいのです。

土曜日の夕方から夜にかけて3時間程度の練習を無理なく続けるので、上達していくのがよく分かります。

岩国市民マンドリンクラブ 50 周年おめでとうございます。続けていくために、まず、無理のない練習スケジュールと音楽の学び、そして何より久しぶりに帰っても受け入れてくれる優しい岩国の皆さんと、緑と錦川、錦帯橋があり続けますように。すべてが私を育ててくれた土地。

音楽を、そしてギターやマンドリンを愛する人たちが、これからも支えていくことでしょう。

創立 50 周年に寄せて

1982 江間紀久夫

岩国市民マンドリンクラブの創設 50 周年おめでとうございます。

「持続は、力なり」という言葉がありますが、岩国市民マンドリンクラブが 50 周年を迎えられたことは、諸先輩方の努力の賜物であり、そしてクラブを支えてきた熊谷先生、歴代会長の力でもあると思います。

昭和 27 年 4 月、仙台の高校入学時に、従兄がマンドリンクラブにいたという単純な理由でマンドリンを手にして 55 年、波乱万丈のマンドリン人生の幕開けでした。

4 月 8 日に入学式を終え、3 日後には部室でマンドリンを手にし、恐ろしいことに 5 月上旬の PTA 総会では、何とセカンドマンドリンで舞台に立っていました。いかに人がいなかったとはいえ、今考えると恐ろしいことです。演奏した曲は、今でも忘れない郷愁。ラ・パロマ。勿忘草の 3 曲で、運指は今も指が覚えています。高校時代の思い出は誰でもそうだと思いますが、鮮明に覚えております。まだマンドリンクラブそのものが珍しかった時代で、自校の文化祭は勿論、他校の文化祭、市のイベント、NHK、東北放送のラジオ放送などと、勉強は何時したのと言う状況でした。

何はともあれ無事高校卒業後、昭和 30 年に、仙台マンドリンクラブ（※）に入部、仙台マンドリンクラブを基点に北は北海道の室蘭アルモニアマンドリンクラブから、南は北九州の新日鐵マンドリン合奏団まで、仕事の関係で日本を縦断、お陰で全国にマンドリン仲間が出来ました。

（※）仙台マンドリンクラブは、今年 83 年目を迎えましたが、創立 60 周年時に、当時の主宰者、東北大学教授の稲垣孝次氏が、新聞社から長く続けるコツは、と質問されたのに対して、「一生懸命やり過ぎないこと」と答えています、面白いので紹介します。全文を紹介すると長くなりますが、あまり理想だけを追いかけない、クラブ員には仕事があり練習は限られた時間にするしかない、従って完璧な技術とか音楽性の豊かな演奏は望めない、この短い練習時間を如何に楽しく、いかも効率性の上がる練習にするかをいつも心がけ、少しでも音楽的な向上を得られよう心がけ、練習の総決算である演奏会で、聞く人の心の片隅にいつまでも残るようなよい演奏がわずかでもできれば成功である。このわずかな感銘が、クラブ員を定着させ、クラブを長持ちさせる一助になっていると考える。意外にやる気旺盛に見える人ほど長続きせず、地道に見える人ほど長続きしている。

昭和 56 年、光市に長期出張で来て結果的に転勤、近くにマンドリンクラブはないかと、JMU の名簿で捜した結果、（防府の大浜さんは当時休業中）下松の山根さんから岩国を紹介してもらい晴れて岩国の一員になりました。当時、中央公民館の今よりもっと狭い部屋で練習していたように記憶しており、コンマスは田村さ

んであったようです。その時は、マンドラで参加しました。

遡ること十数年前、東京で仕事をしていた時のことですが、忙しさに紛れ、現場の仕事を手伝っていたとき、平面研削盤で左手人差し指の第2関節をつぶしてしまい、泣く泣くリハビリしたものの、元に戻ることはなくマンドリンの速いパッセージについていけなくなり、マンドラに移行したものであります。しかもせっかく岩国の一員となったものの、プロジェクトで中近東出張、ミッションでのヨーロッパ出張、結果的に東京転勤と、短期間で岩国を去ることになりましたが、昭和62年1月の名簿で、マンドラの欄に私の名前が残っております。



その後、転勤を繰り返し、現在の岩国に所属する直前、北九州の新日鐵マンドリン合奏団に所属しました。九州はマンドリンの盛んな処で、日本マンドリン連盟九州支部は、毎年1度各県持ち回りで九州マンドリンフェスティバルを開催、福岡や北九州でも独自にマンドリンフェスティバルを開催するなど、場合によっては、フェスティバルの際合宿を行い、親睦を深めるなど横のつながりもあり、独特の地域でした。

新日鐵ではドラトップや指揮、平成9年の第22回九州マンドリンフェスティバルでは、北九州5団体でマンドリンの群れを指揮、客席では藤掛広幸氏が聞いていたので緊張しました。

藤掛氏は、最後のステージでJMU九州支部合同オーケストラ120名を指揮し、ファンタジア九州を聞かせてくれました。新座マンドリンクラブ時代、赤城淳先生の前でも棒を振ったことがありますが、いずれも緊張するものですがよい経験になったのも事実です。若き日のよい思い出でしょうか。思い出といえば昭和50年代、東京にいた時、NHKホールでの演奏や、テレビ出演なども1つの思い出です。

北九州を引き上げ、光市に戻った翌年、防府マンドリンギターアンサンブルが、ファンタジア九州を演奏することで応援することになり、そこで岩国の石川会長と運命の出会いがあり、翌年の第46回定期演奏会から、岩国にお世話になることになりました。

残念なのは、平成13年の夏、脳腫瘍のため2ヶ月入院、幸い後遺症はなかったものの、脳にメスを入れたものの常として集中力が持続せず、演奏活動にも影響を及ぼし、特にチェロのメンバーには迷惑をかける結果になっております。近年老人性難聴気味でもあり、岩国の高度な技術レベルに対応しにくくなっており、50周年参加を記念に引退することといたしました。

今後につきましては、側面から応援したいと考えております。

ゆめのあとさき・・・

1983 足立 康雄

早いもので、I CMCに入って25年が経ってしまいました(中抜けですが)。当時の自分を思い起こすと恥ずかしくなってしまいますが、50年史ということですので、思い出話の1つ、2つを物語ってみたいと思います。

私がI CMCに入ったのは、昭和58年の夏休みというか、お盆前でした。大学4年の夏休みに帰省した私は、就職も内定していて結構暇だったので、姉(白木真智子です)の「おいしいもの食べさせてあげるからギター持って付いておいで・・・ふふ」という誘いに何の疑問も感じずに付いていき、連れて行かれたところが、当時定期演奏会の直前合宿に利用していたらしい? 広島ユースホステルでした。ちなみに、その当時の私の呼称は「足立の弟」でした(現在は「としえちゃんのだんな」ですからあまり進歩していませんか・・・)

そのころ、私は、末岡大先輩のごとく弾けるようになりたい一心でクラシックギターソロを専門に練習しており、合奏の経験はギター合奏(大規模アンサンブルといったところでしょうか?) だけでしたので、マンドリン合奏の楽譜の表記からしてチンプンカンプンでした。楽譜が分からないのに加えて指揮にもまったく付いていけず、ただボーと座っているだけで、嫌になってしまったものです(慣れるのに2~3年かかったかな?)。ただ、それ以上に驚いたのが、何か月もかけて毎日のように定期演奏会の練習していた学生から見ると、多くのメンバーがお盆前に集まり、合宿後そのまま演奏会本番を迎えるという無謀とも思えるスケジュールを平然とこなしている面々のすごさというか、技術力というか・・・でした。私自身は今もそんなに技術力はありませんが、その頃からこれまでの経験のお陰で、手抜きの方法だけはマスターしたような気がしています。

当時の山根会長や石川現会長には大変お世話になったにもかかわらず、結婚して子供ができた頃から、視線が子供に集中し始めたのに加えて、両手が皮膚病になったこともあって、結局、I CMCから離れてギターをお休みしてしまいました。4~5年間ほとんどギターを弾かない(というか弾けない)状態だったのは結構つらかったですね。何も考えないようににはしていましたが・・・ただ、結果論ですが、子育てに集中できたのは、現在の自分から見るととてもよかったと思っています。



2005年11月 #48 定演
大室、足立

復活したのは40回定演の直前でしたが、そのとき演奏した曲(シルクロードや新日本紀行、毛利元就など)に以前には感じなかった「合奏のよさ」というものを感じたのは、新鮮な驚きでした。年をとると好みが変わるというのは本当ですね。技術的に落ちる一方なのは少し哀しいですが・・・まあ、いいか!

40回定演以後、毎年演奏会に参加して、最近はおこがましくもギタートップという重責を任せていただいておりますが、今回の50回定演の曲揃えの中に、I CMCの行く先が見えるように感じています。従来からやってきたように、今後も古いオリジナル曲、新しいオリジナル曲、クラシック分野の開拓、ポップスやアニメの編曲など、狭い

マンドリン音楽界の古い名曲だけにとらわれない新しい発想を続けていくべきでしょう。楽器の特性上、音量的には多くを望めませんから、小粒でもキラリと光る琴線に迫る演奏を目指していくのが「マンドリン&ギター音楽」の理想像だと思っています。あと、今も続けている小アンサンブル(お座敷演奏のことですが)の構成員をもっと多くのメンバーに広げて、「I CMCはいつでも誰でも出張演奏ができる。」と言われるようになり、誰もがソロを弾けるようになりたいですね。

マンドリンとの出会い

1986 渡邊泰學

先日、練習の合間に岩国市民マンドリンクラブが創立50周年という事で、私のマンドリン歴を振り返ってみた。指折り数えてみると、高校時代ギターパートであった私が、大学入学と同時にマンドリンパートへ転向してから25年。何とクラブの歴史の丁度半分ではないか！不肖私、そこは坊主らしく、ただならぬ不思議な「因縁」を感じとった故に、この機会に少し私の四半世紀プラスαを振り返って書き記しておくことにする。

(その一 高校時代)

昭和54年、春3月。高校受験を二日後に控えた私を親友の親父さんが、「今さら勉強してあがいても無駄じゃ。はあ行くところは決まっとる。」と半ば強引に連れて行ったのが明大マンドリン倶楽部の岩国公演。演奏曲目やマンドリンの音色などは全く覚えていないが、客席を奏者が動き回ったり叫んだり賑やかなコンサートだったという印象だけが記憶の片隅に残る。その日から約1ヶ月、晴れて岩国高校へ入学しブレアンの練習を女子棟の廊下越しに見た時、「この前聴きに行かされたんがこんな感じじゃったの一。ギターでも弾いてみるか。」といった程度でブレアンに入部した。今思えばその頃演奏されていた曲が「ガラシャ」であった。卒業するまでの間、熱心な部員たちが、当時の先輩達の奏でたガラシャに追いつけとばかりに、何度も何度もこの曲を演奏する。合戦を思わせる旋律が耳にこびりつき、次第にそれが鬱陶しくなった私は、「部活は週3日程度練習」と勝手に決め、後は部室の掃除と合奏の準備・後片付けに専念するようになっていった。卒業の際に先輩から頂いた色紙に、「先輩、ちりとりとほうきの使い方が上手ですね」と書いてあったのが、私のブレアンでの姿を的確に捉えている。

と、いうことで高校時代初めて聴いた曲が「ガラシャ」。2年で対外的に初めて演奏したのが「レナータ」。3年最後の演奏が「パストラル」。感のいい方は既にお気づきであろうが、この記念すべき第50回定期演奏会の主要曲目は、私がマンドリンを手にする以前に私の肉体へ密かに送り込まれていたのである。全ては今年の50周年という壮大なプロジェクトのために仕組まれていたかの様に…（余談ではあるが、ブレアンが長い歴史の中で対外演奏活動禁止と定演中止を強いられたのは、私が3年時の昭和57年だけである。定演は単独開催できず、吹奏楽部の定演の二部での賛助演奏が最後の演奏となった。当時の私はA級戦犯として頭を丸めさせられ、演奏の直前一週間は前日まで腸閉塞で入院という憂き目にあっている。卒業アルバムは髪が伸びきっておらず坊主頭に毛が生えた程度。そうならざるを得なかった理由はあえてここでは触れまい。ちなみに私のこの頃の岩国市民マンドリンクラブの人々に対する印象は、「お節介なオッサンらーがおるの一。何であの人らーに言われて中庭で「若人」弾かんにやあいけんのか」という程度。)

(その二 大学時代)

無事？高校を卒業し大学へと進学した私。マンドリンへの転向はこの時（昭和58年4月）である。入学間もない私は生活必需品を買いそろえるために、一緒に入学したブレアンギターパート時代からの友人小笠原君と生協にいた。そこで偶然雑誌を立ち読みしていたブレアンの先輩出羽氏と出会ったのが運命の分かれ道。風貌がさだまさしに似ていた出羽先輩に自ら挨拶をした正直で従順な私は「お前ら今暇か？ちょっとついて来い。」という言葉とともに半ば強制的にある場所へと拉致された。そこは山大マングラの練習棟。今まさに総合（合奏）が始まらんとする時であった。先輩はどうやらそこで指揮者をしているようだった。セロパートの後ろに並べたイスに私達を座らせ自らは指揮台に立ち、おもむろに一言発したのである。「えー、今日から新入部員が入りました！」。元来がひねくれ者（正直で従順と書いたのにどっちが本当じゃ？）の私はブレアン出身というだけで即戦力！としてみられることに反発（実力のなさを隠すためともいう）、ギター残留を決め

た小笠原君とは違う道、すなわちマンドリンを選択したのであった。(それから3年後、小笠原君がギタートップ、私がコンサートマスターとして一緒に演奏会を迎えた時が、私のマンドリン人生の、ピークの瞬間であったことは間違いない。)

こうしてマンドリンという楽器に出会った私は、初めての演奏会の決め曲として山大マンクラの先輩で岩国出身の人の作品という「いつか宇宙の片隅で聴いた歌Ⅰ」と出会った。何を隠そう、演奏時間30分というこの超大作の生みの親こそ我がクラブの偉大なる「大魔神」ならぬ「作曲家」尾園氏であった。こうして私の肉体には今回懐かしの曲メドレーをアレンジされ、「交響的前奏曲」を指揮される尾園氏のマンドリンパートにおける独特の作風が、マンドリンを初めて手にしたその時(25年前)即座にインプットされたのである。

その後マンドリンにのめり込んだ私は、いつ頃からか「英雄葬送曲」の1st マンドリンを卒業までの演奏会で弾くことが夢となっていた。しかしながら、音感もリズム感も性能が劣る天性の走り屋の我が肉体は、この曲が定期演奏会の決め曲として選曲された時、未だ2nd トップとして修行中。夢はあっけなく叶わぬ夢となってしまったのである。(この時3部ステージの1曲目として演奏したのが前述の「交響的前奏曲」であった。)

それから半年が過ぎ、マンドリンと出会い早3年4ヶ月の月日が流れていた。コンマスも退任し目標を失い、のちに大学生活を通算七年(*断っておくが留年ではない)過ごすことになる私は、時折眠りながらマンドリン人生の長い下り坂を、目標も見つけられずだらだらと転がっていた。そんな私の元へある情報が飛び込んできた。それこそが「今年の市民の決め曲は英雄葬送曲らしい。」という神(?)のお告げであった。こうして迷うことなく私は岩国市民マンドリンクラブの門を叩いたのであった。それから2年後に坊主となることなど考えが及びもしないこの頃の私が、目標としていた曲が「葬送」曲であり、この曲が私をこのクラブへと導いたというのは「神のみぞ知る」であったのか、はたまた、みほとけに導かれての「お釈迦様の掌」にあったのかは賢明な読者の判断に委ねるとしよう。いずれにせよ入部初の定演で念願の曲の1st を演奏したが満足するにはほど遠く、この曲のリベンジは昨年までの20年の長い歳月を要したのであった。

(その三 現代)

その後、マンドリンにまつわるいくつかの出会いと別れを繰り返し(何故か突然中島みゆき調)、私は現在、二代目の愛器を手に入れている。二本とも大野マンドリンで、今回「レナータ」を指揮される高島氏を通じて購入させて頂いた。初代大野マンドリンはなぜか落合に修理に出され落合の衣を身にまとい、俗に「おおのちあい」と呼ばれ不遇な晩年を過ごしたが、新井大先生のお導きにより作者大野氏自身の手により再生され、今は友人のもとでひっそりと余生を過ごしている。



2006年11月 #49 定演

余談ではあるが、マンドリンを通して多くの人と酒を酌み交わしてきた。練習には来ないのに宴会には出てくると言われたこともあった。へりけになるまで飲むという点において、他の追随を許さないと思われる石川氏や中里氏の真似をしたわけではないと自覚しているつもりなのに、長年アルコールを蓄積した我が肉体は、三浦大先輩の記念誌へのあつい思いとともに痛風を発症し、歩行停止、外出不能となった。かくして右足の激しい痛みは私を軟禁状態に追い込み、原稿作成への貴重な時間を怠惰な私に与えた。今私は大先輩への申し訳のなさに思いを込めキーボードを叩いている。傍らのテレビでは、末岡氏と21年前に初めてお会いした時にそっくりだなと思った俳優前田吟が定年を過ぎた父親役を演じている。

マンドリン音楽との出会いから今日までの長い年月は、全て今年の50周年に向けて、私が1st パートの一

員として演奏しやすいように、我が肉体に密かに仕込まれてきたことを勝手に実感して、悔いのない演奏をしたいと思う。

最後に一つだけ。過去最多演奏は閉幕曲「マンドリニストの生活」。実は私この曲が未だに弾けないことはコンサートマスター金丸氏に敬意を表してもうしばらく私だけの秘密にしておこう。

あれから早20年

1987 大浜芳樹

私が初めてICMCの練習を覗いたのは、1985年の秋。関東の大学を卒業して、実家のある防府にUターンする前に、2年間ほど岩国に就職していた頃の事でした。

大学の4年間に過ごしたマンドリンクラブの楽しみが忘れられず、社会人になっても続けたいと思っていた丁度矢先、この岩国市に社会人のマンドリンクラブがあると聞いて、練習場に飛び込みで訪ねたのが最初です。練習は土曜の夜でしたが、当時車を持っていなかったため、仕事が終わってバスで公民館まで通っていた時期もありました。その頃は、通常練習も人数が少なくパートが揃わない事も度々ありましたが、それでも練習日が楽しみで熱心に通った思い出があります。

入ってみて驚いたのは社会人団体としての層の厚さと柔軟な雰囲気。学生時代のクラブといえば、先輩後輩の上下関係の中で、ひたすら厳しい練習に耐えるというような体育会系のノリで、楽しい部分もちろんあったが、今から思えばずいぶん窮屈な世界でやってきたように感じられます。

ICMCにしる社会人団体は、まず学生時代のような練習時間が取れないので、細かいミスや詰めの甘さがつきまとうのはやむをえないとしても、なお全体的な演奏の流れは学生の演奏では感じられなかった懐の深さといえますか、これが「大人の演奏」という実感があって新鮮でした。何が違うといえば、やはりメンバー全員が純粋に音楽を楽しもうと集まっている事でしょうか。やはり根本のところにある意識や、日々の活動の雰囲気が音に表れるものだと思います。

あれから早20年。自分が出演したプログラムを久々に開いてみると、懐かしい思い出が甦ってきます。最初に参加した演奏会は31回でしたが、小アンサンブル・ステージのメンバーに加えて頂きました。自分は初めての経験でしたが、周りは各パートトップの経験豊かな方々ばかり。指揮者無しのアンサンブルの難しさを実感しましたが、コンマスの田村さんのリードは素晴らしく良い勉強になりました。



2005年11月 #48 定演

34回では編曲者として初めてプログラムに名前が載る事に。その頃指揮者の尾園さんの影響で、Macintoshのパソコンを使っでの音楽演奏や楽譜作成にチャレンジしていた頃で、初めてその成果(?)を人前で発表したのがこの年。といっても1曲のみで、それも今となっては恥ずかしくなるような代物でしたが、自分が編んだ楽譜が実際の音になる過程には、言葉では表せない感動を味わえました。

最近ではもう当たり前になっていますが、当時は、趣味のDTM（デスクトップミュージック）が本格的に普及する以前の話で、更にその何年も前からその分野に取り組んでおられた尾園さんは、かなり時代を先取りしていた存在では。

39回は同じ苗字のメンバーがもう一人増えた(?)年でした。部内での結婚という事でクラブを挙げて祝って頂き感謝感激。40回記念の年は、NHK番組テーマ曲集という企画に関わりましたが、楽譜が揃うまでに

かなり紆余曲折があつて、尾園さんと協力しながら、かなりバタバタと作り上げて大変だった記憶があります。苦労の甲斐あつて、アンケートでも好評だったようで大変嬉しかった。

ただし楽器の勉強不足で奏者の皆さんには、何かと苦労を掛けてしまったような気もしますが、以後もボツリボツリですが楽譜を提供しております。

20年間の付き合いの中で、いろんな人との出会いがあり、また音楽に対する考えも広がったように感じています。これからI CMCのさらなる発展に期待！

感謝の気持ちを込めて

1992 横山英子

I CMCの部員にして頂いてから、今年で21年が過ぎました。

この度、石川会長ご夫妻をはじめ、沢山のお世話になった恩師や先輩方に、この場をお借りして感謝の気持ちをどうしてもお伝えしたいと思い、拙い文面ではありますが、寄稿させて頂くことにしました。

私がマンドリン合奏と初めて出会ったのは、高1の春でした。たまたま隣の席になったマンドリン部の友達に、「母がマンドリン経験者で、家にマンドリンがある」ということを話ただけで、すぐに先生や先輩方のもとに挨拶に連れて行かれました。当時は高校部員が少なく、部員は人数確保の為に必死だったんですね。そのマンドリン部を創部されたのが、以前I CMCでご活躍され、現在も私の母校のマンドリン部を指揮、ご指導されている松重正清先生です。

もし先生がマンドリン部を創部されなかったら、もっと遡ってブレアンに入部していなかったら、私を含む沢山のOGや現在の母校のマンドリン部の現役生達は、マンドリン合奏に出会うことはなかったでしょう。だから、先生には本当に感謝の気持ちで一杯です。有難うございます。

高校では先生の厳しいご指導の下、下手ながら合奏の楽しさ（合奏中檄を飛ばされ、時には指揮棒も飛んでくるという怖さもありましたが）、音楽の素晴らしさ、奥深さをご教授頂き、楽器にのめり込んでいきました。高2の夏には、I CMCの定演チケットを先生から頂き、同期で聴きに行ったことを覚えています。「ルスランとリュドミラ」序曲の演奏のあまりの速さに溜息しか出ず、まさか自分がそんなクラブの部員にして頂けるなんて、その時はつゆにも思いませんでした。

ところが、です。大学2年の夏休み、大学のマンドリン部の先輩から、I CMCへの入部のお誘いを頂いたのです。とても付いていけるクラブではないと思い、お断りしたのですが、先輩は強く引っ張って下さいました。その先輩が、現在看護師としてご活躍中の蔵本（旧姓玉理）敦子先輩です。その蔵本先輩も、大学のマンドリン部のOGで、以前I CMCでご活躍されていた吉松（旧姓檜垣）敦子先輩が引っ張って下さり、入部されました。本当に先輩方の繋がりにも感謝、感謝です。

かくして、I CMCのステージに初めて立たせて頂いたのが29回定演でした。技術的にも人間的にも素晴らしい先輩方に囲まれ、その上、曲目も「英雄葬送曲」等、難曲ばかりで大変緊張し、無我夢中のうちに終わってしまいました。20年以上経った今でもその緊張感が変わることはありませんが、部員の張り詰めた緊張感を和ませようと、いつも自然体で面白い事を言って下さる石川会



2005年11月 #48 定演
打上げ

長をはじめ、合奏の合間に音楽の事だけでなく育児の事でも、とても気さくに相談に乗って下さる会長夫人や、沢山の素敵な先輩方と演奏させて頂くうちに、ICMCは私の中で、心癒される大切な存在となりました。これまで支えて下さった皆様には、心より感謝申し上げます。今後ともよろしくお願い致します。

最後になりましたが、これから、ブレアン出身者でもない私を受け入れて下さった寛大なICMCが60年、70年・・・100年と益々発展していられることを願ってやみません。

マンドリンクラブの活動を通じて

1997 大室敦士

私が岩国市民マンドリンクラブ（以下ICMC）に入ったのは40回記念定演の年、同じ会社の寮にいた山本君に連れていってもらい「シンフォニア」を弾いたのを覚えています。そして11月の定演、大学卒業以来の大きなステージを再び楽しむことができ、感動を新たにすることを覚えています。前後して年齢の近いメンバーが相次いで入部したこともあり、楽しい時期だったなあと、しみじみ思い出します。

私はブレアン出身ではなく、大学のマンドリンクラブでギターを触ったのが最初ですが、かれこれ20年近くになります（入社後しばらく休止状態でしたが）。よくもまあ飽きずに同じことを続けてきたものです（その割にはギターも満足に弾けません(´;`))。という背景に基づいて、最近音楽との付き合い方を少し変えてみようかと思い、いろいろなことを始めてみました。いい意味で前向きですが、悪く言えば現実逃避ですネ。

まず、音楽は楽しむもの、が基本だと思います。楽しむにはいろいろな方法があります。弾く、歌う、聴く、指揮する・・・指揮はできないからじゃあ譜面でも作ってみようかと思いたちました。フィナーレの練習も兼ねて編曲を始めてみたのが98年頃です（河村さん Special Thanks）。やり始めると音の割り付けに悩んだり、和音を検討したり簡単に行きません。しかし、完成し最後にプレーバックして、通して聴く曲が嬉しくて楽しくて。これを繰り返すうちに、じゃあ曲の構成はどのような決まりがあるんだろう、と疑問をもち和声や対位法について楽典を読みました（新井さん Special Thanks）。すると今まで感覚的に（なんとなく）覚えていたことには、実は理論や法則があることがわかり、感動を覚えました。たとえば、なぜ主和音は落ち着いて聞こえるのでしょうか。これは音が重なりあうとき周波数がある整数比で一致するからです（理数系の人間にとってはかなり感動モノ）。ただし、曲が美しく聞こえる原理は、もっと多くの複雑な要因と一部に説明できない理由があるようです。曲が美しいのにギターパートの符玉には限界がある、そう感じた06年にギターからドラに転向しました。できないのは当然まあ、で覚悟と期待を持って始めましたが、トレモロで（何とか）音が出てそれを聞けるようになると楽しい、8分音符の速弾きができるようになるとまた楽しい。何より連続するメロディは今でも新鮮で、弾けることより弾くことに楽しさを感じます（その代わりトップはいい迷惑かもm(_ _)m）。



2005年11月 #48 定演打上げ
足立、山本、大室

話は変わりますが、私の父は広島で社会人男性合唱クラブに所属しており、何度か聴きにいました。そこで最近感じるのは、曲の抑揚、いわゆる変化や表情は音のみならずステージの雰囲気にも現れているんじゃない

かなあ、ということです。自分はステージで譜面どおり、指示どおり弾くことのみを追及してはいないか、と反省しました。曲を譜面や指示通りに弾きこなすスキルは必要ですが、曲を作品としてどれだけ理解しどのように表現すべきか、をもう少し考え表現できないか、それに楽しみを見つけれればと考えています。

ある本によると、究極の指揮者とは、棒を振る必要のない指揮者だそうです。ステージメンバーの呼吸で調和している合奏はきっと楽しい。そしてお客さんにそれが伝われば……。いろいろ書き綴るうちに改めて音楽を続けてきてよかったと思い、その場を提供して下さった I CMC の方々に感謝申し上げます。

I CMC とマンドリンと

1997 竹本順司

I CMC には平成 9 年から平成 11 年までの 3 年間お世話になりました。

定期演奏会は、第 40 回～第 42 回の計 3 回出演させて頂きました。

そもそもマンドリンとの出会いは、学生時代に遡ります。

当時、お付き合いしていた女性が、大学のマンドリンクラブに所属しており、彼女から「一度騙されたと思って演奏会を聴きに行かないか？」と誘われたのがすべての発端でした。当時、仲間内でロックバンドを組んでいた私は「え〜。マンドリンかよ〜」と内心思いつつも、彼女の懇願した潤んだ瞳に負けて演奏会に行くことになりました。その時の演奏会のプログラムは、殆ど記憶にありませんが、間違いなくあれがマンドリンの世界に足を一步踏み入れた瞬間だったと思います。

後日、またその彼女から「一度騙されたと思って練習に参加してみない？」と言われ、「何度僕を騙すつもりなんだ」と内心思いつつも、先だっの演奏会でマンドリンの世界に少し魅せられていた自分は、あっさり承諾することにしました。クラシックギターは以前から経験がありました。その時に弾いた曲は忘れもしません。ファルボの序曲ニ短調と藤掛廣幸の「夜明けの讃歌」の 2 曲。以来、マンドリンに熱中しました。

大学を卒業して山口県に U ターン就職することになりましたが、マンドリンオーケストラへの熱が冷めやらない私は、初任地となった岩国で仕事を覚えることもそっちのけで、マンドリンの社会人団体を探すことにしました。



1999 年夏 広島市民球場
大室、山本、田村、竹本

君・綾さんご夫妻、田村知子さん、三上直矢君。今では賀状のやり取りのみで少々縁遠くなっていますが、少なくとも私はかけがえのない仲間だと思っています。

I CMC はあっさり見つかりました。入団への迷いは多少ありましたが、同じ職場にギターパートの越智静江さんがおられたこと、初めてお会いした石川会長ご夫妻のお人柄に、楽団の気さくな雰囲気を感じ取れたことが決定打となり、以来、I CMC との 3 年間のお付き合いが始まりました。

たかだか 3 年間かもしれませんが、僕にとってのこの 3 年間の輝きは言葉に尽くせぬものがあります。I CMC の雰囲気や居心地の良さは言うに及びませんが、とりわけ同年代の仲間に変に恵まれました。大室敦士君・華枝さんご夫妻、山本浩一

あれから 7 年余り。現在、私は下関に居住しており、妻と子供 2 人の小さな小さな家族を支えています。正

直、マンドリンとは疎遠になってしまいました。ギターもたまの休みに弾いてみるぐらいですが、いつの日かまた I CMC の皆様と熱い思いを、あの楽しい舞台を共有できればと願っております。

I CMC の今後益々のご発展と、団員の皆様方のご健康のご活躍をお祈り致します。

レイトスターター奮戦記

1999 河村太郎

レイトスターターとは、楽器を始めるにはいささか年を取りすぎた輩が、それでもと習い始めた人々のことを指す。元々ヴァイオリンやピアノを大人になって始める場合に使われる言葉と承知しているが、還暦前にギターからマンドリンに宗旨替えした私は、正にレイトスターターとして平成 11 年 6 月、岩国市民マンドリンクラブに入れて貰った。長年弾き続けてきたギターが右指の慢性腱鞘炎で「禁じられた遊び」はおろかブンチャッチャにもこと欠くようになり、仕方なくマンドリンに持ち替えてせめて合奏を楽しもうと、軽い気持ちで練習を始めた頃である。始めてみるとピックは滑ってすぐあさつてを向く、ゆっくりならでできる音階も速くなるとギターの指使いが出る、トレモロは W ノートまがい、一寸速くなるとピックと左指が合わない、何とか上達したいが先生が居ない、と言うわけで岩国で揉まれるのが早道と飛び込んだわけである。

初練習は平成 11 年 6 月 6 日、若手の山本先生によるフィリップの「怯える小鳥」であった。この曲けっこう速いところがあり、いきなり速弾きの洗礼を受ける。小鳥の鳴き声を模した前打音付きのピョピョと言うところが弾けないので、ギターのハンマリング奏法でごまかす。カラチエの「歌と踊り」も速いので手こずった。次のベテラン尾園先生の振る「舞踊風組曲第 3 番」になると更にいけない。読みにくい手書き譜の初見弾きで目も手もついていけず、この曲は回りの元お嬢さん達のすばらしいワザを横目で見物しながら呆然とやり過ごす。そして出来なかったのは見えにくい楽譜のせいと自分を納得させ、帰ってから大きめの五線紙に手書きで写譜した。

FINALE という楽譜ソフトを手にしたのは翌年のことである。結局この曲は符玉を大きくしても弾けない箇所多く、かなりの部分を間引き奏法やエアーマンドリンでしのいだ。



2006 年 11 月 #49 定演

そんな状態で畏れ多くも岩国市民 MC に入る気になったのは、入部の前年とその前年、同じ会社に勤務する山本、大室両先輩クラブ員から定演のチケットを買われ聴きに來たのがそもそもの発端。そこで聴いた演奏のすばらしさ、新井、田村両ソリストの妙技、大編成マンドリンオーケストラの迫力が強く印象に残り、マンドリンやるにはこのクラブに入ってワザを盗むのが一番、と目論んだからである。この目論見は次の年に新井先生の年度初回の練習時にかなえられた。マンドリン奏法の基本の話、ウォーミングアップスケールの例題、6 連符の練習曲など楽譜の配給があつて丁寧な指導を受け、ありがたかった。もう 7 年も前の話であるが、今もその譜面は時折宅練で使わせて貰っている。

さて、レイトスターターではあるが、私の場合ギターで左指は押弦に慣れているので、まるでゼロからのスタートではない譜面もゆっくりなら読める。その内何とかなるだろうと植木等の心境で続けていた。しかし年齢から来る反射神経の鈍化はいかんともしがたく、速弾きは指を離すスピードが追いつかないため音がブツ

ブツ切れ、上達は遅々としている。それでも、慣れるにつれて少しずつ弾けるようになる喜びはあり、今や時々握るギターより人前ではマンドリンの方が安心して弾けるほどである。

岩国ではマンドリンを只で習ったことのほか良いことが他にもいくつかあった。まず入部翌年の第43回定演で小アンサンブルの指揮をやらせて貰ったことである。プログラム構成上第2部のギター合奏、ギターソロ（末岡先生）に続いて15名程度のマンドリン小アンサンブルでオリジナル小品を指揮して欲しいという急な話であった。あれこれ選んだ結果、昔企業時代に指揮したことのある「スブレーン」「水車小屋の乙女達」に好きだった服部正の「鷺の歌」を加え、覚えてたの **FINALE** で3曲とも浄書し演奏させて貰った。レイトスターターとしての立場上、名人達を前にして言いたいことも半分に控えながら、まずまずの音楽的な演奏が出来たことは、コンマスを務めてくれた大浜芳樹氏をはじめパートトップレベルの精鋭メンバーの協力があつたればこそと、今でも感謝している。因みに勤めていたH製作所の笠戸事業所（工場）歌は服部正さんに作曲して貰っている。

次が **FINALE** の習得である。その頃浄書からやり始めた作譜ソフト **FINALE** は、以後の編曲やオリジナル曲浄書に活用したが、これも岩国の難しい曲を数多く経験させて貰ったお陰であろう。クラ編ものの「詩人と農夫」「亡き王女」やモーツァルトイヤーに因んでの「みじかくも美しく燃え」など元々好きなクラシックを原曲からマンオケ向きに編み直す作業は、メンバーの顔を思い浮かべながらフレーズを作り上げるという楽しさがあつた。ポピュラーも原曲のイメージを基にマンドリン合奏で表現できる範囲で再構築する面白さがあり、ビギナーの自分にも練習すれば何とか弾ける技巧レベルでという目安で書いた。結局、自分の書いた音符を弾くのに四苦八苦した思い出の方が多いが、編曲に当たってムダに難しいフレーズは避けたいと、これは痛い目にあつた経験からの我が哲学である。

岩国市民マンドリンクラブはその名前が示す通り社会人クラブであるから、岩高ブレイク時代から続けている経験の長いメンバーから私のようなレイトスターターまでいろんなレベルのメンバーが混在する。そんなクラブの運営や音楽作りを纏め、今年第50回の記念定演を迎えられる訳であるが、中途参入の外様である自分を分け隔てなく温かく迎えていただき、音楽作りの喜びを共有させてくださった石川会長をはじめ三浦先輩、指導者、メンバー、その他支援の方々に感謝しながら拙文を閉じたい。ありがとうございました。

マンドリン、ギター、指揮、編曲、浄書等オール・レイトスターター

河村太郎（コユンジジ）

想 い

1999 田村知子

社会人になり、クラブにどっぷりだった学生生活は一体何だったの？というほど、ぴたりと楽器や音楽に触れなくなりました。仕事を終え、ふらふらになりながら帰宅し、死んだように眠る…そんな毎日の繰り返しでした。

社会人三年目、母校のクラブの記念演奏会に OG として参加しようと、本当に久しぶりに楽器ケースを開きました。さみしそうな楽器、鳴らなくなっていました。

自宅通勤を止め、岩国での一人暮らしを始めて、“岩国市民マンドリンクラブに入ってやってみようかな”という気持ちで、漠然としたものから具体的なものへと変わってゆきました。定演パンフに記載されていた石川会長宅の電話番号に、見学希望の連絡をさせていただき、「楽器持っておいでね」の言葉どおり、楽器持参で見学に。懐かしい、ボッタキアリの交響的前奏曲を練習中でした。

入部以来、私の気質が完全に甦るのに長い時間は要しませんでした。

(自分の)結婚式翌朝、合宿に参加。「本当に結婚式だったの？」との祝福の言葉を頂きました。

——三度の飯より合宿がすき！——

新婚旅行も社員旅行も、練習日に重ならないことを念頭におき日程調整。

——海外旅行より練習(?)がすき！——

合宿初日(大抵仕事です)どんなに遅くなっても、這ってでも合宿所に向かい、夜の部から参加する。

——三度の飯より練習(?)がすき！——

——お客様の手拍子にのせて“マンドリニストの生活”を弾き終え、大盛会の打ち上げも最後までくじけず参加し帰宅。活動休止期間中、仕事オンリーの毎日を、精神バランスを崩しそうになりながらやり過ごし、そしてまた、次年度の活動をスタートする——



1999年2月 大島のビーチ
田村、小畑、室本、竹本

50年という長い年月には、本当に多数の方々が各々いろいろな想いでクラブに関わりを持ってこられ、幾つものご縁が脈々と繋がって今日のクラブがあるのだと思います。

ありがとうございます。出逢えて本当に幸せです。

取り巻く環境、皆様とのご縁、音楽出来ることに感謝の気持ちを持ちつつ、これからも音楽を愉しみ、縁を繋いでいけたら…と思います。

感謝の気持ちを込めて

1999 中村成子

岩国市民マンドリンクラブ発足50周年、おめでとうございます。

長年にわたりクラブを運営していくことは、大変なご苦労が、おありだったことと思います。そして今年2月には、長年の功績が認められ、市から文化功労賞も受賞されて、日々の活動の積み重ねと、今まで先輩方が築いてこられた伝統の重みを改めて感じました。この記念すべき年にクラブの一員でいられますことを、とても嬉しく思っております。

私は、余暇を利用して何かを始めてみようと思ったのがきっかけで、8年前からメンバーに加えていただきました。学生時代にマンドリンは弾いていたものの長いブランクがあったので、当初はついていけるだろうか(?)と不安でした。楽譜通りに弾くことに必死で無我夢中でしたが、懐かしさがこみ上げてきたり、初めて演奏会に参加した時は、成し遂げた後の充実感を味わうことができ、とても嬉しかったことを覚えています。



2006年11月 #49 定演
寺内、中村、金丸

それから毎年、新しい曲に出会えるのが楽しみになってきました。合奏においては、弾く楽しみに加えて、他のパートの音を聴く楽しみもできてきたように思います。

しかしここ近年、練習になかなか参加できないことがあり、周りの皆様には、何かとご心配をおかけしていることと思います。久々に参加した時も、皆さんいつも温かく迎えてくださり、いろんな面で助けて下さるので、何とか今日まで続けられているといったところです。日頃お世話になっている皆様に、この機会に“感謝の気持ち”をお伝えできればと思います。

節目の“記念ステージ”第50回定期演奏会には、“一音一音丁寧に”を心がけ、曲のイメージと自分の思いを重ね合わせて感情を込めて弾いていきたいと、同時に好きなマンドリンを今まで続けてこられたこと、そして今こうして弾いていられることに感謝しながら臨みたいと思います。練習日程が厳しい時は、ついて行けないこともあります、自分の出来る範囲で頑張っていこうと思っていますので、これからどうぞよろしくお願い致します。

音楽

2001 有田典加

社会人になってから「何か音楽がやりたいな・・・」と思っていたとき、職場の先輩からICMCの定期演奏会のチケットを購入しました。

演奏会に通うこと、3、4年。その先輩から「一緒にやろう」とついに声が掛かりました。音楽がやりたいと思う気持ちはあったものの、いくら昔ブレイク時代にマンドラを弾いていたとはいえムリ!と思い、断り続けていたのですが、ある日「見学だけ」と言われ、練習場を訪れた時、あれよあれよという間に楽器を持たされてチョンと座っていたのを昨日のことのよう思い出します。

と、こんな感じでICMCに入部した私ですが、やはり音楽は素晴らしいと感じます。音楽を通して、老若男女問わず語り合えたり、マンドラの音色に心を癒されたり、皆で合奏



2005年11月 #48 定演
後列 山本、有田

することで達成感を感じたり……。とは言っても、まだまだ技術的な面において未熟な私。

「続けることに意味がある」と自分を慰めつつ、第50回記念定期演奏会に向けて、日々練習に勤しむのでした。

岩国の思い出

2001 中井顕成

転職が決まった時、相模原マンドリンクラブの小林さん（故人、当時指揮者）から、新井さんがいるから是非岩国のマンドリンクラブに入ってみてはと勧められました。

「マンドリンソロコンクールで優勝されたあの新井さんですか」と聞いたら「そうです、あの新井さんです。相模原の創始者の一人で奥さんもセロを弾いていました」とのこと。

相模原は、私の家（埼玉県東松山市）から車で2時間の距離ですが、メンバーは60人、運営は女性主体でみんな親切で休み時間にはお茶とお菓子が出て、練習もあせらず、ゆったり、でもまじめに、というタイプの、しかも大合奏ができる、近くにもクラブがあるのに、足は遠い相模原に向かわせる、そういった魅力のあるクラブでした。そのクラブのメンバーであった新井さん夫妻が岩国に居ると言うことを聞いてからは、岩国市民マンドリンクラブが急に身近に感じられるようになりました。

後で知りましたが、このクラブは岩国高校マンドリンクラブのOB、OG会が母体だそうで、最初は少し普通に孤独感を味わいましたが、石川会長始め皆さんで気を使っただき、すぐにメンバーの一員として溶け込めることができました。皆さん有難うございました。

その一つ、女囚刑務所で慰安演奏をした時の思い出です。

まず、市内にこのような場所があることに驚き、建物すべてが真っ白で飾り気がないこと、迷路のような廊下を通ったこと、囚人服を来た女の人が整然と並んでいたことなど、全てが驚きでこのまま閉じ込められて帰れないのでは、と言った圧迫感や不安を抱きながら、でも皆に楽しんでもらおうと思い演奏を始めました。

曲目は、歌謡曲、民謡、童謡など、年配の人から若い人まで多分2～3百人はいたと思いますが、一曲一曲、終わるたびに大きな拍手があり、そのうちに会場のあちこちで鼻をすする音が聞こえ、いつの間にか、私たちが聴衆に溶け込み、会場全体が一体となっていくように感じられました。

指揮者は中里さん。こんなにも気持ち良く弾けたことに、有難うと改めて言いたいと思います。このような経験は初めてで、このクラブに入って本当に良かったと実感できた一日でした。



2003年11月 #46 定演

岩国市民マンドリンクラブの皆さん、第50回の定演おめでとうございます。

私は、44回～46回の3回定演に出させて頂きました。あれからもう5年が経ったんだなあ、みんなどうしてるかなあ、また一緒に合奏したいなあ、一緒に酒を飲み一緒にマンドリンの議論したいなあ、やはりカラオケにしようか？

いつでも岩国の『市民マンドリンクラブ』でいてください。

(H19.10.7 定演間際の転勤、名古屋にてマンドリンを弾きながら)

無 題

2002 山永真夕

私は、8年間マンドリンを弾いています。8年前、学校のマンドリン部に入りました。大会での優勝を目指す部のなかで弾くうちに、いつの間にか、日々の練習どころかマンドリンや音楽をも苦痛に感じるようになっていました。失敗を恐れるあまり、楽しんで弾けなくなっていたのです。

そんな時、I CMCの定期演奏会へ行き、衝撃を受けました。「なんて楽しそうに演奏しているのだろう」と。うらやましい気持ちと同時に温かいものが胸にこみ上げてきました。

I CMCとの出会いが好機となり、改めてマンドリンの魅力や音楽の素晴らしさに気付くことができました。これからより良い音楽を目指しながらも大切なことを忘れないようにしようと思います。

最後になりましたが、50周年おめでとうございます。市民クラブという、さまざまな職種や年代の方々のつながりの中で、色々なことを学ばせていただきました。

I CMCの更なる繁栄を心から願っています。



2006年11月18日
#49 定演 打上げ

社会人のクラブの良さ

2004 石角 剛

岩国市民マンドリンクラブの定期演奏会が、50回という節目を迎えられたことに対しまして、心からお祝いを申し上げます。また、その記念の演奏会に参加させていただいたことをとても嬉しく思っております。岩国の演奏会への参加は、今回で4回目になりました。

ここ3年間は、それぞれのメンバーがお互いの定期演奏会に参加するという形で、交流をさせていただいています。

私とマンドリン音楽との出会いは、小学校4年生の時でした。大学でギタートップを務めた方が担任の先生であったことから、土曜日の放課後ギターを教わりました。

この出会いがきっかけで大学ではマンドリンクラブに入り、卒業後も広島市民マンドリンクラブで活動を行っています。また、教員になったのもこの出会いがきっかけでした。

これまで、社会人として20年以上活動続けてきた中で、自分なりに感じている社会人のクラブの特性を3つにまとめてみました。

- ① 社会人にとってクラブの活動は、決して第一優先のものではなく、個人によってその優先順位はちがっています。活動時間を確保するためには、仕事や家庭その他さまざまな活動と調和を保って、無理が生じない範囲内でメンバーが、時間を共有して行う必要があります。練習量で学生の活動を上回るのは困難です。
- ② 社会におけるいろいろな経験を積み重ねるほど、それだけ音楽の表現も豊かになっていけるものだと感じています。こうした経験という点では、学生時代の表現力を上回るものと考えられます。
- ③ 幅広い年齢構成、多様な職業経験を持つメンバーと接点を持つことによって、新たな世界を知ること

や、別の見方や考え方に触れることができます。社会人のクラブならではのよさです。

①をクリアするためには努力が必要ですが、「②のよさ」や「③のよさ」を感じられることは、生きがいにつながることであり、その努力をする意義は、大いにあると思います。仕事や家庭のこと以外にこうした活動をしたと思うのは、より豊かに生きたいという気持ちの表れだと思います。

ところで、広島市近郊には多くの社会人のクラブがあり、それぞれのクラブにおいてこのようなよさを求めて活動が行われています。

広島市民マンドリンクラブでは、年1回の定期演奏会をベースにしながら、さまざまなイベントを催していますが、その中に他のクラブと合同で演奏会を開催したこともあります。同じような曲を演奏してもクラブが違うと何かと違いました。メンバー構成や運営のシステムが違うことが新鮮に感じられたり、また、指揮者の優れた音楽性に触れたり、合奏規模が大きくなることによる、ダイナミックな響きを感じることはとても刺激的でした。「③のよさ」がより得られる機会であったと言えます。

岩国の演奏会に参加することで、こうしたよさを得る機会を得ていることは、とてもありがたいことです。

これから先も活動を続けていくことで「②のよさ」を確かめてみたいと思っています。

また、「③のよさ」は一人では感じることはできませんので、自分が所属するクラブの活動を大事にすることはもちろんのことですが、可能な範囲でクラブ間での交流をするといった活動も大事にしたいと思っています。

今後も岩国市民マンドリンクラブと広島市民マンドリンクラブの、双方向の交流が続くことを願っていますので、引き続きよろしくお願いします。

ギターと私と ICMC

2004 佐々木速子

私がギターと出会ったのは高校生の時でした。高校には弦楽部がありマンドリンかギターのどちらかを決める時、私は当時、「禁じられた遊び」のテーマ曲が流行っていたのでギターを選択しました。夢中になり、誰よりも上手になりたくて練習をしました。しかし、結婚して三人の子の育児に追われ、ギターを弾いて寝ている子を起こすよりは、自分も昼寝をしたいと思うとギターなんかどうでもよくなりました。

そのうち、子供も成長し人生の残り時間を考えた時、自分に出来ることはギターしかないと思い、再び青春の時以上に夢中になり練習しました。若い時よりも上手いかもと思うことさえありました。ある時、山大のマンドリンの演奏会を聴いた時、マンドリンの音色とオリジナル曲の美しさに感動して、自分も演奏者の中に入りたいと思いましたが、ただのオバさんが入れるわけがありません。そんな時 I CMC に山口から通っていた原田さんに紹介していただき、私も参加することになりました。不安いっぱいで行くと、皆さんが温かく迎えて下



2006 年 11 月 #49 定演



2005 年 11 月 #48 定演

さりほっとしました。

参加して驚いたことは、そのスピードと力強さとフラットだらけの楽譜でした。皆さんは、当たり前のような顔で弾いていたので、再び驚きました。

第48回コンサートのチャイコフスキーの弦楽セレナーデは、マンドリンはもちろんのことですが、ギターの私にとっても大変な曲でした。デリケートな表現に対しての細かな指導と指摘、それに応えようとするクラブの人たちの真摯な態度と努力。厳しい練習の中にあっても、和やかな雰囲気とユーモアを兼ね備えた指導者の新井氏と末岡氏。私はこのような、クラブの人たちが好きで山口から通うのです。季節労働者のように夏場から2号線で一時間半かけて会場へ。昼食後、休む間も無く午後の練習。心地よい疲労感を味わいながら、また山口まで帰る。演奏会が終わった後も、暫くの間マンドリンの曲が頭の中で鳴り響いています。来年は、どんな素敵な曲に出会えるのかと心待ちにしている私です。夢だったマンドリンというオーケストラの中にいる自分に幸せを感じています。

マンドリンと私達

2005 白井妙子、藤井 瞳、中野絵奈（旧姓新川）

高校に入学してブレアンに入学し、周りを見たら（あら？）見覚えのある顔ぶれ・・・。

「えっ？ 平田中学テニス部の新川さんですか？ あなたは、岩国中学テニス部の藤井さんですか？ 私は、川下中学テニス部の白井です。」

それは、正しく中学時代テニス部準レギュラーたちの逃げ場でした。いや、新しい道でした。お互い中学時代のつらいテニス部生活の話で盛り上がるのでした。

ブレアンには、レギュラーがない！ 皆が参加できる。和気あいあいとした仲のよい小集団ができたのでした。

夏には、部員皆で熊谷先生のお墓参り、I CMCとの部内演奏会、一年毎の顧問交代、指揮者はジャンケンで・・・。

色々ありましたが、あっという間の楽しい3年間でした。



2006年11月 #49 定演打上げ
藤井、小野、松永、足立
白井

今では、友人の結婚式の余興でマンドリン演奏をしています。

あやちゃん、まあちゃん、えなちゃん、ご結婚おめでとう！
そして私たちもいつか・・・。

高校時代から、そして現在に至るまで、私達を温かく見守っていただいている方々に感謝して、すてきな友にめぐり会え、今もマンドリンを弾くことができる幸せを噛み締めています。

マンドリンとの出会い

2006 豊島崇宜

記念誌発行に向けて寄稿依頼を頂きました。I CMCに参加して日が浅い自分が何か書くというのは場違いなようでもあり、また書く内容も趣旨からずれているかもしれませんがご容赦ください。

数年前からI CMC部員になっていた修大同期の山樋氏に「英雄やるけえ来る？」と誘われ、2006年の夏からI CMCの練習に参加して突然のマンドリン復帰となりました。「英雄」はその昔全マンで2ndを弾いた事があり、その雄大さに感動した好きな曲でした。I CMCは何度か定演を聴きに行っているのと、自分も岩国市出身（錦川上流方面）という事で親近感もありました。何とかなるだろうと思っていたら全然弾けず、部員の方々は現役バリバリという雰囲気、その上、新井さんのソロでレベルが違う演奏を聴いて、こりゃ大変、と気楽さが飛んでしまいました。とは言いながら、その後は逆に居直って何とか練習参加しながら定演の日を迎え、久しぶりのステージで緊張と楽しさを味わいました。定演打ち上げの頃には気分はマンドリン部員となっていました。

岩国市民や岩高にマンドリン部がある事は学生時代から知っていましたが、当時は大学クラブ以外での活動は考えた事も無かったので、修大MCの先輩・後輩に大勢の関係者がおられた事は全く知りもせず、意識もしていませんでした。それがI CMCに参加し過去の定演記録を見てみると、修大の先輩方に限らず大勢の知っている方々の名前が！あの人もこの人も？という感じで今更ながらI CMCの長い歴史と系譜を知り、何となく自分の無知に漠然と喪失感も感じてしまいました。恐らく全国の社会人団体の中でも、かなりユニークなクラブでしょう。それに、岩国出身なのであえて言わせてもらおうと、岩国で50年も前からこの活動を続けていたというところがすごい、と思うのです。自分も再びマンドリンを手にしたおかげで、この歴史と遠い昔の学生時代にさかのぼるつながりの輪に入る事になり、なんだか不思議さを感じずにはいられません。

高校時代、部活に縁のなかった自分は、大学ではクラブに入ろうと決めていました。同窓の山樋氏と一緒に最初にのぞいたのがマンドリン部で、それが今に至るマンドリンとのつきあいの始まりでした。楽器ならギターがいいと思っていましたが、持たされたのはマンドリン、その時部室にいた先輩がマンドリンパートだったのです。優しい女性の先輩に囲まれてすぐさま指導が始まり、そのまま部員になっていました。ちなみに、山樋氏もマンドリンを持たされたものの指がフレットに納まらない、という事でセロを持たされたのがセロ歴の始まりです。



2006年11月 #49 定演

自由気ままな高校生活を送っていたせいで、ゆるやかながら上下関係のあるクラブ体験は新鮮でもあり、正直なんだか疎ましいとも思っただけでした（社会に出る上では良かった）。一時は退部の危機もありましたが次第に合奏の楽しさを感じるようになり、授業は出ないで練習・合宿には参加というまじめな部員に変貌していきました。そして、4年生での定演が終わった時、やめずに続けて良かったと達成感を感じると同時にこれでマンドリンは終わりと思い、卒業後は楽器をクラブに貸し出しする事に。ところが転動する先々でマンドリンの関係での色々な出会いがあり、断続的ながら市民団体（高松市民MC、ロシアンフォークオーケストラ、新座MCなど）に所属して再び楽器を手にする機会が何度かありました。知らない土地でも共通の趣味を通

じて交流の場が出来た事は本当に良い体験でした。広島に戻って以来ちょっと疎遠になっていたマンドリンですが、今ではI CMC参加を契機に、ずっと続けていきたいと思うようになりました。

なかなか練習参加も出来ない状態ではありますが、50周年だけでなく60周年記念演奏会にも是非参加したいですね！

資 料 室

1. 定期演奏会 出演者数

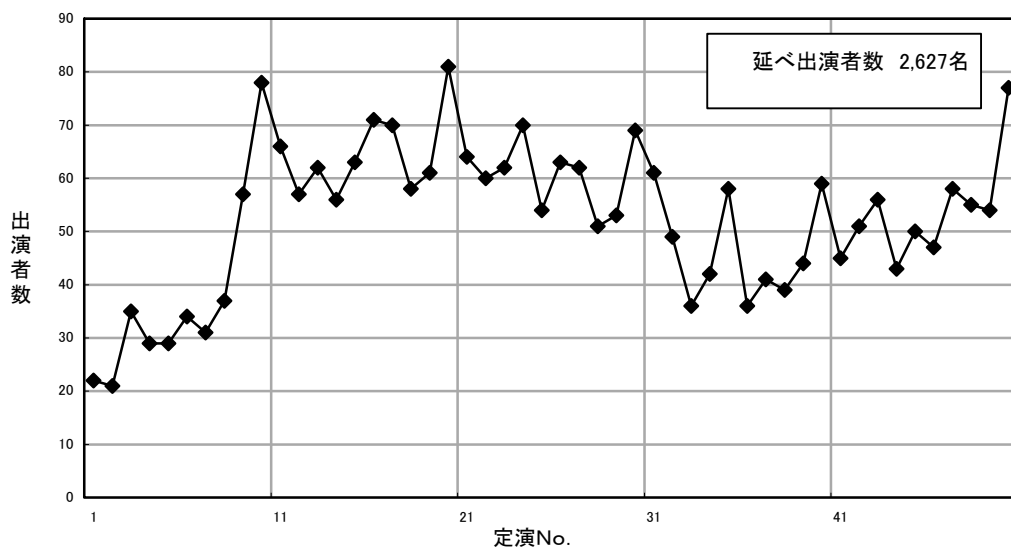
1-1 第1回～第50回(1958～2007)

延べ出演者数	2,627
1回平均出演者数	53

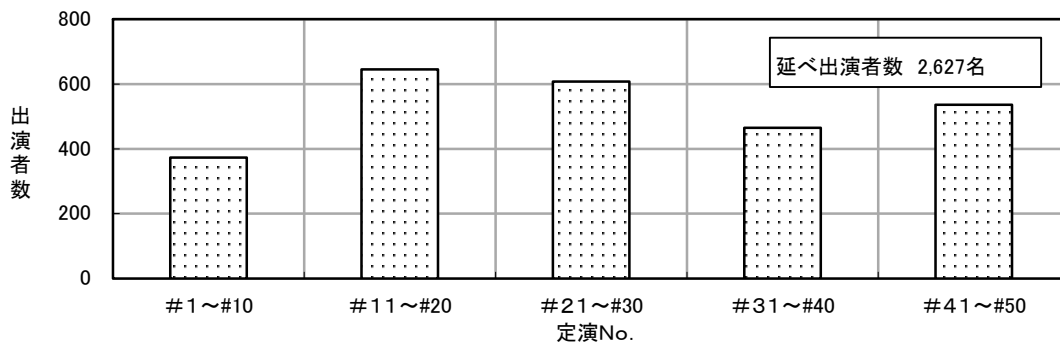
1-2 パート別 出演者個体数

指揮	マンドリン	ドラ	チェロ	ギター	ローネ	ベース	打楽器	合計
1	251	105	51	203	1	35	31	678

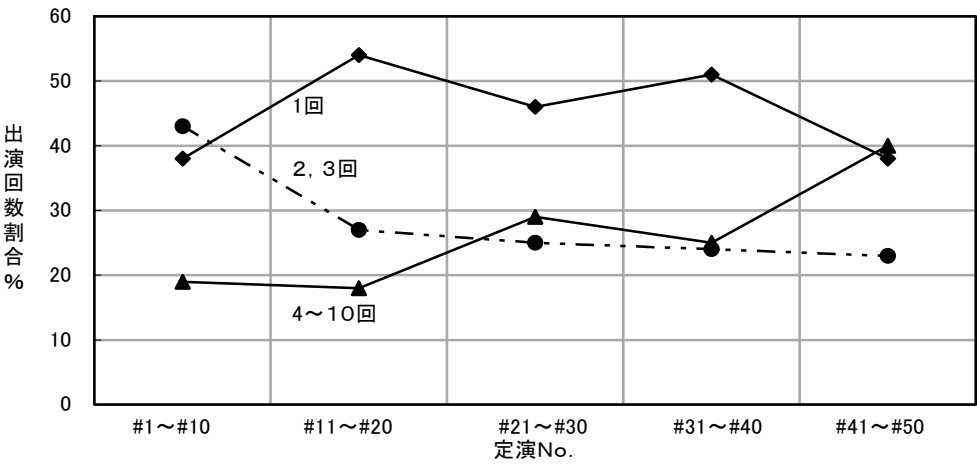
1-3 出演者数推移



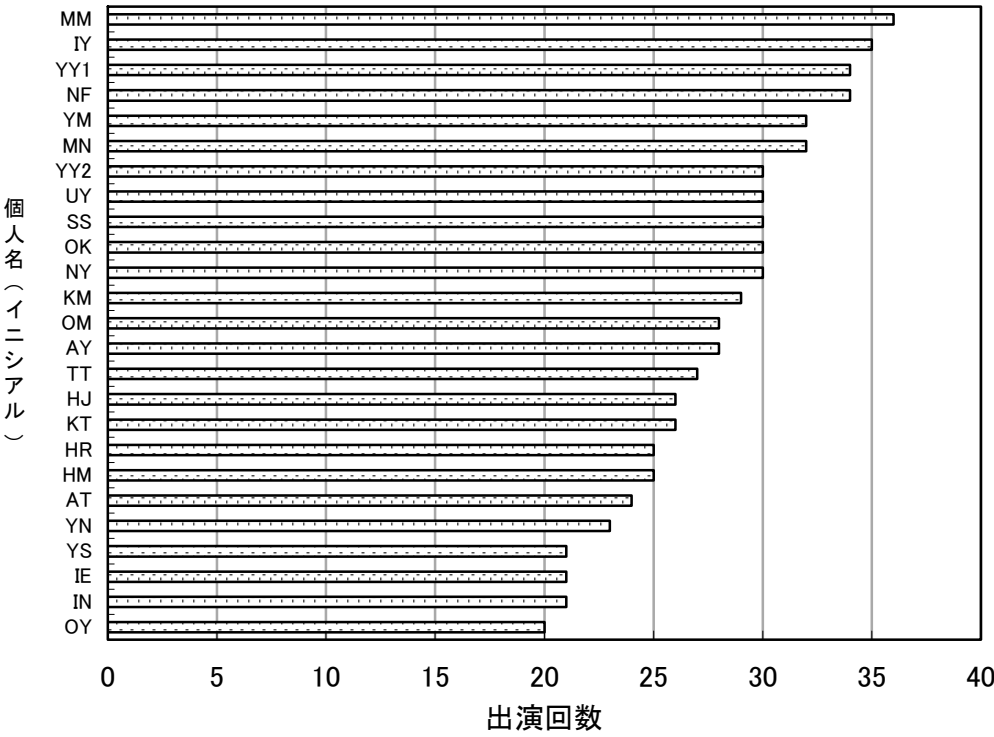
1-4 年代別 出演者数推移



1－5 年代別 出演回数割合 (%)



1－6 個人別 出演回数順位



2. 作曲者人気度 演奏した曲目（オリジナル＋クラシック）

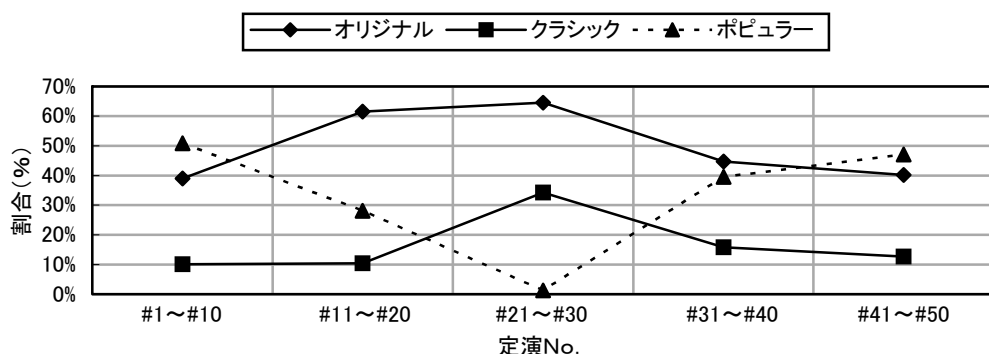
	#1～#10	#11～#20	#21～#30	#31～#40	#41～#50	合計
鈴木静一	3	16	3	1	3	26
熊谷賢一	0	4	5	5	0	14
K. ヴェルキー	8	4	0	0	1	13
M. マチョッキ	9	1	1	0	1	12
G. マネンテ	0	5	2	1	3	11
A. アマディ	0	0	0	2	4	6
U. ボッタキアリ	0	2	1	0	3	6
藤掛広幸	0	1	1	2	2	6
その他の邦人計	14	26	16	14	17	87

合計	59	65	74	45	54	297
----	----	----	----	----	----	-----

3. 演奏曲目人気度（演奏回数3回以上）

No.	曲目	定演No.	定演No.
1	劇的序楽「細川ガラシャ」	8	12,13,16,20,26,30,47,50
2	序曲 イ長調	6	2,5,6,8,10,15
3	序曲 バグダットの太守	5	2,4,9,30,41
4	交響的前奏曲	4	18,28,41,50
	ミレーナ	4	1,3,9,20
	序曲 水車小屋の乙女達	4	4,7,10,43
	浜辺の歌	4	4,12,20,36
	古戦場の秋	4	4,8,10,30
	序曲 ロ短調	4	8,9,14,46
10	民謡「木曾節」に基づく小狂想曲	3	1,3,20
	「月の砂漠」の主題による小幻想曲	3	2,3,6
	白鳥の湖より「情景」	3	5,10,14
	タブー	3	8,9,13
	序曲 レナータ	3	8,12,50
	愛の喜び	3	11,14,19
	「荒城の月」を主題とする2つのマンドリンの為の 変奏曲	3	11,12,34
	パストラル・ファンタジー	3	20,39,50

4. 演奏曲目種類割合



5. 出演者数一覧表

パート	西暦	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	小計
指揮者	回	#1	#2	#3	#4	#5	#6	#7	#8	#9	#10	#11	#12	#13	#14	#15	#16	#17	#18	#19	#20	
B	小計	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10
C	小計	2	1	2	1	0	1	0	1	2	2	2	4	4	4	3	5	5	7	5	7	56
D	小計	2	1	4	6	5	7	6	3	11	14	9	10	12	11	12	13	10	11	8	11	166
G	小計	6	8	11	5	7	9	8	12	14	23	20	13	16	17	15	19	20	14	19	23	279
L	小計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	0	0	0	4
M	小計	9	8	14	13	14	15	14	18	26	35	31	26	24	21	21	24	24	22	20	30	409
P	小計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	2	3	4	2	3	3	20
合計		22	21	35	29	29	34	31	37	57	78	66	57	62	56	63	71	70	58	61	81	1,018
会長		富沢	富沢	富沢	富沢	富沢	富沢	富沢	富沢	富沢	富沢	富沢	富沢	富沢	三浦	三浦	三浦	三浦	三浦	三浦	三浦	

パート	西暦	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	小計
指揮者	回	#21	#22	#23	#24	#25	#26	#27	#28	#29	#30	#31	#32	#33	#34	#35	#36	#37	#38	#39	#40	
B	小計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
C	小計	7	5	5	6	4	3	4	3	5	4	5	4	3	2	3	2	2	1	2	3	73
D	小計	7	8	7	9	5	6	5	5	4	9	8	5	4	5	7	2	2	4	4	5	111
G	小計	9	9	7	9	8	7	10	8	9	12	8	6	3	5	9	5	7	6	6	8	151
L	小計	18	15	21	16	14	20	16	14	14	19	17	10	9	10	13	11	10	13	14	18	292
M	小計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
P	小計	21	22	22	26	22	24	24	21	17	24	22	21	15	16	23	13	16	12	15	22	398
合計		64	60	62	70	54	63	62	51	53	69	61	49	36	42	58	36	41	39	44	59	1,073
会長		三浦	三浦	山根	山根	山根	山根	山根	山根	山根	山根	山根	石川	石川	石川	石川	尾園	尾園	石川	石川	石川	

パート	西暦	98	99	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	小計	合計
指揮者	回	#41	#42	#43	#44	#45	#46	#47	#48	#49	#50	#51	#52	#53	#54	#55	#56	#57		
B	小計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0								0	10
C	小計	2	3	4	2	3	3	3	3	3	4								30	159
D	小計	4	4	6	5	4	6	6	5	6	8								54	239
G	小計	6	6	8	6	6	6	8	9	10	12								77	394
L	小計	14	18	13	10	11	12	16	14	11	25								144	715
M	小計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0								0	4
P	小計	16	18	22	17	21	17	22	21	21	25								200	1,007
合計		3	2	3	3	5	3	3	3	3	3								31	99
会長		石川	石川	石川	石川	石川	石川	石川	石川	石川	石川								536	2,627
																				平均 53

所蔵CD目録

1. ICMC定期演奏会

定演回数	開催日	曜日	西暦	曲名	指揮者	作曲
# 11	S43.8.10	土	68	1. 熊谷先生追悼編集曲 2. 序曲嬰へ短調		K. ヴェルキー
# 12	S44.8.9	土	69	3. 黎明序樂 4. 日月譚の歌(台湾原住民の古謡による) 5. 「荒城の月」を主題とする 二つのマンドリンの為の変奏曲 1st: 山添修志 2nd: 新井義悠 6. 序曲二長調 7. 序曲レナータ		鈴木静一 鈴木静一 服部 正 K. ヴェルキー H. ラヴィトラノ
# 13	S45.8.22		70	1. オープニング(すずらん) 2. ロシア民謡による幻想曲 「ヴォルガは流れる」 朗読: 田中克佳 コーラス: 岩国市民合唱団 3. アンデルセン童話による譚詩と マンドリンオーケストラ「人魚」 ナレータ: 山原玲子 ソプラノ: 野村三重子 4. 劇樂「細川ガラシャ」 5. エンディング(若人)		鈴木静一 鈴木静一 鈴木静一 鈴木静一 赤城 淳
# 14	S46.8.28		71	6. 序曲第4番口短調	高島信人	K. ヴェルキー
# 14	S46.8.28		71	1. オープニング(すずらん) 2. 過ぎた日の熱情 3. メリアの平原に立ちて 4. 序曲第4番 口短調 5. マドンナの宝石 6. ワルツ「女学生」 7. 白鳥の湖より「情景」 8. 愛の喜び 9. 火祭りの踊り 10. 音楽物語「朱雀門」 ナレータ: 中山正紀 11. アンコール(浜辺の歌) 12. エンディング(行進曲「若人」)	高島信人 " " 蛭子忠行 " " " " " 高島信人	鈴木静一 G. マネンテ K. ヴェルキー W. フェラーリ W. トイフェル P. チャイコフスキー G. マルティニー M. ファリヤ 鈴木静一 成田為三 赤城 淳
# 14	S.46.8.28		71	1. 音楽物語「朱雀門」 ナレータ: 中山正紀		鈴木静一
# 15	S47.8.19		72	2. 交響詩「比羅夫ユーカラ」(征夷の史) ソプラノ: 野村三重子 3. アンデルセン童話「氷姫」より "氷の精に魅入られたルディ" ナレータ: 石津恵子 アルト: 野村三重子 4. 行進曲「若人」あいさつ	高島信人 "	鈴木静一 鈴木静一 赤城 淳
# 16	S48.8.17	金	73	1. 恵まれた結婚(祝典行進曲) 2. 劇樂「細川ガラシャ」	高島信人 "	G. マネンテ 鈴木静一
(# 1)	(S48.8.18)	土	73	3. 聖ボニファチオのオベルト伯 4. ギター協奏曲 二長調 P209	" 奥西 仁	A. ヴェルディ A. ヴィバルディ

定演回数	開催日	曜日	西暦	曲名	指揮者	作曲
				Guiter: 松塚展門		
				5. スイスの牧人	奥西 仁	P.モルラッキ
				Mandolin: 新井義悠		
				6. マンドリンオーケストラのための群炎Ⅰ	"	熊谷賢一
				7. " 群炎Ⅱ	"	"
#17 -1	S49.8.16	金	74	《第1部》		
				1. 序楽「今と昔」	高島信人	G. マネンテ
				2. グラウコの悲しみ	"	A. マッツオーラ
(#2)	(S49.8.17)	土	74	3. ダンテ序曲	"	N. リ. カウシ
				《第2部》		
				4. 合奏協奏曲「四季」より「秋」	奥西 仁	A. ヴィバルディ
				5. G線上のアリア	"	J. S. バッハ
				6. ルーマニア狂詩曲第1番	"	G. エネスコ
#17 -2	S.49.8.16	金	74	《第3部》		
				1. マンドリンオーケストラのための ヴォカリーズ	高島信人	熊谷賢一
(#2)	(S49.8.17)	土	74	(1)暁の歌 (2)街の歌 (3)夜の歌		
				2. マンドリンオーケストラのための 群炎Ⅲ	高島信人	熊谷賢一
				3. エンディング カバレリア・ルスティカーナ間奏曲	高島信人	マスカーニ
#18	S50.8.16	土	75	1. 序曲イ短調	中里文昭	G. クラフニッツァー
				2. 祈り	"	U. ボッタキアリ
				3. 夜の印象	"	D. ジョバンニ
				4. ミュージックへのお誘い	尾園勝善	
				5. 狂詩曲「海」	高島信人	鈴木静一
				6. オアシスにて	"	E. マルチ
				7. 交響的前奏曲	"	U. ボッタキアリ
				8. アンコール ドレミの歌		
				9. エンディング カバレリアルスティカーナ間奏曲		マスカーニ
#19	S51.8.15	日	76	1. ト調序楽	山本芳生	D. ジョバンニ
				2. モスコウの真昼	"	D. ベルッチ
				3. 交響的間奏曲	"	G. マネンテ
(#4)	(S51.8.14)	土	76	4. 序奏とファンダンゴ	吉行恭子	L. ボッチェリーニ
				5. 愛の喜び	"	G. マルチーニ
				6. ツゴイネルワイゼン Mandolin: 新井義悠	"	P. サラサーテ
				7. 組曲「山の印象」	藤本匡孝	鈴木静一
				8. 平家物語「西海の挽歌」	"	鈴木静一
				9. アンコール カバレリアルスティカーナ間奏曲		マスカーニ
				10. エンディング マンドリニストの生活		J.B.コック
#20 記念	S.52.8.14	日	77	1. ミレーナ	山本芳生	M. マチョッキ
				2. グラウコの悲しみ	"	A. マッツオーラ
				3. 劇楽「細川ガラシャ」	"	鈴木静一
				4. メリアの平原に立ちて	"	G. マネンテ
				5. 丘を越えて 6. 荒城の月幻想曲	中里文昭	
				7. 鈴懸けの径 8. 浜辺の歌		

定演回数	開催日	曜日	西暦	曲名	指揮者	作曲
				9. 民謡「木曾節」による小狂想曲		
				10. パストラル・ファンタジー	尾園勝善	藤掛廣幸
				11. 委嘱作品 マンドリンオーケストラのための ボカリーズ 第5番 ーすばらしい明日のためにー (1)若葉の歌 (2)君の歌 (3)青春 (4)すばらしい明日のために	"	熊谷賢一
#21	S53.8.15	火	78	1. ローマ・トリノ	中里文昭	D. ジョバンニ
				2. 浪漫的間奏曲	"	A. カベレッティ
				3. 我が懐かしき山々に	"	D. ジョバンニ
				4. プレクトラム		A. アマディ
				5. ゴンドラの唄		E. メッツァカーボ
				6. カバレリア・ルスティカーナ前奏曲		P. マスカーニ
				7. ファンダンゴ	山根道広	F. ワルター
				8. 組曲 第6番	"	H. アンブロシウス
				9. マンドリンの群れ	尾園勝善	C. A. ブラッコ
				10. 夏の庭	"	P. シルベストリ
				11. 劇的序曲	"	A. カベレッティ
				12. エンディング マンドリニストの生活		J.B.コック
#22	S54.8.14	火	79	1. ラ・ベザレーゼ	中里文昭	G. フィリッパ
				2. 歌劇「南の港にて」より間奏曲	"	N. スピネリ
				3. 組曲「吟遊詩人」	"	A. アマディ
				4. ノクターン	山根道広	G. グロウ
				5. パッサの小品より ・アングレイズ ・ガボット ・サラバンド ・メヌエット ・ガボット	"	G.グロート
				6. 浜辺の歌を中心としたアンサンブル	松重正清	
				7. オラッチオ・クリアッチオ兄弟	山根義広	チマローザ
				8. アルジェリア組曲 I 前奏曲 II ムーアのラプソディ III タベの幻想 IV フランス軍隊行進曲	"	サンサーンス
				9. アンコール プリंकプルンクプランク		
				10. エンディング		
#23	S55.8.16	土	80	1. そり滑り	山根義広	R. アンダーソン
				2. シンコペーティッド・クロック	"	R. アンダーソン
				3. ゴリーウオークのケーキウォーク	"	ドビッシ
				4. 白鳥	"	サン・サーンス
				5. プレクトラム四重奏曲 1st: 田村 2nd: 山根 Dola: 松重 Cell: 中里		ファルボ
				6. 教会カンタータ No.147【ギター合奏】		J. S. パッサ
				7. EXECUTION(処刑)【ギター合奏】		松本定芳
				8. 交響詩「エカフの嘆き」	中里文昭	N. ラウダス
				9. 冬の花	"	ブーシュロン
				10. 歌劇ジョコンダより 時の踊り (エンディング)	"	A. ボンキエルリ
				11. マンドリニストの生活		J. B. コック

定演回数	開催日	曜日	西暦	曲名	指揮者	作曲
#24	S56.8.16	日	81	1. ローレイ・パラフレーズ	松重正清	ネスラトバ
				2. 愛の挨拶	"	E. エルガー
				3. ダッタン人の踊り	"	A. ボロディン
				4. 日本民謡集	尾園勝善	熊谷賢一
				5. 神々の饗宴	中里文昭	M. マッチョッキ
				6. 華燭の祭典 (アンコール)	"	G. マネンテ
				7. カバレリア・ルススティカーナ間奏曲 (エンディング)		マスカーニ
				8. マンドリニストの生活		J. B. コック
#25	S57.8.14	土	82	1. 三声のカノン	末岡成基	J. パッセルベル
				2. ハンガリア舞曲 第5番	"	J. ブラームス
				3. 交響詩フィンランディア	"	J. シベリウス
				4. MOのためのラブソディ第4番	尾園勝善	熊谷賢一
				5. マンドリン合奏のための二章	"	柳田隆介
				6. 序曲ニ短調	中里文昭	S. ファルボ
				7. 組曲「エジプトの幻影」 (エンディング)	"	G. ミッシェル
				8. マンドリニストの生活		J. B. コック
#26	S58.8.14	日	83	1. 交響詩「北夷」	末岡成基	鈴木静一
				2. 劇樂「細川ガラシャ」	"	鈴木静一
				3. 舞踏音楽「恋は魔術師」より "火祭りの踊り"	中里文昭	M. de. ファリヤ
				4. 歌劇「南の港にて」間奏曲	"	ニコラ・スピネリ
				5. カバレリア・ルススティカーナ間奏曲	"	P. マスカーニ
				6. 歌劇「ルスランとリュドミラ」序曲	"	J. グリンカ
				7. シンプル・シンフォニー第1楽章	尾園勝善	
				8. 同 第2、第3楽章 (アンコール)	"	
				9. 青い影 (エンディング)		
				10. マンドリニストの生活		J.B.コック
#27	S59.8.14	火	84	1. 「ローラ」序曲	中里文昭	H. ラヴィトラノ
				2. 夜曲(ノクターン)	"	S. コベルティニー
				3. 祭	"	Q. ファブリ
				4. 歌の翼に	"	F. メンデルスゾーン
				5. オペラ「椿姫」より 第1幕への前奏曲	"	F. ヴェルディ
				6. オペラ「椿姫」より 乾杯の歌	"	F. ヴェルディ
				7. ピア樽ボルカ	"	V. ヴォッタ
				8. タイプライター	"	L. アンダーソン
				9. グランド シャコンヌ	尾園勝善	藤掛廣幸
				10. 河の詩 (エンディング)	"	熊谷賢一
				11. マンドリニストの生活		J. B. コック
#28	S60.8.17	土	85	1. 国境なし	尾園勝善	G. Manente
				2. 夜の静寂	"	P. Silvestri
				3. 交響的前奏曲	"	U. Bottacchiari
				4. 二人の友 M: 田村隆司 D: 金丸真明	尾園勝善	G. Filippa

定演回数	開催日	曜日	西暦	曲名	指揮者	作曲
				5.「アラnfes協奏曲」より第Ⅱ楽章 G:末岡成基	〃	J.Rodorigo
				6.「四季」より”冬”	〃	A.Vivaldi
				7. シンフォニエッタNo.1 第1楽章	尾園勝善	大栗 裕
				8. インフォニエッタNo.1 第2楽章 (エンディング)	〃	〃
				9. マンドリニストの生活		J.B.コック
#29	S61.8.16	土	86	1. MOのための舞踊風組曲	尾園勝善	久保田 孝
				2. MOのための音楽「こどもの国」 〔2部〕パンフルート:岩田英憲	〃	熊谷賢一
				3. ロマーナの祈り		ザンフィル
				4. コンドルは飛んでいく		アンデス民謡
				5. 黒いバラ		ジェームス・ラスト
				6. 滅びし国	中里文昭	G. フィリッパ
				7. 子守唄	〃	E. コーラー
				8. 英雄葬送曲 (アンコール)	〃	C.O.ラッタ
				9. 浜辺の歌		成田為三
#30 記念	S62.8.16	日	87	1. 「軽騎兵」序曲	山根義広	F. スッペ
				2. 組曲「アルジェリア」 《30回記念合同ステージ》	〃	サンサーンス
				3. バグダットの太守	中里文昭	ヴォアルデュ
				4. 古戦場の秋	〃	小池正夫
				5. 劇楽「細川ガラシャ」	〃	鈴木静一
				6. 舞踊風組曲 第2番	尾園勝善	久保田 孝
				7. MOのためのヴォカリーズ 第4番 ”風の歌”	〃	熊谷賢一
#31	S63.8.14	日	88	1. ハンガリア舞曲 第6番	中里文昭	J. プラームス
				2. 交響曲「おもちゃ」	〃	L. モーツァルト
				3. アラベスク		C. ドビッシ
				4. 「四季」より”冬”		A. ヴィヴァルディ
				5. 序曲 ニ短調	中里文昭	S.ファルボ
				6. 黄昏	〃	D. ベルッティ
				7. MOのためのヴォカリーズ 第9番”海原へ” (エンディング)	〃	熊谷賢一
				8. マンドリニストの生活		J.B.コック
#32 -1	H1.8.20	日	89	1. 風の伝説	尾園勝善	久石 譲
				2. メーヴェ	〃	〃
				3. 風の谷のナウシカ	〃	〃
				4. プロローグ 出会い	〃	〃
				5. 鉾山町	〃	〃
				6. 時の城	〃	〃
#32 -2	H1.8.20	日	89	1. マンドリン合奏と朗読による音楽民話 「つつじのむすめ」	中里文昭	鈴木静一
				2. ヴェルレーヌの詩によせる三楽章	〃	〃
				3. 今と昔	〃	G. マネンテ
				4. モスコウの真昼	〃	D.ヴェルッティ
				5. セレナーデ 北欧のスケッチ	〃	F. シューベルト
				6. はるかなる未知への旅	中里文昭	A. アマディ

定演回数	開催日	曜日	西暦	曲名	指揮者	作曲
				7. 海峡のワルツ	〃	〃
				8. ロシア舞曲 (エンディング)	〃	〃
				9. マンドリニストの生活		J.B.コック
#33	H2.8.26	日	90	1. ひこうき雲	尾園勝善	松任谷由実
				2. 瞳をとじて	〃	〃
				3. 時をかける少女	〃	〃
				4. 赤いスイートピー	〃	〃
				5. 中央フリーウェー	〃	〃
				6. ダンディライオン	〃	〃
				《ギターソロ》末岡成基		
				7. "さくら"による主題と変奏		横尾幸弘
				8. 大聖堂		A. バリオス
				《マンドリンソロ》田村隆司		
				9. 夜の鐘		ババレロ
				10. スペイン風奇想曲		ムニエル
				海の組曲	尾園勝善	J. グリンカ
				11. 第一楽章		
				12. 第二楽章		
				13. 第三楽章		
				14. 第四楽章		
				15. MOのための"海光る風" (エンディング)	尾園勝善	小林由直
				16. マンドリニストの生活		J.B.コック
#34	H3.8.18	日	91	1. ロトのテーマ	尾園勝善	すぎやまこういち
				2. おおぞらをとぶ	〃	〃
				3. アレフガルドにて	〃	〃
				4. 冒険の旅	〃	〃
				5. 「荒城の月」を主題とせる 2つのマンドリンのための変奏曲	〃	服部 正
				6. 「仮面」序曲	フロムジカME	P. マスカーニ
				7. MOのためのヴォカリーズ 第1番「暁の歌」	〃	熊谷賢一
				8. 群炎 V 「祈りと希望」	高島信人	熊谷賢一
				9. 群炎 III (エンディング)	尾園勝善	熊谷賢一
				10. マンドリニストの生活		J.B.コック
#35	H4.8.29	土	92	1. 序曲「フィガロの結婚」	中里文昭	W.A.モーツァルト
				2. 狂詩曲「スペイン」	〃	E. シャブリエ
				3. アランフェス協奏曲	尾園勝善	J.ロドリゴ
				4. 2つの動機	〃	吉水秀徳
				5. アンコール となりのトトロより (エンディング)		久石 譲
				6. マンドリニストの生活		J.B.コック
#36	H5.9.11	土	93	1. 夏の思い出	尾園勝善	
				2. 浜辺の歌	〃	
				3. 村祭り	〃	
				4. 金太郎	〃	
				5. おぼろ月夜	〃	

定演回数	開催日	曜日	西暦	曲名	指揮者	作曲
				6. インナーズ [ギターソロ]ギター: 中野義久	"	
				7. スペイン舞曲 第5番「アンダルーサ」		グラナドス
				8. アルハンブラ宮殿の思い出		タレガ
				●12の歌「地球は歌っている」より		
				9. オーバー・ザ・レインボー		武満 徹
				10. サマータイム		"
				11. イエスタデー		"
				12. グラン・ホタ		"
				13. プレリュード II	尾園勝善	吉水秀徳
				14. MOのための群炎 VI「樹の歌」	"	熊谷賢一
#37	H6.9.11	日	94	1. ジェラシックパーク	尾園勝善	J. ウイリアムス
				2. 戦場のメリークリスマス	"	坂本龍一
				3. 嵐が丘	"	坂本龍一
				4. ブレードランナー	"	ヴァンゲリス
				5. シンドラーのリスト	"	J. ウイリアムス
				[マンドリン・ソロ]M: 田村隆司 P: 石村円		
				6. シシリアの思い出		S. レオナルディ
				7. 愛の挨拶		E. エルガー
				8. 小人の踊り		R. カラーチェ
				9. タイスの瞑想曲		J. マスナー
				10. 幻想的円舞曲		E. マルチェルリ
				11. チャルダッシュ		V. モンティ
				●MOのための「見知らぬ大地(くに)へ」		
				12. 第1楽章 出航(たびたち)	尾園勝善	尾園勝善
				13. 第2楽章 憧れをのせて	"	"
				14. 第3楽章 時の行方	"	"
				15. 第4楽章 夢を歴(つ)ぐものたち	"	"
				(アンコール)		
				16. セーラームーンのテーマ		
#38	H7.8.19	土	95	1. 襟裳岬	尾園勝善	吉田拓郎
				2. 舟歌	"	浜 圭介
				3. 川の流れるように	"	見岳 章
				4. ライムライト	"	C. チャップリン
				5. エデンの東	"	L. ローゼンマン
				(フラット・マンドリン・アンサンブル)		
				6. ロシアン・ラグ		D. アポロン
				7. リトル・ビーン・アイランド		岩永豊司
				8. ブルー・ミサ		P. オストリュージュコ
				9. A列車で行こう		B. ストレイホーン
				10. 序曲	尾園勝善	吉水秀徳
				11. 生命の詩[世界の命=広島の心]	"	藤掛廣幸
				作詞: 原田東岷 岩国混声合唱団		
				(アンコール)		
				12. 川の流れるように(合唱付き)		見岳 章
#39	H8.8.18	日	96	1. 花の首飾り	尾園勝善	すぎやまこういち
				2. モナリザの微笑み	"	"
				3. 銀河のロマンス	"	"
				4. 二人だけの海	"	弾 厚作
				5. 海その愛	"	"

定演回数	開催日	曜日	西暦	曲名	指揮者	作曲
				(ギターとフルート)G:伊吹稔 F:伊吹恵子		
				6.「タンゴの歴史」より		A. ピアソラ
				7. マンドリンの群れ	尾園勝善	C.A.ブラッコ
				8. パストラール・ファンタジー	"	藤掛廣幸
				(アンコール)		
				9.「シルクロード」より		喜多朗
#40 記念	H9.11.8	土	97	1.「あぐり」より”すばらしき日々へ”	尾園勝善	岩代太郎
				2.「春よこい」より”春よこい”	"	松任谷由実
				3.「シルクロード」より”シルクロード”	"	喜多朗
				4.「新日本紀行」より”祭りの笛～日本の素顔”	"	富田 勲
				5.「秀吉」より”秀吉”	"	小六禮次郎
				6.「毛利元就」より”毛利元就”	"	渡辺俊幸
				(マンドリン・ソロ)M:田村隆司		
				7. ツゴイネルワイゼン		サラサーテ
				●組曲「ナボリの風景」		
				8. サンタルチアの祭		
				9. ボジリボ地方の唄	尾園勝善	クロッタ
				10. 入り江を照らす月・祭日の悪戯っ子		
				11. 古譚	"	ギユウデシ
				12. 劇的序曲	"	カベレツティ
				(アンコール)		
				13.「もののけ姫」よりアシタカとサン		久石 譲
#41	H10.11.15	日	98	1. バグダッドの太守	尾園勝善	F.A.ポアルデュユ
				2. 夜曲	"	S.コベルティーニ
				3. 交響的前奏曲	"	U.ボッタキアーリ
				4. FOREVER YOURS	"	五十嵐 充
				5. 長い間	"	玉城千春
				6. ひだまりの詩	"	日向敏文
				7. ALIVE	"	井秩弘将
				8. もののけ姫/映画「もののけ姫」より	"	久石 譲
				9. アシタカせっ記/映画「もののけ姫」より	"	久石 譲
				10. 朱雀門	"	鈴木静一
				(アンコール)		
				11. 朧月夜		岡野貞一
#42	H11.11.3	祭	99	1. イタリア～英雄行進曲	山本浩一	A.アマディ
				2. サヴォイアのマリア・ピア女王 ～子守唄～	"	G.マネンテ
				3. 怯える小鳥～諧謔風ポルカ～	"	G.フィリッパ
				4. 夏の庭～黄昏～	"	P.シルベストリ
				5. 唄と踊り	"	R.カラチェ
				6. ディズニー・メドレー	尾園勝善	小穴雄一
				7. アラジン・メドレー	"	J.モス
				8. 北設楽民謡「せしよ」	"	川島 博
				9. 舞踊風組曲 第3番	"	久保田 孝
				(アンコール)		
				10. 鉄道員～ぽっぽや～		国吉良一
#43 -1	H12.11.4	土	0	1. 朗読と日本の歌 朗読:山中敏枝 ・はないちもんめ ・ずいずいずっころばし ・金毘羅舟舟 ・夏の思い出 ・七夕さま ・茶摘による幻想曲	末岡成基	

定演回数	開催日	曜日	西暦	曲名	指揮者	作曲
				・故郷		
				2. 岩国錦帯橋	末岡成基	松塚展門
				3. Impression 1999	尾園勝善	舟見景子
				●組曲「もののけ姫」		
				4. アシタカせつ記	"	久石 譲
				5. 崇り神～旅たち～もののけ姫		
				6. アシタカとサン (アンコール)		
				7. 始まることのなかった物語のために (エンディング)		安川 徹
				8. マンドリニストの生活		J. B. コック
#43 -2	H12.11.4	土	0	(ギター・アンサンブル)		
				1. TSUNAMI		桑田圭祐
				2. Farewell to Island		W.Theisinger
				3. Irish Fork Medley		J.スパーク
				(ギター・ソロ) ギター: 末岡成基		
				4. セビリヤーナス[セビリヤ風幻想曲]		H. ツウリーナ
				(マンドリン・アンサンブル)		
				5. スプレーン[憂愁]	河村太郎	A. アマディ
				6. 鷺の歌	"	服部 正
				7. 水車小屋の乙女達	"	M. マッチョッキ
#44	H13.11.10	土	1	1. 懐かしき追憶	末岡成基	G.フィリップ
				2. 晩秋	"	G. マネンテ
				●組曲 吟遊詩人	"	A. アマディ
				3. 供奉		
				4. 若き修道士の歌		
				5. 牧歌		
				6. 結婚祝典		
				7. 太陽がいっぱい	中里文昭	N.Rota
				8. 星に願いを	"	L.Herline
				9. 踊り明かそう	"	F.Loewe
				10. ソリ滑り	"	L.Anderson
				11. ラッパ吹きの日	"	L.Anderson
				●ある貴紳のための幻想曲 G: 末岡成基	新井義悠	J.ロドリゴ
				12. 第1楽章		
				13. 第2楽章		
				14. 第3楽章		
				15. 第4楽章		
				16. 第5楽章		
				17. 歌劇「仮面」序曲	"	P. マスカーニ
				(アンコール)		
				18. マンドリニストの生活		J. B. コック
#45	H14.11.9	土	2	1. 星の庭	末岡成基	小林由直
				2. 星空のコンチェルト	"	藤掛廣幸
				3. ジブリ・メドレー	"	
				4. 千と千尋の神隠し	"	
				・あの夏へ ・滝の少年 ・神さま達		
				・底なし穴 ・6番目の駅 ・湯婆婆狂乱		
				・ふたたび ・いつも何度でも		
				5. 歌劇「カバレリア・ルスティカーナ」より	新井義悠	P. マスカーニ

定演回数	開催日	曜日	西暦	曲名	指揮者	作曲
				前奏曲		
				6. スラブ行進曲	"	P.チャイコフスキー
				7. 愛の挨拶 (アンコール)	"	
				8. オンブラ・マイ・フ[安らぎの木陰] (エンディング)		
				9. マンドリニストの生活		
#46	H15.11.15	土	3	1. プロジェクトX風 朗読と音楽 ・地上の星 ・黄昏のピギン ・大きな古時計 ・ひよこりひょうたん島 ・ヘッドライト・テールライト	末岡成基	
				2. プレリユード 3	"	吉水秀徳
				3. 序曲第4番 ロ短調	"	K. ヴェルキー
				4. 彷徨える霊	新井義悠	U.ボッタキアーリ
				●L'Album de Marisetta		
				5. マリゼッタ[ガボット]	"	G. マネンテ
				6. 夢見つつ[モメント・ムジカーレ]		
				7. 人形[スケルツォ]		
				●交響管弦楽のための音楽		
				8. 第1楽章	"	芥川也寸志
				9. 第2楽章		
				(アンコール)		
				10. 愛の喜び		G. マルティーニ
#47	H16.11.13	土	4	1.NHK大河ドラマより "新選組"メインテーマ(ICMC-edition)	末岡成基	服部隆之
				2.Sound of Music より 私のお気に入り、トレミの歌	"	R.Rodgers
				3.初秋の唄	"	桑原康雄
				4.亡き王女のためのパヴァーヌ	"	Maurice Ravel
				5.喜歌劇「詩人と農夫」序曲	"	Franz von Suppe
				6.劇的序奏「細川ガラシャ」	中里文昭	鈴木静一
				7.ノスタルジー	新井義悠	Primo Silvestri
				8.JAZZ POP ROCK 組曲 MAMBO, BLUES, STOMP	"	Claudio Mandonico
				14.東洋の印象 第2組曲 愛の歌と幻想曲、黄昏、市場にて	"	Amedeo Amadei
#48	H17.11.12	土	5	1.ギリシャ風主題による序楽	末岡成基	N.ラウダス
				2.舞踊風組曲第2番	"	久保田 孝
				3.ライムライト	"	C. チャップリン
				4.ひまわり	"	H. マンシーニ
				5.ハウルの動く城	"	久石 譲
				6.スターウォーズ	"	J. ウィリアムス
				弦楽合奏のためのセレナーデ ハ長調 作品48		
				7.第1楽章 Pezzo in forma di Sonatina ソナチネ形式の小曲		
				8.第2楽章 Walzer 円舞曲(ワツル)	新井義悠	チャイコフスキー
				9.第3楽章 Elegie 悲歌(エレジー)		
				10.第4楽章 Finale(Tema Russo)		

定演回数	開催日	曜日	西暦	曲名	指揮者	作曲
				ロシア的主題による終曲 (アンコール)		
				11.見上げてごらん夜の星を		いずみたく
#49	H18.11.18	土	6	1.短くも美しく燃え ピアノ協奏曲第21番 第2楽章	新井義悠	W.A.モーツァルト
				2.メヌエット ト短調	"	L.V.ベートーベン
				3.ガボット	"	"
				4.アダージェット 交響曲第5番 第4楽章	"	G. マーラー
				5.踊り明かそう (ダンスとの共演)	末岡成基	ローエ
				6. ラ・クンパルシータ (ダンスとの共演)	"	M. ロドリゲス
				7.情熱大陸	"	葉加瀬太郎
				8.夜霧のしのび逢い (ダンスとの共演)	"	G. V. ウォッター
				9.マンドリン合奏の為の二章	"	柳田隆介
				10.ハンガリアの黄昏 M:新井義悠	"	D. ベルツァティ
				11.英雄葬送曲 (アンコール)	"	C. O. ラッタ
				12.見上げてごらん夜の星を (エンディング)		いずみたく
				13.マンドリニストの生活		J. B. コック
#50 記念	H19.11.17	土	7	1.オープニング		尾園勝善
				2.序曲「レナータ」	高島信人	H. ラヴィトラノ
				3.交響的前奏曲	尾園勝善	U.ボッタキアーリ
				4.パストラル・ファンタジー	末岡成基	藤掛廣幸
				ICMC50回記念メドレー		
				5.月光仮面～パイプライン		
				6.男はつらいよ～UFO	中里文昭	尾園勝善編
				7.赤いスイートピー～セーラームーン		
				8.ジュピター～千の風になって		
				9.劇的序楽「細川ガラシャ」	中里文昭	鈴木静一
				10.交響的前奏曲	末岡成基	吉水秀徳
				組曲「ホルベアの時代より」		
				11.Prelude		
				12.Sarabande		
				13.Gavotte	新井義悠	E. グリーグ 伊藤敏明編
				14.Air		
				15.Rigaudon (アンコール)		
				16.Happy Birthday to Us!		舟見景子編
				17.見上げてごらん夜の星を (エンディング)		いずみたく
				18.マンドリニストの生活		J.B.コック

2. ICMC主催

クラブ名称	開催日	曜日	西暦	曲名	指揮者	作曲
東洋工業 MC合同演奏会	S49.3.23	土	74	《第1部》		
				1.序曲「美しき水車小屋の乙女達」	高島信人	M. マチョッキ
				2.夜曲	〃	S. コベルティニ
				3.偉大なる時	〃	K. ヴェルキ
				《第2部》		
				4.ロミオとジュリエット	奥西 仁	
				5.マルタ島の砂	〃	
				6.ある愛の詩	〃	
				7.シバの女王	〃	
				8.残酷物語より「モア」	〃	
				《第3部》		
新井義悠 マンドリン リサイタル	S50.6.21	土	75	9.日月潭の歌(台湾原住民の古謡による)	大川内幸夫	鈴木静一
				10.交響詩「北夷」	〃	〃
				《アンコール》		
				11.カバレリア・ルスチカーナ間奏曲	〃	マスカーニ
				【無伴奏】		
				1. Piccola Gavotta(小さなガボット)		R.Calace
				2. Tema Variato(No.1 Sonata Clementi) (主題と変奏(ソナタ第1番 クレメンティ))		
				3. Aria Variata(主題と変奏 アリア)		C.Munier
				【ピアノ伴奏】 ピアノ: 城間順子		
				4. Danza e Cantabile(踊りと唄)		R.Calace
				5. Danza dei Nani(倭人の踊り)		R.Calace
新井義悠 リサイタル 友情出演	S50.6.21	土	75	6. I. Concerto "G dur" 第一司伴曲「ト長調」		C.Munier
				7. Zigeunerweisen(ツィゴイネルワイゼン)		T.Sarasate
				【アンコール】		
				8. 夜の鐘		L.Paparello
				【ギター独奏】 G: 松塚展門		
				1. Allemande "Suite para Laud No.1" (リュート組曲第一番より「アルマンデ」)		J.S.Bach
				2. Tema and Variations O.P 9 (モーツァルトの「魔笛」の主題と変奏)		F.Sor
				【マンドリン・デュエット】		
				M: 山根義広、田村隆司		
				3. Andante Cantabile		Mozart
				4. Duetto ①Andante		R.Calace
京都特別演奏会	S51.3.21	日	76	〃 ②Allegretto Scherzando		
				〃 ③Andante Mosso		
				〃 ④Allegro Vivace		
				《第1部》		
				1.Imperia/皇帝	高島信人	M. マチョッキ
				2.Romanza e Bolero-Nieves- /ロマンツァとボレロー雪ー	〃	G. ラビトラーノ
				3.Oberto Cente de S.Bonifacio /聖ボニファチョのオベルト伯	〃	A. ベルディ
				《第3部》		
				4.Preludio Sinfonico /交響的前奏曲	〃	U.ボッタキアリ
				5.Danza delle Lucciole	〃	A. アマディ

クラブ名称	開催日	曜日	西暦	曲名	指揮者	作曲
				/ 蛍の舞曲		
				6.Overture su Temi Ellenici	"	N. ラウダス
				/ ギリシャ風主題による序楽		
				《アンコール》		
				7.マンドリニストの生活	"	J.B.コック
				《エンディング》		
				8.カバレリア・ルスチカーナ間奏曲	"	P.マスカーニ
西日本マンドリン フェスティバル disk No.1	S52.2.6	日	77	●Circolo Mandolinistico Fiorentino		
				1.五月雨るる日の憂鬱		中野二郎
				2."全ては去れり"による		堀 清隆
				8つの変奏曲		
				●高松市民マンドリンクラブ	中川信子	
				3.詩的間奏曲		カベレッティ
				4.熱情		G.Branzoli
				●北九州マンドリン合奏団	清正 寛	
				5.スペインの印象"オレンジの樹の下で"		ブーシュロン
				6. " " "ボレロ"		"
				●ECO MANDOLINO	小田善朗	
				7.Papillonne.Mazurka de Concert		E.Mezzacapo
				8.Serenate Mesta		F.Calani
				9.Trios Danses		Lacome
				●Doppio Sestetto Mandolinistico di Bergamasco	藤岡 正	
				10.ギター5重奏曲 第7番 ホ短調		ボッケリーニ
西日本マンドリン フェスティバル disk No.2	S52.2.6	日	77	●岩国市民マンドリンクラブ	山本芳生	
				1.嬉しい時悲しいとき		G. アネリ
				2.聖ボニファティオのオベルト伯		ベルutti
				●アルモニア・マンドリン合奏団	川本良人	
				3.前奏曲		S. ラネエーリ
				4.スイスの牧人 M: 田村隆司		A. モルラッキ
				●エルマノ・マンドリンオーケストラ	木下正紀	
				5.滅びし国		G. フィリッパ
				6.望まれし日		G. ブランゾーリ
				●大阪マンドリン・オーケストラ	赤尾静造	
				7.マンドリン・コングレツ		ブラッコ
				8.コンチェルト・ポロネーズ M: 中原 誠		マルチェルリ
田村隆司 マンドリン リサイタル	S52.9.17	土	77	(無伴奏)		
				1.Piccola Gavotta/小さなガボット		RaffaelloCalace
				2.Love Song/愛の唄		Carlo Munier
				3.Andante/無伴奏ソナタ		J.S.Bach
				4.#10 Preludio/第10前奏曲		RaffaelloCalace
				(ピアノ伴奏): 森 房枝		
				5.Mazurka da Concerto/演奏会用マズルカ		RaffaelloCalace
				6.Rondo all Ungherese		JosephHaydn
				/ハンガリー風ロンド		
				7.水平線のSatie		西垣正信
				8.#1 Concert in Sol maggiore		GiuseppePettine
				/第1協奏曲 第1楽章		
				9.スペイン風奇想曲		Carlo Munier
田村隆司 リサイタル	S52.9.17	土	77	(岩国市民MCアンサンブル)		
				1.Frate Sfratato/還俗修道士	尾園勝善	G.filippa

クラブ名称	開催日	曜日	西暦	曲名	指揮者	作曲
友情出演				2.Reverie de Poete/詩人の瞑想	〃	G.Manente
				3.Capriccio/狂想曲	〃	Hans Gal
				(松塚展門ギターソロ)		
				4.Suite No.3 Prelude /チェロ組曲 第3番 プレリユード		J.S.Bach
				5.Etude No.11/エチュード 第11番		H.Villa-Lobos
岩国市民会館 開館記念演奏会	S54.4.21	土	79	《第1部》 岩高プレクトラムアンサンブル 1.オリーブの首飾り 2.涙のトッカータ 3.天使のセレナーデ 4.パリの操り人形 5.シバの女王 6.エーゲ海の真珠 《第2部》 岩国市民マンドリンクラブ 7.チャルダッシュ 8.愛の喜び 9.アイネ・クライネ・ナハト・ムジーク 10.プリंक・プルンク・プランク	山村 浩 〃 〃 〃 〃 〃 山根義広 〃 〃 〃	G.マルチャーニ モーツアルト
岩国よいとこ 花と祭と音楽と・・						
No.1						
岩国市民会館 開館記念演奏会	S54.4.21	土	79	《第3部》 1.オープニング 2.早春譜 3.春の声 4.花の街 5.楽器紹介 6.荒城の月 7.赤鬼と青鬼のタンゴ 8.花祭り 9.春一番 10.西岩国駅長コマーシャル 11.いい日旅立ち 12.岩国よいとこ 13.エンディング	中里文昭 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃	中田 章 団伊球磨 滝 康太郎 穂口雄右 谷村新司 吉田矢健治
岩国よいとこ 花と祭と音楽と・・						
No.2						

岩国市民マンドリンクラブ会則

1. 名 称 本会は、岩国市民マンドリンクラブと称する。
2. 目 的 本会は、プレクトラム音楽の発展と普及を図り、地方文化の高揚に寄与することを目的とする。(岩国高校プレクトラム・アンサンブルを後援する)
3. 事 業 本会は、次の事業を行なう。
演奏会、友誼団体との交流、その他
4. 会 員 本会は、次の会員をもって構成する。
 - (1) 正 会 員 …… 規定の会費を納入した者。
 - (2) 名誉会員 …… 本会の創設と発展に寄与し、総会において全員一致で推挙された者。
 - (3) 学生会員 …… 学生で正会員の半額の会費を納入した者（正会員と同等の資格を持つ）
 - (4) 賛助会員 …… 演奏会などで賛助出演が可能な者。
 - (5) 休部会員 …… 諸般の事情により会費未納の者。
5. 役 員 本会は、会員の互選により次の役員を置く。任期は1年とし再任を妨げない。
 - (1) 会 長 …… 1名
 - (2) 副 会 長 …… 1名
 - (3) 会 計 …… 1名
 - (4) 会 計 監 査 …… 1名
 - (5) 運営委員長 …… 1名 本会の事業全般を遂行する上でその運営を統括する者。
 - (6) 技術委員長 …… 1名 本会の事業のうち演奏面全般を統括する者。

その他必要に応じて会長の任命により役員を置くことができる。

委員長は、委員を指名することができ、総会で承認を得た後、役員会を組織する。
6. 機 関 本会は、次の機関を置く。
 - (1) 定 時 総 会 (臨時総会)
本会の意思決定最高機関で、委任状を含む過半数の出席を得て成立するものとする。
必要に応じて会長の招集要請により、臨時総会を開催することができる。
 - (2) 役 員 会
役員会は、総会に次ぐ決議機関で役員により構成され、会長の要請により随意開催することができる。
7. 会 計
 - (1) 本会の経費は、会費その他の収入によって支弁する。
 - (2) 本会の会計年度は、毎年1月1日から12月31日までとする。
8. 会 費 正会員は、年会費として¥5,000円を納入しなければならない。
9. 付 則
 - (1) この会則は、平成16年1月10日から発行実施する。
 - (2) この会則は、必要に応じて総会において改廃することができる。
 - (3) この会則以外のところは、従来の習慣に従うこととする。
10. 制定改廃の履歴

制定年月日	昭和35年4月1日	改廃年月日	昭和45年4月1日	改廃年月日	昭和48年4月1日
改廃年月日	昭和51年1月1日	改廃年月日	平成16年1月10日		

2007年度 役員

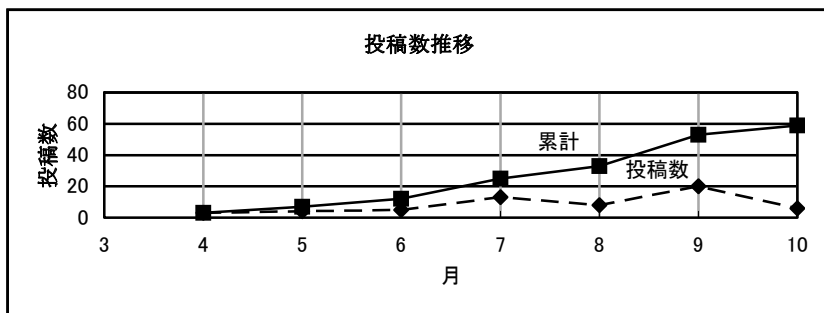
会 長	石川 善久
副 会 長	中里文昭
会 計	越智 静江
会 計 監 査	有田 典加
運 営 委 員 長	三保 裕和
技 術 委 員 長	末岡 成基
音 楽 監 督	新井 義悠

50周年記念事業

50回記念事業実行委員会 委員長：末岡成基

1. 第50回定期演奏会（平成19年11月17日）…………… シンフォニア岩国
2. 第50回定期演奏会 記念パーティ（平成19年11月17日）…… 岩国ビジネスホテル
3. 「岩国市民マンドリンクラブ50周年記念誌」編纂
 編集委員…………… 三浦孔司、石川善久、中里文昭、金丸眞明、末岡成基、濱田純子、
 足立康雄、渡邊泰學、田村知子、石崎悦子
 資料提供者…………… 足立俊江、石川善久、片岡敦子、富永勝之、濱田純子、牧田むつ子
 校正担当…………… 広中亮一
4. 楽 器 購 入…………… シンセサイザーほか
5. I C M C 定 期 演 奏 録 音 盤 整 備 ・ 保 存…………… 三浦孔司
6. 資料整備(プログラムほかの資料の整備と保存)…………… 石川善久、三浦孔司

記念誌への投稿数推移



取立てに
あうれしやな
寄る草稿
いずれも褪(あ)せぬ
熱き思いを

機会あるごとに投稿の呼びかけをしている内に、
「原稿取立人」という称号を頂きました。
それで、一首を。 編集委員長

第50回定期演奏会 記念パーティ

平成19年11月17日 岩国ビジネスホテル



なぜ50年も続いたのだろうか?・・寄せられた原稿からまとめると・・

I. 音楽すること

1. マンドリン・ギターの音に惹かれた
2. 身近な楽器で合奏が可能
3. アンサンブルの楽しさ、心地よさ
4. 合奏曲の仕上がっていく過程の達成感
5. 一步一步高い音楽性を希求

II. 人とのつながり

1. 顔を合わせるだけで心が和む
2. 協力し合える信頼感
3. 困ったときの話相手
4. 先輩後輩の絆
5. 青春時代に染まった無意識の習慣

第50回記念定期演奏会 関係者・・・平成19年11月17日 シンフォニア岩国

指揮者・・・新井義悠 末岡成基 中里文明 高島信人 尾園勝善

1st Mandolin・・・金丸眞明 足立俊江 石川暢子 上田賀子 大浜芳樹 藤井瞳 藤沢幸昌 牧田むつ子
松永尚子 山根さ加え 渡邊泰學

2nd Mandolin・・・濱田純子 岡崎美由紀 岡崎悦治 尾園勝善 河村太郎 堺井恵子 白井妙子
白木眞智子 曾江井圭子 外山里美 中村成子 長塚かつえ 山本晃子 山永真夕

Mandola・・・・・・田村知子 有田典加 内田留美子 大室敦士 国広梓 小東孝幸 坂田陽子 中塚博
原マチ子 細光英治 山根義広 横山英子

Mando Cello・・・石川善久 江間紀久夫 中里文明 船川ちひろ 山樋明洋 山根道広 山本史郎
山本芳生

Mando Lone・・・・山樋明洋

Guitar・・・・・・足立康雄 足立裕太郎 石角剛 石崎悦子 遠藤清子 大越敦 越智和宏 越智静江
金丸孝子 熊本真奈 佐々木速子 末岡成基 高杉政章 富永和也 布川大介 原田寛
松塚展門 三保裕和 山内逸郎 山崎義昭 山本香織 山本庸子 吉木久美子

Contra Bass・・・・中村由哉 小塩洋子 波羅三哉 吉岡光則 市林貢(賛助)

Percussion・・・・吉本屋政幸 中野幸枝 藤村直美

Flute・・・・・・国広昌男(賛助)

Clarinet・・・・村上亜希(賛助)

Bassoon・・・・・・濱崎園子(賛助)

Oboe・・・・・・内藤祥子(賛助)

琴・・・・・・原田順子(賛助)

Baritone・・・・安東省二(賛助)

司 会・・・山中敏枝(賛助)

スタッフ：・・・・東谷五郎 三浦孔司 阿武秀治 安田英雄 中須賀弘明 広中亮一 リリー写真機店
新井恭子 石川裕子 宇井聡美 白木静代 鈴木景子 寺内美津子 広中明美 広中詩織
福川英子 吉園恵美子





編集後記

50周年記念誌編集委員会

委員長 三浦 孔司

編集作業が終わり後は印刷に出すのみとなった今、編集後記に取り掛かっている。
編集作業の多忙さは想像していたので、余暇を投げ打って精を出していた自治会役員を退任して体制は整えていた。

原稿募集に当たり、一般寄稿数の目標として、50周年と平均出演者数50余名にこだわり50稿を掲げ、呼びかけする対象者は、基本的に前記念誌である岩国プレクトラム30年史以降のプログラムに載っていて、しかも3回以上の出演実績をもった人としたので、百名余りということになった。

次第に集まってくる原稿に、編集のため目を通して行くと、プレアン関係者であるなしに拘らず、その少年(少女)時代に受けた衝撃が後の人生に、とてつもない大きな影響を与えているかが思い知らされる。少年たちは、無意識のうちにそれを求め、幸か不幸か身体の中のリズムとなり、離れて行っても脈々と髓の中に居座り続けている様子が窺われる。これは、マンドリンが特別のものである筈はなく、この少年時代というものの特徴であり、すごさなのだろうとつくづく思うのである。

呼びかけの手段は、前回は全て郵便であったものが、これも想像もしなかったEメールという手段が現れて、ほぼ半数はこのEメールでやり取りができ、事務は大助かりという恩恵に浴した。

形態としては、50周年記念事業の1事業として編集委員会を設け、練習時間の合間を利用したり、Eメールや郵便でその主旨を述べ投稿をお願いして、その後も度重なる催促を続けてしまったが、受けた方としては、大方の場合、主旨は分るが日頃から筆を執る習慣がないので、と原稿集めは遅々として進まない状況であった。締め切り期限を3次まで設定して、7月20日を最終と公言してきたが、受け手にはインパクトは弱く、電話、メールを使って個人的な情けに訴えるしか方法がなくなった。それも2ヶ月経過してやっと目標の50という後姿が見えてきたような次第であった。これも想定内でまだ気持ちにも余裕が残っていた。

発行は、50回定演の日としていたが、その後、50回定演のデータまで取り入れることになり、年明けに変更された。

集まった原稿を統一した編集形態で編集したり、カット写真を挿入したり、プログラムとその写真を編集したり、全出場者に関わる集計資料を作ったりといった作業は全てパソコンで豊富な時間を利用して進めたのである。この作業も、かつてなら、印刷屋に持ち込み全部製本代としてかかったものなので、今回は、その分安上がり进行を期待している。

編集の担当を任されたので、前後の状況を見ながら自分の執筆もできたわけで、ついつい書き過ぎたことはお詫びするとして、50年間に3度にわたる記念誌編纂の中心にいられて、師の枕元で自分に言い聞かせた誓いが、記念誌という形で果たせたことを満足に思っている。

長い50年間、弾くことから身を引いたが、組織の存続には常に関心があり、後を継いだ人達の努力によって、私の秘めた誓いが達成されたことも重々承知しており感謝しているし、50回定演記念パーティでは、突然に感謝状まで戴いたことは誠に身に余る光栄である。

私のこの気持ちは、これで重荷を降ろすことができた。明日からは、本当の隠居を味わってみたい。

永い間のお付き合いに、心からのお礼を述べて後記終了とする。

岩国市民マンドリンクラブ
50周年記念誌

岩国市民マンドリンクラブ

会 長 石 川 善 久
編集委員長 三 浦 孔 司

平成20年3月 3日 印刷

平成20年3月11日 発行

編集兼発行者 岩国市民マンドリンクラブ
50周年記念誌
編 集 委 員 会

印 刷 所 山陽印刷株式会社

